

912.6-042-2ㄗ

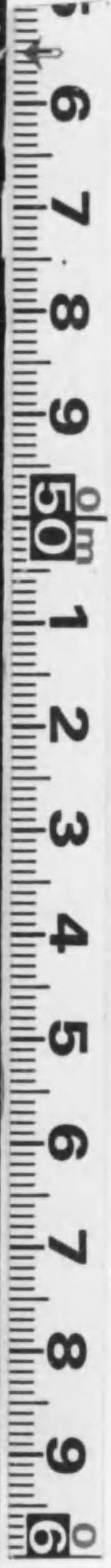


0126
42
2

綺堂戲曲集

岡本綺堂

春陽堂



始



912.6
042
.2

別



岡本綺堂著

綺堂戲曲集

春陽堂版



1015

339

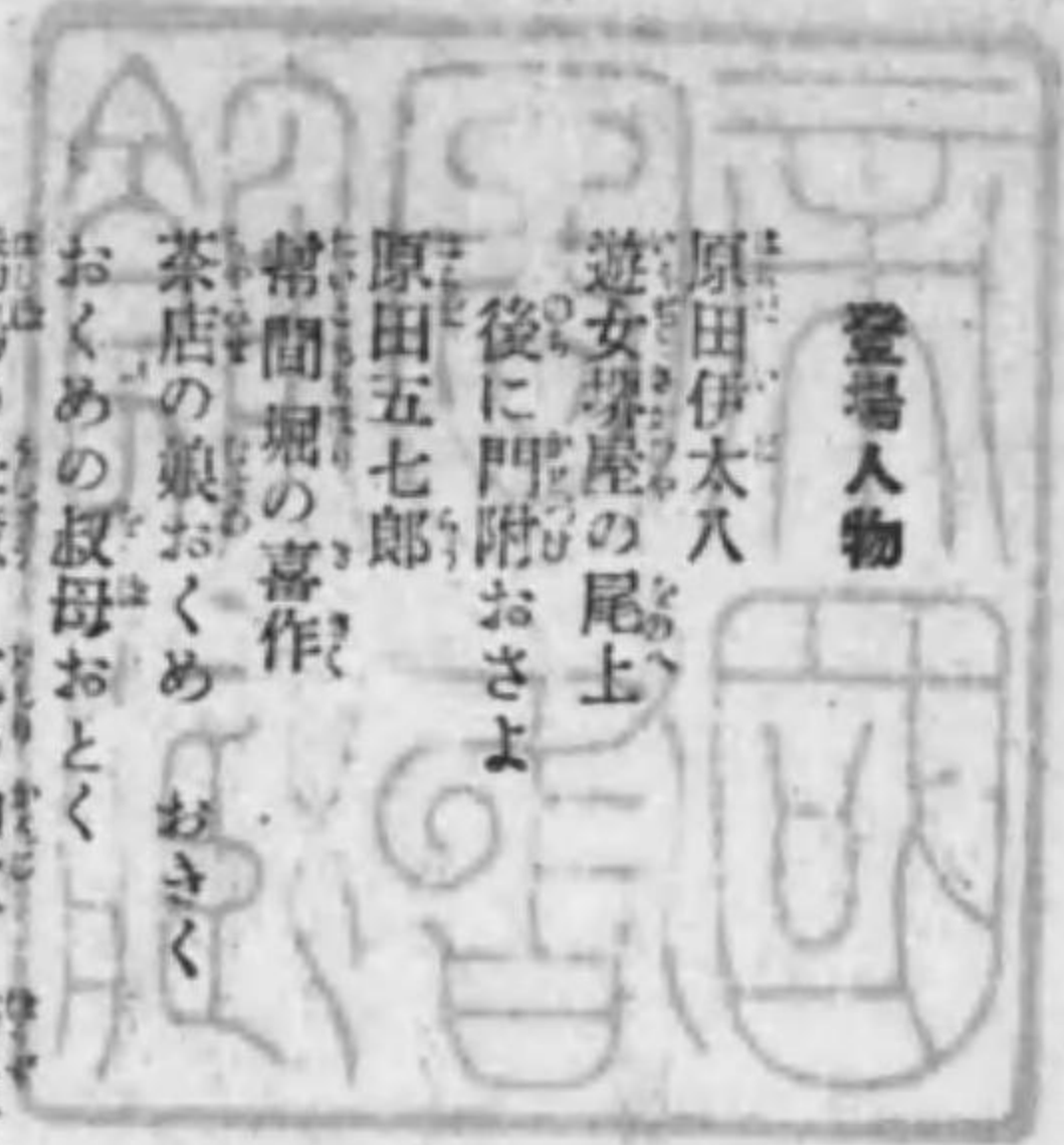
目次

尾上伊太八	(三幕六場)	三
室町御所	(三幕五場)	四
番町皿屋敷	(一幕二場)	八
鳥邊山心中	(一幕二場)	一〇
箕輪の心中	(三幕七場)	一四
修禪寺物語	(一幕三場)	一八
小栗栖の長兵衛	(一幕)	一六
權三と助十	(二幕)	一八
佐々木高綱	(一幕)	二〇
俳諧師	(一幕)	二二



尾上伊太八

岡本綺堂



登場人物
 原田伊太八
 遊女茶屋の尾上
 後に門附おさよ
 原田五七郎
 菊間彌の喜作
 茶店の娘おくめ おさく
 おくめの叔母おとく
 橋場の丑藏 吃の勘次 坊主の九助 長次
 虎松 傳八 源吉
 丑藏の女房おくま
 長屋の女房おたつ おとら
 風車賣萬助

第一幕

第一場

ほかに引手茶屋の女 参詣の女 子守の娘
 中間 捕手の武士 ならず者など

徳川時代。延享三年十二月十三日、雪のふる夕暮。
 よし原仲の町、茶屋の二階。平舞臺の上のかたは折りまはして襖にて立て切り、正面は床の間、ついで上に地袋のある違ひ棚、これについで障子。障子の外は欄干附きの縁側にて、向うには仲の町の雪げしき見ゆ。下のかたには障子のがり口あり。よきところには火鉢、酒肴などもあり。
 (原田伊太八、廿五六歳の優しき武士。尾上、廿二歳の美しき遊女。差向ひにて酒を酌みかはしてゐる。鐘の聲。下座の獨吟になる。)
 唄、冬の日の、詰り／＼し年の瀬に、しのび逢瀬も浮む瀬も、遺瀬も泣いて突きつめて、われから沈む戀の

伊太八 音もきこえずに降つてゐるが、雪も大分積るだらうな。

尾上 もう日が暮れかゝつたので、禿の雪ぶつても止んだとみえて、仲の町も静まらぬ。

唄へ鐘の音も暮る夕暮の、風にみだれてはらくと、袖にかゝれば白雪も、解けて涙のうす氷。

（鐘の音。尾上は起つて障子をあげ、仲の町の雪景色をみる。伊太八も起つて見る。雪はらくとふり込むをふたりは袖にて拂ふ。）

尾上 これでは明日もひき止められて、歸れぬ人がたんとござんせうな。

伊太八 それとは違つてこの二人は、歸りたうても歸られぬ、逆いあの世へ行かうとしてゐる。

（二人はもとの座に戻る。）
尾上 ほんに一段行つたら二階とは歸られぬ、十萬徳土とやらの遠い旅も、お前と手をひいて行くなれば、なんの心細いことがござんせう。

伊太八 わしとても同じこと。奥州津輕の藩中で、侍の子と生まれた伊太八が、場所もあらうに吉原で見ぐるしい

死恥を晒したと、笑はるゝのも覺悟の上、今更なんの未練があらうぞ。

尾上 わたしは七つて廊へ賣られ、ほかには親類も兄弟もあ

るやら無いやら音信不通で、あとに心残りはないけれど、お前はお國に弟御があるとやら。こんな噂がきこ

えたら、さぞやお嘆きなさるであらうに……。

伊太八 願許にゐる弟も、おどろくてあらう嘆んであらうが、三年越しの放蕩に、屋敷は不首尾に不首尾をかさね、どうで無事では済まぬ身の上や。

尾上 ましてお前は二階をせかれ、表向きでは逢はれぬ仲。

伊太八 そんなら二人は今宵を限りに……。

尾上 嬉しうござんす。
伊太八 嬉しういか。
唄へ神や佛を願はずに、ふたりが頼まれたのまれて、たどる閑路や死出の山。
（二人は顔を見あはせて名残を惜む。障子の上り口より茶屋の女中おみのは燭臺をとぼして出づ。伊太八はあわて、顔を隠す。）
おみ 一つの間にかが日が暮れました。もうそろそろとお店の方へ……。

尾上 あい。

おみのお客様も御一しよに……。（云ひつゝ伊太八の顔のぞく。）お、お前は八様。

伊太八 あい、これ。二階をせかれて逢はれぬ伊太八が頭巾で顔を押しかくし、忍んでこゝへ逢ひに來た。情にどうぞ見逃してくれ。

尾上 一生のお願ひでござんす。誰にも沙汰してくださいな。

伊太八 これ、この通りぢや。

尾上 願ひます。
（二人は手をあはせて頼む。）
おみ 思へばほんにおいとしい。萬事はわたしが呑み込んで居りますほどに、こゝでゆつくりおしげりなさんせ。

尾上 そんならもう少しこゝに置いて下さんすか。

おみ 店の方はわたしが好きやうに云つて置ませう。

尾上 願ひましたぞえ。
おみ あい、あい。
（おみのは障子を降りてゆく。）
尾上 死なうと覺悟をきはめたからは、又もや邪魔のないうちに……。
伊太八 死なねばならぬ入籍を、せめて一筆書き残さうか。

尾上 書置ならばあの一問で……。（上のかたの襖を指さす。）

伊太八 こゝろは急けどこの世の名残に……。（逆ひ欄より襖と紙を持ち来る。）

尾上 もし、この燈火を……。（燭臺を取る。）

伊太八 いや、それには及ばぬ。雪明りてまだ明るい。そんなら少し待つてゐやれ。

唄へ隔ての懐おしあけて、心はいだき合ひながら、しばし離るゝ影と影。
（伊太八は上のかたの襖をあけて入る。尾上はあとを見送りて泣く。）

尾上 わたしと云ふもの無いならば、かうした身にもならんすまい。逢ひ初めてより一日も……。

唄へ鴉の鳴かぬ日はあれど、お顔みぬ日はないわいな。しげく逢へばお宿の首尾、あしきは胸に知りながら、好いたが因果東の間も……。

（尾上は起つてあたりを窺ひ、更に上のかたの襖を細目にあけて窺ふ。）
尾上 傍聴るゝがいやまして、募る思ひの嵩じた果が、ゆき詰つた今夜の仕儀、どうぞ堪忍してくださいな。

唄へ鳴く音はさかる鶯も、けふの寒さに閉ぢられて、

春をも待たぬ命と、翅しをるゝ籠の鳥。
（尾上はまた泣伏す。階子の口より暫間、堀の喜作出づ。）
喜作 おい、をの襟。これにお出てなされましたか。
尾上 おい、喜作さん。悪いところへ……
喜作 え。なんぞ御差合でも……

尾上 差合があらうが無からうが、なんぼお前が稼業ちやと云うて、人の塵敷へ断りなしに押掛けて来ると云ふことがあるものか。ふだんはお前を鼻根にしてゐたが、今夜はなにやら嫌ひになつた。さあ、早う歸つてくださんせ。
（顔をそむけてゐる。）

喜作 いや、これはきつい御挨拶。それでは御機嫌の直るやうに、八様のお噂でも致しませうかな。
尾上 いえ、いえ、もうそんな話は聞きたくござんせぬ。

喜作 はて、困つたものだ。（あたまを掻く。）いや、花魁。まあお聞きなさいまし。けふは日本橋で面白いものを見てまゐりました。わたくしが少し野暮用があつて、この雪の降るのに重い傘をかたげて日本橋の袂を通つたと思召せ。すると例の晒し物。さては心中の仕そこなひかと……
尾上 え。（思はず向きなほる。）

尾上 え、もう煩さい。早う歸つてくださんせ。

喜作 これは強いお腹立。（鼻唄。）腹は立てども聞かねばならぬ、君を待つ夜のほとよぎす……。と云ふことを花魁もかねて御存じの筈。

尾上 はて、もう止してくださいと云ふに……。耳をおさへる。）
（この時、上のかたの襖の内より軽く叩く音。尾上はうなづいて起ち上る。）

尾上 さあ、喜作さん。歸つてくださんせ。
喜作 では、どうでも御勘氣は赦りませんかな。
尾上 さあ、さあ、早う。

喜作 とは云へ、今の物音は……
（上の方を覗かうとするを、尾上はあわて、遮る。）
尾上 え、強情な。

喜作 でも、どうやら襖の内が……
尾上 え、もう凄瀾い。

（喜作はお客でもみたら取巻かうといふ料簡で、幾たびか上のかたへ行かうとするを、尾上は無理に押還る。喜作は遂に濫々ながら階子を降りてゆく。）
尾上 （ほつとして。）ふだんは賑かい面白い人ぢやが、かう

喜作 人を掻きわけて覗いてみると、頭の圓い男が一人。さては坊主の道楽が過ぎて、たうとうこゝへ恥を晒すことになつたのか、やれ可哀さうに見てみると、それでも坊主は殊勝らしく、口のうちに南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛……。なんぼ阿彌陀佛でも、もう斯うなつてはお救ひもとどきますまい。

尾上 （かんがへる。）大勢の人の見る前で、そんな生恥を晒さうよりも、いつそ一思ひに死んだらよさうなものぢやに……。咳く。）
喜作 さて、死なうとして死なれぬが人間の因果と云ふもの。このよし原にも一年に三度や四度はきつとある心中も、そのなかつて見ごとに死ぬのは半分くらゐて、あとは皆な仕損じて、御定法の通りに男も女も日本橋に晒しも……

尾上 おい、思なこと。（身をふるはせる。）そんな話もう止してください。

喜作 これはあやまり。また御機嫌を損じましたか。
（尾上は黙つて顔をそむけてゐる。）

喜作 もし、をの襟。これ此の通り、師直め謝まつて居ります。お詫、お詫。（手をつく。）

いふ時には強い邪魔、やう／＼のことで追ひ返した。

（尾上はあたりを窺ひながら上のかたの襖をあけると、伊太八はうしろ向きになりて書置を書いてゐる。尾上は傍へよりてさゝやく。伊太八はうなづく。尾上は伊太八の脇差を持ちて出る。）

尾上 そんなら早う。
（外にて「火の用心」と大きくいふ。尾上は思はず脇差を隠してうしろを見る。舞臺はたちまち暗くなりて、暗中に道具變る。）

第二場

舞臺再び明るくなると、淺草奥山の茶店。舞臺の中央に銀杏の大樹あり。これにつゞいて下のかたに大きな茶店。軒には花暖簾をかけ、入口の柱に宮戸川と記せる角行燈をかけ、店のまへには掛床几二脚ほどを置く。上のかたにも銀杏の大樹あり。うしろには観音堂が横向きに遠くみゆ。

（前の場よりは五年の後、三月下旬の午前。伊太八は半

籠、着流しにて頬被りをなし、銀杏の根に倚りかゝりし
まゝ後向きに寐てゐる。町家の女房は床几に腰をかけて
茶を飲んでゐる。子守は赤兎を負ひ、手に風車を持つて
ゐる。下のかたの床几には風車賣萬助が風車の荷を持ち
て腰をかけてゐる。茶店の娘おきくは立つてゐる。みせ
物の鳴物賑かにきこゆ。

女房 (空を見る。)どうかお天氣にしたいものですね。

萬助 どうかさうしたいものでございます。取分け手前ども

の商賣は、お天氣でなければ仕方がございません。

おきく お前さん道ばかりぢやありません、こゝの家なんぞ

も降られた日にやあ型無しだから、毎朝御音様におねが

ひ申してゐますよ。

萬助 それでもこゝの店なんぞは、おきくさんに、おきくさ

んと云ふ飾繪仕立の別箱揃ひだから一年申照り降り無し

だ。

女房 ほんたうにいつ来てもこゝの店は繁昌のやうですわ。

おきく 御音様の御利益と御屋敷のおかげとて、どうにか

まあ店を張つて居ります。

萬助 うまく云ふぜ。これで家へ歸ると、みんな寛衝の七梅

も持つてゐるのだから怖ろしい。はゝゝゝ。時におく

めさんは……。
おきく 御音様へちよいと朝参りに行きました。
女房 どれ。わたしも歸りに淺島橋へ御参詣をして行きませ
う。
おきく 毎度ありがたうございます。
萬助 わたくしも有難うございました。もし、子守のねえさ
ん。そんなに風車を拵くつてゐると、家へ歸るまでに毀
してしまふぜ。
子守 あい、あい。
女房 どうもお邪魔をしました。
おきく 御ゆつくりといらつしやいませ。
（女房と子守は上のかたへ行きかけて、寐てゐる伊太八
を見かへる。）
子守 おや、こんな處に誰か寐てゐますよ。
女房 なるほど樹の根を枕にして、いゝ心持さうに寐てゐる
やうだ。こんな賑やかなところで、能くゆつくりと寐て
ゐられるものだねえ。
萬助 なに、こゝらにはそんなのが幾らもありますよ。
子守 晝間寐てゐるやうぢやあ泥坊かも知れない。
女房 馬鹿なことを云ふもんぢやないよ。さあ、早くお出で、

お出で。

（女房は先に立ち、子守も共に上のかたの奥に入る。

これと行き違ひに奥よりおきく、十七八歳の美しき茶屋

娘にて出で、寐てゐる伊太八を島渡みて、店先に來る。）

おきく どうも遅くなりました。萬助さん、今朝はあきなひ

がありましたかえ。

萬助 こゝに休んでゐたおかみさんに一つ賣つたのが口明け

さ。

おきく まあ、たんとお寝なさいよ。時におきくさん、ま

だあの人は寐てゐるのね。

おきく (うなづく。)わたし達が店をあける前から寐てゐる

んだが、どうしたんだらうねえ。

(ふたりは伊太八の方を覗く。)

萬助 まあ、うつちやつて置くが可い。そのうちには自然に

眼をさますだらうよ。

おきく だつて、ありやあお仕置場へ出る人よ、顔をしかめ

る。あんな人が店の鼻つ先に寐てゐられちやあ商賣の邪

魔になるわ。

萬助 むゝ。お仕置場へ出る奴か。(覗く。)

おきく このごろは毎日こゝらをうろくしてゐて、人の顔

ばかりじろく見て、なんだか薄氣味の悪い人なんです
よ。

萬助 よし、よし、それぢやあ私が起してやらうよ。(伊太八

の傍にゆく。)もしお前さん、もう起きたらどうだね。夢

でもみてゐると見えて麗されてゐるやうだ。おい、おい。

(萬助はゆり起す。伊太八は起きようとして贈張き、樹

のうしろに倒れる。)

萬助 おい、寐惚けぢやいけねえ。どうした、どうした。

(萬助は樹のうしろへ廻りて、伊太八を引張り出す。伊

太八は再び樹の根に腰をおろして頬被りを取る。月代の

伸びたる頭、前とはかはりて險悪なる人相、喉には傷の

痕あり。)

伊太八 あゝ、夢をみてゐたのか。(眼をこする。)折角よく寢

込んでゐるところを、無理に引摺り起すこともねえ。お

前も邪険な男だな。

萬助 ぢやあ、なにか面白い夢でも見てゐたのか。

伊太八 面白くもねえが、むかしの夢を見てゐたのさ。昔の

ことなんぞはすつかり忘れてしまつた積りでも、時々

夢にみるから不思議だ。(さびしく笑ふ。)

萬助 むかしの夢とはどんな夢だね。

伊太八 お前達に話したつて判るめえ、俺が女に惚れられた時のことよ。

萬助 へえ、お前にも女が惚れたかね。

伊太八 馬鹿にするな。これでもむかしは色男だ。(起ちあがる)手前達のやうなゼイ、風車賣とは譯が違はあ。生れかはつて出直して来い。

萬助 いくら生れ替つても、お仕置場のお手傳ひはまつびら御免だ。

伊太八 なにを云やあがるんだ、引込んでゐろ。(萬助の横面をなぐる)おい、櫻湯を一杯くんねえ。(床几に腰をかける)いや、こりやあ悪かつた。不淨役人の手下に使はれてゐる俺達が、客商賣のお店を拜借しちやあ相済まねえわけだ。まあ堪忍してお呉んなせえ。

(伊太八は尻をまくりて、土にあぐらを掻く。おくめとおきくは氣味悪さうに跡じさりをして、萬助に何うかしてくれと眼で頼む)

萬助 これ、これ、大爺。お前にかうして居られちやあ、この店でも迷惑だ。(着めるやうに)些とぐらゐることは私かなんとか計らつてあげるから……

伊太八 俺あ強請や押借りに来たんぢやあねえ。湯を一杯買

えに来たんだ。おい、おくめさん。後生だから櫻湯を一杯くんねえ。お茶代はこゝへ置くよ。(ふところより金を出して床几に置く)

萬助 (驚く)や、こりやあ二分だ。

伊太八 櫻湯一杯で二分のお茶代なら、まんざら悪いお客ぢやああるめえ。ゆうべはよそで飲み過ぎて、家へ歸る方角も忘れてしまひ、この銀杏の樹の下でござる寐をきめて、夜のあけるのも知らずにゐたが、眼がさめたら喉が渴いてならねえ。おい、おくめさん。どうぞ一杯お願ひだ。お茶代が不足なら、もう少しこゝへ置くよ。

(懐中より又もや金を三つ四つ掴みだして置く。萬助はいよゝゝ驚く)

萬助 どうしてこんな手持つてゐるのか。なるほど、人は見掛けに因らないものだ。

伊太八 金なんぞは幾らでもあらあ。おい、おくめさん。なんとか返事をして呉れねえのか。

お遣りよ。

おくめ だつて、お前……

おきく それで無いと、いつまでも動かないよ。

おくめ 思だねえ。

伊太八 おくめさん。どうしても思かえ。茶店の行燈をかけたゐる以上は、湯の一杯くらは汲んでくれても可いぢやあねえか。さあ、お茶代はこゝへ置くよ。

(又もや金をつかみ出して床几に置く。人々は呆れてゐる)

萬助 ほんたうに不思議だなあ。さつきの子守の云つた通り、もしや泥坊……

伊太八 なんだと……

萬助 いや、どうして、どうして、偉いもんだよ。

(萬助は面倒だから早く汲んでやれと眼で知らせる。おきくも勧める。おくめは思々ながら奥に入る。上のかたの奥より原田五七郎、人品のよき若侍にて笠をかぶり、中間一人を連れて出て来りしが、伊太八に眼をつけて立ちどまり、銀杏のかけに立ちて窺ふ。そのうちにおくめは櫻湯の茶碗を盆に乗せて出づ)

伊太八 そんな遠くから怖さうに手を出さねえで、もつとこ

つちへ寄つて呉んねえ。病犬ぢやあねえから、食ひ付きやあしねえよ。

(おくめは氣味悪さうに進み寄り、無言にて盆を出す、伊太八は容易に手を出さず、おくめの顔をぢつと眺めてゐる。おくめは顔をそむけて困つてゐる。伊太八はやがて茶碗をうけ取り、うまさうに飲む。おくめは早々に内に入る)

伊太八 後生だ、もう一杯。

萬助 そんなことを云つてゐては果てしが無い。さあ、一杯飲んだら素直に歸るがよからう。(伊太八の手を取つて引立てようとする)

伊太八 えい、大きにお世話だ。

(突き放されて、萬助は倒れる。おくめとおきくはうろしてゐる。五七郎は進み出づ)

五七郎 これ、茶を一杯くりやれ。

おきく いらつしやいませ。

おくめ どうぞお掛け下さいませ。

(五七郎は下のかたの床几に腰をかける) 唯今お茶を蓋上げます。

伊太八 おい、おれの方はどうして呉れるんだ。
五七郎 御所望ならば何杯でも差上げませう。
伊太八 え。

(五七郎は笠を取る。)

伊太八 む、お前は……(おどろく。)

五七郎 しぼらくお目にもかゝりませぬが、御別係はござりませぬか。

伊太八 この通り、いつも達者だ。

五七郎 (左右をみかへる。)これ、そこにゐる町人。

萬助 へい、へい。

五七郎 氣の毒だが、この男に些と用談がある。すこし遠慮してくれまいか。

萬助 よろしうございます。わたくしも飛んだところへ引懸つて、實は困つてゐたところでございます。では、旦那様、御ゆつくりとお休みなさいまし。(おくめ等に。)これ、お武家様が見えたから、もう大丈夫だ。
おくめ どうも色々ありがとうございました。
(萬助は早々に上のかたに去る。)

五七郎 六蔵。其方も暫くそこらを遊んでまゐれ。中間へい、へい、かしこまりました。

の果が、紋切形の心中よ。(自分の喉を指さす。)この傷のあとを見りやあ大抵判るだらう。それが見ごとに仕損じて、三日のあひだも日本橋で晒され、いやはや飛んだお笑ひ草よ。

五七郎 それは江戸屋敷の役人から委しい書面で承知いたしました。あまりの面目なさにその當座は請演して引籠つて居りますと、上には格別の御沙汰を以て、兄に代つてわたくしに家督相續を仰せつけられ、引きついで御奉公いたして居ります。

伊太八 む、さうか。それちやあ去年から江戸屋敷に詰めてゐたんだな。

五七郎 左様でございます。

伊太八 そりやあ些とも知らなかつた。(少しく思案してゐる。)

五七郎 然るにこのたび大事の御用をうけたまはり、日々ひそかに江戸市中を徘徊して、心當りを詮議いたして居ります。

伊太八 なんの詮議をしてゐるのだ。

五七郎 盜賊の詮議でございます。

伊太八 む、泥坊……。屋敷で何か取られたのか。

(中間は會釋して、これも上のかたに去る。おくめは茶を汲んで出づ。)

おくめ お茶を一つおあがりなさいまし。

(五七郎は茶碗を取りて思案してゐる。おくめはおきくと顔を見あはせて首肯し合ふ。)

おくめ あの、わたくし共はちまいと奥へ行つて居ります。御用があつたらお呼び下さいまし。

(二人はそこを外すころにて、店の奥に入る。五七郎は一際すゝめて、伊太八にも床几にかけよと云ふ。伊太八は着物の泥を掃き、上のかたの床几に置きたる金をうしろへ掻き遣りながら腰をかける。)

五七郎 兄上、きついお變り様でございますな。

伊太八 變つた管だ。武士を止めてからもう五年になる。して、お前はいつ江戸へ出て来たのだ。

五七郎 昨年の秋に出府いたしました。委細のことは國許にてうけたまはり、唯々残念に存じて居りましたが、お姿を見るにつけて、また今更に悲しさが……。落涙する。)

伊太八 もうそんなことは云つてくれるな。定めて何も彼も聞いたらうが、吉原の尾上といふ女に熱くなつて、屋敷はしくじる、女も借金で首がまはらず、詰り詰つた擧句

五七郎 先月八日の夜に、盜賊がお蔵を切破つて、御用金一千兩をぬすみ出しました。夜番の者が盗目に見ましたるところでは、賊は二人であつたと申すこと。

伊太八 なにしる太え奴等だな。

五七郎 兄上にも若しお心當りがござりましたら、なにとぞ御助力をねがひます。

伊太八 おれも泥坊に近附きはねえが、世間は廣いやうて決りもんだから、どこでどんなことを聞き出さねえとも限らねえ。若し心當りがあつたらば乾と内證で知らして遣らうよ。

五七郎 何分おたのみ申します。

伊太八 む、判つた、判つた。おれは少し用があるから、もうこれで別れるとしよう。まあ、達者であてくれ。(起ちあがる。)

五七郎 お前様にもお身を御大切に……。
伊太八 お前などは出世前だ。せいん、大事に勤めるが可いや。おれも昔は覺えがあるが、野暮堅え屋敷奉公も覺悟だらうな。

五七郎 これが武士の勤めと心得て居りますれば、別に窮屈とも存じませぬ。

伊太八 それでなけりやあ大小は差せねえ。おれなんぞは今

は氣樂なものさ。はムムム。

(伊太八は笑ひながら行かうとするところへ、向うより吃の勘次走り出す。)

勘次(吃る。)お。小、小、小頭。ど、ど、どこにあんだ。さ、さ、先刻から、ほ、ほ、方々を、さ、さ、探してゐたんだぜ。

伊太八 ゆうべから飲み過ぎて、こゝに打つ倒れてゐたんだ。

勘次 は、早く来なくつちやあ、間、間、間に合はねえ。もう、ひ、ひ、引廻しが、出、出、出る時刻だぜ。

伊太八 手前は吃るから何を云ふんだか判らねえ。もう引廻しが出ると云ふのか。む、む、すぐに行くよ。

勘次 は、早く、早く……。(勘次は吃りながら伊太八を急ぎ立ててゆく。五七郎はちつとあとを見送る。)

五七郎 むかしの兄上とは、まるで人が變つたやうな。朱にまじはれば赤くなる。情ないことだなう。(嘆息する。)

(上のかたより中間出づ。)

中間 もう御用は済みましたか。

五七郎 まつたく油断のならぬことだ。

(五七郎は起ちあがりて、向うを見ながら思索する。おさよも同じく向うを見る。萬助は床几の上の金を指さしながら勘定してゐる。おくめとおきくは鹽を持ち来りて、伊太八のかけたる床几のあたりにふり撒く。淺草寺の鐘きこゆ。)

第二幕

幕

淺草田圃の小屋。板屋根の粗末なる屋體にて、竹縁あり。正面の上のかたに破れたる押入戸、ついで破れ障子二枚、下のかたは破れたる鼠壁、上のかたには少しく下りて、一間の臺所あり。臺所には一つ、籠を据ゑて入口に破れ戸一枚を閉てたり。家の下のかたには屋體に沿うて、低き四つ目垣あれど、木戸なければ往來は自由なり。垣の外に柳の立木あり。前の幕とおなじ日の午後。

(吃の勘次は搦鉢の火鉢にて五合徳利の火洞を付け、茶碗酒をのんでゐる。坊主の九助は一つ籠のいが栗頭

も茶でも飲んでゆけ。

中間 へい、へい。(奥にむかひて。)おい、姐さん。お茶をくんなねえ。

(おくめとおきくは奥より出づ。)

おくめ はい、はい。お熱いのをすぐに持つてまゐります。おきく 一向おかまひ申しませんでした。

(ふたりは茶を汲んで来る。五七郎と六蔵は茶を飲んでゐる。上のかたより風車賣萬助、再び出づ。)

萬助 あいつめは、もう歸つたかね。(床几の上をみる。)お、やつぱり金はこゝへ置いて行つた。

おくめ あんな人の癖に、どうしてお金を持つてゐるんだらうねえ。

五七郎 かれが澤山に金を所持して居つたか。

(上のかたの奥よりおさよ、門附けの姿にて笠をかぶり、三味線をかまへて出で、木かげにてこの話を聴く。)

おくめ どう考へても不思議でございますよ。

萬助 乾とあいつは泥坊だ。(大きく云ふ。)

五七郎 え。

(おさよも思はず前に出る。)

萬助 へえ、なか／＼油断はなりませんよ。

臺所にて籠の下を吹いてゐる。蛙の聲きこゆ。

勘次(吃る。)あゝ、好い心持になつて来たが、て、て、天氣の方は、な、な、なんだか悪くなつて来たな。(空をみる。)

(下のかたより橋掛の丑藏、籠の足をさげて出づ。)

丑藏 勘次。小頭はまだ歸らねえのか。

勘次 む、もう、け、け、歸つて来る時分だが……。おや、お前は、た、た、蟬をさげて来たのか。

丑藏(縁にあがる。)けふは小頭の誕生日だといふから心ばかりの祝えに蟬着よ。へん、主人の遠夜でなくつて仕合せだ。この洒落は手前におかぬめえ。

勘次 な、なんでも可いから一杯遣んねえ。丁度、か、か、棚も好い頃だ。(茶碗を出す。)

丑藏(茶碗で飲む。)おや、ひどく煙いぜ。臺所に誰かゐるのか。

勘次 ぼ、坊主の野郎が、め、めしを飲んでいるんだ。

丑藏 やい、やい、いぶすのも好加減にしろ。こゝの家に狸はゐねえや。

九助(臺所より首を出す。)へん、貉と狸が二匹りやあ澤山だ。

たときにも、女はまだびく／＼動いてゐたよ。強情な奴
ま。

九助 ふむう。

伊太八 氣味の悪さうな面をするな。手前達もだん／＼に
出世すれば、忌でも此後を勤めにやあならねえのだ。

九助 そればかりは御免蒙りてえものだ。南無阿彌陀佛、
なむ阿彌陀佛。

伊太八 又いつもの癖を始めやあがつたな。止せ、止せ。血
のついたこの槍はあとで研いで置かにはあならねえか
ら、そこらへ掛けて置いてくれ。(勘次は槍を渡す。)おれ
は着物を着かへて来るから、そのあひだに酒やなにかを
持出して置け。

九助 あい、あい。

(伊太八は草鞋をぬいで奥に入る。勘次は槍を鴨居にか
ける。)

丑藏 さあ皆も手傳つてこゝへ酒や肴を運んでくれ。

一回 承知だ、承知だ。

(一同は臺所より酒肴などを運び出す。伊太八の分だけ
は足の附いたる膳にのせて上の方に据ゑる。)

み言事も出来る。武藝も出来る。自然と人々に立てられ
て、今ちやあ立派な小頭だ。

九助 わつしはお前さんよりも一足先にこゝへ来たんだが、
根が坊主あがりだから、相變らず意氣地はねえや。(あた
まを撫でる。)

伊太八 遅えねえ。手前も日本橋へ西瓜頭を晒されたお仲間
だったな。おたげえに好い業晒しだったよ。

九助 本意までも實に置いて、品川通ひの報は顔面。南無阿
彌陀佛、南無阿彌陀佛。

伊太八 (酒を飲む。) え、それが手前の悪い癖だ。おれも
世間を狭くして、よんどころなくこゝへ落ちたが、乞食
を三日すりやあ忘れられねえと、世間て云ふのはこゝのこ
とで、田圃の溝泥の匂がだん／＼身にしみると、この世
界が又面白くなつて来た。第一が氣樂で可いや。今更お
もへば人間を箱詰めにしたやうな馬鹿に難屈な武家奉公
を、よく辛抱して来たものよ。武士と聞いちやあ尊厳で
も悚然とすらあ。(笑ふ。)

丑藏 なるほど、野暮堅を屋敷奉公よりも、こちとらの方が
氣樂だらうな。

伊太八 こゝへ来た日が一生の直切り目で、早え話が、侍

出、出来た。こゝ、この刺身を見てくれ。おれが、
庵、庵、庵丁の腕を見せたんだ。

長本 なるほど、色々の肴がならんだ。

丑藏 けふは小頭の御馳走だ。思ひ切つて飲むが可いや。

四人 有難え。ありがてえ。

(奥より伊太八は着物を着かへて出す。)

伊太八 さあ。みんなどし／＼飲んでくれ。おれの膳なんぞ
は別にするにやあ及ばねえ。みんな丸くなつて一緒に飲
まうぜ。

(一同はあぐらを掻いて飲みはじめる。)

長本 わたしは昨今でよく知らねえが。けふは小頭、お前さ
んの誕生日かえ。

伊太八 まあ、誕生日と云つたやうなもので、つまりおれが
生れ變つた日だ。おれが心中を仕損じて、こゝへ轉げ込
んで来たのは、今から丁度五年前だ。

丑藏 もう五年になるかねえ。考へてみると早えものだ。(伊
太八は猪口を指す。)その時お前さんは色の白い人品の好
いお侍で、こんな立派な人がこゝらへ轉げ込んで来る
とは、心柄とは云ひながら、あゝお氣の毒なことだと、
腹ながら噂をしてゐたが、それでも元は武家出だから腹

の伊太八はその日かぎりに消えてなくなつて、淺草田圃
の伊太八といふ人間が新規にこの世界に生れて来たのだ
から、その日を新しい誕生日と決めて、毎年かう遣つて
心ばかりの祝ひをするのよ。お釋迦の誕生なら四月だ
が、おれは三月だから梅若かも知れねえ。とんだ御命日
だ。はい、はい、はい。

長本 それですつかり判りやした。ぢやあ、時々品川から
たづねて来る門附の美女といふのがその吉原の一件だ
ね。

勘次 そ、そ、さうよ。今こそ、か、か、門附になつてゐる
が、昔はよ、よ、よし原の花魁だ。小、小、小頭の爺だ
が、いつ見ても綺、綺麗だね。

伊太八 けふの引廻しとどつちが好い。

九助 そりやあ比べ物になるものか。品川のレコの方が十段
も優れてゐらあ。第一、指抜けがしてゐるし、氣立が良
いからね。

伊太八 乙う胡膝を捲るな。今にもつと好いのを見せて遣ら
あ。(笑ふ。)

丑藏 (四人をみかへる。) おい、どうだい。猪口を流行らせ
ようぢやあええか。

伊太八 こゝへ来た日が一生の直切り目で、早え話が、侍

虎松 そこに如才があるものか、腹の痛まねえ酒と来た日に
やあ何奴もみんな酒類童子だ。
傳八 さつきから黙つて飲むと食ふ一方だから、皿はみんな
この通りだ。

丑藏 なるほど君が大分閑静になつて来たな。
面苦なにか看かありさうなものだが……(上の方をみる。)

お、好いものが来た。来た。
長太 (おなじく見る。) 遅えねえ、好い物が遣つて来た。(縁
端に出る。赤、来い。赤、来い。(呼ぶ。)

(上のかたより赤犬一匹出づ。)

虎松 遣奴はどこかのまぐれ犬だな。
伊太八 構ふものか。ぶち殺して食つてしまへ。

(傳八と源吉は飛び降りて犬を追ひまはす。犬は遂に逃
げてゆく。)

傳八 いま／＼しい畜生め、逃げてしまやあかつた。ほかに
食ふ物はねえかなあ。

伊太八 まあ、仕方がねえ。なには無くとも酒だけで我慢し
て置くが可いや。

二人 あい。
(傳八と源吉は内にあがる。)

伊太八 時にその看て思ひ出したが、おい、丑。例の看は大
丈夫だらうな。

丑藏 そりやあ心配しなさんな。看は戸棚のなかへ押込ん
で、鳴がしつかり見張つてゐるから、わつしが留守でも
確かなもんだ。一足だつて外へ出すこつちやあねえ。

伊太八 うまく遣つてくれたか。
丑藏 そこに如才があるものか。

勘次 な、なんだか、な、な、謎のやうな話だが、一體、
そ、そ、その看とか云ふのは、な、な、なんだね。

丑藏 まあ、今にわかることだ。黙つてゐろ。

九助 どうも女の話しらしいぜ。
伊太八 さすがに手前は感が好いや。實は今夜鯨を買ふん
だ。

一同へえー。(顔を見あはせる。)

長太 ちやあ、その品川のが来るのかえ。

伊太八 馬鹿を云へ。あんな婆は疾うの昔にお拂ひ箱だ。も
つと若え可愛らしいのが来るんだ。

勘次 きよ、きよ、今日は、た、た、誕生日で、おまけに、
こ、こ、今夜は鯨が来る。ま、まるで、ぼ、ぼ、盆と正
月が一緒に来たやうなもんだね。

九助 なにしろ、おめでた續きて結構なことだが、一體その
鯨さんと云ふのは、どこから来るんだね。

丑藏 まあ、まあ、黙つてゐると云ふのに……(伊太八に。)

ちやあ、もうそろ／＼お積りにしようかね。

伊太八 みんなも飲足りねえか知らねえが、けふはまあこの
位で切り上げて貰はうか。

長太 なに、もうこれで澤山だ。さつきから黙つてがぶ／＼
飲んでばかりゐたんで、すつかり好い心持になつて來
た。

虎松 たまに好い酒を食つたんで、腹の蟲がびつくりして、
五臟六腑を堂々巡りをしてゐらあ。は、は、は、は。

傳八 ちやあ小頭。
四人 どうも御馳走さまでございました。

勘次 こ、こ、轉ばねえやうに、け、け、歸れよ。
四人 馬鹿を云へ。は、は、は、は。

(四人は下のかたに去る。)

九助 (勘次と顔を見あはせる。) ちやあ、おれ達ももうお開
きとしようか。
勘次 な、なるほど、お開きか。手、手、手前、乙な文
句を知つてゐるな。

伊太八 だが、みんな一度に立つてしまつちやあ仕様がね
え。坊主は些とこを片附けて行つてくれ。それから勘
次はそこらへ行つて、きはだの脂つこい奴でも買つて來
てくれ。

(伊太八は錢を出して遣る。)

勘次 あい。よ、よ、ようござえます。

丑藏 わつしはすぐに連れて来るぜ。それともまだ些と時刻
が早えかね。

伊太八 やい、やい、忌に氣を持たせるな。大事の看を手前
なんぞに預けておくのは不安心だ。早くこつちへ引渡し
てくれ。

丑藏 は、どつちが不安心だか判るものか。
勘次 ちやあ、ちやあ、行つて來ますぜ。

丑藏 そこまで一緒に行かうぜ。
(丑藏と勘次は出る。鯨の聲きこゆ。)

丑藏 いよ／＼天氣が可怪くなつて來たな。
勘次 こ、こ、今夜は、ふ、ふ、降りだぜ。

丑藏 花時分にやあ兎角降りたがるものだ。
(二人は去る。九助も空をみる。)

九助 なるほど今夜はあぶねえや。

伊太八 田圃の蛙がしきりに鳴くから、雨をよび出すかも知れねえ、かういふ曇つた暖かい日に、遠い蛙の聲を聴いてゐると、なんだか薄ら眠くなるもんだ。(飲社で寝ころぶ。)

九助 だが、お前さんはまだ飲むだらう。

伊太八 む。おれの分だけはまあさうして置いてくれ。

(九助は取りちらしたる皿小鉢などを臺所に運ぶ。おさよは笠をかぶり、三味線をかへて足早に出で、すぐに庭口に入る。)

九助 お、おさよさんか。

おさよ たうとうぼつ／＼降つて来ましたよ。

九助 まあこつちへお上んなせえ。おい、小頭。品川のおさよさんが来やしたぜ。

(伊太八は少しく身を起しておさよを見たが、悪いところへ来たといふ體にて、又もやごりりと倒れる。)

九助 おい、小頭。起きねえか。品川のが来たといふのに：

：(おさよに。)今少し飲んだから横になつてしまつたんだ。

おさよ 相變らず飲むてすかねえ。(笠をぬぎて縁に上る。)

九助 この頃はしばらく見えなさらなかつたね。

(九助は臺所へゆく。)

おさよ それぢやあ少し待つてゐませうかねえ。

(おさよは伊太八をそつと寝かして少し下手の方へゆく。遠く蛙の聲、薄く雨の音。)

おさよ 品川よりもこつちの方が些とは陽氣かと思つたが、

よし原の廊を眼の前に控へてゐながら、こゝらはやつぱり寂しいねえ。(所在なげに考へてゐる。)

お、雨がだんだんに降つて来た。春の雨だから強い降りにもなるまいと思ふが、あしたも降られると商賣はまた一日休みか。(空を見る。)

このごろは久しく休んでゐたせゐか、毎日唄ひなれた長唄もなんだか忘れてしまつたやうだ。こんなことぢやあ仕様がなかねえ。

(おさよは柱に寄りかゝりて三味線をひきよせ、爪弾きにて中音に唄ふ。)

唄へもみぢ葉の青葉にしげる夏木立、春は昔となりけらし。

(このうちに、伊太八は細く眼をひらき、すこしく身を起して唄を聴く。)

九助 (臺所にて。)もし、おさよさん。相變らず美しい聲だね。その唄はなんだね。

おさよ 毎年寒さが烈しいと、このふる疵の痕が痛むので：

。(喉をなでる。)

今年の春も二月ばかりは、どこへも出ずに休んでゐましたが、もうおひ／＼に暖かになつたので、二三日前からやう／＼稼ぎに出るやうになりました。

た。あたりを見て。けふはお客でもあつたのですかえ。

九助 小頭の誕生日だといふので、大勢あつまつて今まで飲んでゐましたよ。

おさよ ほんにもう五年になる。(ほろりとする。)

月日は早いもんですねえ。

九助 なにしろ、小頭が起きなくつちやあ仕様がかねえ。おい、

おい。こりやあすつかり寝込んでしまつたやうだ。

おさよ わたしが起すから、かまはずに用をしてください。

もし、八さん、伊太八さん。

(ゆり起せども。伊太八は矢はり寝た振りをしてゐる。)

おさよ ほんによく寝てゐる。もし伊太八さん。(指き起せども、伊太八はまた倒れる。)

九助 折角いゝ心持に寝かゝつてゐるところを、無理に起すとよくねえから、もう少し待つてゐなざるが可い。今わ

つしがお茶でも淹れるから、まあ、ゆつくりしてゐなせえ。

おさよ 長唄の高尾ですよ。

九助 あ、仙臺橋に殺された高尾か。

(おさよはつゞけて唄ふ。)

唄へ煙草のんでも煙管より、喉が通らぬ流煙、泣いてあかさぬ夜半とても無し。

(このうちに九助は臺所より土瓶をさげ、茶盆に茶碗二つをのせて持つて出で、伊太八の様子をうかがふ。)

九助 おや、小頭、起きてゐるんだね。俺あほんたうに寝てしまつたんだと思つた。

おさよ (唄をやめる。)

あら、起きてゐるの。

(伊太八は再び眼をとぢる。)

九助 (俯による。)

おい、さつきからおさよさんが来てゐるんだせ。焦らさねえで早く起きねえよ。

(九助は寄つてゆり起す。)

伊太八 さう／＼しい野郎だな。

(又寝ようとするを、おさよは寄つて抱き起す。)

おさよ もし、伊太八さん。

伊太八 (仕方なしに。)なんだ。

おさよ お前、相變らず酔つてゐるのかえ。

九助 毎日この通りだ。

伊太八 やかましいやい。引込んでゐろ。

九助 あい。(早々に臺所へゆく。)

おさま お前も少しはお酒を憚んだらどうでござんすえ。

伊太八 酒を憚んだら大名にもなれるのか。は、は、は、は、。

ギヤマンの鉢で美しく飼はれた金魚でも、一旦溝のなかに落ちたが最後、ほうふうや蛆と同一やうな料簡にならなけりやあ、とても生きちやあられねえ。昔は昔、今は今で、このごろの俺は酒でも飲んで寝るのが楽しみだ。は、後生樂のものよ。

おさま まだそれはかりではござんすまい。聴けばこのごろは博奕も打つ、喧嘩もする、押借強請かどはかし、悪いといふ悪いことは何でもおぼえたこと云ふ噂。そんなことがお役人衆の耳にでも這入つたら、お前は唯では済みませぬ。なんぼ斯うした身になつたとて、昔と今とを比べると、あんまりひどい變りやうで、わたしは涙がこぼれますよ。

伊太八 それもみんな手前のおかげだ。原田伊太八といふ歴

歴のお侍様 がこんな姿になつたのも、手前といふものが有つたからだ。今更おれに意見をされた義理でもあるめえ。

おさま もし、そんなに飲んでほ...

伊太八 え、うるせえ。なにをしやあがるんだ。やい、坊主。もつと熱いのを持つて来い。

九助 (臺所より瓶を出す。)でも、おさよさんがあんなに心配してゐるんだから...

伊太八 手前は乙うこの女におべつかりやあがるな。ぐづくぶ云はねえて早く持つて来い。

九助 あい。(引込む。)

おさま よし原へ来た時分は、こんなに強いお酒ではなかつたに...、かうも人間が變るものか。(泣く)

伊太八 いつまで一つことを云つてゐるのだ。手前のやうな

奴が傍にゐると、酒が陰氣になつていけねえ。それだから體よく品川の方へ追つ拂つてしまつたのに、なぜこゝへ尋ねて来るのだ。用はねえから早く歸れ。

おさま それでもあんまり心配して...

伊太八 餘計なお世話だ、早く歸れ。え、歸らねえか。(おさよを小突く。)

おさま 歸れといふなら歸りますが、どうぞ身持を改めて...

伊太八 まだそんなことを云つてゐやあがるのか。うぬ、ずんずん出て行かねえと料簡しねえぞ。(徳利をふりあげて起つ。)

おさま さあ、出て行け。(臺所より九助出づ。)

九助 おい、おい、そんな手懸えことをして、怪我でもさせると大變だ。まあ、待ちねえ。(おさよに。)おまへさんも氣の毒だが、大將はちつと酔つてゐるんだから、けふはまあ逆はねえて素直に歸つた方がいゝぜ。

伊太八 さあ、歸れ、歸れ。

おさま ちやあ、歸りますよ。

伊太八 あたりめえよ。こゝは手前の家ぢやあねえ。

おさま でも、あんまり...

おさま お前を斯ういふ姿にしたのも、元はと云へばわたしから...。(涙をぬぐふ。)

九助...、たどひ何のやうに落ちぶれても、人間は正直が身の守り、こゝろさへ誠の道にかなつてゐれば、きつと神様や佛様が...

伊太八 その神佛はこつちから疾うの昔に見限つてゐるんだ。今更つまらねえ講釋は止しにしろ。

(傍にある徳利を把つて猪口につぐ。おさよはその手をおさへる。)

おさま もし、そんなに飲んでほ...

伊太八 え、うるせえ。なにをしやあがるんだ。やい、坊主。もつと熱いのを持つて来い。

九助 (臺所より瓶を出す。)でも、おさよさんがあんなに心配してゐるんだから...

伊太八 手前は乙うこの女におべつかりやあがるな。ぐづくぶ云はねえて早く持つて来い。

九助 あい。(引込む。)

おさま よし原へ来た時分は、こんなに強いお酒ではなかつたに...、かうも人間が變るものか。(泣く)

伊太八 いつまで一つことを云つてゐるのだ。手前のやうな

(寄らうとするを、九助は止める。)

九助 まあ、なんにも云はねえて歸んなせえよ。小頭は氣が暴えから、なぐられてもしちやあ詰らねえ。

伊太八 坊主。その阿魔をひきずり出してしまへ。

九助 あい。判つたよ、わかつたよ。

(九助は一方に伊太八を宥めながら、一方にはおさよを宥めて外へ連れて出る。)

九助 い、隣衛に雨も止んだやうだ。品川までは随分あるから、この間に早く歸んなせえ。

おさま あい。色々御厄介になりました。(おさよは涙をふきながら、笠をかぶりて向うへ行きかかる。下のかたより丑藏は尻を端折り、おくめに番傘をさし掛けて出づ。)

九助 お、丑大爺か。(おくめを見ておどろく。)

丑藏 これ。(眼で叱る。)

(おくめは無言で逃げようとするを、丑藏は止める。)

丑藏 まあ、あとで判ることだ。兎も角もおとなしく来るが可い。(無理におくめを連れて這入る。)

(おさよは立止まりて窺ひあたりしが、合點のゆかぬ體

にて忍び足にて引返し、下のかたにかくれる。
丑藏 さあ、人見しりをしねえて、早く上んねえ。これから
はこゝがお前の家だ。

おくめ ええ。
丑藏 なにをぐづぐづしてゐるんだ。(無理におくめを縁にあ
げる。)

伊太八 や、御苦勞、御苦勞。おい、おくめさん。よく来て
呉んなすつたね。(九助に)やい、ほんやりしてゐねえ
で、酒の支度でもしろ。

九助 あい、あい。
(九助は呆れた顔をして臺所へゆく。おくめはおろ／＼
してゐる。)

伊太八 何もそんなにそは／＼することはねえや。奥山の茶
店で、おとなしいのと容貌が好いので評判、娘のおくめ
さんが、おれ達の女房になるとは、よく／＼強い御縁だ
らうよ。まあ、さう思つて落ちついてゐるが可いや。こ
んな家でも酒ぐれえに不自由はしねえ、とりあへずお酌
でもして貰はうちやあねえか。(臺所に向ひ)おい、酒は
どうした。

九助 あい、あい。馬鹿に急ぐんだな。(徳利を持ち來りて伊
太八へ)

太八の前に置く。娘さん、お酌をたのむぜ。
丑藏 そんなことは可いから、手前はそつちへ行つて煎番で
もしてゐてくれ。

九助 へん、ありがたてえ役廻りだ。
伊太八 なんだと……

九助 なに、なんでもねえのさ。(再び臺所へゆく。)

丑藏 さあ、酒が来た、小頭、始めねえか。
伊太八 む、(猪口を取る)おい、おくめさん。一つ注いで
くんねえ。御祝儀はさつき澤山遣つてあるぜ。

おくめ はい。(もじ／＼してゐる。)

伊太八 さつきの櫻湯は強氣に旨かつたよ。
(おくめは黙つてゐる。)

伊太八 (聲あらく)おい、注がねえのか。酌は出来ねえの
か。
おくめ はい。(思々ながら酌をする。)

丑藏 この子の酌なら旨からうね。(笑ふ。)

伊太八 これもみんな手前の極きだ。
おくめ もし、丑藏さん。さつきからも云ふ通り、どうぞ家
へ歸して下さい。

丑藏 (空をばけて)それぢやあお前、話が違ふぜ。
せうから。
丑藏 歸りたけりやあ歸しても遣らうが、なにしろ今夜は泊
つて行きねえ。

おくめ いえ、どうしても歸して下さい。
丑藏 お前も強情な女だな。
(丑藏は伊太八の顔を見る。伊太八うなづきて立ちあが
り、鳴居にかけたる槍を把る。)

伊太八 どれ、今のうちに槍でも研いで置かうか。
おくめ え。
伊太八 けふは小塚つ原で磔刑の女を突いて來たので……
(笑ふ。)この通り血だらけになつてしまつた。(槍をみせ
る。)

おくめ え。(顔へる。)

丑藏 これで突かれちやあ堪らねえな。
伊太八 これも刷つ腹をずぶりと抉られりやあ、どんな人間
でも堪らねえや。は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、
(おくめは逃げようとして縁を降りかゝるを、伊太八は
槍の柄にておさへる。)

伊太八 え、じたばたするな。ふだんから奥山で眼をつけ
てゐた女だが、所詮素直に相談はつくめえと、この丑藏

おくめ 話が違ふとはこつちで云ふこと。さつきお前さんが
店に來て、橋場の叔母さんが急病だから、すぐに歸つて
來てくれと云ひなざるので、おどろいて見舞に行く途中
にお前さんが待つてゐて、無理にこの田圃へ連れ込ん
で……

丑藏 おい、おい、常識を云つちやあいけねえ。夜なかでも
あることか、この眞晝間にお前も子供ぢやあなし、忌が
るものを無理にこゝへ連れて來られるものか。積つて見
ても知れたことだ。お前も得心づくて來たんぢやあねえ
か。

おくめ いえ、いえ、腰を立てれば殺すぞと嚇してこゝへ連
れ込んだので……

伊太八 まあ、まあ、今更そんなことを云ひ合つても仕様が
ねえ。おい。(丑藏に猪口をさす。勘次がなにか肴を見つ
けて來る筈だ。)

丑藏 (猪口を取る)おい、おくめさん。おれにやあ酌をし
て呉れねえのか。お前も現金な女だな。
(おくめは矢張り黙つてゐる。丑藏は手酌で飲む。)

おくめ 日の暮れないうちに早く歸して下さいまし。もう
そろ／＼と店を仕舞ふ時分て、内でも定めて察じてゐま

の智慧を借りて、うまくこゝまで連れ込んだからにやあ、なんと云つても、もうこつちのものだ。當分はおれの鼻にして、飽きた頃には川崎か、もつと遠くならば神奈川、藤澤、三島女郎衆か岡崎か、五十三次宿々の好きなどころへ賣つて遣らあ。おい、丑。如才なく山女街へかけ合つて置け。その時にやあ手前にも山分けだ。
 丑 ありがてえなあ。おい、おくれさん。(傍に寄りておくれの手を取り、再び縁より引き上げる。)もうかうなつちやあ仕方がねえ。お前もまんざら堅氣のお嬢さんと云ふわけでもねえ。寺内の生真坊主や寺侍を迷はした報いとあきらめて、素直に往生するがいゝぜ。お前はあれが……(槍を指さす。)怖くねえのか。大哥はあれで人を突き殺すのが商賣だよ。
 おくれ さあ。(顔へてゐる。)
 伊太八 やい、はつきりと返事をしねえか。
 (おくれは泣き伏す。おさよはたまり兼ねて小藪より出ようとする時、下のかたより勘次は手拭をかぶり、竹の皮包をさげて出づ。そのあとよりおくれの叔母おとくが追つて出づ。)

え。このおくれ坊を嫁に貰ひてえ。
 おくれ え。
 勘次 な、なるほど。こ、こ、こりやあ恰好の花嫁だ。叔母さんも定めて、ふ、ふ、二つ返事だらうね。
 おとく 飛んでもないことを……家の都合で茶店奉公はさせて居りますが、これでも大切の婿取りでございます。伊太八 そんならおれの方から婿に行かう。持参金はうんと持つて行くぜ。
 丑 女の方でも惚れてゐるんだから仕方がねえ。いつそ諦めて素直にくれてしまふが可いちやあねえか。
 おとく いえ、いえ、さうはなりません。
 伊太八 どうしても不承知かえ。
 おとく 忌がるものをかどはかして来て、婿に行かうの、嫁にくれのと無理難題、どうしてそれが肯かれませう。
 伊太八 なに、かどはかした。うぬ、飛んでもねえことを云やあがる。やい、勘次。その婆を小つ酷くなくり付けろ。
 おくれ あれ、もし……。
 丑 嘘え、黙つて見てゐろ。(おくれをわさへる。)
 伊太八 やい、坊主。そこから薪ぎつぼうを持つて来い。

勘次 う、う、うるせえ。知、知、知らねえと云ふのに……。(おさよはこれを見て再びかくれる。)
 おとく それでもおくれは此處へ連れ込まれたと云ふことを、たしかに人が聞いて来ました。
 勘次 だ、だ、誰が、そ、そ、そんなことを云つたか。知、知、知らねえが、お、お、俺あ、まつたく知らねえんだ。
 (云ひながら二人は入来り、おとくはおくれを見付けろ。)
 おとく おい、おくれ。やつぱりこゝにゐたのか。
 おくれ おい、叔母さん。
 (おくれは駆け寄り、おとくを、丑蔵はおさへる。)
 おとく 今買物にそこまで出たら、奥山のおくれさんが丑蔵さんと二人づれて、こつちの小屋へ這入つたといふ噂。不思議に思つて探しに来ました。(丑蔵に。)もし、お前さん。なんて姪をこんなところへ……。
 丑蔵 頼まれたから連れて来たのさ。
 おくれ いえ、いえ、頼んだ覚えはありません。無理無禮にわたしを手込めにして……。
 伊太八 え、やかましい。(おとくに。)もし、おまへさんが叔母さんなら、あらためて御相談してえのは外ぢやあね

九助 なんだ、なんだ。
 (九助は薪を持ちて臺所より庭に出る。)
 勘次 こ、こ、この、ば、ば、婆をなぐるんだ。
 おとく それはあんまり……。(逃げようとするを、勘次は襟髪を取つて引き握る。)
 九助 なんぼ何でも相手は年寄りだ。薪ぎつぼうで打んなくるのは些と可哀さうだな。
 勘次 氣、氣、氣の弱えことを云ふな。さ、さあ、おれに貸、貸、貸せ。(薪を受取つて振上げる。)おれは、こ、こんな事が、だ、だ、大好きだ。
 おくれ まあ、待つて下さいまし。
 丑蔵 それぢやあ素直にうんと云ふのか。
 おくれ さあ。
 伊太八 え、構はずになぐれ、殿れ。
 勘次 さ、さあ、ば、ば、婆、手、手、手前も早く承知をしろ。(薪にて打つ。)さ、さあ、こ、こ、これでもか。(つゞけて打つ。)
 おくれ あ、あ、もし、どうぞ堪忍して……。
 (おくれは氣を探むを、丑蔵はおさへてゐる。伊太八は笑つて酒をのんでゐる。小藪よりおさよは走り出で、勘

次を交へる。

おさよ まあ、そんな手馴れなことを……

前次 だ、だ、誰だ、誰だ。む、おさよさんか。邪、邪、魔をしちやあいけねえぞ。

おさよ これが邪魔をしずらなれませうか。これ、伊太八さん。先刻もあれほど意見したに、ひとの娘をかどはかして、女房にするの、宿場へ賣るのと、呆れ果てたお前の斜簡。

伊太八 まだそこらにうろ／＼してゐたのか。手前の出る幕ぢやあねえ、引込んでゐろ。

おさよ いえ、いえ、引込んでゐられません。今から心をあらためて……

伊太八 え、うるせえ奴だ。前次、そいつも一緒になぐり付けてろ。

前次 え、すこしく撥ねふ。

伊太八 坊主。手前も手傳へ。

九助 いや、こりやあいけねえ。(頭をおさへて後へ退る。)わつしは御免だ。南無阿彌陀佛。なむ阿彌陀佛。

伊太八 どいつも意氣地のねえ奴だ。

おさよ (おとくに。)もし、わたしが出来ましたからは、決

して御心配には及びません。

おとく どうぞ助けてくださいまし。

おさよ わたしに任してお置きなさい。

おとく なにおんお頼み申します。(手をあはせて拜む。)どうぞ二人が無事に歸れますやうに……

伊太八 無事に歸してたまるものか。やい、おさよ。邪魔をするともう斜簡しねえぞ。

(伊太八は起ちかゝらうとする時、下のかたより以前の長太走り出す。)

長太 おい、なんだか知らねえが、頭から急用だ。

伊太八 おれに來いと云ふのか。

長太 すぐに呼んで來いと云ふことだ。

丑三 お頭から急に呼びに來るとは……なんだらうね。(顔をしかめる。)

伊太八 悪いところへ呼びに來たが、なにしろ顔を出して來ずばなるめえ。うるせえな。

(九助は葎所より番傘と下駄を持つて來る。伊太八はその下駄を穿きて出る。)

伊太八 みんなも能く氣をつけて、どいつも逃しちやあならねえぞ。

おさよ もし、お前はまだ……

(おさよは詰め寄らうとするを、伊太八は蹴倒して傘を開く。)

伊太八 さあ、長太。一緒に來い。

(伊太八と長太は下のかたへゆく。おさよは情なさうにあとを見送る。薄く雨の音。蛙の聲。)

幕

第三幕

第一場

伊太八の家の裏手。正面はあばら家の板羽目。下のかたに流しの毀れかゝりたる井戸あり。井戸のほとりに柳の立木あり。この柳より物干竿の竹をわたして、古き襦袢、小兒の着物などがけてあり。前幕と同じ日の夜、薄く雨の音、題目太鼓の音きこゆ。

(上のかたより女房おたつ、手拭をかぶりて出づ。)

おたつ おや、おや、たうとう本降りになつて來さうだ。日が暮れたのに、干物を片附けるのを忘れてゐた。

(竿にかけたる着物や襦袢などを外してゐる。下のかたより同じく女房おとらは柄杓を入れたる手桶をさげて出づ。)

おとら 仕様のない天氣だねえ。(云ひつゝおたつの方を透しみる。)おや、おや、おたつさん。ちよいとお待ちよ。

おたつ おとらさん、なにか用かえ。

おとら まあ、お待ちよ。(進み寄る。)お前さんのかゝへてゐる襦袢は誰のたえ。

おたつ 家の子供のたえ。

おとら おとほけてないよ。そりやああたしの家で夜干しにして置いたんだよ。ほんたうに油斷も隙もなりやあしない。常談しないで返しておくれよ。

おたつ おや、お前さん、可怪なことを云ふね。それぢやあ妾がお前さんのを取つたとても云ふのかえ。

おとら その麻の葉の襦袢は家の子供のたよ。ぐづ／＼云はないで返しておしまひよ。

おたつ おなじ麻の葉だつて世間に幾らもあらあね。妾あから見えても人の物なんぞ塵一本だつて取つたことはないんだよ。常談も好加減にするが可いや。(干物をかゝへて行きかゝる。)

おとら (追つてゆく) お前さんも随分づう／＼しいねえ。
あやまつて返しておいでよ。
おたつ、ぢやあお前さんは何うしてもあたしを泥坊にするのかえ。

おとら 盗んだから盗んだと云ふのさ。それに不思議があるものか。

おたつ さういふお前こそ勘次さんの墓所から下駄を持ち出さうとして、帯でさん／＼殴られたぢやあないか。

おとら お前こそ傳八さん所のたはしをちよろまかして行つたのを忘れたか。

おたつ なにを云やあがるんだ。泥坊め。

おとら うぬが泥坊だ。

おたつ 畜生……

おとら 厭物……

(ふたりは編み合の大喧嘩になる。上のかたより坊主の九助うかゞひ出で、二人のなかへ割つて入る。)

九助 まあ、待つてくれ。こゝで喧嘩は止してくれ。折角酔つ拂ひを寝かし付けたところだ。

おたつ 伊太八さんは寝てゐるのかえ。

九助 小頭は今留守だが、丑藏と勘次をやう／＼寝かしてし

よは先に立ち、おくめは手拭を吹き流しに振り、おとくと共に忍び出す。)

おさよ 九助さん。大丈夫ですかえ。

九助 大丈夫。日は暮れる、雨は降つて来る。ぬけて出るにやあ丁度幸ひだ。

おさよ 丑藏さんも勘次さんも、すつかり酔つて寝込んでしまつたから、めつたに気が付く氣遣ひはあるまい。

おくめ 叔母さんの病氣とだまされて、初めは丑藏さんの家へ連れ込まれ、それから又こゝの家へ送られて、おそろしい無理難題、どうなることかと案じて居りましたに、無事でかうして歸れますのも、みんなお前さん達のお庇でございませぬ。なんとお禮を申してよからうやら……

おとく 叔母ひとり、姪一人、この子に若ものことでもあつたら、死んだ姉にも申譯がないと、どんなにか心配いたしました。先づ何事もなくて済みましたは、日ごろ信心する彌音様のお庇……(手を合はせる。二つにはお前様方のおなさけ、この御恩は一生忘れませぬ。)

おくめ 今夜は心が急きますれば、いづれ改めてお禮にあがります。

おさよ わたくしの家は遠い品川ですから、決してわざ／＼

まつたところだ。眼をさますと又面倒だから、まあ静かにしてくれ。

おとら だつてお前さん。あたしの家の精神をこの泥坊が……

おたつ まだそんなことを云ふのかえ。

おとら あたりませへさ。

(二人はまた詰寄るを、九助は隔てる。)

九助 まあ、まあ、止してくれと云ふのに……。それほど喧嘩がしたけりやあ、あつちの空地の廣い所へ行つて、喰合ふとも死合ふとも勝手に遣つてくれ。さあ、さあ、たのむから早くあつちへ行つてくれ。(無理にふたりを下のかたへ押送る。)

おたつ それでもお前さん、こん畜生が……

九助 可いよ、可いよ。まあ、あつちへ行つて何でも遣つてくれ。さあ、早く、早く……

(おたつとおとらは下のかたへ突き遣られて、なにか口小言を云ひながら立去る。)

九助 いや、さう／＼しい噂共だ。折角寝かし付けた二人に、眼を醒まされちやあ何にもならねえ。

(云ひつゝ、左右を窺ふ。うすく雨の音。上の方よりおさ

お禮には及びませぬ。そんなことを云つてゐるうちに、もしや人に見付かつては……)

九助 ちげねえ。ぐづ／＼してゐるうちに、小頭が歸つて來ちやあ大變だ。

おさよ さあ、些とも早くお出でなさいませ。九助さん。お前はそこまで御一緒に……

九助 そこまで送つて行つて上げませうよ。

おとく なにか何までありがたうございます。

おさよ 氣をつけてお出でなさいませ。

(おくめとおとくはおさよに禮を云ひて嬉しうに立去る。九助は案内してゆく。)

おさよ 伊太八さんの留守を幸ひに、みんなを巧く感懐して、あの二人を逃がして遣り、これでやう／＼安心したが、さて此のあとを何うしたものか。

(おさよは考へてゐる。題目太鼓の音。上のかたより勘次は酒に酔ひたる體にて、彼の槍を杖にして出づ。)

勘次 さあ、た、大變だ、大變だ。女がみんな居なくなつてしまつた。

(よろけながら四邊をさよ／＼見まはしてゐる。)

おさよ 勘次さん。わたしはこゝにゐるよ。

伊太八 風の吹き廻しか、よし原の騒ぎ唄が田圃を越して、今夜は手に取るやうに聞えるな。おれもよし原へ通つた頃には、こんな下らねえ奴に惚れてゐたのだ。(さびしく笑ふ。)

(上のかたより丑藏寛ひ出づ。)

丑藏 おい、小頭。どうなることかと先刻から窺つてゐたら、たうとうおさよさんを殺つちまつたね。可哀相なことをしたつけなあ。

伊太八 それも心柄だ。仕方がねえ。時に丑。もううか／＼しちやあみられねえぜ。

丑藏 え。

伊太八 このあひだの大名屋敷の一件よ。

丑藏 む。お前の舊の主人の屋敷で、勝手はすつかり知つてゐると云ふから、おれも手傳つて千兩箱をかつぎ出したが、それがたうとう露れたのか。

伊太八 ぬすんだ奴はなんでも屋敷の勝手を知つてゐる者に相違ねえと。だん／＼に詮議がきびしくなり、今もお頭のところへ呼び付けられて、色々に訊かれたが、どこまでもシラを切つて歸つて来た。だが、お頭も薄々感づいてゐる様子だから、行掛けの駄賃にあのおくめを引つ遣ひ

(時の鐘きこゆ。)

伊太八 ありやあ淺草の四つか。夜は短くなつたな。

(鐘の聲つゞけて聞ゆ。丑藏は竹釣瓶にて井戸の水を汲み、おとらが置いて行きし手桶にあげ、その水を桶杓に汲んで来る。)

丑藏 さあ、水だよ。

(おさよを抱き起して飲ませる。)

丑藏 小頭。

伊太八 なんだ。

丑藏 これも昔は、お前と死ぬほどに惚れ合つた仲なんだな。人間はわからねえもんだなあ。

伊太八 不思議なものよ。

丑藏 不思議だなあ。

(丑藏は思はず手を放せば、おさよはがつくり倒れて息絶ゆ。よし原の騒ぎ唄また聞ゆ。)

丑藏 今夜は馬鹿に陽気に騒いでゐるやあがるな。(おさよを見つて。)こつちの佛様はもういけねえや。お前も馴染甲斐に拜んで遣んねえ。

伊太八 俺あそんなことは大嫌いだ。(云ひすて、上の方に去る。)

て、どこへか高飛びしようと思つて、歸つてみれば女は玉無しよ。あんまり癪に障つたから、こいつはたうとう此のさまだ。(おさよの死骸を指さす。馬鹿な奴よ。)

丑藏 なるほど、そりやあ俺もかゝり合ひだ。うっかり油断は出来ねえな。

伊太八 おれは今夜の中にもこゝを立退いて、一旦上州の方に身をかくさうと思ふのだが、手前もなんとか這奴の始末をして、早々に草鞋を穿く支度をしろ。勘次がそこらに歸つてゐるから、起して手傳はせるが可いや。

丑藏 む。勘次も倒れてゐるんだね。

伊太八 そいつは腹を眩してゐるんだ。すぐに生きらあ。ちやあ頼むよ。

(云ひすて、伊太八は上の方にいかうとする。倒れしおさよ再び眼をみひらく。)

おさよ 伊太八さん。

伊太八 え。(立ちどまる。)

おさよ お前は心を入れかへて……。どうぞ昔のやうになつて……。(云ひかけて弱る。もし、水を……。水を……)

丑藏 水をくれろと云ふんだね。

伊太八 末期の水だ。飲ましてやれ。

丑藏 なるほど、思ひ切つて薄情に出来てゐるなあ。なにしろ、おれ一人ぢやあ手が付けられねえ。(勘次を呼び溜ける。)

勘次 やい、勘次。しつかりしろ。おい、おい、おい、どうした。しつかりしろ。桶杓で水を飲ませる。)

勘次 (眼をひらく。)

(夢中で云ふ。)

丑藏 あぶねえどころか、おさよさんはもう袂うに死んでゐらあ。

勘次 え。

丑藏 さあ、手前も手傳つて始末をしろ。

勘次 と、と、飛んでもねえことになつたな。

(丑藏は指圖して、勘次と共におさよの死骸を引き起すところへ、九助は歸り来る。)

九助 や、こりやあ何うしたんだ。(驚く。)

丑藏 靜にしろ。おさよさんが小頭に殺られたのだ。

九助 ひどい事をするなあ。やれ、やれ、可哀さうに……。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。(拜む。)

丑藏 手前の南無阿彌陀佛も今夜初めてお役に立つた。(笑ふ。)

勘次 さすがの俺も、こ、こ、これにやあ驚いたよ。南無

南無阿彌陀佛。

三 手前までが釣込まれて、ぐづぐづ云つてゐても仕様がねえ。どうして浮ばれねえ佛だ。早く片付けてしまはうよ。
(丑藏は勸次と共におさまの死骸を下のかたへ運びゆく。題目太鼓の音。)

九助 おれも一緒にゐりやあ殺されたかも知れねえ。あゝ、なむ阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

(向うより原田五七郎は中間に提灯を持たせ、あとより身軽に出で立ちたる侍数人がひて出づ。)

五七郎 これ、伊太八といふ者の住居はいづこだ。

九助 (びつくりして。)へえ、へえ、あれでございませう。

五七郎 (侍を見かへる。)兎もかくも拙者が踏み込んで一顧詮議いたせば、各々は家の前後をかためて取逃さぬやうに用心めされし侍 心得ました。

九助 わたくしはもう御用はございませんか。

五七郎 おゝ、行け、ゆけ。

九助 はい。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

(九助は早々に下のかたへ逃げてゆく。)

五七郎 六藏、其方もこゝに控へてをれ。

中間はあ。

(中間は提灯を持ちしまゝ控へてゐる。五七郎一人は上のかたへ行きかゝる。薄く雨の音。)

第二場

もとの伊太八の住家。内には薄暗き行燈を點しあり。

(伊太八は鉢巻、片肌ぬぎにて竹杖に仕込みたる刀を腰にさし、床板をめくりて床下に埋めたる小判を掘り出している。床の上にも小判が深山に積んであり。)

伊太八 丑の野郎はなにをしてゐやあがるんだらう。とてもおれ一人ぢやあ持ち出し切れねえ。(汗を拭いてゐる。)

(下のかたより五七郎窺ひ出づ。)

五七郎 頼む。

伊太八 え。(ぎよつとする。)

五七郎 伊太八どののは在宅めさるか。

伊太八 な、なんだ。

(伊太八はあわてゝ傍にありし槍を把り、積んだる小判の上に腰をかける。)

五七郎 お騒がなざるな。五七郎でございませう。

伊太八 むゝ、弟か。(すこしく安堵して槍を捨てゝ)今頃こんなところへ何しに來た。

五七郎 ちと御意得たい儀がござりまして……。

伊太八 なんだか知らねえが、まあこつちへはひれ。

五七郎 御免ください。(縁にあがる。先刻は失禮、仕りました。)

伊太八 (まだ不安らしく。)そんな事はどうでも可い。早く用をいへ。早く云へ。

五七郎 兄上。

伊太八 なんだ。

五七郎 その小判は如何なされたのでござります。

伊太八 え、これか。これは……。

五七郎 先刻も申上げましたる通り、江戸屋敷に盗賊忍び入り、御用金一千兩をぬすみ出しました。

伊太八 それは先刻も聞いたことだが、それがどうしたと云ふのだ。

五七郎 もはや何にも申上げませぬ。わたくしの役目はこれでござります。(懐中より十手と捕縄を出す。)

伊太八 ぢやあ何か、おれがその泥坊だと云ふのか。(少しく慌てる。證據があるか、證據があるか、それを云へ。今

は身分違ひでも、貴様はおれが現在の弟だぞ。兄に向つて無暗なことを云ふな。

五七郎 覺えがないとおつしやりますか。

伊太八 あたりめえよ。知らねえ、知らねえ。

五七郎 では、大枚のその小判を、なんて床下に埋めてお置きなされました。

伊太八 え。

五七郎 その刻印を檢めませうか。

伊太八 え。

五七郎 かやうなお姿に相成つても、兄上も元は武士の種、尋常に御切腹なされませ。

伊太八 腹を切れ……。飛んでもねえことを云やあがる。おらあ腹を切るやうな覺えはねえ。

五七郎 切腹は御承知でござりますか。

伊太八 いやだ。いやだ。

五七郎 たとひ忌と申されましても最早逃るゝ道はござりませぬ。(詰めよる。この家の前後は大勢が取巻いて居りますぞ。)

伊太八 なに、大勢が取巻いてゐる……。こりやあいけねえ。(起ちあがる。)

五七郎 兄上、御卑怯な。(袖をつかむ。)

伊太八 え、なにをしやあがる。

(伊太八は振り放して行燈を蹴倒せば、家のなかは暗くなる。五七郎は探りながら追はんとするを、伊太八は指り抜けて行かうとするうちに、五七郎は積んだる小判につまづき倒れる。伊太八は縁より飛び降りて下のかたへ行きかゝると、小藤より侍一人うかひひ出で、それとすかし編み組みつゝを、伊太八は突き倒して一駄に走りゆく。五七郎は起き上りて屹と向うを見込む。雨の音。)

第三場

吉原の裏田圃。平舞臺にて所々に柳の立木あり。正面は田川や低き土手を隔て、吉原の廓。灯入りの遠見。鷹ぎ唄きこゆ。

(ひやかしの若い者は頬振り、相々傘にて立つ。)

若者甲 なんだか降つたり止んだり、をかした天氣だな。

若者乙 このごろの天氣癖だ。ふられる覺悟してありや間違ひはあるめえ。

若者甲 手前が女郎買にいつたやうだ。は、は、は、は。なに

しろ一廻り廻つて来ようぜ。

若者乙 毎晩御苦勞様なことだな。あんまり強く降つて来ねえ中に、行かう、行かう。

(二人は上のかたに去る。下のかたより丑藏は頬包り尻指折にて破れし番傘をさし、女房お熊は竹の子笠をかぶり、風呂敷包みをかゝへて出づ。)

丑藏 おい、もつと早く歩かねえか。不躰は口ばかり達者な癖に、かういふ時にやあ意氣地がねえぜ。

お熊 そりやあ當りませ、女だものを……。こんな時に面倒を見てくれるのが亭主の役だよ。

丑藏 ふだんは曝らしくもねえ癖に、いざと云ふ時にやあ人に免れかゝりやあがる。ぐつぐつしてゐると置去りだぞ。

(先へ行きかゝる。)

お熊 (捉へる。) ぢやあ妾を捨て、行くつもりかえ。伊太八さんはおかみさんを殺したといふが、お前も負けず劣らずの癡情だねえ。死んで執着いて遺るから覺えてゐるが可い。

丑藏 うるせえな。ぢやあ、ずん／＼歩け。

(二人は上のかたへ行きかゝると、あとより長太、虎松、ほか二人は棒を持ち出て出づ。)

長太 おい、丑藏。ちよいと待つてくれ。

丑藏 え、なんぞ用か。

虎松 お頭が用があると云ふから、氣の毒だが、あと戻りをしてくんねえ。

丑藏 用は大抵判つてゐるが、ふだんの好しみだ、まゝ見ねえ顔をして通して呉れ。

長太 いくら不躰の好しみでも、お頭の指圖だから仕方がねえ。

お熊 そこをあたしが頼むから……。

虎松 いけねえ、いけねえ。なんでも一度は歸つてくんねえ。

長太 そつちは二人、こつちは四人、素直に歸つた方がよからうぜ。

丑藏 (舌打して。) 足踏連でなけりやあなあ。忌々しい目に逢つたものだ。

長太 さあ、さあ、早く来ねえと云ふのに……。

丑藏 誰も行かねえとは云やあしねえ。さう／＼しい奴等だ。(丑藏夫婦は長太等四人に圍まれて下のかたに行かうとする時、下のかたより傳八、源吉を先に、その仲間の者、大勢出づ。)

傳八 お、長太。丑藏はどうした。

長太 夫婦ながらこの通りだ。

源吉 伊太八もこつちへ逃げて来たと云ふが、とても素直に歸る氣づけえはあるめえ。

虎松 あいつは元が侍だから用心しろ。

傳八 合點だ。合點だ。

お熊 小頭もやられるのかねえ。

丑藏 これも運の盡きだ、仕方がねえ。

(丑藏夫婦と長太等四人は下のかたに去る。)

傳八 さあ、今度はこつちの番だ。今までは小頭だが、お頭の指圖だから仕方がねえ。

源吉 遠慮なしにふん認めれ。

一同 承知だ、承知だ。

(一同は左右の柳のかげに隠れる。雨の音。向うより伊太八は竹杖に仕込みし刀を腰にさし、酒菰をかぶりて走り出づ。)

伊太八 又おそろしく降つて来やがつた。なにしろこゝらにうか／＼しちやあゐられねえ。夜のあけねえうちに板橋まで仲さにやあなるめえ。

(伊太八は上のかたへ行かうとする時、木かげより傳八と源吉出づ。)

傳八 おい、小頭。ちよいと待つて呉んねえ。
 (伊太八は知らぬ振をして行き過ぎようとする。)
 深吉 知らねえ顔をするもんぢやあねえ。まあ、待つて呉ん
 ねえ。(菘を掴む。)もし、お頭の御指圖だ。
 伊太八 だれの指圖でも俺あ知らねえ。(振拂つて行かうとす
 る。)

傳八 もう仕方がねえ。それ。
 (合圖に連れて木かげに隠れし大勢出て、伊太八を押取
 りまく。雨の音。騒ぎ唄。伊太八は大勢を相手にたゝか
 ひ、大勢はかなはずして逃げ去る。傳八と源吉は棒を持
 つて打つてかゝるを、伊太八は竹杖の刀をぬいて切拂ひ、
 遂に二人を切倒す。)

伊太八 どうも這奴も馬鹿な奴だ。しかし人間も落目にな
 つちやあ惚めなもんだ。先刻まではヤレ小頭の大爺のと、
 おれを敬ひ奉つて、振舞酒をありがたさうに掻つ食つ
 た奴等が、みんな向うに廻りやあがる。この薩梅ぢやあ
 丑も勘次もやられたらうな。

(伊太八は刀を鞘に収め、落ちたる酒菘をかぶつて行か
 うとする。下のかたより原田五七郎は羽織をぬぎ、下緒
 を露にかけて出づ。)

五七郎 兄上。それにおいてなされたか。
 伊太八 え、又來やあがつたか。執念深え奴だ。もう好加
 減にしる。

五七郎 これがわたくしの役目てござります。
 伊太八 うぬ、もう料簡しねえぞ。

(伊太八は刀をぬいて切つてかゝるを、五七郎は十手に
 て防ぎ聞ひ、遂に伊太八の刀をうら落して組み伏せる。)

五七郎 さあ尋常に切腹なさるか。
 伊太八 疲れてゐなけりやあ手前なんぞに負ける俺ぢやあね
 えんだ。さあ、放せ、放しやあがれ。

五七郎 但しは繩をかけませうか。
 伊太八 手前に縛られて堪るものか。

五七郎 これほど申してもお聞入れないとは……。
 伊太八 なにを云やあがるんだ。

(不意に剣かへして又逃げかゝるところへ、左右より
 侍數人出づ。中間も提灯を持ちて出づ。)

伊太八 (伊太八を取りまきて再び組み伏せる。伊太八は暴れ
 る。)

五七郎 もうこの上は是非に及ばぬ。それ、繩を打たれい。

(侍は伊太八を捻ぢつけて無理に繩をかける。)

伊太八 やい、五七郎。手前は兄をふん縛つて手柄にするの
 か。

五七郎 (嘆息して。)それも御心柄で致方もござらぬ。(侍に
 むかひて。)それ、引立てめされ。

伊太八 さあ、どうともしやあがれ。馬鹿野郎め。
 (侍は伊太八を引立てる。)

—幕—

室町御所

登場人物

足利將軍義輝
大館岩千代
一色淡路
高木左近
島山次郎
松永彈正久秀
池田丹後將武
岩瀬主水助
伊賀七郎
森傳助
和田右京
津川源八郎
生駒甚作
落合彌市

中村五郎兵衛
魚住虎松
犬塚新吾
藤原の妻小侍從
乞食與兵衛
笛を吹く男
蛇使ひの女
松永の娘多門
足利と松永の家來
侍女
花賣の女
僧
人夫など

第一幕

第一場

洛中三條大橋の袂。舞臺の中央より上の方へよ
せて大橋あり。所々に柳の立木あり。正面は加
茂川をへたて、東山をみる。足利時代の末、永

祿七年五月十九日の午後、木の音や、高くきこ

（白河の花賣女おそよ、お夏の二人、夏の花なうづたか
く盛り入れたる籠を持ちて立つ）

おそよ この頃ふりつゞいた五月雨もどうやら晴れさうにな
つて来たが、かう毎日降られては、わし等の商賣は休み
も同様ぢや。

お夏 加茂川もこの通りに水が増した。この上に降つたら溢
れようも知れまい。もうよい加減に晴れてほしいものぢ
やなう。

（ふたりは空を仰ぐ。僧良念、小坊主良山の二人は橋を
渡りて出づ）

良山 おゝ、あすこに花賣が来ました。なんぞ買うて戻りま
せうか。

良念 なるたけ廉う値切つて買はうぞ。これ、これ、花賣。
なんぞ良い花があるかな。

おそよ 花を召してくださいませ。

良山 買はうと思ふから呼んだのぢや。

お夏 花はなんでもお望みのがござります。
（おそよとお夏は籠を出してみせる。）

良念 この熊子はなんぼぢや。

おそよ 十文でござります。

良山 その白百合は……

お夏 これも同値でござります。

良念 これもみな高値ぢやな。錢五文くらゐで見事な花はな
いか。

おそよ これならばお負け申しておきませう。

良念 いや、萬浦ならば五文でも高いわ。ことわざにもいふ
六日のあやめ、しかも今日は十九日で、節句からは半月
も過ぎてゐるぞ。

良山 先づ三文くらゐのところでござりませうな。

お夏 いくら節句が過ぎてゐても、三文では買われませぬ。
おそよ 三文花がはしければ、お寺の門へお出でなされま
せ。

良念 わしが寺には一文花も買つてゐるわ。は、は、は、ど
うぢや、三文には負からぬか。

お夏 ほかをたづねて御座なされませ。

良念 いや、愛嬌のない女子どもぢや。では、良山、行かう
かの。

良山 さあ、さあ、まゐりませう。

南無阿彌陀佛。
南無阿彌陀佛。

(僧二人は下の方へ去る)

おそよ たまに來れば素見ばかりぢや。どれ、そこらを一廻りして來ようか。

お夏 けふは久振りで高ひに出たに、一日あるいても縁なことはないなう。

(二人の女は脚絆や草鞋の紐を結び直してゐる。武士二人は橋を渡りて出づ。)

武士甲 公方家の御成ぢや。しばらく通行は相成らぬぞ。

おそよ 公方様の御成でござりまするか。

武士乙 今日清水寺へ忍びの御参詣で、たゞいまお歸りに相成るのぢや。

武士甲 無禮のなきやうに懐んで控へてをれ。

お夏 かしこまりました。

義輝 京の水をきよむる工夫はないか。

左近 むかしの帝が申されました通り、双六の賽と加茂川の水とは、人の自由には相成りませぬ。

お夏 さうかなう。

(云ひつゝ、彼の花賣女に眼をつけ、更に左右を見かへれば、家來どもは馬の目を取る。義輝は鞍より降り立ち、更に床几にかゝる。)

義輝 あれに居るは花賣の女どもであらう。花を残らずこれへ持て。

次郎 はつ。その花をこれへ……。

二人 はつ。

(おそよとお夏は次郎のまへに花籠をささぐ。)

次郎 して、この花をいかゞ遊はしまするな。

義輝 一つの籠をこれへ……。

次郎 はつ。

(次郎は進んで一つの籠を獻すれば、義輝は籠をみて、笑ましげにうなづく。)

義輝 百合、なでしこ、菖蒲、かきつばた、皆とり／＼に美しいものぢや。よい、よい。

(義輝は起つて橋のほとりに行き、籠の花を取つて一々

義輝 川を隔て、遠く望めば、今日この頃のさみだれに縁を増したる東山、雲を見るやうな眺めぢやなう。

岩千代 仰せの通り、青葉わか葉の山々は、遠く隔て、見まするが、また一入の風情でござりまする。

左近 今更ならねどこの三條の大橋より、川をへだて、東山を見ましたる風景は、都にもたぐひござりませぬ。

次郎 たゞ惜むらくは此頃の雨つゞきて、加茂の川水が常よりも濁つてをりまする。

義輝 なにさまこの頃の雨に水まして、加茂川の清き流れもおびたゞしく濁つた。見よ。廣き河原もあとなく隠されて、あか土を溶したやうに濁つた水が、岸を渡さんばかりに漲つてをるわ。都は山紫水明の地と謳はるゝに、山

はむかしながらに青けれど、水のかばかりに濁つたは忌

忌しい。しかも心なき徒の仕業とみえて、川上より捨て

たる破れ笠、さては古き草鞋のたぐひ、浮いつ沈みつ流れてくるわ。都名所の加茂川も、かくては路はたの溝川も同然ぢや。

岩千代、なにを申すもこの頃のなが雨が雨にござりますれば、清き名をうたはるゝ京の水も、濁るばかりでござりまする。

に川へ投げ入れる)

左近 や、その花を川のなかへ……。

義輝 加茂の川水が濁りに濁つて、汚れたる物の漂ふはあまりに目障りぢや。せめては美しい花をなげ入れて、濁れる水を彩つてくれうわ。白、紅、黄、青、むらさきの

花や葉が、水をくぐつて流るゝ風情は、吉野の春か、龍田の秋か。は、面白いなう。

岩千代、なにさまこれは風流の思召、水の神にも心あらば定めて嬉しう存じて居りませう。

義輝 そち達も投げてみい。

岩千代 はつ。

(岩千代、左近、次郎はほかの籠を取りて、思ひ／＼に花を投げ入れる。)

義輝 濁れる水に色を添へ、濁れる水に香をたゞよはして、思ひもよらぬ興を催したわ。かの花賣に褒美を取らせ

い。

次郎 はつ。(懐中より金を取出す。褒美を取らずぞ。ありがたく頂戴いたせ。)

おそよ 恐れ入りました。ござりまする。

(おそよは進んで金をうけ取り、二人は土に手をつきて

拜禮す。

左近もはや用事は無い。行け、ゆけ。

お禮ありがたうござりまする。

(二人の女は籠を持ちて下の方へ立去る。)

岩千代 (空を仰ぐ) 又もや空の色も怪しうなつてまゐりましたれば、降らぬうちに御歸館遊ばしては如何でござりまする。

巖崎もはや歸館いたさうか。さみだれの喧問は短いなう。

(巖崎も空を仰ぎつゝ起ちあがる時、下の方より松永の家臣伊賀七郎は家來數人を引連れ、おびたどしき怪の杖をつみたる車を人夫にひかせて出づ。かくと見るより岩千代はその行手に立竈がる。)

岩千代 待て、待て。公方家の御威先であるぞ。

左近 退れ。さがれ。

七郎 (進み出づ) 岩千代どの、拙者は伊賀七郎ぢや。お見おぼえもござらう。して、公方家にはいづかたへお忍びてござるな。

岩千代 清水寺へ御参詣の方向でござる。

七郎 さらば我々とは路が違ふ。邪魔せずと通してくだされい。拙者はいそぎの用事をかゝへてゐる身ぢや。

(七郎も太刀に手をかくれば、七郎の家來どもは驅寄りて七郎を遮る。)

岩千代 さあ、早う路を變へて行け。この車をあとへ戻せ。

(岩千代進んで車のはなを押し戻せば、人夫は餘儀なく車を引つ返す。七郎は無念に塔へす、車に積んだる籠の一枚をとりて、矢庭に岩千代の面を打つ。岩千代怒つて太刀をわかんとするを、左近と次郎は走り寄つて支へる。七郎は猶も打たんとするを、これも家來に支へる。)

岩千代 おのれ。武士の面を打つたるな。左近も次郎も止むるな、放せ。

(岩千代は身をもがくを二人は奮支へる。)

七郎 (冷笑ふ) お、打つたがなんとした。當時威勢をふるふ松永殿に對して、とかくに楯を突くが面憎さに、七郎が折檻いたしたのぢや。は、公方家がなんぢや、將軍家がなんぢや。おのれ等も位例れの主人に奉公せうより、この籠をかついて發符の供して來い。

(七郎は籠の杖を岩千代に投げつけて去る。家來等も車を圍みて元來し方へ引返してゆく。)

岩千代 おのれ……

岩千代 そのやうにおびたどしい籠を積んで何とするのぢや。

七郎 え。(すこしく口籠る。) 宇治の發符にまゐるのぢや。

岩千代 發符にそれほどの籠が入用か。さりとては仰山なことぢやなう。(少しく怪む) して、お身の主人松永は、何百人をつれて發符にゆくのぢや。

七郎 (むつとして) いらざる詮議をする男ぢや。當時都にならびなき松永正どのぢや。發符にも何百人何千人の供をつれて行かうわ。

岩千代 それにしても松永の屋敷は立賣町ぢや。これへまゐつては方角が違ふぞ。

七郎 え、それをお身に習はうか。拙者は一先づ三好殿の屋敷へまゐるのぢや。

岩千代 三好も誘うてゆくのか。

七郎 くだいなう。(顔を背ける) なんでもよいから通して下されい。それ……

(見かへれば、人夫は車を挽き出さんとす。)

岩千代 え、ならぬと申すに……公方家の御威先を押し通らば、この岩千代が手は見せぬぞ。

七郎 なに……

(岩千代はいよゝ怒つて追はんとするを、左近と次郎は抱きすくめる。)

左近 急くな。岩千代……

次郎 まあ、待ちやれ。

岩千代 でも、このまゝには……

巖崎 岩千代、待て。

岩千代 はつ。

巖崎 かの七郎とか申す奴、主人松永の威勢を屏にきて、強て供先を押し通るならば、たゞ一刀に切つて捨てんと、最前より指纏を押へて居つたが、かれも道理は争はれず、おめくんと車を返して行つたわ。それでそちの役目は立つた。そのくらのことは堪忍せい。

岩千代 はつ。

(岩千代は落ちたる籠を手に取りて、無念の涙をぬぐふ。)

巖崎 そちの無念は察してをるぞ。わが面前にて家來を打斷されて、巖崎とても口溜いは山々ぢやが、かねて聞かす通り、三好松永は威勢をたのんで、將軍の手に對してすらも、目にあまる振舞の多いこの頃のありさまぢや。しばらく辛抱して時節を待て。

岩千代 はつ。上様が御勘辨に相成りますれば、わたくしも
じつと無念を堪へて、しばらく時節を相待ちまする。
岩千代 男の癖に涙をこぼすな。

岩千代 はつ。
義輝 なにや彼やで時を移した。いざ歸館いたさうか。供捕
ひいたせ。

一問はつ。
義輝 馬にのる。左近と次郎その他の家來も附添ひて
行かんとする時、上の方より松永の家臣岩槻主水助出で、
かくと見るより土にひざまづきて禮す。

義輝 かれは何者ぢやな。
左近 おなじく松永の家來岩槻主水助と申しまする。
義輝 おい、左様か。(打笑む)松永の家來も七郎のやうな無
禮者ばかりでもないと思ゆるな。

(義輝をはじめ、家來等は向うへ去る。岩千代はあとに
残りて、彼の枝をじつと打ちながめ、無念の體なり
しが、やがて主水助と顔を見あはせ、おのが素振を覺ら
れまじと彼の枝を腰にはさみ、足早に向うへ去る。主水助
はあとを見送る。橋の上より松永の娘多門、十八歳、美
しく粧ひて、侍女ひとり連れて出づ。)

多門 さあ、主水助。

主水助 お供いたすてござりませう。

多門 みち／＼何を話さうか。

主水助 なんなりとも承はりまする。(打笑む)

多門 (おなじく打笑む)では、兎も角もあゆみながら、

主水助 面白いお話をお聞かせくださりませ。

(多門と主水助は肩をならべて歩みゆく。侍女はすこし
引退りて従ひゆく。池田丹後將武、廿七八歳。頭巾を
かぶり、笠を持って走り出で、橋の上にて三人のうしろ
姿を乾と見送る。)

第二場

洛中立賣町、松永正の屋敷内。

披露をこらせし茶室、床には書軸をかけ、花を
活け、茶棚、臺子などあり。庭には樹木敷あり。
り。左右には風雅なる土塀あり。おなじ日の夕
刻。

久秀 五十餘歳。平蜘蛛と
に茶を立てゝゐる。庭

侍女 あれ、あすこに主水殿が……。

多門 おい、ほんに……。

(多門は橋を渡りて進みよる。主水助も見かへりて打笑
む。)

主水助 おい、娘にはいづかたへお越してござりました。

多門 清水寺へ参詣して來ました。

主水助 では、將軍家と同じところへ……。

多門 一足ちがひで、もう下向の濱んだところであつた。こ
こてお身に逢うたは丁度幸ひぢや。さあ、打連れて屋敷
へ戻らう。但しは誰か。

主水助 なんて嫌でござりませう。

多門 さあ、一所におぢや。

(多門は主水助の手を取らうとするを、主水助はしづか
に振拂ふ。)

主水助 都大路には人目がござりまする。

多門 ほんにうるさい世の中ぢやなう。

侍女 わたくしはおあとへ引退つてまゐりますれば、ゆる
ゆるとお話をなされませ。

多門 おい、邪魔せぬやうに、あとから離れて來や。よいか。
侍女 はい。

には蛙の聲きこゆ。

久秀 釜には松の聲、庭には蛙の聲、さみだれの晴間に庭の
青葉をながめながら、心しづかに一服の茶を飲むも、風
流の趣意であらうよ。(空を仰ぐ)いや、さういふうちに
空は再び陰つて來た。今宵はおそらく雨であらうな。よ
い、よい、ふらば降れ。夜討には雨が結句ましかも知れ
ぬ。

(久秀は再び釜にむかふ。蛙の聲しきりにきこゆ。下の
方より伊賀七郎出づ。)

七郎 殿、たゞいま戻りましてござりまする。

久秀 おい。七郎、戻つたか。用意の籠は取りあづめたか。
七郎 およそ三千本ばかり取集めました。いかゞでござり
ませうな。

久秀 それほど集めたら不足はあるまい。夜いくさには合印
が無うてはならぬ。めい／＼の腰に挿して、同士撃せぬ
やうに氣をつけよ。よいか。

七郎 一同にも乾と觸れ渡すてござりませう。右の籠を車に
つませて、これへ曳かせてまゐる途すから、恰も公方家
の御成にゆき逢ひました。

久秀 いづかたへお忍びぢやな。

とて何とならうぞ。はしはし。

七郎 大方後生を願はれたのでござりませう。

久秀 そんなことかも知れぬなう。

多門 父上これにおいてなされましたか。

久秀 おい、よいところぢや。これへ来て相伴いたせ。

多門 はい。

(多門も父にむかひて坐す。)

久秀 七郎もどうぢやな。

七郎 はつ。お茶も結構ではござりまするが。もはや人敷も

到着の時刻でござりますれば……

久秀 時刻はまだ早い。さのみ慌つるにも及ばまい。しかし

人敷が揃うたれば、久秀よりあらためて申渡す儀があ

る。一同打退れてまゐれと云へ。

七郎 かしこまりました。

(七郎去る。)

久秀 はて、せはしない奴ぢや。娘、あらためてそちの手前

を一服所望いたさうかの。

う。わたくしも今日は祇園と清水に参詣して、御本意感

就を祈つてまゐりました。

久秀 ほかならぬそちの願ひぢや、神も佛もさだめて納受さ

れたであらう。陪臣の松永久秀も翌は公方家同様の出世

もなると云ふものぢや。そちも一心を凝して、父の果報

を祈つてくりやれ。

(多門は茶を立て、出す。久秀は茶碗を取りて飲む。)

多門 服加減いかゞでござりまするな。

久秀 よい、よい。加減は上々ぢや。

多門 今宵の御首尾も上々でござりませう。

久秀 崩れかゝつた足利の家ぢや。久秀の方で一押し押した

ら、棟も柱もめり／＼と折れてしまふわ。

多門 とは云へ、上様は武勇人に越えさせたまひ、打物取つ

てはその面に立つ者もないとか申しまする。

久秀 さあ、それがいさゝか懸念ぢやが……。さりとて多勢

に無勢ぢや。撃ち洩すやうなこともあるまい。

(下の方より伊賀七郎再び出づ。)

七郎 人数はのこらず打揃うてござりまする。

久秀 左様か。組頭以上の者どもをこれへ呼べ。

七郎 はつ。(下の方にもかひて。)いづれもこれへ……。

多門 では、御免くださりませ。

(多門は茶を立てる。)

久秀 久秀が人に養はるゝ實は二つある。その一つは先づそ

ちぢや。年四十に近きまで子なきを憂ひ、志貴の多門天

に祈禱を籠めて、はじめて懐けし娘なれば、名をそのま

まに多門と呼ばせ、けふまで恙なく成長させたが、わが子

ながらも萬人にすぐれし容貌、松永の娘多門といへば、

雲の上までもきこえし美人となつたわ。

多門 又してもそのやうなことを……。親の口から我子をお

なぶりなされまするな。

久秀 いや、弄るでない、ほんのことぢや。今一つの實はそ

の平蜘蛛の釜、大明より傳へて東山殿の手に入りしを、

更に傳へてわが物となつたが、これも日本には二つなき

名器ぢや。その釜でそちの手前、茶の味は甘酸であら

うよ。

多門 とは云へ、まだそれだけでは御満足がなりません。

久秀 さあ、人間の慾には限りがないもので、おなじくは大

下の權を兩手に握つて、その上でそちとその釜とを併せ

有つたら、久秀の望みも初めて叶ふといふものぢや。

多門 その御望みの叶ふのもう二响三响の後でござりませ

下りて唯ある木の下に坐す。)

久秀 今あらためて申すまでもなけれど、公方家近ごろの御

政道よろしからず、萬民ほと／＼難儀に及びて、足利十

三代の御運も將にかたむかんとす。しかも公方家は我等

を殊のほか憎ませたまひて、隙もあらば三好松永の兩

家をほろぼさんと、内々の御企てもありとか聞く。おく

るゝ時は人に制せらるゝと云へり。われより先に手を下

して、當公方家を失ひたてまつり、阿波の御所頼朝公を

迎へ取りて、更に十四代の將軍に据ゑまらせ、われは

天下の後見となりて、家繁昌の基を開かんと思ふぞ。い

づれも異存あるまいな。

主水助 仰せまでもござりませぬ。當公方家の御政道正しか

らざるは萬人の知るところ、しかも當家に敵意を含ませ

らるゝからは、一刻も早う謀叛のおん企て然るべく存じ

まする。

傳助されば我々も密々に用意をととのへ、今宵戌の刻を合圖に、室町御所の四方よりみだれ入り、たゞ一戦に將軍家を攻めほろぼさんと、手ぐすね引いて相待ち居りまする。

久秀 して、人數の配り様は……。
右京 先づ東の手は三好どの自身に馬をすゝめられ、人數はおよそ四百五十餘騎、三本木東の洞院に陣を立てられまする。

五郎兵衛 御所方にも一色淡路、大館石千代をはじめとして、宿直の武士も四五十人は屯してをりますれば、かれらも必死の働きを致すてござりませう。

久秀 よい、よい。それで四方の隙はあるまい。久秀は室町の大門、大手口に陣を取らうぞ。

右京 仰せ御もつともござりまする。
久秀 進んで引受くる勇士はないか。
（一同は又もや顔を見あはせる。）
久秀 公方家の武勇がそれほどに怖ろしいか。
（一同は答へず。）
久秀 將軍の威勢がそれほどにおそろしいか。
（一同は答へず。）

新吾 入替へ入れかへ攻め付けて、一人も残さず討取るは、半响が一响のひまでござらう。

久秀 待て、待て。其方どもは一人も残さずといふ。そのうちには公方家も含まれて居らうな。

七郎 それは勿論の儀でござりまする。
久秀 して、その公方家は誰が撃つな。
（一同は顔を見あはせて少しく躊躇する。）
久秀 たゞいまも申す通り、宿直の面々いかほどに働くと、それは多寡の知れたるものぢや。が、たゞ恐るべきは公方家一人ぢや。かの御仁は力量逞しく、打物取つては御所内にもならぶものなき達人と、人も云ひ、我も誇つてをらるゝほどなれば、容易に討取ること覺束ない。さりとて狭い御所内ぢや。遠矢にかくることもなるまい。所詮は一騎討の勝負であらうが、この役目を引受くるものはないか。

七郎 なにさまこれは大事の役目、首尾よく仕遂すれば天晴れの功名ぢやが、方々、いかゞてござるな。

傳助 いかにもなう。
（一同は再び顔を見あはせる。）

室町御所に討入つて、まつさきに公方家の御首級をあげたる者には一千貫の褒美を取らせうが、どうぢや。
（一同は「一千貫、一千貫」と叫ぶのみにて、われ進んで應ずるもの無し。）
久秀 さらば二千貫……二千貫ぢや。
（一同は答へず。）

久秀 （いよく／＼焦れる。）さらば三千貫……え、五千貫ぢや……え、まだ不足さうな面附ぢやな。よい、よい。さらばこれを遣はす……この平蜘蛛の釜を遣はす。これは久秀に取つて二つとない寶ぢや。それでもまだ不足と申すか。え、しかと返事をいたせ。
（一同は又もや顔を見あはせて「平蜘蛛、平蜘蛛」とささやき合ふのみ。）

久秀 平蜘蛛でもまだ不足とあれば、久秀の寶はもう盡きた。む。

（久秀は衝と起ちて娘の手をとり、多門を前にひき出す。）
久秀 今宵公方家をうち取つたるものに、この多門をくれる。いとしい娘の婿にする。

（かくと聞くより主水助は俄にすゝみ出づ。）

久秀 今宵の企ては公方家一人を討取るが趣意ぢやに、當の相手をうち洩しては、折角の苦心も水の泡ぢやぞ。

右京 仰せ御もつともござりまする。
久秀 進んで引受くる勇士はないか。
（一同は又もや顔を見あはせる。）
久秀 公方家の武勇がそれほどに怖ろしいか。
（一同は答へず。）
久秀 將軍の威勢がそれほどにおそろしいか。
（一同は答へず。）

久秀 （いよく／＼激して。）返事のないのは卑怯者ばかりと極まつたか。いや、いや、これほどの大事の役目を、無理強ひにすゝめたは私の不覺ぢや。重賞の下には死士ありといふ諺もある。さらば久秀が賞を懸くるぞ。こよひ

主水助 さらば拙者が……。

(云ひかくる時、今まで黙してゐたりし池田丹後、これを打消すやうに大音あげて叫ぶ。)

丹後 いや、それがしがお請けつかまつる。池田丹後將武がたしかにお請けいたしました。

(一同おどろきて丹後の顔をみる。丹後は前にすゝみ出づ。)

主水助 いや、その儀は相成るまい。お請けの口上は拙者が先ぢやぞ。

丹後 え、口上の前後は扱措いて、人には身の程といふものがある。お身等のやうな生ぬるい京侍に、この役目が勤められうか。控へておるやれ。なう、殿。武士に二言はない。今宵室町御所に討入つて、公方家の首級をあげたるものには、たしかに息女を下さるゝか。

久秀 久秀も武士ぢや。嘘はいふまい。

多門 あゝ、もし、それは……。

久秀 はて、よい、父に任しておけ。

丹後 約束に違變はござらぬな。

久秀 諸人のみる前で、久秀たしかに誓つた。

主水助 お詞ではござれども、お請けの御返事申上げたるは、

丹後 一人ではござりませぬ。拙者の聲はお耳に入りませぬか。

多門 ほんに丹後よりも先に、主水助がお請け申上げたのでござりまする。

久秀 さらば兩人に申付けう。丹後にもあれ、主水助にもあれ、まづ第一に公方家を討つたるものを、娘の婿と定むるほどに、いづれも懸命の働きたせ。

七郎 まことに依怙なき御測きてござりまする。御兩所にも其心して、たがひに功名を競はれい。

丹後 功名を競ふといふは、宇治川の佐々木禊原のやうな勇士が二人ならん場合にお申すことぢや。

主水助 主水助では相手に足らぬと云ふか。

丹後 は、ムムムム。

(主水助むつとして詰め寄らんとするを、傳助等は支へる。入相の鐘きこゆ。)

多門 お、あの鐘は酉の刻か。

久秀 討入までにはもう一响ぢや。いづれも物具の用意いたすがよからう。

一同 はつ。(鐘の聲つゞけてきこゆ。)

久秀 つねに聞くあはれに換へて嬉しきは、人待つけふの入相の鐘。と口吟む。古歌の心も思ひ當つて、日の暮るゝのが待たれたわ。

丹後 いま一响が猶待たれまする。

(丹後は希望の眼をかゞやかして、打笑みながら暮れてゆく空を仰ぐ。多門と主水助は顔を見あはせる。一同たち上る。うすく雨の音きこゆ。)

—幕—

第二幕

第一場

室町の足利將軍館。白木造りにて高足の二重家體。上方の床には燈籠、長刀などあり。正面は襖、左右に廊下ありて、軒には翠簾をまき上げ、よきところに燈籠を置きたり。庭の上の方には池ありて、かきつばたの花さけり。下方は網代堀にて、所々に青葉の立木あり。前幕とおなじ夜。

(將軍義輝は前に坐して、西魚により、愛妾小侍従、廿一

二歳、その傍に侍りて酒宴の體なり。侍女風、夕顔、卯の花、皀月の四人と小姓二人控へたり。雨の音海くきこゆ。)

小侍従 この五月雨を題にして、歌などおよみ遊ばしませぬか。

義輝 此詞や掛詞の三十一文字にももう飽いた。何かほか面白くはないかなう。

小侍従 では、いつもながら拙い舞でも御覽に入れませうか。

義輝 舞も古うて珍らしいない。大方の遊びはもう飽いた。この上はたゞ酔うて眠るのぢや。

小侍従 御覽なるにはまだ時刻がお早うござりまする。先づお杯をお置ねなされませ。

義輝 云ふまでもないことぢや。この頃の義輝は酒が無うては一日も過されぬ。いつそ死ぬほどに酔ひたいと思つてゐるが、扱さうもならぬものぢやなう。

小侍従 この頃はあまり御酒癖が衰へせまするゆゑ、少しは御酒をおすゝめ申して、お心を和げるもよからうと、淡

路殿も仰せられました。
淡路が左様に申したか。つもる不平に一時は推辭も募

つたが、今ではおしも大いに悟つた。いつの代いかなる人にも不平はあるものぢや。足利家十三代のあるじと生れて、官は征夷大將軍、位は從一位、この上の果報は又とあるまい。この上は要なき修羅を燃さずと、たゞ面白く世を送るが優ぢや。先づそんなものでは無いか。

（義輝は小姓に酌をさせて飲む。）
小侍 唯その御果報のいつまでも盡きぬやうに、お祈り申してをりまする。

（下の方の廊下つたひに、一色淡路、四十餘歳、笹の杖を持つて出づ。）

淡路 おゝ、淡路か。丁度よいところぢや。先づ飲み。（杯を献す。）

淡路 ありがたうござりまするが、御酒頂戴いたしまする前に少しく言上つかまつりたき儀がござりまする。

義輝 なんぢや。また例の諫言か。
淡路 御諫言ではござりませぬ。先刻清水寺御參詣のみぎりには、おん供申したる大館岩千代が、かやうなものを持歸りまして、しきりに無念の涙にくれて居りまする。

義輝 おゝ、それは私も知つてゐる。岩千代はその笹の杖で、松永の家來に扱たれたのぢや。

淡路 當時威勢を振ふとは申せども、松永は三好の家來筋で、所謂陪臣でござりまする。その陪臣の又家來が將軍家御側ものを、みだりに打擲して相済みませうか。ただこのまゝに捨置かれましては、恐れながら上の御威光にもかゝりませうかと存じまするが……。

（突然に）おゝ、その松永で思ひ出した。彼には多門といふ美しい娘があると申すことぢやな。

淡路 そのやうな噂も聞いてをりまする。

義輝 この小侍従に比べてはどうあらうな。
淡路 さあ、何うでござりませうか。一色淡路、女子の目利きは不得手でござりまする。（聽なく云ふ。）

小侍 妾もまだ見たこととはござりませぬが、松永の娘といへば洛中にも隠れのない美人、それに比べましたら、妾風情は月の前の星よりも、果敢ないものでござりませう。（少し氣色を損じたる體にていふ。）

義輝 は、そのやうに恨みがましう申すな。どうぢや、淡路。松永の娘をわが手許へ召出す工夫はないかな。
淡路 陪臣の分際で、やゝもすれば上を凌がんとする松永め

の娘を、御寵愛遊ばす御所存でござりまするか。

小侍 松永めは惜い奴ぢやと、日頃から仰せられるではござりませぬか。

義輝 憎いやつなればこそ、その娘を召出さうと云ふのぢや。日ごろから申す通り、あの松永めは憎うてならぬ。折もあらば打亡ぼしてもくれうと存ずれども、今の義輝には彼を伴すほどの力がない。されど彼は筋目もない賤しいものぢや。われには征夷大將軍源氏の棟梁といふ世にならびなき名譽がある。この名譽を餌にして、かれの娘を所望と申さば、松永もおそらく喜んで承引するであらう。かくして娘を差出したら、思ふがまゝに弄り物にして、息の絶ゆるほどに追ひ遣うてくれるわ。親の因果が子に報ふとか申すはこの事で、それが松永めに對する切めてもの意趣暗しぢや。

淡路 親を憎ませたまふがために、罪なき娘に祟らせらるゝは、あまりに御厚儀かとも存じまするが……。

義輝 卑怯ぢやとて是非がないわ。かれは力があつて名がない。我は名があつて力がな。彼は力をたのんで、常にわれを苦むるほどに、われは名を以てかれを誘ふよりほかはあるまい。弓を善くするものは弓を以て闘ひ、槍を

善くするものは槍を以て防ぐが自然の習ぢや。
淡路 でもござりませうが、この儀ばかりは……。

義輝 ならぬと申すか。
小侍 松永めの娘など一所に御奉公はなりかねまする。萬一いよ／＼御召出しと相成りますれば、妾はお暇たまりまするほどに、左様思召して下さりませ。

義輝 まだ判らぬか。頑固な奴等ぢやなう。
（雨の音強きこゆ。侍女は空を見る。）
淡路 おゝ、又ひとしきり強く降つてまゐりました。

（今夜も降通すのでござりませうか。）
卯の花 この頃の雨にも飽々しましたなう。

淡路 あまりに飛沫が強うござりますれば、しばらく翠簾をおろしませうか。

義輝 いや、ひとしきりで又やむであらう。垂れ籠めては鬱陶しいものぢや。そのまゝに致しておけ。

（蛙の聲高きこゆ。）
義輝 池の蛙がしきりに鳴くなう。

淡路 雨の強く降るときには、鳴きやむが習でござりまするに……。

小侍 却つて高く鳴き立つるは……。不思議なことをござりまするな。

(蛙はしきりに鳴く。)

義輝 え、さわがしい奴ぢや。雨夜の蛙もかやうに鳴き立ては無風流の極みぢや。やあ、女共。あまたの松明を池のほとりに照らして、蛙の鳴く音を一時にとどめよ。

四 心得ました。

(侍女四人は奥に入る。)

小侍 蛙の鳴く音が左までにお耳に障りましたか。

義輝 お、耳障りぢやよ。館のそとへ一足踏み出せば、三好や松永の奴原がさま／＼の邪魔をしをて、何事も義輝の自由にはさせぬ。せめて館にあるあひだは、思ふがまゝに振舞はねば、世に生きてゐる甲斐がないぞ。ええ、蛙めがまた鳴くわ。燈火を早く持て。

(高聲によび立つれば、はつと答へて下の方より楓等四人の侍女は、片手に竹笠を持ち、片手に松明を持ち出てく。)

義輝 この雨のなかを御役目大儀ぢやが、上の御意とて是非もござらぬ。手に／＼松明をふり照して、池のあたりを

一巡りせられい。

四人 かしこまりました。

(侍女どもは松明を振りながら池のほとりに進みゆく。)

四 幸ひに雨も小降りになりました。

義輝 火を消さぬやうに氣をつけてゆけ。

四人 はあ。

(侍女どもは松明の火を水にうつす。蛙の聲は次第に止む。)

小侍 松明の火におどろかさされて、蛙も次第に鳴きやみました。

義輝 かれらも火におどろいて一旦は音を止めたが、暗とならばやがてまた鳴くであらう。やかましく鳴き立てられは眼りの邪魔になる。女どもは火を持って、夜もすがら池のめぐりを張替いたせ。

四人 はあ。

義輝 これはいよ／＼離儀のお役ぢや。御小姓衆と一响交代で、御用を勤めたがようござらう。

小姓 心得ました。

(雨の音又もや強くきこゆ。)

小侍 お、また強く降つてまゐりました。

(侍女どもはあわて、竹笠にて松明の火を掩ふ。)

義輝 よく降ることぢや。淡路、雨をやむる工夫はないか。

義輝 これは思ひも寄らぬこと。人間の力では及びませぬ。

義輝 人間の力に及びぬことが多いなう。

(義輝は思々しげに嘆息す。雨の音にまじりて貝鐘の音遠くきこゆ。)

小侍 や、あの聲は……。

(淡路は衝と起ちて縁先に出で、貝鐘の音に耳をかたむく。)

義輝 夜陰に及んで俄にきこゆる貝鐘のひびきは……。淡路

其方はなんと思ふぞ。

義輝 東の洞院、烏丸、櫻の馬場、四方にきこゆる貝鐘が次第にこなたへ近づくは……。殿、一大事でござりまするぞ。

義輝 む、謀叛人がこゝへ寄するといふか。

小侍 殿は何者でござりませうな。

義輝 察するところ、三好か松永……。いよ／＼謀叛を企てたか。

(貝鐘の音いよ／＼烈しく、大筒岩千代、笠笠にて走り出す。)

岩千代 常はさびしき雨の夜に、大路小路の物さわがしきは、合點ゆかずと物見にまゐれば、幾千の人は四方に屯して、御所を目がけて押寄せます。

義輝 旗の紋所は……。

岩千代 大手は正しく松永正、からめ手は三好の一族と見申した。

義輝 擬はいよ／＼案に違はず。(首肯)やあ、淡路。其方は宿直の者どもを呼びあつめて、既矢射よと申傳へい。

淡路 はつ。

(淡路は縁つたひにて、下の方へ走り入る。)

小侍 日頃より威勢をたのんで、上をないがしろにするのみか、果は謀叛をたくむとは、云はうやうやない人非人どもでござりまするな。

義輝 それは今更いふも詮ない。三好松永が合體して、謀叛を企てしとあるからは、足利の家も十三代の今日で亡ぶるわ。

岩千代 残念な儀でござりまする。

義輝 義輝も征夷大將軍の名をたのんで、儘にみづから愚めて居つたが、今となつては名もいらぬ、位もいらぬ。た

だおのれの力を待むのみぢや。いてや最後の力を揮つて、謀叛人どもを踏みじつてくれうぞ。
岩千代 われも力のかぎり闘うて、冥途のおん供仕りませう。それ、侍女衆。最後の御酒宴の御用意あれ。
四人 はあ。
（侍女どもは内に入りて座につく。）

岩千代 近う。
岩千代 はつ。

（岩千代は縁先近くすゝみ出でてひざまづけば、義輝は小姓を見かへる。）
義輝 その笹の枝をこれへ……

小姓 はつ。
（小姓の一人は淡路がすて置きたる笹の枝を持ち来る。義輝は手に取る。）

岩千代 これは今日の夕刻、清水寺参詣のみぎりに、松永の家來めが其方を打つたる枝ぢや。無念はさだめて覺えがあらう。
岩千代 はつ。

義輝 今にして思へば彼の笹は、盤持などに用ゆるものではない。今宵夜討の合印と推量したぞ。ついては其方物具

に身をかためて、この枝を腰にはさみ、敵の陣中へまぎれ入つて、謀叛の頭領松永めを唯一刀に打つて捨て、主の請負、その身の仇、一度に報ゆる所存はないか。
岩千代 よくぞお心が付かれました。夜中と申し、亂軍の折柄、その合印を身につけましたら、敵もうたがふ氣遣ひはござりませぬ、首尾よく松永めに近寄つて、君に代つて謀叛人の成敗、屹と仕るでござりませう。
義輝 しかと頼んだぞよ。
岩千代 はつ。

（義輝は縁先にすゝみ出る。岩千代は伸び上りて笹の枝をうけ取り、たがひに顔を見あはせる。貝鐘の音又もやきこゆ。）

小侍 敵はいよ／＼密するとみえて、夜をさわがす人馬の物音が、手に取るやうに聞えまする。
岩千代 早うゆけ。

岩千代 首尾よく御用を勤めてからが、とても逃れぬ我が命……。あすは再び冥途で見参……。
義輝 いや、そちはなるべく身を全うして、二度が三度でも執念く仇をねらへ。
岩千代 はつ。

（下の方の謀つたひに一色淡路、武装して弓矢をたづまへ出づ。）
淡路 敵はもはや御門前まで押寄せ申した。宿直の面々は、上野兵部、結城主膳、高木左近、島山次郎、引詰め引きつめ射るほどに、矢面に立つたる敵二十餘人は、見る見るうちに倒れましたわ。

小侍 とは云へ、敵は大勢なれば、とても最後の御勝利は……。
義輝 それは云ふまでもないことぢや。義輝も最期の用意をせうぞ。岩千代もゆけ、ゆけ。

岩千代 然らば御免くださりませう。
（岩千代は笹の枝を持ちて、下の方へ走り入る。貝鐘の聲絶えずきこゆ。義輝は杯を取る。）

義輝 わかれの酒ぢや。酌いたせ。
小侍 はあ。
（小侍は進んで酌をする。義輝はかたむけ盡して、小侍に従に飲む。）

小侍 ありがたうござりまする。
（小姓に酌をさせて、小侍は飲む。）
義輝 その杯は淡路にまはせ。

淡路 はつ。ありがたく頂戴いたしまする。
（淡路も杯をうけ、小姓の酌にて飲む。）
淡路 おそれながら御返杯……。

（義輝は小姓に酌をさせて飲み、その杯を縁にうちつけて割る。）
義輝 われも碎けて土となるのぢや。長刀持て。
小侍 はあ。

（小姓は床より長刀を持ち来る。）
義輝 義輝が最後の働きをみよ。すくなくも二十人三十人は薙ぎ伏せてくれうわ。

（義輝は長刀をかい込んで起つ。小侍は起つて鐵櫃より緋緘の籠を取出す。）
小侍 上様には先づおん着長を……。

義輝 （打笑む）お身は足利の家風を知らぬか。主が家來を征伐するときには、籠をつけぬが源氏の習ぢや。
小侍 とは云へ、不意の夜討にござりますれば……。

義輝 いや、堀河の義経は眞似たうないわ。
小侍 はあ。

（小侍は籠をかたよせる。空にほととぎすの聲きこゆ。義輝は聲する方を打仰ぐ。）

敵 死出の四長が五月の闇を鳴いて通るわ。義輝が最期に一首残さう。料紙を持って。

小姓 はあ。

(小姓起たんとすれば、貝鐘の音にげしく聞ゆ。)

敵 はいよ、追つてまゐつた。さ、早う、早う。

小侍 では、いつそ料紙の代りに……

(小侍は懐剣をぬきて、わが白き袖を切る。)

敵 お、よい、よい。さらば親も紙も要らぬぞ。

(義輝はわが指を咬み、その血汐を袖に染めて辭世の歌をかく。)

辭世の一首、見てくりやれ。

(小侍は袖を受取り、淡路ものぞきて見る。)

小侍 さみだれか露か涙か時鳥……

わが名をあげよ雲の上まで。

(高らかに吟じて空を仰ぐ。ほととぎすの聲きこゆ。高木左近、島山次郎、大童にて太刀をぬき持ち、下の方より走り出づ。)

左近 上様、これに御座ありしか。宿直の面々必死となつて防げども、矢種このらす射盡して、敵は御門前まで舞々と寄せ申した。

第二場

おなじく館の門前、築地の外には幾株の柳をうゑたり。

(松永正久秀、陣羽織を着て床几にかゝり、兜を持ちたる家來一人これに従ふ。ほかにも松明または槍を持ちたる家來十数人控へたり。いづれも腰に笹の枝をはさむ。)

久秀 敵の矢種も大方は盡きたであらう。いよ、これからが手づめの勝負ぢや。小勢ながらも敵は必死に闘うて、容易に埒があかぬと見ゆる。誰かある、門内の様子を見てまゐれ。

家來一 はあ。

(家來の一人は門内に走り入る。貝鐘の音にげしくきこゆ。森傳助、和田右京、大意に鉢巻して鎧をつけ、挿物を背負ひて腰に笹の枝をはさみ、槍を持ちて走り出で、久秀のまへに一禮す。)

森傳助。

右京 和田右京。

傳助 これより討つて入りまする。

大敵 双方手詰のたゝかひと相成つては、なにを申すも敵は目にあまる大勢、おそれながら御運も最早これまでかと存じまする。

敵 よい、よい。ついでに寶藏に秘め置きたる金銀はいふに及ばず、鎧、太刀、兜、さては綾錦のたくひまで、こことくこれへ運び出して、むらがる敵のなかへ投げ入れよ。怒に眼がくれたる敵の奴原、われ先にと争つて拾はんとするところを、片端より薙ぎ伏せ斬倒してくれうぞ。これも最後の一興であらうよ。

義輝 なにさまこれは面白き御思案。とても敵の手に渡すものならば、かうして弄るも一興でござらう。それ、方々……

(小姓と侍女等を見かへれば、一同心得て奥に入る。)

義輝 さらばいよ、最後のいくさぢや。いづれも支度いたせ。

一同 はあ。

(貝鐘の音にげしくきこゆ。)

(云ひ捨て、門内へ走り入らんとするを、久秀は呼び止める。)

久秀 え、おのれ等は武士にも似合はぬ。夜討の作法を知らぬ奴な。面も確とはみえぬ夜いくさに名を名乗ればとて何とならうぞ。鎧の緋の色、旗さし破、一々に名乗つて通れ。

二人はつ。(引返してくる。)

傳助 森傳助は崩潰、挿物は不動明王……

右京 和田右京は紺糸織、さし物は墨にて和田右京照正と記してござる。

久秀 一々見知つた。ゆけ、ゆけ。

二人 御免。

(二人は門内に走り入る。)

久秀 池田丹後、岩鏡主水はまだみえぬか。

家來一 はあ。

久秀 彼のふたりは如何いたしたのかなう。矢軍のすんだる頭を見計らうて証付くる所存であらうな。

(伊賀七郎、門内より走り出づ。)

七郎 敵は思ひのはかに手闘うござりまするぞ。

久秀 窮鼠猫を食むの例ぢや、さもあらうよ。

七郎 中門口までは寄せましたれど、容易に奥へは踏み込まれませぬ。
 久秀 敵とても鬼神ではない、いま一响の後には自然に疲るるわ。
 (門内より大館岩千代、鎧をきて腰に彼の笹の杖をばさみ、みだれたる髪を顔にふりかけて出づ。)

岩千代 大將はいづれにござるな。

七郎 誰ぢや。

岩千代 味方の者、合印を御覽ください。

久秀 む、久秀はこれにあるぞ。

岩千代 お、これにござりましたか。密々にて申上げたき儀が……。

久秀 なにか知らぬが近う寄せ。

岩千代 はつ。

(岩千代つかくんと寄らんとするを、七郎はあわてて逃る。)

七郎 待て、待て。聞きおぼえのある聲と思ひしに、おのれは正しく大館岩千代……。

岩千代 。

七郎 殿、御油断あるな。

(家來どもは松明をさしつけて取圍む。岩千代は早やこれまでと覺悟して叫ぶ。)

岩千代 謀叛人の松永め。

(降りかゝつて斬付けんとすれど、家來どもに隔てられて果さず。岩千代は齒がみをなして奮闘。遂に敵と闘ひながら下の方へ去る。久秀とその兜を持ちたる家來一人、ほかに七郎のみが後に残る。)

七郎 敵は死物狂ひでござりますれば、岩千代のごとき不敵者が又もやあらはれ出てぬとも限りませぬ。こゝに御座あつては、大事のおん身にいかなる過失があらうも知れませぬ。一旦はあれまで引退つて、ゆる／＼御見物なされては如何。

久秀 さらば一先づ引揚げるといたさうか。七郎、まるれ。七郎 はあ。

(七郎は先に立ち、久秀は家來を引連れて、上の方へあゆみ去る。門内より高木左近、畠山次郎は敵の軍兵數人とたゝかひながら出づ。兩人奮闘。左近は敵とたゝかひつゝ門内に退き、次郎は敵を遣うて上の方へ走り去る。雨の音又きこゆ。池田丹後、よるひの腰に笹の杖をばさみ、片手に松明、かた手に槍を持ち出て出づ。)

丹後 これほど手詰のいくさになつても、公方家の武勇に恐れ、二つには公方家といふ名に怖ちて、誰一人進んで將軍に手ざしをする者もあるまい。……もしやあの主水めが……。なんの、小二才が……。われ等の先を越さうなどとは及ばぬことぢや。

(丹後は松明を地に投げすて、踏み滑し、槍を取直して門内へ大股にすゝみ入る。下の方より大館岩千代は若槻主水助と闘ひながら出づ。)

主水助 え、おのれらの首に望みはない。邪魔せずと通せ、通せ。

岩千代 謀叛人の片われ、一人たりとも通さうか。

主水助 なにを……。

(兩人はげしく闘ふうちに、下の方より松永の家來數人出づ。)

主水助 われ等はほかに目ざす敵がある。こゝ頼んだぞ。

(云ひすて主水助は門内に走り入る。岩千代追はんとするを、家來どもは遮りて闘ふ。雨の音いよ／＼烈し。)

第三場

もとの館に戻る。庭前には所々にかゞりを焚き

て、鎧、金銀珠玉の細工物、諸道具、女の衣類など内にも外にも散亂せり。

(小侍は引立烏帽子に紅梅の鉢まきして、長刀を持ち、おなじく白鉢巻の侍女四人、いづれも長刀を持ちて居なちべり。)

小侍 館の八方を取切られし上は女わらべとて逃るゝ途はあるまい。まさかの時には奥殿に火をかけて、一同いさぎよく相果つる覺悟ぢや。先づそれまではこゝを守護して、敵一人も奥へは通すまいぞ。

目 仰せまでもござりませぬ。わたくし共も武家に御奉公いたすからは、まさかの時には覺悟がござりまする。

夕 謀叛人共これへ亂入いたさば、片端より薙ぎ倒して、最後の働きつかまつるでござりませう。

小侍 女とあなどつて無禮を働かば、何奴なりとも容赦すな。して、御門口の様子はどうぢや。

卯の花 宿直の面々こゝを先途と闘うてをりますれば、敵も容易にはふみ込まれますまい。

早月 せめて夜の明くるまで支へられましたら、思ひもよらぬ加勢のまるらぬとも限りませぬ。

小侍 いや、いや、亡ぶるものに加勢はあるまい。あても

ないことは頼まぬがよいぞ。
四人はあ。

(義輝は長刀を振り込みて奥より出づ。)

義輝 どうぢや、岩千代よりなんのたよりもないか。

小侍 一向にうけたまはりませぬ。

義輝 松永めも用心ぶかい奴、迂闊に近づくこともなるまい。大方は仕損じて討たれたかなう。

(貝鐘の聲烈しくきこゆ。)

義輝 宿直の者共いかばかりに狂くとも、味方の人數には限りがある。今は義輝のほろぶる時節となつた。そち達は奥へまゐつて、最期の支度いたせ。

小侍 今にも謀叛人が寄せてまゐらば、及ばずながら我々も……。

義輝 いや、いや、義輝が最後のいくさに女子どもの加勢は頼まぬ。願のやうな奴ばらの眼に觸れて、由なき耻辱を受けぬうちに、そち達は奥へゆけ。早う行け。

一團はあ。

(小侍従をはじめ侍女四人は奥に入る。蛙の聲きこゆ。)

義輝 蛙めが又鳴くわ。この上は鳴きたいだけ勝手になけ。思へばそちたちは仕合者ぢや。この館にすむ人間は、今

脊の中にほろび盡して、夏草しげる空屋敷のうちには、そち達が自由な住家となるのぢや。
(義輝さびしく笑ふ。下の方の木かげより池田丹後、槍を構へてうかゞひ出づ。義輝乾と見かへる。)

義輝 誰ぢや。

丹後 名乗ればとて御存じのないものでござる。

義輝 扱はおのれも謀叛人な。

丹後 お身標の御首級を頂戴にまゐつた。

義輝 下郎め、推参……退れ。すされ。

丹後 は、下郎も上臈も、こゝまでせり迫めたら一人とひとぢや。おのれの力を恃むよりほかはござらぬ。いざ尋常に御登悟あれ。

義輝 え、義輝に闘ふほどの力がないと思ふか。おのれ等の五人三人、闘くひまに斬つて捨つるわ。

丹後 御手並拜見……。

義輝 まゐれ。

丹後 御免。

(丹後は槍を把つて突いてかゝる。義輝は太刀をぬきて闘ふ。双方飛鳥のごとく飛びちがへて倒けども、勝負は容易に決せず。二人は闘ひつゝ、縁にさがり、打物をすて

て組討となり、丹後は押されてうしろの襖を倒しつゝ、折かさなつて轉びしが、更に跳ねかへして今度は義輝をくみ伏せる。そのはすみに次の襖を破り、ふすまの骨にて丹後は両眼を傷つく。しかも押へたる手をゆるめず、義輝を膝下に敷きたるまゝ、短刀をぬいてその胸を刺す。義輝驚る。丹後はほつと息をつき、鎧の引合せより紙を取り出して、両眼より溢るゝ血をぬぐへども、血は流れやまず、這ひ起きんとしてつまづき倒る。)

丹後 お、この眼が……。あたりが俄に闇となつた。見えぬ……。見えぬ……。右も左もみえぬ……。お、お、お。(探りながらに起たんとして又倒る。それにしても大事の證據ぢや。將軍の首を……)

(道ひまばりて義輝の死體をさぐり求む。雨の音きこゆ。)

岩槻主水助 下の方より走り出てこの體を見ておどろく。)

主水助 丹後でないか。

丹後 (耳をかたむけて。) 主水助か。

主水助 して、將軍は……。

丹後 丹後がみごとに仕留めたわ。

(主水助いよ／＼おどろきて縁に駆けあがる。)

主水助 え、無念ぢや。お身に先を越されたか。(云ひつゝ、丹後の顔を見つめる。お身の顔にはおびたらしい血が……向病でも負うたのか。)

丹後 相手と引組んで倒るゝはずみに、襖の骨で左右の眼を突き破つたのぢや。

主水助 む、では、俄に盲目となつたか。

丹後 お、俄に盲目ぢや。聲は聞けどもお身のすがたは見えない。

主水助 それは難儀であらうなう。

(主水助少しく思案す。丹後も思案する。)

丹後 主水、お身に頼みがある。

主水助 なんぢや。

丹後 上帯を解いて、わしの眼をくゝつて呉りやれ。

主水助 む。

(何心なく進みよるを、丹後は矢面に取つて捻ぢ伏せ、短刀にてその臍腹を突く。主水助は悲鳴をあげて死す。)

丹後 さびしく打笑ふ。

丹後 眼を失うたは我が不運。あはせて彼の不運であつた。

(丹後はやがて再び義輝の死體を探りてその首を牽ち、義輝の衣を裂きて押包み、小脇にかゝへて四邊を探りま

はれば、落ちたる槍が手にさきにつく。丹後ばこれを杖にして探りながら歩み出でんとし、よるめきながら縁を降りゆく。雨の音烈し。

幕

第三幕

淀川堤の中腹。舞臺の正面は少しくあとへ下げて小高き堤をつくり、花道の方よりのぼるべき道路あり。堤には柳の立木つらなりて、そのうしろには淀川の流れを見る。堤の中腹には約三人を容るゝに足るべき小屋ありて三方に荒むしゝろを垂れたり。小屋のまへは堤下の道路にて、あたりには芒などの秋草おひ茂れり。前の幕とおなじ年の九月の末。

(笛を吹く男、乞食のすがたにて小屋のまへの切株に腰をかけ、餘念もなく笛を吹いてゐる。小屋の窓をあけて、蛇つかひの女が扉をかける。)

女 おい。お前さんもさつきから很好くびい／＼吹いてゐるね。子供ちやあるまいし、好加減にしたらどうだえ。(男は平氣で吹いてゐる。女はじれつたさうに舌打しな)

奴を引摺り込んで来たんだらうねえ。

男 なんでも元は立派な武士だと云ふぢやあないか。女 いくら立派な武士でも大名でも、一旦こつちの小屋へ落ちてしまへば、やつぱり同じ仲間ぢやないか。むかしの身分を嵩に被て、武士風を吹かされて堪るものか。あんな奴はどうかして追つ獲つてしまひたいね。

男 追つ獲はうと思つても、あいつはなか／＼出て行きさうもないぜ。目は潰れてゐても強情らしい男だからな。女 盲の癖に威張つてゐるから、猶更のこと憎らしいよ。男 まあ、そんなに憤ることもない。むかうて出て行かなければ、こつちで立去る分のことさ。

女 お前さん、どつちの方へ行くつもりだえ。男 どつちといふ的もない。この笛を吹きながら、西へても東へても勝手にぶら／＼と行くのさ。女 もしさうなつたら、あたしも一所に連れて行つておくれな。

男 おいらも一所に行く……。女 さうさ。いくら乞食をしてゐたつて、あたしも若い女

だもの。若い男と一緒に暮してゐる方がいゝやね。男 いや、御免だ。おいらにはこの笛といふ友達がある。

がら小屋を出て来る。若き女にて手首には蛇をよいてゐる。

女 おい、好加減におよしと云ふのに……さう／＼しいよ。

(男はやう／＼振向く。)

男 でも、これがおいらの商賣だからな。

女 商賣ならば往來のあるところへ行つてお吹きな。こんな堤の下で幾ら吹いてゐたつて、上から誰も錢を投つてくれる人はありやしないよ。

男 それもさうだな。けれども、畢竟は道樂からこんな身の上になつたのだから、かうして吹いてゐるうちは、なんだか氣が滞々するよ。

女 つまらない道樂があつたものさねえ。笛が好きならば俗人にでもなればいゝのに、乞食になるとはあんまり道樂が強すぎるねえ。

男 いや、窮屈なことは俺あ嫌ひだ。乞食をして好きな笛をふいてゐる方が氣樂で可い。

女 とつちが、この頃はあんまり氣樂でもないよ。先月からあんな變な奴が仲間に入つて来たので、毎日喧嘩が絶えやあしない。與兵衛のおぢいさんも何だつてあんな

お前にはその蛇といふ友達がある。おたがひに分れ／＼になつても寂しいことはないよ。

女 でも、話相手がないぢやないか。

男 話相手なんぞは寧ろそない方が可い。話相手があればこそ喧嘩相手も出来るのだ。ひとり法師の方が氣樂でいゝね。

女 おまへさんも随分變り者だねえ。(堤の上より大筒若千代は忍び姿にて笠をかぶり出て。男は又もや笛を吹く。女は蛇の頭をなでてゐる。若千代は堤を降りて花道へゆきかゝりしが、こなたな見かけで立戻る。)

若千代 ちと物がたづねたい。

女 はい、はい。なんの御用でございます。

(男は笛を吹きやめる。)

若千代 そち達はこの小屋に住む者か。

男 左様でございます。

若千代 近頃このあたりに盲目の乞食が徘徊いたすとか聞き及んだが、左様かな。

女 盲の乞食ならばこの小屋にも住んでをりますが……。若千代 年のころは廿七八、以前は武士で筋骨たくましく男

ぢや。

男 (女を見かへる。) どうも彼奴らしいぜ。

女 さうだねえ。そのおたづねの旨によく似た男が、こゝの小屋に住んでをります。

男 どこの者だか存じませんが、なんでも先月のはじめ頃から、この仲間て古顔の與兵衛といふ老爺さんが引張つて来たのでございます。

若千代 して。今はいづこに居るな。

女 與兵衛老爺さんと一緒に、どこへか物を買ひに出ました。やがて戻つて来るでございませう。

若千代 夕暮までには戻るであらうな。

女 きつと戻つてきりませう。

(若千代うなづきて懐中より錢を出す。)

若千代 その男が戻つて来ても、わしの来たことを必ず云ふなよ。よいか。

女 はい、はい。かしこまりました。

(若千代は錢をなげて遣る。)

女 おありがたうございます。

(若千代は笠をかたむけて去る。女は落ちたる錢を数へてゐる。)

與兵衛に手をひかれつゝ堤の上をあゆみ来る。與兵衛は五十前後の老人なり。

與兵衛 これ、氣をつけてあるが可いぞ。俄盲といふものは兎かくに感が悪いものだ。

丹後 この頃は、大分あゆみ馴れたれば、さのみ不自由とも思はぬのぢや。

與兵衛 さういふ口の下から、すぐに讀くではないか。強情ももう好加減にしたがよい。

(云ひつゝ堤を降りて小屋のまへに来る。)

男 喧嘩相手が歸つて来たぞ。

女 ほんたうに見るから癩に障るねえ。

與兵衛 どうだ、けふは買ひがあつたか。

男 相變らず不景氣でしたよ。

與兵衛 わしはこの男を引張つて、遠い町まで出あるいたお庇で、錢と米とをこれほど貰つて来たぞ。(麻の袋に入れたる錢と米とをみせる。)

女 なるほどおちいさんは能く稼ぐねえ。お首さんは仕合者だ。

丹後 わしは眼がみえないでも、稼ぐから収入もある。お前たちは満足な身體をもちながら、遊んでゐるから錢が取

男 おい、それはお前ひとりて取るのぢやあるまいな。

女 だつて、お禮はあたし一人て云つたんだよ。

男 でも、おいらだつて口を利いたぜ。いくらか分けて呉れてもよからう。

女 うるさいねえ。お前さんは笛さへ吹いてゐりやあ可いと云つたぢやないか。

男 腹が空つちやあ笛も吹けないぜ。

女 ぢやあ、あたしと一緒に待つてくれるかえ。

男 それは些と考へものだ。

女 それ御覺よ。あたしだつて嫌なこつた。

(女は錢をかぞへて懐中に収める。鳥の啼きこゆ。男はぼんやりと世を仰ぐ。)

男 あゝ、渡鳥の聲がきこえる。もうそろ／＼と寒くなるな。

女 だん／＼に多が来るんだねえ。

男 その蛇がおまへの肌にあたゝめて買身時節が来るんだ。

女 秋も末になると、なんだか心細いねえ。

(水の音さびしくこゆ。盲目の池田丹後、零落して乞食となりたる體、太刀を背負ひて竹杖をつき、乞食の頭

れぬのぢや。

男 もうそろ／＼と切めたぜ。

女 もし、お首さん。けふは少し御相談があるんですがね。

男 何なんぢや。

女 それを第一にあらためて貰ひたいんです。むかしは何であらうとも、今は御同様の身分ですよ。あたまから人を驚かすやうな、そんな大層な物言ひは止して貰ひませう。

丹後 わしは武士ぢや。袖乞ひ詞などは些とも知らぬわ。

男 郷に入つては郷にしたがへといふ體もある。一旦小屋に落ちたからは、これから五分五分のお附合に願ひたいものだ。こゝにゐる者はおまへさんの家来ぢやないんだからね。

丹後 武士が乞食を家来にするか。云はずとも知れたことぢや。

女 それからおわがひ申したいのは、おまへさんが背中にお背負つてゐる長い物ですがね。この小屋に三人でさへも狭いところへ、このごろお前さんが一人殖えて、おまけに寝るにも起きるにも、その長い物を背負つてゐられぢやあ何分邪魔になつて、手も足もゆつくりと働かせませ

んからね。そんなものは捨てるとも賣るとも型を付けて
しまつて下さいな。

丹後 なに、この太刀を手放せと申すか。

女 邪魔だから止せと云ふんですよ。

丹後 だまれ。いかに零落いたせばとて、家重代の銘刀を手
放してならうか。かされて申さば免さぬぞ。

女 ぢやあ、その刀で斬る氣かえ。盲のくせに氣の強いこ
とを云ひなさんな。いくら威張つたつてひとり歩きもて
きない癖に……。ほんたうに憎らしいねえ。もし、お盲
さん。おまへさんは自分一人、あたしには斯ういふ味方
が附いてゐるんだよ。

(持つたる蛇を丹後の鼻のまきへ突き付ける。丹後はそ
の手を把へて捻伏せる。)
丹後 おのれ、盲目と侮つて無禮するな。つかみ殺すから覺
悟いたせ。

奥兵衛 (支へる。) あ、これ、手暴なことをしてはならぬ。

まあ、待たつしやれ、待たつしやれ。(ふたりを引分け
る。) みち／＼も云うた通り、袖仲間にもまたそれ／＼
の作法がある。いくら以前が武士だと云つて、こなたの
やうに大風にかまへてゐるては、仲間の者と折台がつくま

い。もう少し素直にしてはどうだな。
丹後 素直にせよとは、あの乞食め等に追従輕薄をいへと申
すのか。

男 ちよいと云ふことがあの通りだ。

女 あれだから憎らしいんだよ。自分も乞食の仲間入りを
してゐながら、乞食め等もよく出来た。(男にむかひ。) も
し、お前さん。もういよ／＼見切るかね。

男 見切つた方がよささうだよ。こんな男と一つ小屋にゐ
ることは眞平だ。

女 おまへさんが行くなら、あたしもお別れた。

奥兵衛 なんだか可怪いな、お前たちは何うすると云ふのだ。

女 おぢいさんには永らく御世話になつたが、こんな變な
奴と一緒にゐるのは面白くないから、今日かぎりて立退
きますよ。

奥兵衛 まあ、まあ、そんなに腹を立つものではない。

男 おいらももう何處かへ行くよ。

奥兵衛 みんなが一度に行つてしまつては後がさびしい。今
まで仲よくしてゐたのだ。まあ、大抵のことは我慢しろ
よ。
折角ですが御免を蒙りますよ。あたしはこの蛇さへ持

つてゐりやあ、どこへ行つても商賣はできるんですから
ね。立派に蛇つかひで世が渡れるんですからね。

男 おいらもこの笛が一本あれば、どこの門に立つても、
一文や二文の錢は貰へるのだ。

奥兵衛 それはさうでもあらうが、そこが我慢といふものだ。
堪忍も我慢ももう飽きましたよ。全體、おぢいさんが
悪いよ。こんな奴さへ引摺り込まなければ、三人がいっ
までも仲好くしてゐられたものを……。

男 そんなことを云つたつて仕様がな。おぢいさん、達
者てゐなさいよ。

(男はそのまゝ行きかゝる。)

女 さうして、お前さんはどこへ行くの。

男 さつきも云ふ通り、好きな笛をふいて、勝手な所をさ
まよつて歩くのだ。

(男は笛をふきながら上の方へあゆみ去る。女は小屋の
内に入りて、鏡と小さき包を持ち出て出づ。)

女 おぢいさん、あたしもお暇申しますよ。

奥兵衛 おまへ達は何うしてしまふのか。

御縁があつたら又お目にかゝりませうよ。
(女は丹後を憎まげに見かへりつゝ、堤を上りて下の方

(あゆみ去る。奥兵衛は茫然とあとを見送る。)

奥兵衛 ひとり西へ……一人は東へ……。今朝まで一つ小
屋に仲よく住んでゐたものが、夕方にはこの通り分れ分
れた。あいつ等はなにを目的にどこへ行くのだらう。い
や、かういふ境涯に馴れた奴は、それからそれへと飛び
まはつて、風に吹かれた落葉のやうに、どこまで行つて
止まるか、自分にも判らないのだらう。

(奥兵衛は獨語。丹後はあたりを耳をかたむける。)

丹後 ふたりの奴共はもう行つたのか。

奥兵衛 どこを的とも無しにふら／＼と行つてしまつた。か
うなると、あとに残るのはこなたと私と二人ぎりだ。今

夜から些と寂しからうぞ。

丹後 かれらのやうな下賤の徒は、一緒に居らぬ方が結構ま
しぢや。

奥兵衛 二口目にはそのやうなことを云ふから、とかくに人
と折合はぬのだ。が、まあそれも仕方が無い。なにしろ
日が暮れかゝつて薄ら寒くなつて来たから、ちつと焚火
でもしようかな。

丹後 それがよからう。

奥兵衛 二人が居なくなると、やれ、やれ、いそがしいぞ。

(奥兵衛は小屋のかけより枯枝を持ち来りて、焚火をす
る。ふたりは火を圍む。)

奥兵衛 今まではほかに人も居たので、委しいことも聞か
んだが、かうして差向ひになれば遠慮はない。忘れもせ
ぬ先月のはじめに、こなたがその體裁をして、淀川端に
さまようてるたのを、わしが氣の毒に思つて連れて来て、
けふまで一緒に暮してゐるが、立派な太刀を身につけて
ゐる様子といひ、物の云様から起居振舞、以前はさだめ
て由緒あるお人と見たがあやまりか。整障りが無くばこ
なたの素性來歴を、話して聞かしてはくださぬか。

丹後 いま去つた二人とは違つて、こなたは頼もしい親切
な男ぢや。わしの身の上をつまづ話して聞かさう。わ
しは松永正の家來で、池田丹後といふもの。五月十九
日、室町御所夜討のみぎり、主人松永にたのまれて公方
家を擧み撃にせうと企てたが、相手はきこえし早業の達
人、打物をすてゝ組討と相成つた。

奥兵衛 おも。

丹後 しばしは上になり下になり、やう／＼組み伏せて首を
取つたが、櫛の骨で眼を傷つけ、その場よりこのやうな
盲目となつてしまつた。叔さうなると頼まれぬは人心ぢ

たら、今ごろは松永の姫を妾として、あつぱれ果報者よ
と人に羨まるゝであらう。丹後が斯様におちぶれたは、
天罰でもない、謀叛のためでもない。主人がわれを許つ
たからぢや、朋輩や家來がわれを見捨てたからぢや。不
正、不義、不實の徒が多いからぢや。(空を睨んで罵るこ
とくに云ふ。)

奥兵衛 さう云へばそれも一理ぢやが……。まあ、今更そ
れを云うても返らぬ。何事も運だときらめて、人を恨
まず世を呪はず、心を平に持たれたがよいぞ。して、こ
なたが婿になるといふ相手の姫とやらは、その後どうさ
つしやれたな。

丹後 その女は……。どうして居るのやら一向に知らぬ。名
は多門といひ、容貌は萬人にすぐれ、浴中にもならびな
き美人であつたが……。嘆息して) あゝ、この眼が見ゆ
ればなう。

奥兵衛 その女子には、こなたもよく／＼心残りとも見えるな。
丹後 諸人の嫌ふ役目を引受け、公方家を討取つて、命がけ
の働きしたも……。この眼を失つたも……。かの女子を得た
いがためばかりぢや。心が残るも無理ではあるまい。あ
の美しい顔の顔は、見えぬ眼にもあり／＼と映つてゐる

や。もし公方家を討取らば、わが娘の婿にせうと誓ひし
詞を反古にして、主人は我をかへりみず、朋輩も家來も
われを扶けてはくれぬ。無念とは思へども盲目の悲しさ、
われに十分の道理あれども訴ふるに由なく、世にも人に
も捨てられて、遂にいまの身の上と相成つた。これも公
方家を討つたる天罰などと、嚴な奴等はいふであらう。
(苦笑ひする。)

奥兵衛 では、この五月に公方様を討つたのは、こなたの仕
業でござつたか。

丹後 あのみぎりに第一の功名をあげたは、この池田丹後ぢ
や。

奥兵衛 なるほど功名には相違あるまいが、人もあらうに公
方様を手にかくるとは、こなたも大それた事をさつしや
れたなう。その罰で眼が潰れたとは、こりや然うなうて
はならぬ事だ。天罰のおそろしいと云ふことを、こなた
も思ひ當つたでござらうな。

丹後 は、なにが天罰……。世間では公方家を討つ者のや
うに云ひますが、足利の先祖尊氏もおなじく謀叛人では
ないか。わしは不遇で眼が潰れたればこそ、謀叛人の天
罰のと人に爪弾きせらるゝが、もし満足なからだであつ

わ。秋風のさむい小屋のうちで、夜露にぬれつゝ眠る間
も、姫のすがたを夢に見るのぢや。

奥兵衛 それはよく／＼の執心と見ゆる。その多門とかいふ
姫がなかつたら、こなたも武士を捨てまいものを……。
いや、こなたばかりで無い。戀のために身をすてた男は
むかしから数々ある。まあ、聴かつしやれ。なんでも遠
い昔のことださうだが、この淀川べりに若い男と女が住
んでゐた。男は女に懸想して、いろ／＼に心を砕いて云
ひよると、女もしまひに根負がして、そんなら今夜この
堤の下で逢はうと約束したので、男は日のくれるのを待
兼ねて、約束の場所へ行つて待つてゐたが、女は更に姿
をみせぬ。それは霜の寒い晩であつた。男は凍えるばか
りの寒さを堪へて、今か／＼と待ち暮してゐるうちに、
たうとう夜が明けてしまつたが、女のあし音もきこえな
かつた。そこで男は女の薄情を恨むのあまりに、川へ身
をなげて死んでしまつたといふ。その片思ひが今も残つ
てゐるとみえて、その岸に年々生える芦は、決して兩
方に葉が出ないのも不思議ではないか。

丹後 片葉の芦とか歌によむのはそれでござるな。
奥兵衛 それからその芦を片葉の芦といひ、その岸に近いと

ころを片葉の芦の淵とも云ふのだ。こなたもその女子のことばかり思ひつめて、片葉の芦になつては詰らぬ。もうもう縁のないものと諦めたがよからうぞ。

丹後 あきらめらるゝ戀てあらうか。
與兵衛 と云つて諦めるよりほかはあるまい。こなたは氣の強いくせに諦めの悪い男たなう。

(焚火やうやく消ゆ。水の音きこゆ。)
與兵衛 お、話に夢中になつてゐるうちに、焚火もいつか消えかゝつた。秋も末になつたので、日が暮れかゝるとだん／＼に寒くなつてくる。こりや焚火くらゐでは追付くまい。酒でも飲んで腹のなかから温めねば、とても今夜は凌がれぬぞ。かういふ時に蛇つかひの女があると使にやるには重寶だが……。まあ、可いわ。わしが一走り行つて買つて来ようか。

(與兵衛は小屋の内に入りて、瓢を持ち来る。)
與兵衛 わしは隣村まで酒をかひに行くほどに、焚火を斷やさぬやうにして待つてゐさつしやれ。

丹後 御苦勞でござるな。
(與兵衛は瓢を持ちて上の方へいそぎ去る。丹後は採りながら枯枝を焚火にくべる。水の音さびしく、入相の鐘

鳴の聲遠くきこゆ。)
丹後 川の舟逢うては別れ、上り下りてまゝならぬ。舟逢うては別れ、のぼり下りてまゝならぬ。哀れを知らぬ船頭共も、優しい戀を唄うてゐるわ。
(船唄の聲又きこゆ。)
丹後 唄へぬしとわたしは片葉の芦よ、ふたり連れ添ふ時はな

きこゆ。)

丹後 お、鐘が鳴る。秋の日もやがて傾くとみゆるな。五月十九日、松永の屋敷で勢揃ひをしむ時にも、おなじく入相の鐘を聞いた。あの時には……。あの時には……。首尾よく公方家をうち取つたら、日頃の望みも叶ふこと、胸は躍つて血は湧いて、手のとどかぬ大空の月を掴んだやうに、よろこび勇んで日の暮れるのを待つたが……。その折に聞いた鐘の音は、天上の音楽のやうにもきこえたが……。つかんだと思つたのは矢はり水の月で、手にも止らず砕けてしまつた。この兩の眼が潰れると共に、夜も晝も一切暗。おなじ鐘の音でも、聞く人の心によつて響きが違ふとはよく云うたものぢや。丹後がいま聞く入相の鐘は、地獄の迎ひのやうにも聞ゆる。

(嘆息して。)
丹後 いや、地獄と云へば、ゆうべは我手にかけてた公方家が、地獄の鬼となつて枕もとにあらはれた夢をみた。生きてゐるうちさへも恐れぬ將軍が、死んだ後に何怖からう。(あざ笑ふ。)おのれ、睨み返して呉れうとよく聽ると、鬼の顔は忽ち多門の美しい女の顔とかはつた。夢は不思議なものぢやなう。

(丹後はさびしく笑ひつゝ、焚火に枝をくべてゐる。船

か傾けるたりしが、今や主従が堤を降りたる時、俄に聲をかける。)
丹後 あいや、卒爾ながらおたづね申す。唯今そこを通るのは、松永の娘多門でないか。
丹後 いかにもさうぢや。
丹後 お、多門か。
(丹後は焚火のそばを離れて少しく這ひ寄る。)
七郎 え、袖乞どもの分際で、松永殿の御息女を呼び捨てにするとは無禮な奴め。物がほしくば土に頭をさげて御慈悲をねがへ。
丹後 呼び捨てにしても苦しからぬ筋あればこそ、多門と呼んだがなんとした。夫が妻の名をよぶに不思議があらうか。
七郎 なんと申すべ不審ながらに透しみる。御息女に對して、夫の妻のと……。おのれは氣でも狂うたのか。かさねて無禮を申さば捨置かぬぞ。
丹後 さう云ふ聲は伊賀七郎か。主の威勢を嵩にきて、相も變らず強いことぢやな。
七郎 や、われを七郎と知つたるは……。おのれは何者ぢや。丹後 半生逢はぬ間にもり忘れたか。池田丹後の面をみい。

唄の聲遠くきこゆ。)

丹後 堤の上より松永の娘多門を白木の昇輿にのせて、家來二人がこれを身き、伊賀七郎が先に立ち、侍女二人と家來數人が附添ひて出づ。

多門 七郎、日暮もいかう詰つたなう。
七郎 あきの日は釣籠落しと昔から申すに嘘はござりませぬ。急ぐとすれど、もはや暮近く相成りました。

多門 淀の渡を越えるときに、入相の鐘を聞いたやうであつたが、京ももう眼の前ぢや、さのみ急ぐにも及ぶまい。鐘の音を聞きながら野路をゆくも風流であらうぞ。

七郎 人家のある所までまゐりましたら、松明の用意をいたさせませう。
(主従は語りながら堤をおりかゝる。丹後はその聲に耳

きこゆ。)

丹後 傾けるたりしが、今や主従が堤を降りたる時、俄に聲をかける。)

七郎なに、池田：丹後ちやと：。

(七郎はおどろきて立寄り、焚火の火かげに丹後の顔を見つゝうかゞひ視る。)

七郎なにさまお身は池田丹後ちや。さりとは思ひも寄らぬこの姿は：。

丹後この姿には誰がした。池田丹後ともあるべき武士を、袖乞には誰がした。松永頼正といふ日本一のいつはり者と、お身達のやうな不人情者とが密合うて、われを奈落の底へ突き落したのぢや。

(丹後は怒つて罵る。多門は左右を見かへる。)

多門 興を卸しや。

家来はつ。(家来は興を昇さおろす。多門は徐かに興を出でて、丹後のそばへ進み寄る。)

多門 丹後、久しう逢はぬ。妾は多門ちや。

丹後 おゝ、多門：。(丹後は俄に笑をふくみて、這ひ寄りつゝその袂を捉る。)

七郎おどろきて進らんとするを、多門は眼で制す。)

多門(剛しづかに。)人家に遠き流川堤、ほかに聞く耳がなければとて、故主や朋輩の悪口は些と嗜んだがよからう。

お身と彼とが懸してゐることは、丹後はかねて存じてをる。その主水めを生けて置いては邪魔になる。

多門 その心根が憎いので、妾はそちを見限つたのぢや。盲目になつた心の僻みから、味方を不意に襲つたは卑怯者：。

丹後 なに、丹後が卑怯者ちやと：。

多門(罵るとく。)おゝ、卑怯者ちや、卑怯者ちや。公方家をうち取つて見事に功を立てたなら、はじめの約束を楯にして、なぜ男らしう妾をうけ取らぬ。さうなつたら逃れぬ義理で、妾も懸を捨てまいものでもないが、罪もない味方を先に殺しておく卑怯者。それが武士のすることか。

そのやうな卑しい根性で、多門を妾に持たれうか。約束を破つた罪を人に責むるな。約束を破つたはそちの罪ぢや。自業自得といふものぢや。

(丹後は黙して睨みる。)

多門 これほど云うて聞かしたら、そちにも得心がまるつたであらう。おのれの罪をかへりみて、人を恨むな、世を恨むな。けふは男山の八幡宮へ参詣して、日くれて京へ歸る途中、こゝで逢つたは勿論の幸ひぢや。これだけ云うたらほかに用はない。(杖を擡ひて)藥物これへ：。

ぞ。恨みがあらば妾はいへ。父上や七郎を恨むは筋ぢやひぢや。

丹後 勿論、お身にも恨はある。とは云へ、娘の多門を丹後の妻にくれうと、約束したは父の彈正ちや。又その約束を破つたも父の彈正ちや。

多門 親といひ、子と云うても、人の心はみな別々ぢや。父上のおぼしめしは妾の知らぬこと。妾にはまた妾の心がある。

丹後 お身もその場に居合はせながら、その約束を知らぬと云ふか。知つても不承知と云はるゝか。

多門 いや、知らぬとは云はぬ。不承知とも云はぬ。日ごろは一隊の勇士顔する者共も、棄破といふ時には公方家の威光に恐れて、みな遠慮をするなかに、われから名乗つて出た岩瀬主水と池田丹後のふたりは、男のなかの男をと、われはも頼もしう思つてゐました。

丹後 その丹後は約束を違へず、みごとに將軍の首を取つたぞ。

多門 將軍を討つたは手柄ちやが、味方の主水助をなせ殺した。

丹後 主水助は味方でない。われに取つてはおなじく敵ぢや。

家来はつ。(家来は興を持ち来る。多門は乗らうとするを、丹後はあわてゝ進る。)

丹後 いや、それは理を非にまげて、鷲を鳥と云ひくろむる透口上ぢや。丹後にはまた丹後の云分がある。たとひ味方を殺さうとも、約束は約束で反古にはならぬぞ。お身は飽までも丹後の妻ぢや。この小屋がお身の住家て、ほかに歸るべき家はないぞ。

七郎 えゝ、邪魔するな。退け、のけ。

(丹後をつき退けて多門を奥にのせる。)

丹後(叫ぶ。)多門。待て。夫を捨てゝいづこへゆく。多門：。

(丹後は行かんとするを、家来等は支へる。多門は奥に乗つて下の方へゆく。丹後は探りながら又追はんとするを、七郎等はおさへ付ける。)

七郎 なにか引縛るものはないか。

(多門はくれなるの細紐を解き、無言にて投げあたへる。)

七郎は細紐を取り、暴れ狂ふ丹後を大勢にて引つくる。)

七郎 人の目に觸れぬやうに、その小屋のなかへ投げ込んで

お身と彼とが懸してゐることは、丹後はかねて存じてをる。その主水めを生けて置いては邪魔になる。

多門 その心根が憎いので、妾はそちを見限つたのぢや。盲目になつた心の僻みから、味方を不意に襲つたは卑怯者：。

丹後 なに、丹後が卑怯者ちやと：。

多門(罵るとく。)おゝ、卑怯者ちや、卑怯者ちや。公方家をうち取つて見事に功を立てたなら、はじめの約束を楯にして、なぜ男らしう妾をうけ取らぬ。さうなつたら逃れぬ義理で、妾も懸を捨てまいものでもないが、罪もない味方を先に殺しておく卑怯者。それが武士のすることか。

そのやうな卑しい根性で、多門を妾に持たれうか。約束を破つた罪を人に責むるな。約束を破つたはそちの罪ぢや。自業自得といふものぢや。

(丹後は黙して睨みる。)

多門 これほど云うて聞かしたら、そちにも得心がまるつたであらう。おのれの罪をかへりみて、人を恨むな、世を恨むな。けふは男山の八幡宮へ参詣して、日くれて京へ歸る途中、こゝで逢つたは勿論の幸ひぢや。これだけ云うたらほかに用はない。(杖を擡ひて)藥物これへ：。

置け。

家来はつ。

(家来等は丹後をとらへて無理に小屋のなかへ押込み、外より建をおろす。)

七郎 思ひもよらぬ奴に行き逢うて、大きに時刻を移しました。

(多門は七郎を招きてさやく。七郎うなづく。)

七郎 然らば途中より取つて返して……

(多門うなづく。)

七郎 はつ。

(七郎は矢はり先に立ち、多門をはじめ、侍女家来共も附添ひて去る。上の方の奥にて笛の聲遠くきこゆ。東の花道より大館岩千代出づ。)

岩千代 室町御所にて死ぬべき命を、今日までおめくながらへしは、亡き上様が修羅の御無念を晴さうためぢや。近頃こゝらに徘徊する盲目の乞食は池田丹後に相違あるまい。まづ彼奴を討取つて……む。 (岩千代はあたりを見かへりつゝ、小屋の上の方に忍びよる。)

岩千代 盲目の乞食は戻つたか。

(内には返答なし。岩千代はかきかされて呼ぶ。)

岩千代 池田丹後は居らぬか。

丹後 (小屋のうちに叫ぶ。) 丹後はこれに居る。多門を渡せ、妻をかへせ。

(岩千代うなづきて太刀を抜き、更に左右をうかゞふ。舞臺やうやく暗し。向うより以前の七郎は一般に駆け来り、これも太刀をぬきて矢庭に小屋のなかへ突き込まんとし、思はず岩千代と顔を見あはせ、たがひに愕然として透しみる。)

七郎 誰ぢや。

岩千代 たれぢや。

(消え残る焚火の光に、ふたりは再び透しみる。)

岩千代 おゝ。七郎か。 (岩千代は物をも云はずに切つてかゝる。七郎も引受けてしばし闘ひしが、遂に敵せずして元來し方へ逃げゆくを、岩千代もつゞいて追うて去る。奥下の上の方より與兵衛はふくべを持ち出て出づ。)

與兵衛 左のみ遠い路でもないに、往還りするうちに日がばつたりと暮れてしまつた。年を取ると意氣地がない。(小

屋の中をうかゞひて、盲殿や、もう寝てしまつたのか。

さあ、酒を買つて来たぞ。一杯飲んでから寝たがよからう。秋の夜はなか／＼長いわ。(建をあげておどろく。)

これ、こなたは何を唸つてゐるのだ。俄に病氣でもおこつたのか。これ、どうさつしやれた。

(與兵衛は細紐にくゝられたる丹後を引き出して、透しながめる。)

與兵衛 や、こなたはくゝられてゐるのか。おゝ、あかい細紐のやうなもので嚴重に縛られてゐるわ。こりや一體どうしたのだ。(云ひつゝ、縛られたる細紐を解く。)

丹後 (呻くやうに。) 多門はいづれへまるつた。

與兵衛 多門とは誰ぢや。

丹後 松永の娘、わが妻ぢや。

與兵衛 そんな人はこゝにはゐぬぞ。いや、こんな細紐があるからは、もしや女が来たのかな。

(與兵衛は不審さうに細紐をながめる。丹後は探り寄つてその細紐を奮ひ取る。與兵衛はいよ／＼呆れる。)

與兵衛 留守のあひだに何かあつたのやら、わしには些とも判らぬが、こなたはどうやら様子が可怪いぞ。まあ、落ちついて譯を話さつしやれ。

丹後 松永の娘がこゝへ来た。

與兵衛 松永の息女とお姫様ともあらう者が、今頃こんなところへ来るとは合點が行かぬ。こゝらには悪い狐が澤山ゐるから、こなたは化かされたのではないか。

(夜はいよ／＼暗くなりて、遠き境のうへに無数の狐火みだれて飛ぶ。)

與兵衛 狐だ、きつねだ。きつと狐の仕業に相違ない。あれ、あの通り、狐火が燃えてゐるわ。

丹後 なに、火が燃ゆる……

與兵衛 狐火が行列して通るのだ。

丹後 行列は姫の行列か。

與兵衛 いや、きつねの行列だ。丹後 むゝ、公方家の行列か。公方が行列を揃へてどこへゆく。この丹後を征伐にまるつたか。

(背負ひし太刀をぬきて起ち上る。)

與兵衛 あ、これ、どうさつしやれた。丹後 なんの、將軍……なんの、羅刹……阿修羅の眷族一度に押寄せて来るとも、それを恐るゝ丹後と思ふか。

(丹後は太刀を振りかざして空を切る。狐火しきりに燃ゆ。)

丹後 おい、主水か。なんの、おのれが……。又もや太刀を振つてあたりを切る。

奥兵衛 これ、これ、あぶない。待たつしやれと云ふに……。

丹後 更に上の方にむかつて、叫ぶ。

丹後 や、多門か。おい、多門……。わしも一緒にゆくぞ。

多門……。待て、待て。

丹後 は片手に細紐を持ち、かた手に太刀を持ち、迷ふが如くにふらふらと行く。奥兵衛いよ／＼驚きて交へんとするを、丹後は太刀の柄にて突退すれば、奥兵衛は倒れる。

丹後 多門……。おい、多門……。

丹後 は上の方へよるめきながら迷ひゆく。向うより岩千代は再び引返して走り出で、小屋のまへに來りて奥兵衛につまづく、奥兵衛はその足に踏る。

奥兵衛 まあ、待たつしやれ。

岩千代 えい、邪魔するな。奥兵衛を蹴放す。

奥兵衛 (心づく) や、丹後どのは無かつたか。

岩千代 その丹後はいづれへまゐつた。

奥兵衛 さあ、今までここに居りましたが、なにか判らぬことを云ひながら、狐に化かされたやうにうろ／＼と……。

岩千代 むい。して、如何いたした。

(この時、上の方の奥にて水の音きこゆ。)

岩千代 や、あの水音は……。

奥兵衛 盲の聲に駆けあつて、もしや川へでも陥つたか。

岩千代 更にかく實否を見とどけねばならぬ。案内いたせ。

奥兵衛 はつ。

(二人は行かんとする時、上の方より以前の笛をふく男出づ。)

男 これ、盲の乞食が川へおちたぞ。

奥兵衛 なに、盲が川へ落ちた……。

男 おいらがすすこの岸で笛を吹いてゐると、あの盲がうろうろと迷つて來て……。

岩千代 して、自殺か過失か。

男 そこはなんとも判りませんが、あそこは片葉の芦の淵と云つて、昔からよく人の死ぬところだと聞いてをります。

奥兵衛 むい、あれもやつぱり片葉の芦だなあ。(歎息する。)

(岩千代は残念さうに川の方を見かへる。月出づ。男は刀を倒して笛を吹く。水の音さびしくきこゆ。)

幕

番町皿屋敷

登場人物

- 青山橋本
- 用人柴田十太夫
- 奴隸次 權六
- 青山の腰元お菊
- お仙
- 津川の後室眞弓
- 放駒四郎兵衛
- 並木の長吉
- 橋場の仁助
- 聖天の萬藏
- 田町の彌作
- ほかに若黨 陸尺 茶屋の娘など

第一場

勘町、山王下。正面はたかき石段にて、上には

左右に石の祠寄せ、石燈籠などあり。櫻の立木の奥に社殿遠くみゆ。石段の下には櫻の大樹、これに沿うて上のかたに養養殿の茶店あり。店さきに床几二脚をおく。明暦の初年、三月なか

ばの午後。

(橋本長兵衛の子分並木の長吉、橋場の仁助は床几に腰をかけてゐる。茶店の娘は茶を出してゐる。宮神樂の音きこゆ。)

お茶一つおあがりなされませ。

長吉 標も今が丁度盛りだね。

こゝ四五日のところが見頃でございます。それに當年

はいつもよりも取分けて見事に咲きました。

長吉 山王の櫻といへば、おれたちが生れねえ先からの名物

だ。山の手で櫻と云ふ先づこゝが一番だらうな。

仁助 それだから俺達もわざ／＼下町から登つて來たのだ。

それで無けりやああんまり用のねえところだ。

長吉 これ、神様の前で勿體ねえことを云ふな。山王様の罰

があたるぞ。

仁助 山王様だつて怖えものか。おれには罰音標が附いてゐるのだ。

お背中(おせ)にちやあございませんか。(笑ふ) 仁助 やい、やい、こん畜生。ふざけたことを云やあがるな。

長吉 まあ、静かにしろ。どうせ姐さんに褒められる柄(がら)ちやあねえや。はムムムム。

頼 ほう、とんだ粗相(そそう)を申しました。(ふたりは茶をのんでゐる。石段の上より青山播磨、廿五歳、七百石の旗本。あみ笠、羽織、袴。あとより権次、権六の二人、いづれも奴にて附添(つくだ)ひ出づ。)

播磨 櫻はよく咲いたな。

権次 まるで作り物のやうでござりまする。

権六 たなばたの赤い色紙(いろし)を引裂いて、そこらへ一度に吹き付けたら、斯うもあらうかと思はれまする。

権次 はて、むづかしいことを云ふ奴(やつ)ちや。それより一口に、祭禮(まつり)の軒飾(のき)りのやうぢやと云へ。はムムムム。

(三人は笑ひながら石段を降りる。)

頼 お休みなされませ。

(三人は上の方の床几(とこざ)にかゝる。長吉と仁助は見てさゝやき合ふ。娘は茶を飲んで三人に出す。)

長吉 おい、ねえさん。こつちへももう一杯(いち)突(つ)ねえ。

頼 はい、はい。(茶を飲んで来る。)

長吉 (飲まうとしてわざと顔をしかめる。)こりやあ熱(あつ)くつて飲めねえや。

(長吉はわざとその茶を播磨の前(まへ)にぶちまける。)

権次 やあ、こいつ無禮(むれい)な奴(やつ)。なんて我等(われら)のまへに茶をぶちまけた。

権六 かう見たところが粗相(そそう)でない。おのれ等、喧嘩(けんか)を賣(う)らうとするのか。

長吉 賣(う)らうが賣(う)るめえがこつちの勝手(かた)だ。買(か)ひたくなけりやあ買(か)はねえまでだ。

頼 一文(いちもん)の奴(やつ)の出る暮(くれ)ちやあねえ、引込(ひきこ)んでゐる。こつちは手前達(てまへたち)を相手にするんぢやあねえや。

播磨 然らば身(み)どもが相手(かた)と申(ま)すか。(笠(かさ)を取る。)

頼 喧嘩(けんか)を賣(う)る、おのれ等のやうなならずものが八百八町にはびこればこそ、公方様(こうはつさま)お膝元(かたもと)が騒(さわ)がしいのぢや。

(この以前より放駒(はなご)の四郎兵衛(しろうべゑ)、町奴(ちやうやつ)のこしらへにて子分(こぶん)二人をつれ、石段(いしだん)を降り来(き)り、中途(ちゆうと)に立ちて窺(のぞ)ひあたりしが、この時(とき)すつと前(まへ)に出る。)

四郎兵衛 仔細(しじゆ)もなしに咬(か)み付(つ)くやうな、そんな病犬(びやういぬ)は江戸(えど)にやあゐねえや。白柄組(しろがら)とか名(な)を付けて、町人(ちやうじん)どもを嚇(おそ)す。

してあるく、水野十郎左衛門(みづのじうざゑもん)が仲間(なかま)のお侍(おさむらい)、青山播磨(あきやまはまろ)様と仰(おほ)しやるのは、たしかあなたでござえましたね。

萬藏(まんざう) さうだ、さうだ。この正月(しんげつ)に山村座(やまむらや)のまへで、水野(みづの)と喧嘩(けんか)をしたときに、たしかに見(み)かけた侍(さむらい)だ。

頼 違(ちが)えねえ。坂田(さかた)の何(なに)とかいふ奴(やつ)と一緒に(いっしょ)になつて、その白柄(しろがら)をひねくり廻(まわ)したのを、俺(おれ)あちやんと覺(おぼ)えてゐるんだ。

(長吉と仁助は床几(とこざ)をゆづり、四郎兵衛(しろうべゑ)はまん中に腰(こし)をかける。)

播磨(はまろ) む。白柄組(しろがら)の一人(ひとり)と知(し)つて喧嘩(けんか)を賣(う)るからは、さてはおのれは花川戸(はながわ)の無禮院(むれいゐん)長兵衛(ちやうべゑ)が手下(てあし)の者(もの)か。

四郎兵衛(しろうべゑ) お察(おさ)しの通り、無禮院(むれいゐん)長兵衛(ちやうべゑ)の身内(みうち)でも、ちつとは知られた放駒(はなご)の四郎兵衛(しろうべゑ)。

長吉 並木(なみき)の長吉(ちやうきち)。

仁助 播磨(はまろ)の仁助(にすけ)。

萬藏(まんざう) 聖天(せいてん)の萬藏(まんざう)。

頼作(たのしやく) 田町(たのまち)の彌作(ややく)だ。

権次 やい、やい。こいつら素町人(すぢやうじん)の分際(ぶんぎわい)で、歴々(れきれき)の御旗本(ごはたもと)衆(しゆ)に衝突(こうつう)かうとは、身のほど知らぬ蚊(め)とんぼめ等(らう)等(らう)。それほど喧嘩(けんか)が賣(う)りたくば、殿様(だんさま)におねだり申(ま)すまでもなく、

云(い)値(ぢ)でおれ達が買(か)つてやるわ。

権六 幸(さい)ひ今日は主親(しゆしん)の命日(いのちひ)といふでも無し、殺生(ころし)するにはあつらへ向(む)きぢや。下町(しもまち)から騒(さわ)くつて来た(き)上(う)り鰻(うなぎ)、山(やま)の手奴(てのやつ)が引(ひ)つ攔(らん)んで、片(かた)つばしから溜池(るいぢ)の泥(どろ)に埋(う)めるからさう思(おも)へ。

四郎兵衛(しろうべゑ) そんな囂(さわ)しを怖(こ)がつて、尻尾(しつぽ)をまいて逃(に)げるほどなら、白柄組(しろがら)が菓(か)を組(く)んでゐる此(こ)の山(やま)の手(て)へのぼつて来て、わざ／＼喧嘩(けんか)を賣(う)りやあしねえ。こつちを溜池(るいぢ)へぶち込(こ)む前に、そつちが山王(やまおう)の括(くわ)り猿(さる)、御子供(ごこども)衆(しゆ)のお土産(みやげ)にならねえやきに覺悟(かくご)をしなせえ。

播磨(はまろ) われ／＼が頭(かぶ)とたのむ水野殿(みづのどの)に敵意(てきい)を挟(は)んで、とかくに無禮(むれい)をはたらく無禮院(むれいゐん)長兵衛(ちやうべゑ)、いつかは懲(ちやう)してくれんと存(ぞん)じて居(ゐ)つたに、その子分(こぶん)といふおのれ等(らう)が、わざと喧嘩(けんか)を挑(も)むからは、もはや容赦(ゆるし)は相成(あ)らぬ。望(のぞ)みの通り

青山播磨(あきやまはまろ)が直々(ちやくぢやく)に相手(かた)になつてくるゝわ。

四郎兵衛(しろうべゑ) いゝ覺悟(かくご)だ。お逃げなされるな。

播磨(はまろ) なにを馬鹿(ばか)な。

子分四人(こぶんよにん) え、休(やす)めちまへ、休(やす)めちまへ。

(播磨も權次も身(み)がまへする。四郎兵衛(しろうべゑ)、その他四人(その他よにん)人も身(み)繕(つくろ)ひして詰(つ)めよる。娘(むすめ)はうろ／＼してゐる。この

時、陸尺に女の乗物をかゝせ、若黨二人附添ひて走らせ來り、喧嘩のまん中へ乗物をおろす。
長吉 おい、おい。お前達も目さきが利かおえ。
仁助 こゝへそんなものを卸してどうするんだ。
二人 退いてくれ、退いてくれ。

(權次權六は若黨の顔を見ておどろく。)

權次 おゝ、こなたは小石川の。

權六 津川様の御乗物か。

(乗物の戸をあけて津川の從室眞弓、五十餘歳、禿禿すがたにて出づ。)

眞弓 おゝ、小石川の伯母上、どうしてこゝへ……。

眞弓 赤坂の菩提所へ佛參のかへり路、よいところへ來合せました。天下の御旗本ともあるべき者が、町人どもを相手にして、違引とか差入とか、毎日毎日の喧嘩沙汰、さりとは見あげた心持ちや。不慮からあれほど云うて聞かしてゐる伯母の意見も、そなたといふ暴れ馬の耳には念佛さうな。主が主なら家來までが見習うて、權次、權六、そち達も悪あがきが過ぎませうぞ。

(權次、あい、あい。(頭を押へてうづくまる。))

四郎兵衛 見れば御大家の後室様、喧嘩のまん中へお越した

四郎兵衛 どうも失禮をいたしました。もし、白柄組のお侍。いづれ又どこかで逢ひませうぞ。(長吉仁助等にも今聞く通りだ。さあ、みんな早く來い、來い。
仁助 あい、あい。
(四郎兵衛は先にたちて、長吉と仁助と子分二人は去る。))

眞弓 これ、權六。こゝは往來ぢや。詳しいことは屋敷へ來た折に云ひませうが、武士たるものが町奴とかの眞似をして、白柄組の神祇組のと、名を聞くさへも苦々しい。喧嘩がなべて面白からう。喧嘩商賣は今日かぎり思ひ切らねばなりませんぞ。

權六 はあ。

眞弓 きかねば伯母は勘當ぢや。わかりましたか。

權六 はあ。

眞弓 それ。

(眞弓は眼で知らすれば、陸尺は乗物を昇きよせる。眞弓は乗物に乗りしが、再び首を出す。)

眞弓 これ、權六。そちが悪あがきをするよ云ふも、一つにはいつまでも御身であるからのことぢや。この間もちよつと話した飯田町の大久保の娘、どうぢや、あれを縁に

されて、このお剃きをお付けなさる思召でござりますか。御見物ならもう少しおあとへお退り下さりませ。眞弓 差出た申分かは知りませぬが、この喧嘩はわたしに預けてはくださりませぬか。權六はあとで殿しう叱ります。まあ堪忍して引いてくだされ。

四郎兵衛 さあ。(思案する。)

長吉 でも、このまゝて手を引いては。

仁助 親分に云譯があるめえせ。

眞弓 今更あとへ引かれるものか。

眞弓 かうなるからは命の取遣りだ。

眞弓 かまはずに遣つちまへ、遣つちまへ。

眞弓 不承知とあればわたしがお相手。

四郎兵衛 え。

眞弓 それとも素直に引いてくださるか。

四郎兵衛 こりやあ困りましたね。いくら御武家にしたところか、女を相手に町奴がまさか喧嘩もなりますまい。

眞弓 喧嘩は元より出たと勝負、けふに限つたことでもござりませぬ。おまへ様のおあつかひに免じて、こゝは素直に歸りませう。長吉も仁助も縁をこらへろ。

眞弓 よう聞き分けて下された。そんならこゝはおとなしう。

眞弓 買つては。

權六 さあ。(迷惑さうな顔。喧嘩のことは兎もかくも、その縁談の儀は……)

眞弓 忌ぢやと云ふのか。(かながへる。)ほかの事とも違つて、これは無理強にもなるまいか。そんならそれはそれとして、かへすんも白柄組とやらの附合は、きつと止めねばなりませんぞ。

權六 はあ。

(眞弓は乗物の戸をしめる。若黨等は権六に一禮して向うへ乗物を昇いてゆく。)

權六 殿様。悪いところへ伯母御様がお見えになりました。

眞弓 (笑ふ。)伯母様は苦手ぢや、所詮あたまは上らぬわ。

今伯母様に叱られた、その白柄組の水野どののは、仲間のものを誘ひ合せて、今夜わが屋敷へまゐらるゝ筈ぢや。

酔つたら又面白い話があるらう。

(風の香して襟の花ちりかゝる。)

眞弓 おゝ、散る花にも風情があるなう。どれ、そろ／＼歸らうか。

權六 はあ。

(權次は茶代を置く。娘は禮をいふ。播磨は行きかゝる。)

第二場

番町青山家の座敷。二重屋敷にて、上のかたに床の間、ついで襖。庭には飛び石、上の方に井戸ありて、井戸のほとりに大なる柳を栽ふたり。おなじ日の夕刻。

(上の方より庭づたひに、用人柴田十太夫が先に立ち、腰元お菊、お仙の二人出づ。ふたりは高麗染の皿五枚を入れたる箱を持つ。)

十太夫 これ、大切の御品ぢや。氣をつけて持つてゆけ。よいか。

二人 かしこまりました。

十太夫 唯今お蔵から取出したばかりで、別に仔細もあるまいが、念には念を入れよと云ふこともある。お勝手へ持つて退るまでに兎もかくも一度吟味をいたさう。その箱をそれへ運べ。

二人 はい、はい。

(三人は縁にあがる。お菊は先づ箱をあけて五枚の皿を

十太夫 殿様がお歸りになるまでに、あちらのお客間を取片附けて置かねばならぬ。では、そのお皿を元のやうに箱に入れて、お勝手の方へ運んでおけ。やれ、忙しいことぢや。

(十太夫はそゞくさと庭に降りて上の方に去る。お仙はあとを見送る。)

お仙 ほんにいつもくく氣せはしいお人ぢや。併しそれほど大切なお皿ならよく氣をつけて取扱はねばなるまい。なう、お菊どの。はて、お前は何をうつとりしてゐるのぢや。

お菊 (突然に。) お仙どの。

お仙 なんぢやえ。

お菊 このごろ殿様は御縁談があるとかいふ噂ぢやが、お前それをほんたうと思ふかえ。

お仙 さあそれは、新參のわたしには判らぬが、なにやらそんな噂がないでもないやうな。(口のうちで繰返す。) 若しあつたお菊 無いでもないやうな。(口のうちで繰返す。) 若しあつたとしたら。

お仙 おめてたいことぢや。
お菊 さうかも知れぬ。(腹立たしげに云ひしが又思ひ直し

出す。十太夫は眼鏡をかけて一々にあらためる。ついでお仙も五枚の皿を出す。十太夫はおなじく検めてうなづく。)

十太夫 よし、よし、十枚ともに別條ない。くどくも申すやうなれど、これは大切のお品ぢや。かならず粗相があつてはならぬぞ。

お仙 御用人様。この十枚のお皿が何うしてそのやうに大切なのでござりまする。

十太夫 そちは新參、詳しいわけをよく知るまいが、このお皿は高麗焼で、御先祖様から代々傳はるお家の寶ぢや。萬一あやまつてその一枚でも打碎いたら殿しいお仕置、先づ命はないものと覺悟せい。

お仙 え。(頷へる。)

十太夫 ぢやによつて滅多に取出したことはないのぢやが、今宵は白柄組のお頭水野十郎左衛門様がお越しに相成るについて、殿様格別のお心入れて、御料理の器にそのお皿をおつかひなさる。又しても諍く申すやうぢやが、一枚一枚鄭重に取りあつかへ。割るは勿論、疵をつけても一大事ぢやぞ。よいか。

二人 はい、はい。

てのいや、それは嘘であらう。嘘ぢや、嘘ぢや。うそに違ひない。

お仙 でも、殿様ももうお年頃ぢや。奥様をお買ひなさるに不思議はあるまい。

お菊 奥様……(又腹立たしげに。) 内の殿様は奥様などお買ひなさる筈がないのぢや。

お仙 はて、そんなに怖い顔をして、なぜわたしを睨むのぢや。お前は、このごろ様子が變つて、ぢつと考へてゐるかと思へば、急にじれたり怒つたり、なにか氣合ても悪いのかえ。

(お菊はだまつて俯向いてゐる。琴唄のやうな獨吟になる。)

唄へ世の中の、花はみじかき命にて、春は胡蝶の夢うつつ、なにが戀やら情やら。

(お仙は五枚の皿を片附けて箱に入れる。お菊はやはり考へてゐる。)

お仙 おとなりのお屋敷では又いつものお琴のお波ひが始まつたやうな。(箱をかゝへて起つ。) さあ、おまへも早うお勝手へ……。わたしは一足さきへ行きますぞえ。
(お仙は庭に降りて下の方に去る。)

お菊 (奇々して) え、なんとしたものであらう。わたしといふ者を打捨て、ほかの奥様をお買ひ遊ばすやうな、そんな騒つきの殿様でないことは、不審からよく知つてゐるものゝ、小石川の伯爵御様の御媒介で、飯田町の大久保様とやらから奥様をお迎へなさる、内相談があるやうら。(また考へる) いや、それはほんの人の噂ぢや。お、さうぢや。現にこのあひだも殿様にそれを云うて念を押したら、え、馬鹿め、おれを疑ふにも程がある。まあ、黙つて長い目で見てをれと、たゞ一口にお叱りなされた。叱られて嬉しかつたも束の間で、又なんとやら疑ひの芽が噴いてくる……。え、もうどうともなれ。唄へ物に狂ふか青柳も、風のまに／＼もつれて解けて、緑のみだれの果しなき。

(お菊は少しく悶れたる氣味にて血を片づけてゐたりしが、また手をやめて考へる。)

お菊 よもやとは思ふものゝ、萬一ほんたうに奥様が来るやうであつたら……。え、氣の揉めることぢや。たとひ口ではなんと仰せられても、男はいつはりの多いものやうら。なんとかして殿様の、心の奥の奥を確かに見きはめる工夫はないものか。(思索しながら我手に持つたる

血にふと眼をつける。お家に取つては大切な寶といふこの血を、もしも妾が打碎いたら……。)(又かんがへる)とは云ふものゝ、大切なお道具を、むざ／＼毀すは勿體ない。

唄へ雲さへ晴き雨篋ひ、故郷の空はいづこそと、ゆくてに迷ふ雁の聲。

(お菊は血をながめて、毀さうか毀すまいかと迷つてゐる。)

お菊 え、もう寧ろそのこと。

唄へしづ心なく散りそめて、土に歸るか花の行末。(この以前よりお仙は下手より出て来りてうかゞひある。お菊は思ひ切つて一枚の血を取り、緑の柱に打ち付けて割る。この途端に、下の方にて「お歸り」と大きく呼ぶ聲。お仙は早々に下の方へ立去る。上の方より庭づたひにて十太夫足早に出づ。)

十太夫 お、もうお歸りぢや。(下の方へ行かんとしてお菊をみる) お菊、まだそこに居つたのか。や、お血をどうぞ取したか。これ、お菊。(あわてゝ縁に上る) や、大切のお血を眞二つに……。こ、こりや何ういたしたのぢや。仔細をいへ、仔細を申せ。

(十太夫はおどろき怒つて詰める。お菊は黙つて手をついてゐる。)

十太夫 え、黙つてゐては判らぬ。こ、こりや一體どうしたのぢや。さつきもあれほど申聞かせて置いたに……。かやうな粗相を仕出来しては、そちばかりではない、この十太夫もどのやうな御咎めを受けうも知れぬ。こりや飛んでもないことに相成つたぞ。

(十太夫も途方に暮れてゐるところへ、奥の襖をあけて青山番頭つか／＼出づ。)

十太夫 お歸り遊ばしませ。御出迎へと存じましたる處、おもひも密らぬ様事が出来いたしましたして、失禮御免くださりませ。

お菊 思ひもよらぬ様事……。)(打笑む) 十太夫が又なにか狼狽へて居るな。あわてずには居られませぬ。殿様、これ御覽

十太夫 いや、あわてずには居られませぬ。殿様、これ御覽くださいませ。(血を指さす。)

お菊 (割れたる血を見ておどろく) や、高麗の血を眞二つに……。誰が割つた。(怒る。)

お菊 わたくしが割りました。

うな。

お菊 はい、恐れ入りましたござりまする。大切なお血を損じましたは、わたくしが重々の不調法、どのやうな御仕置を受けませうとも決してお恨みとは存じませぬ。

お菊 お、先づ以て神妙の覺悟ぢや。青山の家を取つては先祖傳來大切の寶ではあるが、粗相とあれば深く咎めるわけにもまゐるまい。以後はきつと慎めよ。

お菊 はい。ありがたうござりまする。(安心して喜ぶ。)

お菊 幸ひ今夕の來客は水野殿を上客として、ほかに七人、主人をあはせて丁度九人ぢや。血が一枚かけても事は済む。なう、十太夫。

十太夫 左様でござりまする。しかし御客人の御都合は兎もあれ、折角十枚揃ひましたる大切な御道具を、一枚缺きましたる不調法は、手前も共におわび申上げまする。

お菊 (打笑む) いや、いや、心配いたすな。たとひ先祖傳來とは申せ、鎧兜槍刀のたぐひとは違つて、所詮は血

小鉢ぢや。わしは左のみ借いとも思はぬ。しかし昔形氣の親類どもにきこえると面倒、表向きは矢はり十枚揃うてあることに致しておけ。

十太夫 はあ。

播磨 御客人もやがて見えるであらう。座敷の用意萬端と
こほりなく致して置け。そちは名代の粗忽者ぢや、手落
のないやうに氣をつけい。

十太夫 委細心得てをりまする。萬事手ぬかりのない筈とは
存じて居りまするが、ではもう一度念のために、御座敷
を見廻つてまゐりまする。御免ください。

(十太夫はそくさと再び庭傳ひに上のかたへ去る。お
菊は残る四枚の皿を箱に入れる。)

お菊 とんだ粗相をいたしましたして、なんとも申譯がござりま
せぬ。(手をつく。)

播磨 はて、どう申すな。一度詫びたらそれでよい。まご
とを云へば家重代の高麗皿、家來があやまつて砕く時は
手討にするが家の掟ぢやが、餘人は知らず、そちを手討
になると思ふか。は、は、は、は。砕けた皿は人の目に立
たぬやうに、その井戸のなかへ沈めてしまへ。

お菊 はい、はい。

(お菊は嬉しげに起つて、先づ皿の箱を縁さきを持ち出
し、更に缺けたる皿を取りて庭に降り、上の方の井戸に
なげ込む。)

お菊 では、わたくしもお勝手へ退りまする。(皿の箱をかゝ

へる。御免くださりませぬ。(下の方へ行きかゝる。)

播磨 待て、待て。左様に通じてまゐるな。勝手の手はほか
の女どもに任して置いて、まあこゝで少し話してゆけ。
お菊 はい。(嬉しげに縁に腰をかける。播磨も縁さきに進み
出る。)

播磨 母から此頃にはたよりはなないか。
お菊 この一月ほどなんのたよりも聞きませぬが、大方無事
であらうと存じてをりまする。

播磨 親ひとり子一人ぢや。いつそ此の屋敷内へ引取つては
どうぢやな。母は屋敷住居は嫌ひかな。

お菊 いえ、嫌ひではござりませぬが、母を御屋敷へ連れて
まゐりまするには、なにも彼も打明けねばなりません。

播磨 なにもかも……(打笑む。隠すことはない。母にも打
明けたらよいではないか。

お菊 でも……それは……(恥しげにうつむく。)

播磨 取かしかい。もう斯うなつたら誰に憚ることもない。
天下の旗本青山播磨を婿にきめましたと、母のまへて立
派に云へ。

お菊 云うても大事ござりませぬか。
播磨 そちの口から云はれずば、母を兎もかくも屋敷へ連れ

てまゐれ。わしから直々に打明けて申すわ。若しその時
に、母が播磨を婿にするは不承知ぢやと申しても、そち
は矢張りこゝに居るであらうな。

お菊 たとひ母がなんと申しませうとも……

播磨 いつまでもこゝに居るか。
お菊 はい。

播磨 それを飽と忘るゝなよ。
(二人は顔を見あはせて打笑む。上の方より十太夫足早
に出づ。)

十太夫 殿様。その菊と申す女は重々不埒な者でござります
る。(鞆圍いて云ふ。)

播磨 なにが不埒ぢや。皿を割つたのは粗相と申すではない
か。それともまだはかに何か曲事を働いたか。

十太夫 いや、その皿を割つたのは粗相ではござりませぬ。
縁の柱にうち付けて、自分で割つたと申すこと。

播磨 自分でわざと割つたと申すか。
十太夫 朋輩のお仙がたしかに見届けたと申します。粗相
とあれば致方もござりませぬが、大切のお品をわざと打
割つたとは、あまりに法外の致し方。殿様が御勘辨なさ
れても、手前が不承知でござります。きつと吟味をいた

さねば相成りませぬ。

播磨 さりととは思議のことを聞くものぢや。こりや、菊。
さだめて粗相であらうな。

十太夫 いや、粗相とは云はせませぬ。
播磨 はて、騒ぐな。どうぢや、菊。十太夫はあのやうに申
して居るが、よもやさうではあるまいな。はつきりと申
開きをいたせ。

お菊 (胸を据ゑて) 實は御用人様のおつしやる通り……

播磨 わざと自分の手で打割つたか。
お菊 はい。

播磨 む。十太夫と顔を見あはせる。さりとて氣が狂うた
と思はれぬ。それにはなにか仔細があらう。わしが直
直に吟味する。十太夫はしばらく遠慮いたせ。

十太夫 いや、はや、呆れた女でござる。こりや、菊……

播磨 (じれる。) よい、よい。早くゆけ。
(十太夫は上のかたに引返して去る。)

播磨 こりや、菊。そちはなんと心得て、わざと大切の皿を
割つた。仔細を申せ。(物柔かに云ふ。)

お菊 おそれ入りましたでござりまする。
播磨 最前も申す通り、その皿を割れば手討に逢つても是非

ないのぢや。それを知りつゝ自分の手で、わざと打割りしとあるからは、よく／＼の仔細がなくてはなるまい。つゝまず云へ。どうぢや。

お菊 もう此土はなにをお隠し申しませう。由ないわたくしの疑ひから。

播磨 疑ひとはなんの疑ひぢや。

お菊 殿様のお心をうたがひまして……

播磨 はだまつてお菊の顔を覗む。

お菊 このあひだも鳥渡お耳に入れました通り、小石川の伯母御様がお謀介で、どこやらの御屋敷から奥様がお興入れになるかも知れぬといふお噂。あけても暮れてもそればかりが胸に支へて……恐れながら殿様のお心を試さうとて……

播磨 むむ。それで大方仔細は讀めた。それに就いてこの播磨が、そちを唯一時の花とながめて居るか、但しはいつまでも見捨てぬ心か。その本心を探らうために、わざと大切の皿を打破つて、皿が大事か、そちが大事か、播磨が性根をたしかに見届けようと致したのであらう。菊、たしかにさうか。

お菊 はい。

なんと言はうとも、決してほかの妻は迎へぬと、あれほど誓うたをなんと聞いた。さあ、確と申せ。なにが不足でこの播磨を疑うた。なにを證據にこの播磨を疑うた。お菊 おまへ様のお心に曇りのないは、不斷からよく知つてゐながらも、女の浅い心からつい疑うたはわたくしが重重のあやまり、眞平御免くださりませ。

播磨 今となつて詫びようとも、罪のないものを一旦疑うた、おのれの罪は生涯消えぬぞ。さあ、覺悟してそれへ直れ。

お菊 (播磨はお菊を突き放して刀をひき寄せる。下の方より庭づたひに奴權次走り出す。)

お菊 もし、殿様。しばらくお控へ下さりませ。さつきから物蔭で窃と立聞きをして居りましたら、お菊どのが大切のお皿を割つたとやら、碎いたとやら、そりやもうお菊殿の落度は重々、そのかほそい素つ首をころりと打落されても、是非もない羽目ではござるもの、多寡が女子ぢや。骨のない海月や豆腐を料理なされても、なんの御手堪へもござるまい。さつきこの喧嘩とは譯が違ひます。こゝは何分この奴に免じて、そのお刀はお納めなされて下さりませ。

播磨 それに相違ないか。

お菊 はい。

播磨 え、おのれ、これ程までにして我が心を試さうとは、あまりと云へば憎い奴。こりやよく聞け。天下の旗本青山播磨が、戀には主家來の隔てなく、召仕へのそちと云ひかはして、日本中の花と見るはわが宿の菊一輪と、弓矢八幡、律義一方の三河武士がたゞ一筋に思ひつめて、白柄組のつきあひにも吉原へは一度も足ふみせず、丹前風呂でも女子のさかづきは手に取らず。かたき同志の町奴と三日喧嘩せぬ法もあれ、一夜でもそちの傍を離れまいと、かたい義理を守つてゐるのが、嘘や偽りてなることか、積つてみても知るゝ筈。なにが不足でこの播磨を疑うたぞ。

お菊 (お菊の襟髪をつかんで小突きまはす。お菊は倒れながら泣く。)

播磨 い、や、そちの疑ひは晴れようとも、うたがはれた播磨の無念は晴れぬ。小石川の伯母はおろか、親類一門が

お菊 その疑ひももう晴れました。お免しなされてくださりませ。

播磨 折角の取りなしぢやが、この女の罪は赦されぬ。なんにも云はずに見物いたせ。

お菊 一旦かうと云ひ出したら、あとへは引かぬ御氣性は、奴もかねて呑み込んで居りまするが、なんぼ大切の御道具ちやと云うても、ひとりの命を一枚の皿と取替へるとは、このごろ流行る取替へえの始よりも餘り無難作の話ではござりませぬか。どうでもお胸が晴れぬとあれば、殿さまの御名代にこの奴が、女の頬筋ふたつ三つ殿倒して、それで御仕置はお止めになされ。

播磨 え、播磨が今日の無念さは、おのれ等の奴が知るところでない。いかに大切の寶なりとも、人ひとりの命を一枚の皿に替へようとは思はぬ。皿が惜さにこの菊を成敗すると思つたら、それは大きな料簡ちがひぢや。菊、その皿をこれへ出せ。

お菊 はい。

播磨 (時の鐘きこゆ。お菊は箱より恐る／＼一枚の皿を出す。播磨はその皿を刀の鈎に打ちあて、割るに、お菊も權次もおどろく。)

播磨 それ、一枚……。菊、あとを數へい。

お菊 二枚……。

なんと言はうとも、決してほかの妻は迎へぬと、あれほど誓うたをなんと聞いた。さあ、確と申せ。なにが不足でこの播磨を疑うた。なにを證據にこの播磨を疑うた。お菊 おまへ様のお心に曇りのないは、不斷からよく知つてゐながらも、女の浅い心からつい疑うたはわたくしが重重のあやまり、眞平御免くださりませ。

播磨 今となつて詫びようとも、罪のないものを一旦疑うた、おのれの罪は生涯消えぬぞ。さあ、覺悟してそれへ直れ。

お菊 (播磨はお菊を突き放して刀をひき寄せる。下の方より庭づたひに奴權次走り出す。)

お菊 もし、殿様。しばらくお控へ下さりませ。さつきから物蔭で窃と立聞きをして居りましたら、お菊どのが大切のお皿を割つたとやら、碎いたとやら、そりやもうお菊殿の落度は重々、そのかほそい素つ首をころりと打落されても、是非もない羽目ではござるもの、多寡が女子ぢや。骨のない海月や豆腐を料理なされても、なんの御手堪へもござるまい。さつきこの喧嘩とは譯が違ひます。こゝは何分この奴に免じて、そのお刀はお納めなされて下さりませ。

お菊 はい。

播磨 (時の鐘きこゆ。お菊は箱より恐る／＼一枚の皿を出す。播磨はその皿を刀の鈎に打ちあて、割るに、お菊も權次もおどろく。)

播磨 それ、一枚……。菊、あとを數へい。

お菊 二枚……。

（お菊は血を出す。播磨は又もや打割る。）

播磨 それ、二枚……次を出せ。

お菊 三枚……

（播磨はまた打割る。權次も思はずのび上る。）

權次 おも、三枚……

播磨 次を出せ。

お菊 四枚……

（播磨は又もや打割る。）

お菊 四枚……もう無いか。

お菊 あとの五枚はお仙蔵が別のお箱へ入れて持つてまゐりました。

播磨 むも。播磨が血を溜むのでないのは、菊にも權次にも判つたであらうな。青山播磨は五枚十枚の血を溜んで、人の命を取るほどの無慈悲な男でない。

權次 それほど無慈悲でないならば、なんでむざ／＼御成敗を……

播磨 そちには判らぬ。黙つてをれ。しかし菊には合點がまゐつた筈。潔白な男のまことを疑つた、女の罪は重いと知れ。

お菊 はい、よう合點がまゐりました。このうへは何のやう

はせてゐる。播磨は一刀にその肩先より切り倒す。）

權次 おも、たうとう造つておしこひなされたか。（起き上る。）可哀相になう。

播磨 女の死體は井戸へなげ捨てい。

權次 はあ。

（權次はお菊の死體をだき起す。上の方より十太夫は燈籠をさげて出づ。）

十太夫 おも、菊は御手討に相成りましたか。不憫のやうでござりまするが、心柄いたし方もござりませぬ。

權次 殿様お指圖ちや。（井戸を指す。）手傳うてくだされ。

十太夫 これは難儀な夜ぢやな。待て、待て。

（十太夫は袴の股立を取り、權次と一緒にお菊の死體を上手の井戸に沈める。播磨は立ち寄つて井戸をのぞく。鐘の聲）

播磨 家重代の寶も碎けた。播磨が一生の戀もほろびた。

（下の方より權次走り出づ。）

權次 申上げます。水野十郎左衛門様これへお越しの途中で町奴どもに道を遮られ、相手は大勢、なにか彼やと云ひ

がかり、喧嘩の花が咲きさうでござりまする。

權次 むも。そんならまだ先刻の奴等が、そこらにうろつ

な御仕置を受けませうとも、思ひ残すことはござりませぬ。女が一生に一度の男（播磨の顔を見る。）戀にいつは

りの無かつたことを、確かにそれと見きはめましたら、死んでも本望でござりまする。

播磨 もし傷りの戀であつたら、播磨もそちを殺しはせぬ。いつはりならぬ戀を疑はれ、重代の寶を打割つてまで試

されては、どうしても赦すことは相成らぬ。それ、覺悟して庭へ出い。

（お菊の襟裳を取つて庭へつき落す。權次はあわて、お菊を圍ふ。播磨は庭下駄をはきて降立つ。）

播磨 權次。邪魔するな。退け、退け。

權次 殿様。女を斬るとお刀が汚れます。一旦柄へかけた手の遣り場がないといふならば、おも、さうぢや。あれ、あの井戸端の柳の幹でも、すつぱりとお遣りなされませ。

播磨 馬鹿を申すな。退かぬとおのれ斷殺すぞ。

（權次が遮るを播磨は振り退けて、お菊の前にひき出す。）

權次 えも、殺生な殿様ぢや。お止しなされ、お止しなされ。

（權次また取付くを播磨は蹴倒す。お菊は尋常に手を合

てゐたと見えるな。

播磨 よし、播磨がすぐに疵け付けて、町奴どもを追ひ散らしてくれるわ。

（播磨は股立を取りて縁に上がり、承座にかけたる槍の鞘を拂つて庭にかけ降りる。）

十太夫 殿様。又しても喧嘩沙汰は……

播磨 やめいと申すか。一生の戀をうしなうて……（井戸を見かへる。）あたら男一匹が、これからは何をして生くる身ぞ。伯爵御の御勤當受けうとまよ。八百八町を愚れ

あるいて、毎日毎晩喧嘩商賣。その手はじめに……（槍を取直して）奴。まゐれ。

二人はあ。

（播磨は足袋にだしのまゝに走りゆく。權次權次も身づくろひして後につゞく。十太夫はあとを見送る。

鳥邊山心中

登場人物

菊地半九郎
坂田市之助
坂田源三郎
菊地の若黨八介
お染の父與兵衛
若松の遊女お染
おなじくお花
花菱の仲居お雪
ほかに仲居大せい

第一場

徳川時代。寛永三年十二月中旬の夜。京都祇園の茶屋。常足の二重家體にて、上の方に床の間、續いて出入りの襖。庭には飛び石、石燈籠

などあり。騒ぎ唄のやうな下方入りの鳴物にて幕あく。

(すぐに竹本の淨瑠璃になる)

淨へ色里に、きて新らしき戀衣、お染と云へどこやらに、染まぬ麻の風俗は、洗石おほこの町育。うき身はおなじ養蠶の、父をたづねてうろく、と、座敷をぬけて忍び出て。

(奥の襖をあけて遊女お染、十七歳、あたりを窺ひながら出づ。)

お染 今お雪さんが耳打ちして、河原町の父さんがたづねて来たとのこと。はて、どこにゐさんすやら。

淨へ父の與兵衛は庭傳ひ、顔見あはせて。

(下の方よりお染の父與兵衛、五十餘歳の商人、風呂敷づみみを背負ひて出づ。)

お染 お、父さん。

與兵衛 娘か。

お染 よう来て下さりました。して、あの春着は出来ましたかえ。

與兵衛 (縁に腰をかける。) お、出来た、出来た。話はあとのこと。まあ見やれ。

淨へ包とくくとりいだす。濃紫と黒輪子、男女の嗜れ小袖。

(與兵衛は風呂敷包をあけて、黒とむらさきの着物二かまねを出す。)

お染 お、ほんに見事に出来ました。父さん、たんとお禮を云ひまする。

淨へ父もほくく打ちうなづき。

與兵衛 は、自慢するではなけれども、この染色を見てくりやれ。可愛い娘が廊へ来て來年は初の正月、どうかして人にひけを取らずまいと、おれも蔭ながら案じてゐたら、江戸のよいお侍衆になじみが出来て、春の衣裳もそのお客人にこしらへて買ふと云ふこと。

お染 ほんに廊へ身を洗めてから、日數も浅いわたしとて、來る正月の紋目とやら物目とやらをどうしたものかと初めから案じてゐたに、店出しの晩からおなじみになつた江戸のお侍が、わたしのやうな者でも可愛がつてくだされて、夜も聲も揚げ詰め、ほかの座敷へはまだ一度も出たことがござんせぬ。まあ、喜んでくださんせ。

與兵衛 さあ、それぢやによつて、おれもそなたの爲、また二つにはその御客人の爲、なるだけ無駄な入費をかけず

に、よい品をあつらへさせたいと思つたので、廊へ出入りの呉服屋をそつちのけに、おれが懸念の店へちか掛合、半分値とまでは行かずとも、二割も三割も格安に仕立てさせた上に、これ見やれ、どうも云はれぬ染めの好き。

これなら誰に見られても恥かしいことは微塵もない。まあ、ちよつと手を通して見や。

お染 はて、おまへもまあ氣の短い。まだお客人にも見せぬうちに、手を通しては済まぬこと。いづれ春になつたらな。

與兵衛 お、是非一度はその衣裳を着た姿を……。

お染 見に来てくだんせ。

與兵衛 拜みに來ようか。(手をあはせる。)

お染 あれ、父さんがでんがうばつかり。ほムムムム。

與兵衛 はムムムム。

淨へたち上りしがまた見返り。

與兵衛 あ、これ、まだお目にはかゝらぬが、その江戸のお侍といふお方にの。おれが好うお禮を申してをりましたと、忘れぬやうに申上げてくれ。よいか。

お染 あい、あい。

與兵衛 この頃は悪い風邪が流行るさうな。よう氣をつけた

がよいぞよ。

お染 あい、あい。

奥兵衛 (ゆきかけて又立戻る。) それからなう。そのお侍といふのはお酒を召上るかの。

お染 あい。随分たんと飲みなさんす。

奥兵衛 そりやもう、あなたが召上るのはどんなに召上つてもよいがの。そなたはそのお附合をして、かならず無理な酒を飲むまいぞ。勤めする身に無理酒は大毒ぢやと云ふからの。

お染 よう合點してをりまする。

奥兵衛 では、今云うたおれの言つてを必ず忘れてくれまいぞ。よいか、よいか。忘れるな。

お染 あい、あい。さういふお前こそ歸る道を忘れさんすな。

奥兵衛 は、こいつめ。いつの間にか廊の水にしみて、そのやうな情で口をおぼえたな。は、は、は。

お染 笑うてこそは歸りけれ。

(奥兵衛は下の方に去る。)

お染 あゝして父さんが喜んでゐさんすのもみんなあの半蔵のお庇、その揚げ詰めのお座敷をぬけ出して、いつまで

もこんな處にゐては済まぬ。どれ、早う行きませう。

お染 行きかゝるうしろより、出合がしらに。

(奥より菊地半九郎、二十二歳の江戸の武士、酒に酔ひて出づ。)

お染 お、お前は……。

半九郎 わしを置去りにして、今までどこに隠れてゐた。座敷をぬけて忍び男にでも逢うてゐたか。

お染 あい。このやうな男に逢うてゐました。(衣裳をみせる。)

半九郎 お、春着が出来たか。廊の習ちやとか云うて、わしもそなたに釣合ふやうな新らしい小袖を誂へさせられたが、これが私のやうな武者者に似合ふかな。は、は、は。まあ、よい、よい。兎もかくも仕舞つて置いてくりやれ。したが、折角こしらへたその小袖も、そなたと對に着る日はないかも知れぬ。

お染 え、そりや又なせでござんすえ。

半九郎 將軍家が江戸へお歸りの日が迫つた。とばかりでは判るまいが、將軍家には先月はじめに御上落、われも御族本の一人としてお供の數に加はり、京に旅籠のつれづれに測らずそなたと馴染をかきね、來春までは逗留と思つてゐたに、元旦の拜賀は俄に御儀儀がへと相成

り、當年内に當地をひき拂うて、江戸表へ御下向と今朝支度頭から賜れ渡された。この上は所詮逗留は相成るまい。遅くも五日か七日のうちには……。

お染 お別れになるのでござんすか。

お染 あきれて涙も涙くむ。

半九郎 逢ふ夜の數は幾くとも、馴染んでから足かけ二月、さほどに深い仲でもなければ、懸や情は置いて、まだ廊下ぬそなたの不憫さに、及ばずながら今日まで夜も寝るこゝへ来て、そなたの力ともなつたれど、侍は御衆公が入切、お供に外れていつまでもこゝに逗留は思ひも寄らぬこと。察してくりやれ。

お染 あい。(泣く。)

半九郎 市之助が無理に強るので、今宵は例よりも飲みすぎした。あゝ、酔うた、酔うた。どれ、お染。水を一杯飲んで来てくれぬか。

お染 あい、あい。(奥に入る。)

半九郎 おもへば不憫な。あゝ、酔うた。こりや堪らぬ。(敷枕して倒れる。)

お染 無残やお染は一時に、百年経たる寝顔、わかれと聞けば悲しさの、なみだに顔も顔はれて。

お染 (出る。) お冷を汲んでまゐりました。もし、半蔵。お

お、いつの間にかうとくと……。

お染 男の寝顔をうちながめ。

お染 忘れもせぬ先月のなかば、わたしが初めて店出しの夜に、こゝへ呼ばれた初會の一座は、どなたも江戸のお侍、粗勿があつてはならぬぞと、親方さんから氣を付けられ。

お染 廊下でひとり泣いてゐたら、誰やらうしろからそつと来て、はて何を泣く。泣くほど悲しいことがあれば、わしが力になつてやると、見掛けは強さうなお侍が、優しう云うて下された。

お染 廊下でひとり泣いてゐたら、誰やらうしろからそつと来て、はて何を泣く。泣くほど悲しいことがあれば、わしが力になつてやると、見掛けは強さうなお侍が、優しう云うて下された。

お染 無残に願うた縁むすび。店出しの初めから仕合せな客を取りあてたと、馴染にも淡まれ、父さんにも自慢して、喜んだのもほんの束の間、やつぱりわたしは不仕合せに。

お染 無残に願うた縁むすび。店出しの初めから仕合せな客を取りあてたと、馴染にも淡まれ、父さんにも自慢して、喜んだのもほんの束の間、やつぱりわたしは不仕合せに。お染 生れたものかと忍び音に、かこち微くぞいらら

き。俄に奥は賑はしく、浮かれ立つたる市之助、お花の手を取りよるめき出て。

(奥より坂田市之助、半九郎とおなじ年輩の侍。遊女お花の手をとりて出づ。お染は着物を床の方におく。)

市之助 (これも酒に酔ひたる體。) これ、半九郎は何處に、どこに。お、お染はこゝに……。半九郎も居たわ、ゐたわ。

お花 ほんに二人ともに手の悪い。座敷をぬけて隠れ遊び、このまゝでは堪忍なりませぬぞ。なあ、市様。

市之助 さうぢや、さうぢや。その罰には何がよからうな。なには兎もあれ、起せ、起せ。

お染 あい、あい。(半九郎をたき起す。) もし、お連衆が見えませんでしたぞえ。

半九郎 (眼をひらく。) お、市之助か。座敷をかへて飲み直さうといふ洒落か。面白い、面白い。

(起き直る。お染は水を出す。半九郎はのむ。)

市之助 さあ、仲居どもをこれへ呼べ。

(お花は手をたく。あい／＼と答へて、奥より仲居大勢出る。或は燭臺を持ち、あるひは酒肴を運ぶ。)

市之助 さあ、さあ、陽気に騒げ、さわげ。京で遊ぶももう

わしの刀は備前物ぢや。その刀屋に談合して、二百兩に替へてはくれまいか。

淨へ市之助は眉をひそめ。

市之助 思ひもよらぬ頼みぢやが……。その二百兩のいりみ

ちは……。)

半九郎 京の鷲を買ひたいのぢや。

市之助 京のうぐひす……。はて、お身にも似合はぬ風流な

ことぢやな。(云ひつゝお染を見かへりて、扱はとうなづ

く。)む。して、その鷲を江戸へ連れてゆくのか。

半九郎 いや、籠から放して遣ればよいのぢや。大方舊巢へ戻るであらう。

お花 二百兩のうぐひすとは……。もしやそこらに啼いてゐる

……。 (お染を見かへる。)

市之助 いや、そなたの口を出すところでない。(眼で制し

て)さて、半九郎。見得の場所と云ひ満座のなかで、そ

れを打出すお身の心のうちは、市之助もよう察してゐる

が、そりや悪い斜簡、お身はあまりに正直過ぎやうぞ。

半九郎 え。

四五日らや。江戸へのみやげに面白いことのあるたけを盡して歸らう。

お花 折角かうしてお馴染になりましたに、お名残惜しいこととてござんすな。もうこれ限りお目にかゝれまいかと思へば、心細いやうてなりましたね。お染どのもそれを知つてかえ。

お染 あい。たつた今初めて聞きました。

市之助 聞いて定めて泣いたであらうな。はて、隠すな。白粉が涙でよごれてゐるわ。は、は、は。これ、半九郎。

お身はさつきからなせ黙つてゐる。面白い面白いといふた口の下から屈託らしい顔付、なんぞ仔細のあることか。

淨へ問はれて乾と顔をあげ。

半九郎 さて、市之助。お身とおれとは竹馬の友ぢや。遠慮なく頼みたいことがある。

市之助 あらたまつて何ぢやな。

半九郎 かやうな場所申すも異なものぢやが、思ひ立つたら一响も待たれぬ。この半九郎に二百兩の金を貸してくれぬか。と云うたところで、お身も旅先でそれだけの貯へはあるまい。お身は京の刀屋にしろるべがあるさうな。

あかして、思ふさま鳴かせてみたが、所詮は一時の興にすぎぬ。江戸へ歸れば又江戸の鷲がある。

市之助 ぢやによつて、わしもその鷲を江戸へ持歸らうとは思はぬが、鳴く音があまりに哀れぢやゆるに籠から放して遣りたいのぢや。半九郎は人も知つたる意地張ぢやが、生れつきから涙脆い男、ありあまる金を持つた身でも無し、家重代の刀を賣つて……。これ、察してくれ。

市之助 それも鷲を買ひ取つて、わが物にでもすることか。籠から放してやるだけに、家重代の寶を手放すとは、まだ分別が至らぬ、至らぬ。何事もさう一向には思ひつめぬものぢや。

淨へ取合ふ氣色もなかりけり。お染は悲しき勿體なさ、心で筋と手をあはせ、泣くよりほかに事ぞ無き。

市之助 さあ、これで鷲の話は済んだ。息のあるうちに行く先で、面白いこと仕盡したいのが、われ等一生の願望ぢや。(杯を取る。) さあ、つけ、つけ。

お染 あい、あい。(酌をする。)

市之助 半九郎も飲め、飲め。

半九郎 む、わしも飲まう。(大きい椀を取る。) さあ、こ

ろ

ろ

ろ

ろ

ろ

ろ

ろ

ろ

ろ

ろ

れへついでくれ。
市之助 ほう、小氣味がよい晴。
淨へ笑ひささめく折柄に、坂田源三郎血氣の侍、苦り切つてぞ打ち通る。

お雪 (下の方にて。) まあ、まあ、お待ちくださいませ。
(お雪は仲居の風俗にて、市之助の弟源三郎を止めながら出る。源三郎は十九か二十歳ぐらゐの侍。羽織袴、大小にて、お雪を突きのけて庭先に入り来る。)

源三郎 兄上、これにお出でなされたか。
市之助 お、源三郎か。なにしにまゐつた。
(源三郎は縁に上りて座につく。半九郎はだまつて酒を飲んでゐる。)

源三郎 (苦々しげに一座を見かへる。) 拙者は兄に火急の用事があつてまゐつたもの。じやらけた女どもは見ると目障りぢや。みな立て、立て。
淨へ 眠みまはされ、むつとして。

お花 おまへは市之助の弟御さうな。いつもく〜親のかたきでも尋ねるやうな、むづかしさうな顔ばかり。ちと兄さまを見留めて、おまへも粹にならしやんせ。江戸への土産によい女郎傘をお世話しよ。京の女郎と大佛餅とは、唯

地を引拂ふについては、上の御用は申すに及ばず、めいめいの諸支拂ひ買ひがかりも締纏にすませ、江戸への土産物も買ひととのへ、親類中の年寄どもへは神社の護符も頂いて行かねばならず、きのふは愛宕、けふは徳島と、天狗のやうに駆け廻る。その忙しい最中に、みじかい多の目を悠長らしい色里の居つとけ遊び、私の用向は拙者一人が手足を凝切らしても事はすめど、上の御用は一人が一人役、それでお前さまのお役が動まりますか、組頭的首尾がよいと思召すか。京三郎まで一緒に連れ立つて来て、弟に苦勞さするが兄の手柄か。すこしは分別なされませ。

淨へ 疊たいて云ひまくれば、一座も白けてみえにけり。兄も少しく持論し。

市之助 もうよい、もうよい。なにも後も判つた、判つた。兄もやがて歸るほどに、そちは一足先へ歸れ。

源三郎 いや、透いた一寸逃れと、弟はなか〜合點せず。
お供申す。さあ、すぐにお支度なされませ。

市之助 それは無理といふものぢや。歸るには相當の支度もある。まあ、なんでもよいから先へ行け。(起ち上る。)

見たばかりでは旨味の知れぬもの。噛みしめて味ふ氣があるなら、おまへも若いお侍。こちらから身振りして臨るほどの心中者がないとも限らぬ。兄様のわたしが意見ぢや、一座になつて面白う遊ばんせ。

源三郎 え、つべこべと尋ねる女め。おのれ等の分際で、武士にむかつて假にも兄様呼はり、敵れとて容赦はせぬぞ。(刀を引寄せる。)

お花 お、何ほわたし等のやうな果敢ないものでも、縁の骨切をみるやうに、さう安々とは切られまい。さあ、兄さまの眼のまへで、見事わたしを切つて見やんせ。
淨へ 冷み笑へば堪忍せず。

源三郎 おのれその頼柄を……
(刀をひき寄せるな、お雪をはじめ、仲居等は寄りて支へる。半九郎は腰ころびて見物してゐる。)

市之助 源三郎、鎮まれ、鎮まれ。こゝをいづこと思つてゐるのぢや。
淨へ 源三郎は膝つき寄せ。
源三郎 それは拙者よりお尋ね申すこと。兄上こそこゝをいづこと思召す。曩に御上洛の將軍家は俄にお歸りと聞れ出され、お供してまゐりし江戸の諸侍も、速からず京

源三郎 あ、兄上……
市之助 はて、馬鹿堅い奴。野暮を申すな。
(市之助は奥に入る。お花もお雪も仲居等もついで奥に入る。)

源三郎 え、情ない兄上……もう一度御意見して、無理にも連れて戻らにやならぬ。さうぢや。
淨へ 起たんとするを引止め。
(今まで横になりゐたる半九郎は頬をあげる。)

半九郎 源三郎。待て、待て。
源三郎 お、半九郎か。

半九郎 かやうな切所て立騒いでは見言しい。今夜はおとなしう歸つたがよからうぞ。兄は屹とこの半九郎が連れて戻る。安心して歸れ、歸れ。

源三郎 いや、安心してはゐられまい。一つ穴の給が支度合を、眞にうけて歸られうか。兄がかやうな白痴を露すも、お手前のやうは不しだらの筋があれはこそぢや。よい朋輩を持つて兄は仕合せ、拙者屹とお禮を申すぞ。

淨へ むしやくしや紛れの八つ當り。
半九郎 は、そのやうに怒るものでない。お手前はまた年が若い、ひとばかり悪い者のやうに云ふが、兄は兄、

拙者は拙者ぢや。兄が遊ぶと拙者が遊ぶとは、おなじ遊びでも心の入れ方が違ふかも知れぬ。まあ、なんにも云はずに歸れ、歸れ。

源三郎 歸らうと歸るまいと拙者の勝手ぢや。

浄へ又起ちかゝるをお染は取付き。

お染 半襟もあのやうに云うてござれば、まあ、まあ、お待ちなされませ。

源三郎 え、面倒な。退いてをれ。

浄へかよわき女を突き放せば、力餘つてよろ／＼、倒れかゝりし牆の上、酒も肴も飛び散つたり。半九郎も短氣の男。

半九郎 やい、源三郎。年下の者と思つて和かにあしらうてゐれば、云ひたい三昧の悪口、仕たい三昧の狼藉、もう堪忍がならぬぞよ。素直に手をさげて詫びて歸れば可し、さもなくはおのれの粉髪を引つ掴んで、狗ころのやうに門端へ投げ出すぞ。

源三郎 は、そのやうな脅しを怖がる源三郎でない。夜露と無しに兄をさそひ出して、あたり侍を腐らせた悪い友達。江戸の侍の面汚しめ。そつちから詫びをせねば堪忍ならぬわ。

これ拜みます、頼みます。どうぞもう一度分別して、仲直りしてください。

浄へ拜みまはるをまた蹴放し。

源三郎 女が留むるを幸ひに、云ひ出した勝負をやむるか。卑怯者め。

半九郎 なんの……。さう云ふおのれこそ逃るなよ。

浄へふたりは鞍より飛んで降り、さゝゆる女を刎ね退けて、河原へ走りゆく水の、あはれやお染は起ちつ居つ、人を呼ぶ間もあらばこそ、あとを慕つて……。

第二場

四條の河原。夜のけしき。所々に枯柳の立木などあり。水の音きこゆ。

浄へゆきさへ、暫し絶えたる夜の道、四條河原も冬ざれて、水の音のみ伝ふびし。

與兵衛 (出づ。) あゝ、暗い晩ぢや。河原を通る方が近道のやうに思つてゐたが、かう云ふ晩にはやつぱり町つゞきを歩いた方がましてあつたかも知れぬ。祇園を出てから路寄りをしてゐたので、思ひのほかは夜が更けたやうな。どれ、どれ、いそいで歸りませう。

浄へ負けず劣らず軋み合ふ。そばにお染は手に汗にぎり。お染どちらがどちらとも云はれぬ此場の仕儀、ましてお二人ともにおなじ御明証、もうお互ひに料簡して……。

半九郎 いや、その料簡はもうならぬぞ。おのれこの半九郎を江戸の侍の面汚しと云うたな。その仔細を申せ。

源三郎 仔細は今更云ふまでもないことぢや。御用を意つて遊里に入りびたる奴、それが武士の手下になるか。聞きたくば幾度でも云うて聞かす。菊地半九郎は侍の面よこし、恥さらし、武士の風上にも置かれぬ奴ぢや。

半九郎 お、よう云うた、おのれも武士に向つてそれほどおのれを云ふからは、相當の覺悟があらうな。

源三郎 お、念にはおよばぬ。武士にはいつでも覺悟がある。

浄へ解けぬ詞の行きがかり、半九郎はつツと起ち。

半九郎 問答無益ぢや。源三郎、河原へ來い。

源三郎 面白、眞勳の勝負するか。

浄へいづれも堪へぬ血氣と短氣、押取り刀でたち出づれば、お染ははつと氣もそとろ。

お染 なんぼ侍、衆ぢやと云うて、瑣細なことから云ひ募り、眞勳の果し合とは、あまりと云へば餘りの御短慮。

(千鳥の聲きこゆ。)

與兵衛 お、千鳥が鳴く。いつも聞き慣れてゐるもの、赤兒のなくやうな哀れな聲ぢや。は、今頃は娘もある春着を江戸のお客人にみせて、さだめて自慢じてゐることであらう。おなじ勤めをしてゐても、あゝいふ力になる頼もしい客人があれば、親方の首尾もよし、娘も氣丈夫、おれも安心と云ふものぢや。お、千鳥が又鳴くわ。千鳥も聲からうが、おれも寒い。かせ引かぬうちに行きませう。お、よい、驪梅に雲の缺けたところから海月が出たやうな。

浄へ呟き、行きかけて。

(與兵衛は下の方に去らんとして、上の方を見かへる。)

與兵衛 や、誰やら蕪合うてゐる様子。お、刃物が光るわ。お、お、だん／＼こつちへ斬結んでくるらしい。喧嘩か物取か知らぬけれど、傍杖の怪我せぬうちに、行きませう、行きませう。さうぢや。

浄へやがて歎きの種ぞとも、知らぬ白髪の堅老翁、足を

はやめて立歸る。

(與兵衛はいそいで立去る。木の音はげしく、上の方より半九郎と源三郎は斬りむすびながら出づ。月はをりを

り半九郎と源三郎は斬りむすびながら出づ。月はをりを

りに墜れて、二人は探りながらに聞ひ、半九郎は途に源三郎を斬倒す。月はまた明るくなる。
淨へはつと一息月かげを、たよりにお染は走り付き。
(上の方よりお染走り出づ。)

半九郎 お、お染か。
お染 半様、お怪我はなかつたか。して、相手のお侍は……。
半九郎 この通りぢや。
お染 え。

淨へひと目見るよりぞつとして、齒の根もあらず顛へる。男は騒ぐけしきもなく、刀を鞘に収めても、をさまり象ねし胸の鬨、暗きに迷ふばかりなり。

(半九郎は源三郎の死體を片寄せ、河の水をすくひて飲む。お染も手眞似にて自分にも飲ませてくれといふ。半九郎は水を入れる物がないと云ふ思入にて、自分の袴袴の袖をひき裂きて水に浸し、お染の口にふくませる。千鳥鳴く。)

半九郎 かよわい女子が血を見たら、さだめておそろしくも思ふであらう。どうぢや、もう落ちついたか。
お染 はい、はい。
淨へとは云ふものゝ察じられ。

半九郎 なにを馬鹿な。半九郎はそれほど卑怯な男でない。さしたる意趣も遺恨もないに、朋輩ひとり殺したからは、潔く罪をひきうくるが武士の道ぢや。若松屋のお染の客は人殺しと、あすは世間にうたはれて、そなたも肩身が狭からうが、それも因果ぢや、堪忍せい。

お染 なんの、なんの、勿體ない。あしかけ二月明暮れに、不測を加へてくださった。御恩は山ほどあるものを、まだそればかりか立ち際に、重代の刀を手放しても、わたしを受出して親許へ歸して遣らうの思召は、あんまり冥加がおそろしく、心で拜んでをりました。もし、半様、どうでも死なねば済まぬなら、一緒に死なしてくださいませ。

半九郎 いや、それもまた無分別。よしない義理をたて過ぎて、この半九郎に命までも呉れようとは、親の歎きを思はぬか。

お染 その歎きを思はぬではなけれども、おまへと云ふものに取廻り。

淨へわたしは今日まで生きてゐた。
お染 さつきあの祇園の茶屋で、もうお別れと聞いた時から、心は疾うに。

お染 わたしはこんな勤めの女子、お武家の法はなんにも知りませぬが、かうして人ひとり殺しても、お前になんの御咎もござんせぬかえ。

半九郎 さあ、生れつき短氣の上に、酒には酔つたり、詞のゆきがかり、堪忍のならぬ羽目となつてあたら閉鎖ひとりを手にかけたが……。今更思へば無分別。上洛のあひだは身持を儻み都の人に笑はるゝなど、かねて支那頭より罵れ渡されてあるに、場所は色里、酒の上の口論、しかも朋輩をうら果しては罪を逃れんやうもない。
淨へさすがに酒の酔さめて、半九郎は茫然と今更悔むも甲斐ぞなき。

お染 そんならやつぱりお侍でも人を殺した罪はのがれず。半九郎 尋常に切腹するか。但しは兄の市之助に仔細をうちあけ、弟のかたきと名乗つて討たるゝか。二つに一つのほかはあるまい。
お染 え。

淨へ呆れて詞もなかりしが。
お染 お、さうぢや。これを知つてゐるはわたし一人、ほかには誰も見てゐぬのを幸ひ、早うこゝを逃げてくださんせ。

淨へ死んだも同様。
お染 日本中に二人とない、たのもしいお人に引分かれ。
淨へ年期のながい勤め奉公、どう辛抱がなるものぞ。
お染 店出しの宵からお前さまの揚話で、汚れない妾のからだは、どこまでも半様ひとりを夫として、清い一生を送りたさ。

淨へ聞き分けてたべ、察してと、身をなげ伏してぞ泣きゐたる。
半九郎 わしもそなたを色里に洗めて置くがいぢらしく、身うけて親許へと、思ひしことも食ひ違つて、かうなるからは望そのこと、そなたを殺すはそなたを救ふ、慈悲の殺生であらうも知れぬ。濁りに洗んで濁りに染まぬ、清い處女と戀をして……。

お染 死ぬる際まで離れずに……。
半九郎 そんならこゝで……。

お染 あゝ、もし。(ささやく。)

半九郎 なるほど、屍を河原に曝さうよりも、いかなる人も遠にゆく鳥邊の山を死場所と……。

お染 折角こしらへた二人の春着を、あたら形見に残さうよりも、死んでゆく身の暗小袖。

半九郎 ものふも討死と覺悟すれば、鎧物具みごとに扮装
ち、立派に死ぬるが世の習。
お染 忍んで茶屋へ引返し。
半九郎 死装束を取つて来ようか。お染、来やれ。
お染 あい。

淨 風にみだるゝ枯柳、まねくがまゝに引かれゆく。
（二人はあたりなうかゞひながら上の方に忍び入る。下
の方より半九郎の若黨八介足早に出づ。月はまた隠れ
る。）

八介 やれ、暗いことぢや。折角月が出たと思つたに、雲め
がまた邪魔をし居つた。

（上の方より仲居お雪出て来りて、思はず八介に突き
當る。）

お雪 お、御免なされませ。
八介 さう云ふのは仲居のお雪殿ではないか。

お雪 ほんに入介殿でござんしたか。

八介 支配頭から火急のお招きで、旦那のお迎ひに来たのぢ
やが、いつもの通りおいでとあらうな。

お雪 さあ、それが大變。おまへの旦那の半様は市様の弟御
と果し合をなされうとて、この河原の方へ來られたと

やら。

八介 え。して、して、それはいつのことぢや。

お雪 たつた今のこととござんす。

八介 たつた今なら何處ぞ太刀の音の聞えさうなものぢや
が……。なんにしても其れはまことに一大事ぢや。（上の
方へ行かうとする。）

お雪 もし、もし、そつちではござんすまい。

八介 ではこつちか。（下の方へ行きかけて。）いや、こつち
はわしが今来た路ぢや。なんにしても斯う暗うては埒が
あかぬ。早う提灯を持つて來さつしやれ。

お雪 合點でござんす。

（お雪は行きかけてつまづき、透しながらに上の方に引
返す。）

八介 さあ、さあ、大變なことが出來てしまつたぞ。なんて
又、市之助様の弟御と果し合なぞなされたのか。え、
かうしてゐても氣が揉める。無駄とは知りながらも一
度こつちの河原を探して見ようか。（下の方に入る。）

（時の鐘、これより竹本の出語りになる。）

淨 ひとり來て、ふたり連れ立つ極樂の、清水寺の鐘の
聲、九つ心くらき夜に、捨つるこの身はいざ鳥邊野

へ。をんな肌には白無垢や、上にむらさき藤の紋、申
着緋紗綾に黒繩子の帯、年は十七初花の、雨にしをる
る立姿。

（お染は文句の通りのこしらへにて、上の方より忍んで
出で、あたりを窺ふ。）

淨 男も肌は白小袖にて、黒き繩子に色あさ黄うら。
（半九郎も文句の通りのこしらへにて、あとより出る。
茶屋の殿きの笛きこゆ。）

淨 鳥邊の山はそなたぞと、死にゆく身のうしろ髪。

半九郎 ひく三味線は祇園町。
お染 茶屋のやま衆が色酒に。

半九郎 みだれて遊ぶ睡ぎ合ひ。
お染 あの面白さ見る時は。

淨 への面白さ見るときは、過ぎし霜月十五日、初の御
見を思ひ出す。

お染 あゝ、今更それを云ふも愚痴でござんす。さあ、些と
も早う。

半九郎 お染。
お染 半さま。

（月かくれる。ふたりは手を取りて行かうとする時、上

の方よりお雪は提灯をもちて先に立ち、あとより市之助
とお花出づ。）

市之助 それへゆく二人連は……。

（お雪はつか／＼と寄りて提灯をさしつけるを、半九郎
はたゞき落す。下の方より八介も出て来りて半九郎に突
きあたる。半九郎は八介をつき放し、お染の手を取りて
向うへ走り去る。皆々あとを透し見る。）

淨 河原づたひに……。
（床の三重、時の鐘。）

—幕—

箕輪の心中

登場人物

藤枝外記
外記の妹お鶴
吉田五郎三郎
用人彌三左衛門
中間角助
菩提寺の僧
百姫十吉
十吉の母お時
村のむすめお米
大芝屋徳衣
新造徳彌
若い者喜介
ほかに花見の男女
小坊主 若侍 水屋 燈籠屋 薪内話

廊の者 盆唄の娘子供など

第一幕

第一場

向島の木母寺。平舞臺の下手へよせて、藁ぶき
屋根の茶店あり。軒にあづま屋といふ行燈をか
け、門口に木振よき柳の立木あり。よきところ
に床几二脚ほどならべてあり。所々に櫻の立
木、花盛りの籠なり。正面には木母寺の境内を
見る。
（熊藏、半次、職人のこしらへにて、眼かづらをかけて、
酒樽を持ち、ほかに娘三人、おなじく花見のこしらへに
て、いづれも茶店の床几に腰をかけてある。外にも花見
の男女大ぜい、思ひ／＼のこしらへにて立ちかゝりある。
天明五年三月十五日、梅若の供養にて双盤念佛の音きこ
ゆ。）
熊藏 おい、おい。娘さん。茶でも湯でも早くたのむせ。酔
醒めのせぬか、喉が潤いてならねえ。
半次 ほんたうにこゝらは田舎だぜ。花時にやあ些と氣の利

いたのを置けばいゝのに……。おい、おい、姐さん。大
急ぎだよ。

茶屋女 はい、はい。

（茶店の中より茶屋女二人は赤い襦袢をかけ、土瓶、茶碗、
さくら餅などを盆にのせて持ち出す。）
女甲 どうもこみ合つて居りますもんですから、つい／＼遅
くなりました。

女乙 まあ、ゆつくりとお休みなすつて下さいまし。

熊藏 あんまりゆつくりしてゐると、日が暮れてしまはあ。

なあ、半次。

半次 ひと休みしたら、早く梅若へおまわりをして来よう。

（みな／＼拾遺詞にて茶を飲む。奥にて双盤の音きこゆ。
花見の男女は奥を見る。）

男 それ、お念佛がはじまるぜ。

女 早く行きませうよ。

（男女大ぜいばわや／＼云ひながら境内に入る。）

熊一 もうお念佛が始まると云ふから、わたし達も早く行か
うぢやありませんか。

熊藏 遅えねえ。どれ、出かけべえか。おい、姐さん。お茶
代はこゝへ置くよ。

女甲 毎度ありがたうございます。

（熊藏と半次は立たんとしてよろ／＼する。）

熊一 あれ、あぶない。

熊二 お前さん達は酔つてゐるから氣をつけないと、池へお
つこちるよ。

半次 おつこちる時にやあお前を抱いて一緒に心中だ。あは
はムムム。

熊藏 こんなものは邪魔でいけねえ。おい、誰か持つてくん
ねえか。（樽を出す。）

熊三 だつて、こりやあもう空ぢやあないか。

熊藏 空でもなんでも、これをさげてゐなくつちやお花見ら
しくねえや。ついでにこんなものも其方へ渡さう。

（熊藏は眼かづらを取る。娘三はうけ取りて眼かづらな
かけ、空樽をさげる。）

半次 おれもこんなものは鬱陶しくていけねえ。（眼かづらな
取る。）兜も籠も何つちもいらねえ。みんなそつちへお渡
し申すぜ。

（半次も眼かづらと樽を出す。娘一は眼かづらをかけ、
娘二は樽を持つ。）
熊一 ねえさん。おやかましくございました。

女甲 どういたしまして、一向おかまひ申しません。

（熊蔵を先にみな驚きながら境内に入る。）

女甲 けふは梅若の御供養で朝からお客が絶えないので、息

をつく間もありやあしない。

女乙 ほんたうに今日はがっかりしてしまつた。

女甲 お花見もこの五六日のところが書き入れたから、忙が

しいのも仕方があるまいよ。

（二人は茶碗など片付けてゐる。下手の奥より藤枝の妹お縫、十八歳、旗本の娘のこしらへにて、中間角助をつれて出づ。）

角助 お嬢様、これで鳥渡お休みなされては如何でございますか。

（お縫はうなづきて床几にかゝる。）

女甲 入らつしやいませ。（茶を汲んで出す。）

お縫 角助。けふは大層な賑ひであるなう。

角助 御覽の通り、向島も今が花盛りでございますから、江

戸中の者がみんな出かけてまゐります。

お縫 ほんに今は花の盛り、いつもながら見事な眺めではな

お難なに、混雑のなかで悴を見失うたと……。それは心配なことであらう。

お時 いえ、あれも子供には無し、どうやら斯うやら一人前の若い者、別に心配するほどのこともござりませぬ。

角助 おまへの方では心配しなくつても、息子さんの方で、却ておまへを案じてゐるかも知れねえ。私が行つて一遍さがして来ようか。

お時 いえ、いえ、決してそれには及びませぬ。やがてあとからまゐりませう。

（お縫でも、ゆき違ひになつてはならぬ。角助、境内を一度探して来や。）

角助 かしこまりました。

お時 それは御苦勞でござりますな。

角助 では、しばらくお待ちくださいませ。

（角助はお縫に會釋して境内に走り入る。茶店の女は茶碗を持ち出て出づ。）

女甲 おや、御家来さんは……。

お時 御家来さんは今ちよいとあれへまゐりました。そのお湯はわたくしが頂きます。

（お時は茶碗をうけ取る。女は店に入る。）

（女甲は角助にも茶を出す。）

角助 姐さん、後生だ。おれには櫻湯をくんねえ。

女甲 はい、はい。

（女は店に入る。お縫はあたりを眺めてゐる。境内よりお時、四十七八歳、農家の女房の拵へにて、うる／＼しながら出て来り、お縫と顔を見あはせる。）

お時 お、お嬢様ではござりませぬか。

お縫 お、乳母か。

角助 お乳母さん、珍らしいところで出つくはしたね。

お縫 まあ、そこへかけたがよからう。

お時 はい、ありがたうござります。

（お時は床几にかゝりて一禮する。）

お時 此頃はまことに御無沙汰をいたして居ります。して、今日はお花見でござりますか。

お縫 花見といふではないけれど、小梅の御菩提所へまゐつた序に、梅若の御供養を拜みに来ました。

お時 實はわたくしも梅若さまへ御参詣に來たのでござります。が、境内の混雑で悴のすがたを見うしなひ、そこらを探して居るうちに、丁度よいところでお目にかゝりました。

お縫 かけ違つて暫らく逢はなんだが、乳母はいつも逢者でめでたいなう。

お時 おかけ様でこの通り丈夫でござります。して、殿様はお勤め向きの御首尾もよく御業昌でいられますか。

お縫 お前はまだ知るまいが……。兄さまも此頃は、別にお勤めと云うては……。

お時 え、お勤めはござりませぬか。

お縫 （悲しげに。）實は去年の暮に、小普請入りを仰せつけられました。乳母、察してくりやれ。

お時 （おどろく。）それは、まあ……。なるほどこのお正月、お屋敷へ御年始に出ました時、いつもの春のやうては無く、なんだか陰氣でひつそりしてゐると存じました

が、さう云ふわけではござりませぬか。

お縫 春早々から悪い耳を聞かせたくない、なんにも云はずに隠してゐましたが、さういふ仕儀でお勤めにも出られず、たゞ引籠つてばかり居られます。

お時 おふくろ様にお乳がないので、わたくしがお屋敷へ御奉公、殿様が七つにおなり遊ばすまでお乳をあけて居りましたが、小さいときから御發明のお生れつきで、武藝學問なに暗からず、立派に御成人あそばして、ゆく／＼

は定めて御出世と、わたくしも蔭ながら喜んでをりまし
たに、お役御免の小音請入りとは、一體どうしたわけ
ござります。

お時 共、その調は...。ひとに話せば笑ひ草、乳母なら
ば共に泣いてもくれよう。兄様は武士にあるまじき腐通
ひ、身持放埒の殿によつてお上の首尾をそねた次第。
お時 え、殿さまが腐通ひに...。それは今まで些とも存じ
ませんでした。して、そのお通ひなさる女といふのは：
...

お時 大菱屋の綾衣とかいふ女子...。一昨年からの深い馴
染とやら。

お時 それはまあ飛んでもない。それにしても、おまへ様を
はじめ御親類の方々が、なぜ御意見をなされませぬ。
お時 幾たび御意見申しても、針ほどの效目もあらばこそ、
ますく不しだらが暮るばかりで、今は親類も呆れてゐ
るくらゐ...。

(お時はいよく打調るれば、お時共にも怒ひ顔。)
お時 それはさぞ御心配でござりませう。あれほど立派な殿
様に、どうしてそんな隙がさしたのやら...。情ないこ
とでござりますな。

るものか。引込んでゐる。

半次 さあ、野郎。どこまでもうぬが相手だ。

(二人は立ちかゝるを、連れの娘等は止める。お米と十
吉は途方にくれてゐる。)

お時 (起ち上る。) あゝ、これ、待ちや。

お時 え。(お時の顔を見て。) や、藤枝様のお嬢様でございま
したか。

半次 この通り酔つて居りますので、とんだ失禮をいたしま
した。

お時 それはわたしが知り合の者、粗相は免してやつてはく
れまいか。

(藤枝と半次は顔を見あはせる。)

藤枝 へえ、お嬢様のお扱ひなら、わたくし共にも決して否
やはござりませぬ。

お時 では、料簡してくれるのかえ。

半次 よろしくござりますとも...。なあ、熊。
別意も遠恨もあるわけぢやあなし、好んで喧嘩を
するでもねえ。では、お嬢様。

半次 これ御免くださいまし。
(熊蔵、半次は早々に去る。連の娘三人もついで去

(二人は顔を見あはせて嘆息す。この時境内の方さわが
しく、以前の熊蔵と半次はお時のせがれ十吉を引立て出
づ。十吉は十八九歳、農家の若者。あとよりお米、十六
七歳、村の娘にて、うろくしながら出づ。ついで以
前の娘三人も出づ。)

熊蔵 やい、この野郎。なんて俺達に突き當りやあがつたの
だ。
半次 うぬ巾着切りだらう。料簡かならねえぞ。
(ふたりは十吉を小突く。)

十吉 (おどくする。) 今この境内で連にはぐれ、うろく
探してゐるうちに、向うにばかり氣をとられて、つい粗
相をしました。どうぞ勘辨してくださいまし。

熊蔵 思だ、思だ。つい粗相で済むと思ふか。
半次 賣る喧嘩ならいつでも買つてやるから、相手になれ。
(お時はこれを見て、割つて入る。)

お時 あゝ、もし、これはわたくしの件、どんな粗相を致し
たかは知りませぬが、わたくしが代つてお詫をいたしま
す。どうぞ勘辨して遣つてくださいませ。

お米 わたくし共々におおび申します。
熊蔵 え、ばどあや阿魔つちよが口を利いたつて勘辨でき

る。)

お時 十吉、どこも怪我はなかつたかえ。

十吉 丁度よいところへお嬢様がおいで下すつたので、何事
もなく済みました。ありがたうござります。

お時 あの二人は屋敷へ出入りの職人、ふだんはおとなしい
正直者だが、花見の酒に酔つたのであらう。

お時 それでも生酔ひ本性違はずとやらで、お嬢さまのお顔
を見ましたら急におとなしくなつて歸りました。

(角助、境内より出づ。)

角助 十吉さん、そこにゐるか。實は今、境内をひとまはり
探して来たのだ。

十吉 いろく御心配をかけて相済みませんでした。

角助 なに、お禮にやあ及ばねえ。時にお嬢様、なんだかお
天氣をかしくなつて参りましたから、そろくお歸り
になつては如何でござります。

お時 番町までは路も遠い、降らぬうちに戻りませう。乳母
も十吉もひまを見て、屋敷の方へたづねて来や。

お時 はい。近いうちに必ずお屋敷へうかひます。唯今の
お話をうけたまはりましては、わたくしも心配で心配で
なりませぬ。

お雛 あ、これ、くはしいことは又その節……。
 (お雛は眼で知らせるに、お時はうなづく。お米は空を仰ぎ見る。)

お米 おも、もうぼつ／＼降つて来ました。
 十吉 大したこともあるまいが、これが梅若の涙雨だ。
 お雛 涙の雨はいづこにも……。 (空をみる。)

(この時、雨ますます降り出づるに、みな／＼忙がはしく茶店の軒下に入る。)

第二場

木母寺附近、料理茶屋の入口。舞臺の上手少しくあとへ下げて、風雅なる屋根附の門にむかし屋と記せる行燈をかけたなり。左右は青竹の垣を折りまはし、門内に櫻の立木あり。垣の外、すこしく下手へ寄りて櫻の大樹あり。

(以前の娘三人は手拭をかぶり、裳を端折りて、料理茶屋の軒下に立つ。小坊主安念は法衣、朴直の下駄。照登賣六助はかづらを掛けたる棒を持ち、いづれも濡の木の下に雨宿りをしてゐる。花見の人々濡れながら走り出で、上下へ入る。みな／＼空を見る。)

(上手より以前の節は番傘をさして出づ。)

照登 やう／＼のことで傘を一本工面して来たが、半次の奴はまだ見えねえかね。

娘一 さつきから待つてゐるんだけど、どこへ行つたか判らないんだよ。

照登 仕様がねえなあ。だが、いつまでこゝに待つてもおられめえ。あの野郎は置去りにして出掛けようぜ。お前たち三人はこれをさして行きねえ。

六助 は、三人の相傘はめづらしい。

照登 それでも丸つきり無えよりは優しだらう。

娘二 さうして、お前さんは……。 (お雛は、お前さんは……。)

照登 おれは、お雛さん、どうせ自棄だ。

六助 女の子にやあ深切だね。

照登 これてなけりやあ情緒は出来ねえ。さあ、出かけた、出かけた。

(むすめ三人は捨棄詞にて一つの傘に入り、照登は手拭をかぶりて先に立ち、みな／＼急ぎ去る。)

六助 こりやあいつまでも止みさうもねえ。(棒にかけた眼かづらを外して懐中へおし込む。仕方がねえ、濡れる、濡れる。お日和、お日和。)

娘一 熊さんや半ちゃんはどこまで行つたんだらうねえ。
 娘二 直そこまで傘を借りに行くと言つたが、まさか置去りした譯でもあるまい。

娘三 あの人のことだから何とも云へないよ。

六助 梅若の涙雨が、たうとう本降りになつて来やあがつた。おい、お小僧さん。お前はどこのお寺だえ。

安念 お寺は駒込吉祥寺でござる。

六助 え、悪く洒落れるぜ。木母寺か長命寺か。

安念 木母寺でござる。

六助 それぢやあ今日の念佛踊りに鉦をかん／＼叩いた方だね。なにしろ斯う降られちやあ此方の商賣は型なした。どうだい、お小僧さん。お前にやあ日和の御祈禱はできねえかね。

安念 御祈禱次第で、随分祈つて進めるが……。
 六助 懇張つたことを云ひなさんな。今時の坊主は油断がならねえ。

娘一 雨はだん／＼強くなるばかりで、なか／＼止みさうもないねえ。

娘二 いつそもう濡れて歸らうか。

娘三 それでももう少し待つて見ようよ。

(六助も雨のなかを走り去る。)

安念 だん／＼に人が行つてしまふので、なんだか寂しうなつた。どれ、おしも濡れて行かうか。

(安念はあたりを見まはしてゐる。奥の料理茶屋にて唄ふこゝろにて、端唄模様の獨吟になる。)

唄へあづま路に、あはれを殘す梅若の、雨をなみだと誰が云ひし、戀のあはれは虎が雨。

安念 こゝの茶屋でも何か面白さうに唄うてゐるな。浮世の凡夫が花に浮かれて、は、馬鹿なことぢや。色即是空……南無阿彌陀佛。なむ阿彌陀佛。

(安念も去る。時の鐘、薄く雨の音きこゆ。)

唄へふりし昔の大藏も、江戸の廊のよし原も、ながれは同じ隅田川、ちり浮く花を友として、つがひ離れぬ都鳥。

(門の内より藤枝外記、廿五歳の武士。大葉屋綾衣、廿一二歳の遊女。むさしやと記せる貸傘を相傘にして出づ。あとより新造綾鶴出づ。)

唄 梅に雨も小降りになつたやうでござんすな。
 外記 花時の天氣憐だ。やがて晴れるであらう。
 綾衣 今鳴つたのは七つでござんせうな。

外記 廊の門限は七つ半。今から歸つたら遅くもあるまい。迎ひの駕籠はまだ見えぬか。
親衣 左もない病氣を云ひたてに、お醫者へ行くところらへて、廊を出たのは今日の午ごろ。こゝで主と落ち合せて、花をみながら半日をほんに面白く暮したので、今さら廊へ歸るのは……

外記 思だといふのか。熱をいへば限りがない。わしもあとから行くほどに……

親衣 きつと来てくださんすか。

親衣 主にかぎつて嘘はござんすまい。話の残りは今夜ゆつくり……

親衣 必ずあとから来てくださんせ。

外記 む。唄へ波のまに／＼吹き分けられて、翼も寒き春のゆふ風。
(駕籠犬四人は駕籠二挺なかつぎて出づ。)

親衣 へえ、お待遠さまでございました。

外記 おう、よい、よい。三人連れ立つては人目もある。わしは一足おくれで行けば、お前達ふたりは先へ歸れ。親衣では、待つてゐますぞえ。

りをしておいでなされませう。

外記 こゝで私に逢つたことを、妹に云ふなよ。

十吉 はい。

外記 誰にも云ふなよ。
(云ひすて、外記は門内に入る。十吉は合點のゆかぬ體にて、しばらくあとを見送る。お米もおつ／＼門内をうかゞふ。茶屋の奥にて唄の聲きこゆ。)

幕

第二幕

第一場

龜町番町、藤枝外記(五百石の旗本)の屋敷。
二重家體にて、床の間に鏡櫃を飾り、ついでに
遮り欄、鏡の庭には飛石、石燈籠、立木。下の
かたに枝折戸あり。

(七月十三日の午後。若侍二人、一人は花袋を持ち、一人は如雨露を持ち、枝折戸のそばに立ち、四目垣にからみたる朝顔に水をやつてゐる。)

侍甲 盆になつても、日中は陰分暑いな。

親衣 だますと堪忍しませぬぞ。

(外記 笑ひながら首肯く。親衣と綾鶴は駕籠に乗りてゆく。雨の音しめやかに、櫻の花ばら／＼と散りかゝる。外記は傘をさして見送る。綾衣は駕籠の垂簾をあげて、見返る。)

親衣 六つ半までには乾度でござんすぞ。

(外記は矢はり笑ひながらうなづく。駕籠は遠く走り去る。)

外記 春雨に濡れてゆく女の駕籠に、花のふよきの散りかゝるは、靈にあるやうな風情たなう。

(外記はうつとりしていつまでも見送る。下のかたより以前の十吉、跣足にて番傘二本をかゝへ、お米と相傘にて走り出づ。)

十吉 殿様ではござりませぬか。

外記 おう、十吉。どこへ行く。

十吉 おふくろと一緒に梅若へ参詣に來ましたら、丁度お顔様にお目にかゝりました。

外記 なに、妹に逢つた……

十吉 はい。そのうちにこの俄雨で、堤下の親類まで傘を借りに行つてまゐりました。お顔様は梅若の茶店で、雨宿り併しこの朝顔ばかりは、日中に水をやらねばなるまい。

侍甲 墓もおひ／＼に伸びて來たから、花もやがて末だらうよ。

(中間角助は文を持ちて出づ。)

侍甲 おう、角助。貴様は晝前から些とも影を見せなかつたが、今まで何處をうろつてゐたのだ。

侍乙 貴様はこのごろ兎かく横着でよろしくないぞ。

角助 いえ、決して横着といふわけぢやあねえ。殿様のお使で遠くまで行つて來たので……(汗をふく)いや、どうも暑いことだ。

(奥より用人堀部三左衛門、五十餘歳、出づ。)

三左 これ、角助。殿様のお使でどちらへ参つた。

角助 へえ。(もじ／＼してゐる。)

三左 この三左衛門に沙汰無してまゐるとは……(角助の顔を見詰めて)さあお使の出さきを確と申せ。隠すと其分には差置かぬぞ。

角助 へえ、實は其……

三左 一體、貴様の手に持つてゐるのは何だ。
(角助はあわてゝ文をふところ、三左衛門は隠さうとする。三左衛門)

第二幕

第一場

龜町番町、藤枝外記(五百石の旗本)の屋敷。
二重家體にて、床の間に鏡櫃を飾り、ついでに
遮り欄、鏡の庭には飛石、石燈籠、立木。下の
かたに枝折戸あり。

(七月十三日の午後。若侍二人、一人は花袋を持ち、一人は如雨露を持ち、枝折戸のそばに立ち、四目垣にからみたる朝顔に水をやつてゐる。)

侍甲 盆になつても、日中は陰分暑いな。

門は若侍を見かへりて眼で知らずれば、甲乙二人は心得て立ちかゝり、無理に角助の文を奪ひて、三左衛門に渡す。

三左 上書は女文字で練まるる。むむ。(うなづく)これ、角助。私がこれまでたび／＼申聞かせて置いたを忘れたか。たとひ殿様の仰せでも、吉原などへお使にまゐるかと相成らぬと、堅く申渡してあるに、さりとて不届極の奴、貴様のごとき者が當お屋敷に居つては、殿様のお身持も直るまい。今日かぎり長の暇をつかはすから、左様心得ろ。

角助 え、お暇になるのでございますか。
三左 勿論のことだ。早く出て行け。
角助 こりやお飛んでもねえことになつたな。(弱つてゐる)
(奥より外記の妹お縫出づ。)
お縫 三左衛門、待ちや。角助には少し聞きたいことがある。(若侍等を見かへる)お前達は部屋へ。
甲乙 はあ。(會釋して去る)
三左 (苦り切つて) 殿様。かやうな者にお詞をおかけ遊ばすな。
お縫 でも、聞いて置きたいことがある。(角助にむかひ)こ

角助 へい。殿様はその花魁一點張り、また女の方でも殿さま一點張り、ほかの客は振向いても見ないといふ遊上方で、廊内では大評判でございます。併しあのくらの女に首つたけ惚れられるといふのは男冥利で、殿様もよくよく好い月日の下にお生れなすつたのでございませう。實にお羨ましいことと……

三左 たはけめ、云はして置けばさま／＼の懸語を申す。殿様、もうおやめなされませ。
お縫 まあ、待ちや。それほど噂を立てられては、綾衣とやらも豫業はなるまいに、今も相變らず勤めてゐるのかえ。角助 さあ、さういふわけでございますから、ほかの客は寄り附かず、自然女の方にも借金は殖える、殿さまの方にも御無理が出来るといふやうな理窟で、語り語つた擧句の果、實を申せば……(摺寄つて聲をひくめ)花魁は先月の晦日に店をかけた出して、箕輪の御乳母さんのところへ……

お縫 なに、綾衣は吉原をぬけ出して、箕輪の乳母のところへ隠れてゐるとか。
三左 それはいよ／＼以ての外。年來御恩をきて居りながら、かやうな時に御意見のひと言も申上げることか、却て証

れ、近う来や。けふかぎり長の暇になつても、お前はなんとも思ひませぬか。

角助 なんとも思はぬどころぢやございませぬ。實に大弱りでございます。以後は屹と慎みますから、今度のところだけは御勘辨を……。なにぶんお願ひ申します。
お縫 詫びるならば、勘辨してもあげようが、その代りにわたしは今たづねることを包み隠さずに云ひますか。
角助 へい、へい。もう斯うなれば一から十まで、なんでも根こそぎ申上げます。

お縫 お兄様が三年越し馴染んでおいてなさる吉原の遊女、大菱屋の綾衣とかいふのは何のやうな女子かえ。
角助 わたくしも度々お供をして存じて居りますが、その綾衣といふ花魁は實に豪勢なものでございませぬ。年のころは廿一二、容貌はよし、姿は好し、氣前はよし、なにしろ入山形に二つ星の仲の町張り……。あなた方は御承知でございますまいが、一體仲の町張りとお申しますと……。
三左 え、詰らぬことをべら／＼饒舌るな。おたづねのことだけを手みじかに申上げればよいのだ。
お縫 して、お兄様はその綾衣のところへばかりお通ひなさるのか。

落の女を隠まふなどは、言語道断、憎い奴。手前これより箕輪へまかり越して、乳母めをきびしく折檻し、一刻も早くその女を追ひ拂はねば、殿様お爲に相成りませぬ。角助、案内いたせ。
(三左衛門は押取刀にて起たんとするを、お縫は止めらる。)

お縫 はて、急ぐには及ばぬ。さう事が判つたからは、市ヶ谷の叔父様とも御相談して、また分別の仕様もあらう。三左 なるほど。市ヶ谷の殿様にも豫て御心配をねがつて居れますれば、一應御相談をいたした方がよろしいかも知れません。では、角助、もうよいから、行け、行け。
角助 へい、へい。もう御用はございませぬか。
お縫 部屋へさがつて休息したがいよ。

角助 へい、へい。
(角助はほつとして立去る。あとに二人は顔を見合せらる。)

三左 嬢様。いよ／＼事面倒に相成りましたな。
お縫 ほんに困つたもの。お兄様がそれほどに御執心なら、また取計ひの仕様もあらうけれど、なにをいふにも相手が勤めの女ではなう。

三左 左様でござりますとも……町人でも筋目正しい家では、吉原の女子などは門端も踏ませませぬ。まして天下の御旗本が、くらべにもならぬ御身分違ひ、とても、とても。(頭をふる。)

お龍 さあ、あまり身分が違ふので、たとひわたし達は承知しても親類大勢が承知しませぬ。

三左 よし又、御親類が承知なされても、世間一統が承知しませぬ。第一にお家の汚れ、御先祖様へ相済みませぬ。(お籠も思案にくれてゐる。奥より藤枝外記出づ。)

お龍 おも、お兄様……

外記 角助はまだ戻らぬか。

お龍 え。(三左衛門の顔をみる。)

三左 角助は唯今戻りました。

外記 おも、戻つたか。定めて返事を持参したであらう。これへ出せ。これへ出せ。

三左 いえ、これは差上げられませぬ。

外記 なに、渡されぬ……

三左 かやうなものを御籠に入れては、お前さまお爲に相成りませぬ。(三左衛門は先刻の文を取つてすた／＼に引裂き捨つ。)

外記は赫となりしが、また思ひ返して冷笑ふ。

外記 さて／＼そちらは忠義者だ。文の通ひ路に關を握るても、こゝろと心との通ひ路は塞がれまい。貴様達の小才覚で、燃える火を消さうとするのは、あれ、あの庭の燒石に如雨露の水をそぐやうなものだ。止せ、よせ。時に三左衛門、すこしく金子入用だが、知行所から取り立つる工夫はないか。

三左 いかにか御自分の御知行所でも、定めほかに無體の御用金など怪しからぬ儀でござります。

外記 では、藏の中から不用の鎧かぶと太刀など持出して、賣拂つてはどうだ。

三左 鎧、兜、太刀などは武士の表道具、まして御先祖傳來の大切な品々、おまへ様の御自由には相成りませぬ。

(三左衛門頷として應ぜず。外記はい／＼物然として、床にかざりし鎧櫃より一領の卯花縁の鎧を取り出して來る。)

外記 これ、三左衛門。わしが今この鎧を持ち出して、勝手に賣拂つたらなんとする。

三左 いえ、唯今も申す通り、おまへ様のお持物でも、お前様御勝手に相成りませぬ。御先祖様が慶長元和度々の

戰場に、敵の血を灑いだるその鎧、申さばお身にもかへがたき寶、藤枝五百石のお家はその鎧と太刀の功名故でござりまするぞ。

お龍 今あらためて申さずとも、鎧刀は武士のたましひといふことを御存じないか。いかにお心が狂へばとて、重代の寶をむざ／＼手放さうとは、あまりにお情なう存じませぬ。

外記 慶長元和の血なまぐさい世の中と、太平百餘年の今日とは、世もちがへば人の心もちがふぞ。鎧刀を武士の魂などと、自慢した時代はもう過ぎた。わしも以前は

武藝に凝り固まつて、やれ劍術の柔術のと、油汗をながして苦んだものだが、今更おもへば馬鹿であつた。歴々の武士が竹刀の持樣も知らず、弓の引樣も知らず、武藝よりも遊藝に身をいれて、小唄や三味線の稽古に餘念もない。それでも立派にお役をつとめて、家繁昌する世のなかに、なんの用もない鎧刀、五月人形の飾り具足や萬蒲刀も同様だ。家重代の寶でも、好い値に引取るものがあれば、なん時でも賣放すぞ。

(鎧を投げ出せば、二人はあきれて顔を見あはせる。)

三左 いかにも此頃の御旗本御家人が、武藝をすて、遊藝に

耽り、次第に懦弱に洗れまするは、なげかはしい儀でござりまするが、他は他、われは我、さやうな徒にはおかまひなく、お前様は飽までも御先祖以來の御家風によつて……

外記 え、くどい。野暮を申すな。先祖の講釋も聞き飽きたぞ。(顔をそむけて取合はぬに、兩人はたゞ嘆息のほか無し。奥より先刻の若侍一人出づ。)

侍甲 申上げます。

外記 なんだ。

侍甲 市ヶ谷の殿様お越しにござります。

お龍 おも、叔父様がお見えなされたか。

三左 すぐにこれへお通し申せ。

(二人は好いところへ叔父が来てくれたと喜ぶ。外記は顔をしかめる。)

外記 いや、叔父に逢ふも面倒……。外記今日は所勞でござるとお断り申せ。

三左 いや、いや、餘人とは違つて市ヶ谷の殿様、お逢ひなさらねば濟みますまい。

外記 え、かまはぬ。逢へぬと云へ。

いえ、いえ、さうはなりません。い。 (たがひに争ふうちに外記の叔父吉田五郎三郎、四十前後、おなじく旗本。袴、羽織にて奥より出づ。かくと見るより、お終はあわて、纏片附ける。)

三五 これは、これは、お出迎へも致しません。...

五郎 いや、いや、始終出入りをする屋敷だ。案内も待たずに通つて来た。

お終 叔父様、ようおいでなされました。

五郎 きびしい残暑だ。一同變ることもないか。

お終 はい。

三五 これ、早うお茶の支度いたせ。

侍 甲はあ。(引返して去る。)

外記 その後ほまことに御無沙汰をいたして居ります。

五郎 御用が忙がしければ自然無沙汰になる、それはお互ひのことだ。おしもこの間は御用繁多であつたが、幸ひ今日は非番。と申して、屋敷にたゞ子然として居つても退屈だから、久振りて一勝負しようかと、この暑いのに出かけてまゐつた。どうだ、外記。このごろは少し強くなつたかな。三左衛門、盤を持て。

三五 はあ。

(三左衛門は起つて、違ひ御より碁盤を持出づ。外記は氣のすまぬ顔。)

外記 わたくしは此頃しばらく盤にむかひませぬので、とても叔父様の御相手は出来ませぬ。どうか今日は御免を...

五郎 む、見れば顔色もよくないやうだが、氣分でもすぐれぬか。

外記 別に海氣と申すでもござりませんが...

五郎 病氣でなくば一局まゐれ。却つて暑さを忘るゝものだ。(盤にむかひて石を取る。外記もよんどころなしに石を取る。)

お終では、お詞にしたがひまして。

三五 暫時お次へさがります。

(お終と三左衛門は會釋して奥に入る。)

五郎 さあ、ほかに人も居らぬ。ゆる／＼と勝負せうか。

(二人は盤にむかひて石を打つ。)

五郎 これ、なにをうかく致して居る。身にしみて打たねば面白くないぞ。

外記 はあ。

五郎 これは大分暑くなつてまゐつた。

(羽織をぬいで又打つ。外記もはじめは氣の乗らぬ體なりしが、しだいに釣込まれて打つ。)

外記 (やがてあわたしく) や、叔父様。それでは違ひます。

五郎 なにが違ふ...

外記 お前様のこの石はもう死んで居ります。

五郎 馬鹿を申せ。なんでこれが死ぬものか。

外記 でも、これは...

五郎 え、卑怯なことを申すな。

外記 負腹を立つおまへ様こそ、近頃御車伝てござりますぞ。(あざ笑ふ。)

五郎 やあ、卑怯とはなにが卑怯...。今の一言聞き捨てならぬぞ。これ、この石はかう切つたのだ。

(五郎三郎は不意に傍におきたる刀を取つて、ぬき聲に斬りつける。外記は身をかはして碁石をうち付ける。五郎三郎透さず斬り込むを、外記は二三度振りくゞり、碁

盤をくつて受止むる。お終と三左衛門は奥より走り出づ。)

お終 これはまあ何うなされたのでござります。

三五 先づ／＼お終まり下さりませ。

(二人は割つて入る。)

外記 いや、騒ぐには及ばぬ。叔父さまが負腹を立たれたのだ。叔父様が内輪同士の勝負に、一目二目のあらそひから、理不盡の双傷沙汰は、日ごろの叔父様にも似合はぬこと。兎かくに賭事勝負ごとは人を氣狂ひにするものだから。

五郎 これ、外記。賭事勝負ごとは人を氣ちがひにするの知りながら、遊女ぐるひは人を氣狂ひにするとは氣がつかぬか。よし原がよひに現をぬかして、三年越しの身持放埒、この叔父が陰になりひなたになり、隠しても庇つてももう及ばぬ。すでに舊多は小普請入り仰せつけられ、すこしは眼も醒むるかと思ひの外、ます／＼亂行暴る趣、頭支配の耳にも入つて、ひと問住居を申付けらるるか、あるひは甲府勝手をいひ渡されうも知れぬと、組中ても専ら噂する。かくては家の恥、親類縁者の恥、所詮このまゝには捨ておかれぬ奴。覆碁の争ひにことよせ

て、たゞ一刀に斬つて捨て、表向きは頓死と披露して、妹に然るべき婿をとれば、世間に恥もあらはれず、藤枝の家に疵もつくまい。

お母では、叔父様は最初から巧んだ事でござりましたか。五郎おゝ、はじめから仕組んだ今の口論。分別ざかりの武士が理不盡の刃物三昧、おとなげないと思ふなよ。覺悟はして来ても、人のこゝろは弱いもの、現在の物を切らうとする腕は鈍つて、撃ち損じたが残念だわえ。さあ、外記、この上は詰腹……。尋常に切腹いたせ。叔父が介錯してやるぞ。

外記 お詞ではござりますが、外記は命が惜うござります。御手討も切腹もまつびら御免……。

五郎 なに、命が惜いと……。かへすくも卑怯な奴……。その儀ならば……。 (また抜きかゝるを、お縫と三左衛門は遮る。)

お母 叔父様が日ごろの御氣質では、御無理もないこととござりますが、たとひ座敷牢でも甲府詰でも、お命にさへ障りがなければ、また御出世の時節がないとも限りませんまい。

三左 爺様のおつしやる通り、お家のおためとは申しながら、

甥の殿をむざ／＼御手討の詰腹のとは、憚りながら餘りにむごい御沙汰。この儀ばかりは三左衛門、いくへにも御勘辨をねがひ上げます。(更に外記にむかひて。)もし、殿様。叔父さまが今のおことばを、なんとお聞きなされました。先刻も御自分で仰せられました通り、御幼少の時から武藝がお好きで、弓馬勦術柔術まで皆それぞれに免許のお腕前、現に今も叔父様が不意討の切先を見ごと受止めたほどではござりませぬか。その武藝をお役に立て、神妙に御奉公あそばせば、御出世は眼のあたりでござりませうぞ。

お母 それには心を入れ替へて、よし原の女子のことなどふつゝ、思ひ切つてくださりませ。

(外記答へす。)

五郎 お縫も三左衛門も兎かう申すな。下世話にいふ馬の耳に念佛、なにを云つても無駄なことだぞ。

お母 でもござりませうが、今日のところは何分御勘辨をねがひます。

三左 穩便の御沙汰をおねがひ申します。五郎 其方違がそれほどに申すならば、けふはこのまゝ立歸らうが、この後も改心せぬに於ては藤枝の家には代へら

れぬ。きつと仕置をせねばならぬぞ。外記、すこしでも武士の性根があらば、よく分別してみろ。

(五郎三郎は起ちあがる。お縫はうしろより羽織を被せらる。)

五郎 (羽織の紐をむすびながら。) 慶長元和の合戦には、武名をあげたる藤枝の家も、太平二百年の後にはかゝる腰ぬけを産み出して、三河武士の血も次第に濁れてゆくは、人の罪か、世の罪か。(お縫等と顔を見あはせる。實に残念な儀だなう。)

(嘆息しつゝ奥に入る。お縫と三左衛門は送りてゆく。)

外記 命が惜いと申したら、むかし氣質の叔父様は、ひとかたならぬ御立腹であつたが、家の爲や親類縁者のために、命を捨てるといふのは無理な註文。自分の命は自分のもの、人のためになんて死なうぞ。外記の命も自分の爲なら、なん時でも見事に捨て、見せるわ。

第二場

藤枝屋敷の門前。正面は屋根つきの門。左右は

板羽目にて、武家の長屋窓あり。

(燈籠屋は盆燈籠の荷をおろして、駒寄の石に腰をかけ、水屋は障子屋根の屋臺を卸して立つ。)

燈籠屋 どうてすね、水屋さん。かう暑くつちやあ前さんなぞは大當りだらうね。

水屋 いや、なか／＼さうは行きませんよ。それに此邊は堀井戸が多いから、水屋は一向御用なしさ。

燈籠屋 わたしの商賣なんぞも、けふを過ぎちやあ、もうおしまひだ。なにしろ障子は壽命が短いからねえ。

水屋 おたがひに樂は出来ませんよ。日の暮れないうちに、もう些と廻つて来ませう。

燈籠屋 まあお様ごなさい。

(兩人は挨拶して荷をかつぐ。)

水屋 さあ、さあ、水あがらんか。汲立あがらんか。冷っこい。

燈籠屋 燈籠や……。燈籠……。 (たがひに呼びながら左右に別れゆく。門内より吉田五郎三郎は草履取一人をつれて出づ。お縫と三左衛門は送り出づ。)

五郎 唯今も申聞かせた通りの次第であれば、外記の身に就

てはそち達もよく氣をつけねばならぬぞ。魂のぬけた奴、どのやうな曲事を仕出さうも知れぬ。もし思察に能はぬことあらば、早速に私まで知らせてまるれ。よいか。

三左 委細心得てござります。

お目この上にも何分よろしく願ひます。

五郎 五郎。おのれの心ひとつて、一家一門家來にまで苦勞をかける。困つた奴だ。

(五郎三郎は草履取をつれて去る。お籠等はあとを見送る。ゆふ鳥の聲。門内より外記は稚子、羽織にて出づ。斯くと見るよりお籠と三左衛門は左右に立竝がる。)

お籠 お兄様。どこへお出てなされます。

外記 どこへ行かうと餘計な詮議だ。

三左 叔父様の御意見がまだおわかりにはなりませんか。先づ當分は御謹慎……。(外記の袂をとらへる。)

外記 (蛇となる。) 謹慎とは誰の指圖だ。おれはおれの料簡次第で、どこへでも勝手に行くぞ。

三五え。

外記 馬鹿め。

(云ひ捨て、つか／＼行かんとす。お籠はその袂に絶り

とむるを、外記はまた涙切つて足早に去る。お籠と三左衛門は顔を見あはせて嘆息す。以前の燈籠が引返し再びゆき過ぐ。ゆふ鳥の聲悲し。)

幕

第三幕

第一場

箕輪在の農家。藁ぶき屋根、竹藪の二重家並にて、上のかた佛壇、その下に押入れあり。ついで破れたる障子、破れたる壁、上のかたの竹窓の外は蓮池にて、庭より奥へかけて一面に紅白の蓮の花さけり。下のかたには丸太の門口、そとには柳の大樹立てり。田畑をへたて、吉原の廓遠くみゆ。

(おなじく七月十三日の午後、佛壇には精霊棚をしつらへ、軒には大いなる切子燈籠をかけたなり。一人の僧は佛壇の前に坐して經を讀む。この家の母お時は下のかたに坐して蚊いぶしを扇ぎある。いづこよりとも知らず、題目太鼓の音きれ／＼にきこゆ。僧は經を讀み終り

て、こなたへ向き直る。)

僧 御門向御齊みました。

お時 ありがたうござりました。當年はきつい種番でござりますな。

僧 今日朝から湯島神田下谷淺草の檀家を七八軒、それから廊を五六軒まはつて來ましたが、なか／＼暑いことござつた。

お時 殊にこの邊は空間でも藪蚊が多いので、なほ／＼困り切ります。

(お時は蚊いぶしを扇ぐ。奥よりお時のせがれ十吉は盆に土瓶と茶碗をのせて出づ。)

十吉 和尚様、お茶を一つおあがりなさいまし。

僧 いやもうお構ひくださるな。十吉どのもいつの間にか立派な若い衆になられましたなう。

お時 昨年親父がなくなりましてからは、これ一人が柱柱でござります。

僧 いや、いや、もう御安心ちや。十吉どの、そのうちに私がよい線御をお世話しませうぞ。

お時 はい、その線は……。 (云ひかけるを、十吉はきまり悪き顔にて、云ふなと

制す。)

僧 では、もうきまつてござるのか。は／＼／＼。それならば猶々御安心ちや。いや、これは飛んだ長話。どれお暇いたさうか。

お時 まことにお恥かしうござりますが……。盆に乗せたる布施のつゝみを出す。)

僧 折角のおこころざし頂戴します。 (僧は布施をとりて懐中し、下駄をはきながら、上のかたを見かへる。)

お時 お、蓮が見事に開きましたな。いつもながら此邊は閑静で好うござるなう。

僧 お寺の御近所にくらべますと、こゝらはまるで田舎でござります。

僧 いや、田舎が結構ちや。では、御免ください。

二人 ありがたうござりました。 (僧は挨拶して去る。母子はあとを見送る。)

お時 いつも氣難な和尚様だなう。 十吉 あの蓮の花を大層褒めてゐなされたから、後にお寺まありに行くときに、折つて行つてあげようか。

お時 お、それがよい、それがよい。

(母子は話しながらあたりを片附ける。近所の娘子供大勢が手をひかれて出づ。)

唄へぼん／＼盆はけふ明日ばかり、あしたは嫁のしをれ草。

(子供等は盆唄をうたひながら行き過ぎる。お時は表をみる。)

お時 盆踊はこのごろ廢つたが、唄は相變らず賑かいなう。

十吉 朝からのべつに唄つてゐるやうだね。

(子供等の唄の聲遠くきこゆ。)

唄へ君と寝やろか、五千石取ろか。なんの五千石、君と寝よ。

十吉 又あんな唄をうたつてゐる。もう好加減によせば可いに……。わしはあれを聴く度になんだかひやくしてならぬ。はじめは靡で唄ひ出したのださうだが、今ではこころ一面に流行つて来た。

お時 こゝらでは幾ら流行つても梅はぬが、お江戸のまんなかへだん／＼に擴まつたら、殿様の御身分にもかゝはること。あんな流行唄は早くやめて貰ひたいものだ。(嘆息して)お、やがて日がくれる。どれ、行水の湯でも沸して置かうか。これ、十吉。その蚊いぶしを斷やさぬや

うに氣をつけておくれよ。

十吉 あい、あい。

(お時は奥に入る。蛙の聲きこゆ。十吉は蚊いぶしを編ぐ。村の娘お米、浴衣にて出で、内を窺ひてつか／＼入り来る。)

お米 十さん。

十吉 お、お米さんか。

お米 おふくろさんは……。

十吉 おふくろは奥にゐるが、なんぞ用かえ。

お米 いえ、おふくろさんよりもお前に聞きたいことがあつて……。

十吉 あらたまつて私に聞きたい事は……。お米 ほかでもないが、この頃お前の家に来てゐる美しい女人、あれはお前のお嫁さんかえ。

十吉 飛んでもないことを……。奥を見かへる。あれはそんな人ではない。第一にわしとは年が違ふものを……。お米 年が違つとて、年上の女房を持つ人も、世間には澤山ある。ましてあのやうな美しい人だもの……。

十吉 それはお前の邪推といふもの。あのお人はよんどころない譯があつて、さるお方からあづかつてゐるのだ。

お米 ええ、いえ、それは嘘であらう。わたしをだまして何時の間にかあんな美しい嫁御を買つたに相違ない。(泣く。)

十吉 (迷惑する。)

お前とわしとは、表向きに祝言こそせぬけれど、兩方の親たちも承知の上で、末は夫婦ときまつてゐる仲だ。なんてほかの嫁などを貰ふものか。積つてみても知れたことではないか。

お米 それならあれは何ういふ人で、どこの誰からあづかつたか、はつきり云つて聞かして下さい。(詰寄る。)

十吉 さあ、其人は……。奥を憚る。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

お米 それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)

ある通り、家のおふくろがむかし御奉公をした番町の御屋敷の殿様のおたのみで、この間からおあづかり申してある此のお人、わしの嫁などとは思ひも寄らぬことだ。お米（やう／＼涙をぬぐふ。）そんならさうと最初から明してくれれば、わたしも心配はしまいものを、隠さるゝほど疑ふは女の習い……。綾衣にむかひ。）もしおまへ様、勘忍してくださりませ。

お米 なのは託ることがあらう。うたがひが晴れたらわたしも嬉しい。お前さんは十さんと約束がある様子、おたがひに仲よく暮しなさんせ。

お米 はい。（恥かしげに俯向く。綾衣はふたりの顔をちつと見くらへる。）

綾衣 おまへさん達は談ましい。たとひ願書屋根の下で、人に知られず一生を送つても、好いた同士が添ひとぐれば、世に生きてゐる甲斐がある。賣りものに花の綺羅をかざり、松の位の君達と、世に全盛をうたはれても、その身の果はなんとならう。人には運不運があるものでござんすな。（二人はその意を解し登れて顔を見あはせてゐる。奥より）

お米 行つてまゐります。

お時 歸りには日が暮れるであらう。氣をつけて来るが可いぞ。

綾衣 あのとを見送る。（十吉は蓮の花を持ち、お米と連立ちて出でゆく。綾衣はあつたを見送る。）

綾衣 あのと見送る。（十吉は蓮の花を持ち、お米と連立ちて出でゆく。綾衣はあつたを見送る。）

綾衣 それは又あらたまつて何でござんすえ。（綾衣は竹縁の端に置きたる手籠に蓮の花をばきみて、座にかへる。）

お時 お前様とはまだ昨今のおなじみで、委しいお話もしませななだが、わたくしはその昔番町のお屋敷に御奉公して、藤枝の殿様にはお乳をあげた者、その御縁で今日まで相變らずお出入をするうちに、三年前から殿様とおまへ様とは深い仲、語り語つて廊をぬけ出し、差當りはわたくしの家に隠まつてくれとお頼みで、この月はじめからお世話いたして居りますが、それがために殿様のお身に難儀のかゝることを、お前さまは御存じか。

りお時出づ。お時これ、十吉。聞くならぬうちに、お寺へお迎ひに行つてはどうだの。

綾衣 ほんにけふはお盆の十三日……。考へて。お寺はどこでござんすえ。

十吉 上野の傍ですから、さのみ遠くもございませぬ。お米 わたしも一緒に行きませうか。

お時 では、わたしの代りに来んで来てくだされ。（十吉は池のほとりへ行き、花を折り取る。）

十吉 阿母さんこのくらゐでよからうか。お時 お、それでよからう。もつと御入用だとおつしやつたら、又持つて行つてあげるが可い。

綾衣 頼りながらわたしにも其花を序に折つてくださんせぬか。

十吉 あい、あい。（十吉は白蓮の花四五本を折りて綾衣にわたせば、綾衣は會釋して手に取る。）

綾衣 花のなかでも白蓮は、氣高い美しい花でござんすな。（つく／＼眺めてゐる。）

十吉 では、阿母さん。

綾衣 それは疾うから知つてゐます。藤通ひが度かさなつて、自然お上の首尾をそこね、小普請入りを仰せ付けられたと、いつそや主からも聞きました。

お時 さあ、その小普請入りは去年の暮、それでも行跡が直らぬとあつて、親類縁者の方々が御相談の上で近々に座敷牢とかいふ噂。その矢先へ今度のことがきこえたら、どのやうな大事が出来しようかと、それが案じられて此頃は、夜の目も碌に合はぬくらゐ……。なにをいふにも五百石のお家にかゝはること……。おまへ様、察してくだされ。涙を含みて置き口説く。）

綾衣 では、わたしがいつまでも付き纏うては、主の難儀となるによつて、切れてくれると云はんすのか。お時 申しにくい事ではござるが、もし聞きわけて、廊へ戻つてくださればなう。

綾衣 は、ムムム。なるほどお前のこゝろでは、五百石のお家が大事であらうが、主とわたしの戀を唄うた此ごろの流行唄を、お前はなんと聞きなさんした。なんの五千石君とねよ……。五百石や千石はおはぐろ溝へ流す白粉の水もおなじこと、百萬石でも買はれぬは、藤の女のまことでござんす。

お時 申しにくい事ではござるが、もし聞きわけて、廊へ戻つてくださればなう。

(お時はあきれて其顔を見る。)
 殿女 (いよ／＼誇りがに。) それほど尊い女の誠を五百石で買つたとおもへば、廉いものではござんせぬか。おたがひに惚れたが因果、あすが日どのやうなことがあつても、わたしを恨んでくださんすな。
 お時では、殿様のお命にかゝはるやうなことがあつても……。

殿女 殿様が死ねばわたしも死ぬまでのこと、殿様が斯うなつたはわたしの爲、わたしが斯うなつたも殿様の爲、云はゞ兩方が五分五分で、秤にかけたら重い軽いはござんすまい。わたし一人が悪いやうに思はんすは、あんまり身勝手てござんせうぞ。
 (云ひまкруられてお時は取付く鳥もなく、唯うつむきて默然としてゐる。淺草寺の鐘の聲きこゆ。)

殿女 今鳴つたのは淺草の暮六つ……。おふくろさん、行水のお湯は沸きましたか。
 お時 おゝ、すつかり忘れてゐましたが、お湯は疾うに沸いてをります。殊にお前様は世をしのぶお身の上、あまり端近に長居しては……。

殿女 では、暑さを洗ふ行水に、からだを淨めて來ませうか。

ひ火を消して、おなじく内に入る。)
 お時 どうもひどい藪敷でござります。團扇にて扇ぐ。)
 外記 いや、構ふな、構ふな。(白扇をひらきて遣ひながら。)
 さて、乳母。このたびは彼女のことに就て、いろ／＼厄介に相成るなう。

お時 その御挨拶では痛み入ります。何分にもこの通りの手狭といひ、親ひとり子ひとりの無人でござりますので、一向にお世話も行きとよきませぬ。

外記 時に十吉は留守かな。
 お時 はい。夕方からお寺まゐりに出ましてござります。外記 先度まるつた節にも生憎留守、兎角にかけ違つてしばらく違はぬが、別に變つたこともないか。

お時 おかけさまで達者で居ります。
 外記 それは重疊。十吉とわしとは乳兄弟、達者と聞けば嬉しいぞ。

お時 ありがたうござります。
 (奥より綾衣、行水をつかひて夕化粧美しく、衣服も着かへて出て、嬉しげに外記のそばに坐る。)
 綾衣 よく來ておくんなんしたね。ほ／＼／＼。隠さうとしても廊の訛りがつい出てならぬ。堪忍してくださいませ。

(綾衣は起つて奥に入る。)

お時 よし原の花魁といふものは、さて／＼構高て意地の強いもの。今のおそろしい劍幕では、いくら妾が氣を揉んでも、殿さまと手を切つて、廊へ歸るなどは思ひもよらぬ。あゝ、困つたものだなう。(思案に暮れつゝ表をみる。)
 おゝ、いつの間にか日が暮れた。どれ、お迎ひ火でも焚きませうか。

(お時は奥より焙烙に芋がらを入れたるを持ち來りて門に出で、燈をうちて迎ひ火を焚き、またその火を燈籠に移す。芋殼やうやく燃えあがれば、お時は火にむかひて拜む。蟲の聲きこゆ。藪枝外記、忍びやかに出て來り、迎ひ火の煙のなかに立つ。お時は透しみる。)
 お時 おゝ、殿様……。お召物が白いので、わたくしは幽霊かと思ひました。

外記 いや、幽霊かも知れぬよ。たましひは生きてゐても、からだは已に死んでゐる外記だ。むかひ火の煙に迷つて來た。(さびしく打笑みつゝ内に入る。)
 お時 ほかに誰も居りませぬ。御遠慮なく、さあお通り遊ばしませ。

(外記はうなづきて縁にあがる。お時は手桶の水にて迎ひませ。)

外記 いや、その廊訛りが面白いのだ。併しこゝに忍んでゐることは誰も心付くまいな。

綾衣 燈臺下暗しとやらで、こゝとは流石に氣が注かないやうてござんす。

お時 おゝ、暗くなつたのに、まだ行燈も點さずに……。唯今持つてまゐります。

(お時はその場を外す心にて奥に入る。)
 綾衣 もし、さつきの文を見て下さんしたか。

外記 いや、まだ見ぬ先に破られた。
 綾衣 破いたとは……誰が……。
 外記 家來の三左衛門めが、横合から取上げてすたく／＼に引裂いてしまつた。憎い奴めが……。

綾衣 さして大事の文ではなけれど、引裂いてしまふとはあんまりな……。では、御家來衆までが、文の通路の邪魔をするのでござんすか。

外記 おゝ、家來は勿論、をちも妹も親類一門、寄つて集つてふたりの仲を裂かうとする。四方八方みな敵だ。
 綾衣 なるほどさうてござんせうな。主はいよ／＼座敷半へ入れられるとか聞きましたか、そんなことがござんすのかえ。

外記 む、無いともかきらぬ。三年越しおまへに馴染んで、廊下の敷かさなれば、動向の首尾もよろしからず、親類共も心配して、やれ詰腹の、座敷半のと、なにか頼りに懸いてゐる。事によると、支配頭よりの沙汰として甲府詰を申渡されうも知れぬ。して、そのやうなことを誰から聞いた。

農衣 こゝのおふくろさんから聞きました。

外記 それに就て乳母はなんと云つてゐた。

農衣 心配で夜の目も碌にあはぬくらゐと……。

外記 それほどまでに心配してくるゝか。外記が七つになるまで手盥にかけ、生みの子のやうに可愛がつてくれた乳母だ。わしのよくない評判を聞いては、案じるも無理はない。しかし今更案じたとなんとならう。鬼かく世のなかは面白く暮すが得てはないか。いや、面白いと云へば、いつもは手に取るやうにきこえる廊の騒音が今夜は一向きこえぬやうだな。

農衣 主にも似合はないことを……。けふは盆の十三日、

店は休みてござんすから、三味線も鼓も聞えませうまい。

外記 なるほど今日は十三日……。先月かぎり廊へ足踏みも致さぬが、ゆうべは仲の町の草市であつたな。市は相變

らず繁昌したことであらう。

農衣 ほんにさうでござんす。主に初めて逢うたのも、一年の草市の晩でござんした。

外記 お、同役の者に誘はれて、生れて初めての吉原見物、草市で押しかへされぬ混雑のなかを、唯うろ／＼とあるいてゐると、向うから来たおまへの袖に刀の柄を引きかけて、すなりと抜けて落ちようとするのを、あわてゝ押へるそのはずみに、思はずおまへの袖までも一緒につかんで引き止めた。そのとき顔を見あはせたが、馴染の始め、戀のはじめ、縁といふものは不思議ではないか。

農衣 あの晩はいつもよりも賑かた、大門をくゞつたお武家も大勢、仲の町へ見物に出た花魁も大勢、その大勢のなかで主とわたしが、丁度たがひに行き逢うたのは、よくよく深い縁でござんせう。

外記 そのときの刀はこれだが……。わが刀を見る。鍛へは國俊、家重代……。先祖はこれて武名をあげたと、老人共からたび／＼聞かされたものだ。

農衣 ふたりに取つては結ぶの神のその刀を、わたしにもよく見せてくださいな。刀をうけ取りて鞘のまゝに打脱め。よい刀で切られたら、ひと思ひに死なれるでござん

せうな。

外記 お、鍛へのよい薬物なら、苦みも痛みもない。

農衣 切つても突いても、苦みなしに……。

外記 たゞ一思ひに死なれるのだ。

(云ひつゝ刀をこなたへ取らんとすれど、綾衣は鞘をつかんで放さず。二人は顔を見あはせて少時は阿もなし。この時、流しの新内語りが三味線を持ちて出で、この家の門に立つ。)

新内へかねて二人が取りかはず、起請書紙もみんな仇、どうで死なんす覺悟なら、三途の川もこれ此のやうに、ふたり手をとれ諸共と、なぜに云うてはくださんせぬ。

(門にてこの文句を語るうちに、外記は刀を取りてわが傍に置き、二人は黙つて唄を聴いてゐる。そのあひだに二人は云ひあはされど死なんと覺悟し、綾衣は手桶にさしたる蓮の一枝を持來り、縁に打ちつけて花を砕き、この通りに……。外記の顔をみる。外記もうなづく。奥よりお時は角行燈をさげて出づ。)

お時 手が震がつてゐますよ。

(新内語りは唄をやめて、流しを弾きつゝ去る。)

お時 今夜は廊が益休みなで、こんなところまで新内の流しが来た。(ひとりと目を云ひながら、行燈を二人のそばに置く。)

外記 これ、乳母。まことに氣の毒だが、なにか酒肴を見繕つて来てはくれまいか。

お時 はい、はい。かしこまりました。

外記 (紙入れより金を出す。では、これでよいやうに頼むぞ。)

(綾衣は取次ぎてお時にわたす。)

農衣 とんだ御苦勞でござんすな。

お時 この邊には碌な物もございませぬから、田町まで一走り行つてまゐります。

外記 急ぐにはおよばぬ。氣をつけて行け。

お時 では、留守をおたのみ申します。

(お時は奥に入る。蟲の聲しきりに聞ゆ。外記と綾衣はしばし詞もなかりしが、綾衣は起つて奥をうかゞふ。)

農衣 おふくろさんは裏口から出て行きました。

外記 お、左様か。世のなかは面白く暮すが得だと、先刻は申したが、その面白い夢も些との間で、おそかれ早かれ座敷牢か甲府勝手か、おまへとも辛い別れをせねばな

るまい。
綾衣では、いつそ死んでくださんすか。(小聲に力をこめて云ふ。)

外記 おまへも死ぬか。
綾衣 たとひどのやうに戀ひこがれても、生きて添はれる身ではなし、先月廊をぬけ出してからは、いつ何時でも死ぬ覺悟で、毎日行水に身を淨め、夕化粧の身だしなみを缺かしたことはござんせぬ。

外記 やれ、家柄の身分のと、さまざまの手拭足枷で、人を責めようとする窮屈な世の中、蜘蛛の巣にかゝつた蝶々蜻蛉もおなじこととて、命とたのむ花の露も吸はれず、羽翅をしばられて悶死、あゝなんの因果で武士の子に生れたか。冥土へゆけば家柄もなし身分もなし、武士も町人も自他平等、うるさい此世にゐるよりも優してあらうよ。
綾衣 では、けふかぎり五百石のお家を捨て、主は惜うはござんせぬか。

外記 命までも捨て、かゝつたからは、五百石の家がなんであらう。先祖が慶長元和の戦ひに、見ごと敵勢を打ち破つて、勝鬨をあげた誇りの笑顔も、外記が世間の人と闘つて、あらゆる邪魔をうち攘ひ、戀と意地とを立て通し

た最期の笑顔も、鏡に映せばおなじ顔で、勝利の満足に變りはあるまい。

綾衣 それを聞いて安心しました。主は立派なお旗本、わたしは流れの身なれども、人の命に二つはない。今このふたりが死ぬ際に、お家のことを必ず念にかけてくださんすな。

外記 はて、くどい。外記をそれほどの野暮と思ふか。先祖傳來の家をすて、冥土でふたりが新しい家を作らう。

(笑ふ。)

(大菱屋の若い者喜介出て来り、門口より内をうかがひて、更に外の方にむかつて差招けば、おなじく伊平と忠藏は駕籠夫に駕籠を吊せて出で、たがひに囁き合ひて、喜介は先づ門をあけて入る。綾衣は透し視ておどろく。)

綾衣 や、おまへは店の……。
喜介 へい。喜介がお迎ひにまゐりました。

(外記は綾衣と顔を見あはせる。)

外記 お、貴様は喜介か。なにしにまゐつた。

喜介 これは藤枝の殿様……。どうも失禮をいたしました。もし、花魁え。こゝで兎や斯うは申しません。まあ、すなほに歸つて下さい。

(綾衣答へず。)

喜介 先月の晦日にかけて出したきりで音沙汰なし、相手は大抵見當が付いてゐるものゝ、表沙汰にしたら又迷惑する人もあらう。(外記を尻目に見る。と、内證で手わけをして探してゐましたが、眼と鼻の間のこんなところに隠れてゐるようとは、今の今まで些とも知りませんでした。さあ、悪いことは云ひませんから、一緒に歸つてくださ。御内證の方へは私達からまた好いやうに取りなしてあげますから……。さあ、花魁……。

外記 いや、綾衣を連れて歸ることは罷りならぬ。

喜介 え、御不承知でございますか。

外記 いかにも外記が不承知だと立歸つて主人にさう申せ。喜介(せゝら笑ふ。)へ、子供の使ぢやございませぬ。ぢやあ、殿様。どうしても花魁を渡しちやあ下さいませんか。

外記 え、わからぬ奴だ。歸れ、歸れ。

喜介 へえ、左様でございますか。

(云ひつゝ隙をみて外記の刀を奪ひ取り、それと見かへれば、外にかくれたる伊平忠藏はかけ返みて、矢庭に綾衣の手をとらへ、無理に引立てゆかんとす。外記は立寄

つてなげ退ける。そのあひだに忠藏は綾衣を引立てて庭に降れる。外記は追はんとするを喜介は支へる。伊平も這ひ起きて外記に組みつく。駕籠夫は忠藏をたすけて、綾衣を無理に駕籠の中へ押入れんとす。外記は焦つて刀を奪ひ返し、ひき放して振りあげれば、忠藏は恐れて綾衣をうち捨て、駕籠夫は空駕籠をかつき、共に表へ逃げ去る。外記は刀をふりあげて追ひ立つれば、喜助も伊平も抜けつくゞりつ逃げまはりて、これも遂に門外へ逃げ去る。外記はあとを見送りに、門に鍵をかける。)

外記 思ひもよらぬ邪魔が這入つた。

綾衣 喜介の顔を見た時には、わたしもはつと思ひました。

外記 切つて捨つるは易けれど、それも無益の殺生と命ばかりは助けて歸した。

綾衣 一旦は追ひかへしても、わたしの居所が知れたからは又出直して来るは知れたこと……。

外記 時をうつさば乳母も歸らう。

綾衣 十さんやお米さんも戻つて来よう。(向うを見る。あふたりは生きて添はれる身の上……。

外記 死ぬのは忌か。

綾衣 なんの。ほゝゝゝ。

外記はムムム。
 (顔をみあはせて笑ふ。題目太鼓の音遠くきこゆ。)
 外記 又もや幼げのないうちに……。綾衣、來やれ。
 綾衣 あい。

(二人は縁に上がり、綾衣は座敷の隅より古びたる牛屏風をもち來りて、逆さに立てまはし、縁側の手桶より蓮の花三四本を取り來る。)

綾衣 さつき主に見せたのは、花をちらすといふ覺悟の謎、たがひに解けて斯うなるからは、ふたりが手を取つてあの世へゆき、蓮の臺に半座をわけて、千年も萬年も住む心……。これ見てくださいな。

(蓮の花をむしりて、二人の前にその花籠を雪のごとくに敷く。)

外記 成程これは蓮の臺、この世からなる極樂淨土か。いや、風流て面白い。

綾衣 して、書置の御用意は……。

外記 書置などと云ふものは、この世に未練のある徒が、亡き後を思つて愚癡をかき残すか。或はこの世に罪あるものが、詫状代りに書きのこすか、二つにひとつ。外記はこの世に未練もなく、また懺悔すべき罪もない。笑ふも

のは笑へ、諷するものは諷れ、なんとも云はしておけ。申譯めいた書置などは要らぬことだ。

綾衣 ほんに主のいふ通り、褒めようが笑はうが、それは世間の人の心まかせて、どつちでも關はぬこと。ふたりの心は二人よりほかに知る人はござんすまい。

外記 この世界は二人の世界だ。

綾衣 未來までもふたりの世界。

外記 綾衣……。

綾衣 駭様……。

(二人は顔を見あはせて打笑む。)

外記 支度いたせ。

綾衣 あい。

(外記は身づくろひして刀をぬく。綾衣は起つて佛壇に線香をそなへ、屏風を二人の前に立てまはす。淺草寺の鐘の聲。切子燈籠は夜風にゆらめく。)

第二場

同じくこの家の裏手。中央は臺所口にて細腰を垂れ、左右は板羽目、柳の立木などあり。風の音にまじりて題目太鼓の音遠くきこゆ。

(十吉とお米は足早に出づ。)
 十吉 急いでも夜道は抄取らぬものだ。併しまだ五つにはなるまい。

お米 おふくろさんが嘘ぞ待つてゐるんでござんせう。

十吉 お前の家でも案じて居よう。あいにくに曇つて暗い晩だ。

お米 來るみちくも方々の家で、おむかひ火を焚いて、盆燈籠をつけて、なんだか寂しうござんすな。

十吉 私と一緒だ。怖いことはない。

(打連れて上の方の門口へ行きしが、また出で來る。)

十吉 はて、不思議な。表の戸には鑰をかけてある。

お米 わたし達の歸りが遅いので、おふくろさんは待兼ねて、どこへか買物に行つたのではあるまいか。

十吉 大方そんなことかも知れぬ。兎もかくも裏口から這入るとしよう。眞暗だから足もとに氣をつけて……。

お米 あい、あい。

(二人は臺所口へ廻らんとする時、柳は夜風になびきて、お米の顔を打つ。これと同時に稻妻ひらめく。)

お米 あれッ……。なにやら光る物が……。 (十吉に取りつく。)

十吉 今のは稲妻であらう。秋になると毎晩光ることがある。

お米 わたしは又、人魂かと思ひました。

十吉 なに、人魂……。かういふ晩にそんな氣味の悪いことを云ふものではない。

(お時は徳利をさげ、風呂敷につゝみたる皿を持ち出て、ふたりを透しみる。)

お時 十吉ぢやないか。

十吉 お、阿母さん。

お米 どこへ行きなされた。

お時 お客様のおたのみで田町まで買物に行つて來た。

十吉 なに、お客様が……。

お時 それ、番町の……。

十吉 へ、番町の殿様かえ。

(お時は静にせよと制して、臺所口に入る。十吉とお米もつゞいて麓なく入り入る。題目太鼓の音絶えずきこゆ。)

第三場

もとの家に戻る。逆さ屏風はもとの如くに立て

冠してあり。
 お母（奥より出づ。）どうも遅くなりました。
 （云ひつゝあたりを見廻し、やがて屏風の中を覗きて、あつと驚き倒る。奥より十吉お米も走り出づ。）
 十吉 阿母さん、どうしたのだ。だしぬけに大きな聲を出して……

お米 ほんたうにびつくりしました。

お母 吃驚せずにはゐられるものか。まあ、あれを見たがよい。

（泣きながら屏風のうちを指させば、十吉等は不審ながら覗き見る。）

十吉 や、殿様が腹を切つて……

お米 花魁が喉を突いて……

十吉 こりやあ飛んだことになった。

（三人は顔を見あはせて、しばしば詞も出でず。吉田五郎三郎は中間角助に提灯を持たせて出づ。）

角助 殿様、あれでございませう。

五郎 おゝ、左様か。案内いたせ。

（角助は先に立ちて門に来る。）

角助 もし、御免なさい、御免なさい。（門をたたく。）

十吉（縁端に出る。）はい、はい。どなたでございませう。

角助 わたしだ。今朝お使ひに来た角助だ。

十吉 おゝ。角助さん。好いところへ……

（あわてゝ門をあくれば、五郎三郎は進み入る。）

五郎 これ、外記は居るか。

お母 おゝ、市ヶ谷の殿様ではござりませぬか。お情ないことになりましてござります。（屏風を指さして泣く。）

五郎 なに、外記が如何いたした。

（五郎三郎は縁をあがりて屏風のうちを覗き、はつとしたるが、更に屏風のうちに入りて、二人の死骸をあらため、再び出で来る。）

五郎 けふの晝間の一條といひ、かれが屋敷を出てし折に、合點のゆかぬ節もありしと、三左衛門の知らせに付き、

とりあへず跡を慕うてまゐつたが、よもやかゝる始末とは……武士たるものが色に迷ひ、あまつさへ見苦しき

死取を晒して、家を汚し、名を汚し、親類縁者の面にも

泥をぬる。かへすくも惜い奴め。

角助 では、もしや殿様は……

五郎 言語道断の大呆氣……遊女と相對死をいたしたわ。

角助 えゝ。

五郎 いや、かやうな者には憐れにおよばぬ。角助、まゐれ。

（五郎三郎は席を蹴つて起たとするを、お時は止める。）

お母 もし、殿様。御立腹は御もつともでござりますが、五百石のお家を捨て、かうおなり遊ばすのはよく／＼のこととござりませう。

十吉 わたくし共が差出たやうではござりますが、甥御様御不憫とおぼしめして……せめてお線香の一本も、供へてあげてくださいませ。

角助 なるほど皆さんのいふ通り、お家を捨て、お命をすて

て、覺悟をおきめなさるには、云ふにははれぬ深い仔細

もござりませう。どうか幾重にも御勘辨をねがひます。

（左右より人々に纏られて、五郎三郎もすこし猶豫ふ。

唄の聲、遠くきこゆ。）

唄 君と寝やろか、五千石とろか。

お母 あれ、あの唄をお聞きなされましたか。

五郎 むゝ。

唄 なんだの五千石、君と寝よ。

（五郎三郎は耳をかたむけて聴く。唄の聲遠く消えて、

唄の聲。）

修禪寺物語

(伊豆の修禪寺に頼家の面といふあり。作人も知れず、由来もしれず。木彫の假面にて、年を経たるま

登場人物

- 面教師夜叉王
夜叉王の娘かつら
かへての婿春彦
源左金吾頼家
下田五郎景安
金澤兵衛尉行親
修禪寺の僧
行親の家来など

第一場

伊豆の國狩野の庄、修禪寺村(今の修善寺)桂川のほとり、夜叉王の住家。
豪華の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素焼の土瓶などがけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、そのうしろは畑を隔て、塔の峰つゞきの山ま

どのにも裏められようぞ。わたしは嫌ぢや、嫌になつた。(投げ出すやうに碇を捨つ。)

かへて 貴の手業に姉妹が、年ごろ擲ちなれた紙碇を、鬼かくに飽きた、嫌になつたと、むかしに變るお前がこの頃の素振は、どうしたことぞござるか。
かつら (あざ笑ふ) いや、昔とは變らぬ。ちつとも變らぬ。わたしは昔からこのやうな事を好きではなかつた。父さまが鎌倉においでなされたら、わたし等も斯うはあるま

れぞれの分があるもの。將軍家のお側近召さるゝなどと、夢のやうな事をたのみにして、心ばかり高う打ちあがり、宋はなんとならうやら、わたしは案じられてなりませぬ。

かつら お前とわたしとは心が違ふ。妹のおまへは今年十八で、春彦といふ郎を有つた。それに引きかへて姉のおたしは、二十歳といふ今日の今まで、夫もさだめずに過したは、あたらしい生を草の家に、住み果つまいと思へばこそぢや。職人風情の妻となつて、満足して暮すおまへ等に、わたしの心はわかるまい。
(楓の婿春彦、甘餘歳、奥より出づ。)
(楓の婿春彦、甘餘歳、奥より出づ。)
桂どの。職人風情と左も卑しい者のやうに云はれたが、職人あまたあるなかにも、面教師といへば、世に恥しからぬ職であらうぞ。あらためて申すに及ばねど、おが日本開闢以來、はじめて舞樂のおもてを賜られたは、勿論なくも聖徳太子、ついで藤原淡海公、弘法大師、倉部の春日、この人々より傳へて今に至る、由緒正しき職人とは知られぬか。
かつら それは職が尊いのでない。聖徳太子や淡海公といふ、その人々が尊いのぢや。彼の人々も生業に、面作りはな

されまいが……
 春彦 生業にしては卑しいか。さりとて異なことを聞くものぢやの。この春彦が明日にもあれ、舊代の面をつくり出して、天下一の名を取つても、お身は職人風情と侮るか。かつら 云んでもないこと、天下一でも職人は職人ぢや、殿上人や弓取とは一つになるまい。
 春彦 殿上人や弓取がそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。

かつら はて、くだい。知れたことぢやに……

(柱は顔をもむけて取合はず。春彦、むつとして詰めるか、楓はあわて、押隔てる)

かへで あゝ、これ、一旦かうと云ひ出したら、飽までも云ひ募るが姉さまの氣質、逆らうては悪い。いさかひはもう止してください。

春彦 その氣質を知ればこそ、日ごろ堪忍してゐれど、あまりと云へば詞が過ぐる。女房の縁につながらりて、姉と立つれば附け上り、やゝもすれば我を輕しむる面憎さ。仕儀によつては姉とは云はさぬ。

かつら おゝ、姉と云はれずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に有つたとて、姉の見得にも手柄にもなるまい。

春彦 まだ云ふか。

(春彦は又つめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾のうちに、父の聲。)

夜叉王 えゝ、騒がしい。鎖まらぬか。

(これを聴きて春彦は泣へる。楓は起つて蒲團をまけば、伊豆の夜叉王、五十餘歳、烏帽子、筒袖、小袴にて、鑿と槌とを持ち、木彫の假面を打つてゐる。膝のあたりに木の屑など取散したり。)

春彦 由なきことを云ひ募つて、細工の御さまたげをも省みぬ不調法、なにとぞ御料簡くださりませ。

かへで これもわたしが姉様に、意見がましいことなど云うたが基。姉様も春彦どのも必ず叱つて下さりませるな。

夜叉王 おゝ、なんて叱らう、叱りはせぬ。姉様の喧嘩はまあある事ぢや。珍らしうもあるまい。時に今日ももう暮るゝぞ。秋のゆふ風が身にしみるわ。そち達は奥へ行つて夕飯の支度、燈火の用意でもせい。

二人 あい。

(柱と楓は起つて奥に入る。)

夜叉王 なう、春彦。妹とは違つて氣がさの姉ぢや。おなじ屋根の下に起き臥すれば、一年三百六十日、面白からぬ

日も多からうが、何事もわしに免じて料簡せい。あれを産んだ母親は、そのむかし、都の公家衆に奉公したものが、そだちが育ちとて氣位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなしく朽ち果るを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、おなじ胤とはいひながら、姉は母の血をうけて公家氣質、妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがへば親の愛も違つて、母は姉を愛、父は妹を愛。思ひ／＼に子どもの氣風争ひから、埒もない女喧嘩な

としたこともあつたよ。はゝゝゝゝゝ。

春彦 さう承はれば姉どのが、日ごろ職人をいやしみ嫌ひ、世にきこえたる殿上人か弓取ならては、夫に有たぬと誇らるゝも、母御の血筋をつたへし爲、血は争はれぬものでござりまするな。

夜叉王 ぢやによつて、あれが何を云はうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思はず、氣位高う生れたは、母の子なれば是非がないのぢや。

(暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈籠を持ち出て出づ。)

春彦 おゝ、取紛れて忘れてゐた。これから大仁の町まで行つて、このあひだ説べて置いた鑿と小刀をうけ取つて來

ねばなるまいか。

かへで けふはもう暮れました。いつそ明日にしなされては……

春彦 いや、いや、職人には大事の道具ぢや。一刻も早く取寄せて置かうぞ。

夜叉王 おゝ、職人はその心掛けがなうてはならぬ。更けぬ間に、ゆけ、行け。

春彦 夜とは申せど通ひなれた路、一响ほどに戻つて來まする。

(春彦は出てゆく。楓は門にたちて見送る。修禪寺の僧一人、燈籠を持って先に立ち、つゞいて源の頼家卿、廿三歳。あとより下町五郎景安、十七八歳、頼家の太刀をさゝげて出づ。)

春彦 これ、これ、將軍家の御しのびぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。

(楓ははつと平伏す。頼家主従すゝみ入れれば、夜叉王も出で迎へる。)

夜叉王 思ひもよらぬお成とて、なんの設けもござりませぬが、先づあれへお通りくださりませ。

(頼家は縁に鑿を掛ける。)

夜叉王 して、御用の趣は。問はずとも大方は察して居らう。わが面體を後のかたみに残さんと、さきに其方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經るも出来せず。幾たびか延引を申立て、今まで打過ぎしは何たることぢや。

五郎 多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝すとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは當春の初め、其後巳に半年をも過ぎたるに、いまだ献上いたさぬとは餘りの懈怠、もはや猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌さんざんぢやぞ。

頼家 予は生れついでに性急ぢや。いつまで待てど暮せど埒あかず。あまりに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はずこと無用と、予が直々に催促にまゐつた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉王 御立腹おそれ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏のお姿を彫めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用うけたまはりて巳に半年、未熟ながらも腕限り根かきりに、夜登となく打ちましても、意にかなふほどのもの一つも

申上げてゐたら、御疳癖がいよ／＼募らうほどに、こなたも職人冥利、いつの頃までと目を限つて、しかと御返事を申すがよからうぞ。

夜叉王 ぢやと云うて、出来ぬものはなう。信 なんの、こなたの腕で出来ぬことがあらう。而作師も多々あるなかで、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉まで聞えた者ぢやに：：。

夜叉王 さあ、それゆゑに出来ぬと云ふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と云へば、人にも少しは知られたもの。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を、世に残すのはいかにも無念ぢや。

頼家 なに、無念ぢやと：：。さらばいかなる祟りを受けうとも、早急には出来ぬといふか。夜叉王 恐れながら早急には：：。

頼家 ぢや、おのれ覺悟せい。(頼家 頼家、おのれ覺悟せい。御辨募りし頼家は、五郎のさし上げたる太刀を引つ取つて、あはや抜かんとす。奥より柱、走り出づ。かつら まあ、まあ、お待ちくださりませ。頼家 え、退け、のけ。かつら 先づお鎮まりくださりませ。面は唯今献上いたしま

無く、さらに打あ替へ作り替へて、心ならずも延引に延引をかさねましたる次第、なにとぞお察しく下さりませ。

頼家 え、催促の都度におなじことを：：。その申譯は聞き飽いたぞ。五郎 この上は唯だ延引とのみでは相済むまい。いつの頃までにはかならず出来するか、あらかじめ期日をさだめてお詫を申せ。

夜叉王 その期日は申上げられませぬ。左に墨をもち、右に繩を持って、面はたやすく成るものと思召すか。家をつくり、塔を組む、番匠などとは事變りて、これは生なき粗木を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正のたましひを打ち込む面作師。五體にみなる精力が、兩の腕におのづから減まる時、わがたましひは流るゝ如く彼に通ひて、はじめて面も作られます。但しその時は半月の後か、一月の後か、あるひは一年二年の後か。われながら確とはわかりませぬ。

信 これ、これ、夜叉王どの。上様は御自身も仰せらるゝごとく、至つて御性急でおはします。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めのないことばかりする。なう、父様。(夜叉王は黙して答へず。)

五郎 なに、面は巳に出来してをるか。頼家 え、おのれ。前後不揃ひのことを申立て、予をあざむかうてな。かつら いえ、いえ、嘘いつはりではござりませぬ。面はたしかに出来して居りまする。これ、父様。もうこの上は是非がござんすまい。

かへで ほんにさうぢや。ゆうべ漸く出来したと云ふあの面を、いつそ献上なされては：：。

信 それがい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜からうが、命も惜からう。出来した面があるならば、早う上様にさしあげて、御慈悲をねがふが上分別ぢやぞ。夜叉王 命が惜いか、名が惜いか、こなた衆の知つたことではない。黙つておるやれ。

頼家 さりとて、これが見てみられうか。さあ、娘御。その面を持つて来て、兎もかくも御意に入れたがよいぞ。早う、早う。

かへで あい、あい。(かへでは細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる

箱か持ち出す。桂はうけ取りて頼家の前にさぐぐ。頼家は無言にて桂の顔をうちまもり、心少しく解けたる體なり。

かつら いつはりならぬ證據、これ御覽くださりませ。

頼家は假面を取りて打ながめ、思はず感歎の聲をあげる。

頼家 おい、見事ぢや。よう打つたぞ。

五郎 上様おん顔に生寫しぢや。

頼家 むむ。(飽かす打成る。)

頼家 さればこそ云はぬことか。それほどの物が出来してゐながら、兎かう遊つて居られたは、夜叉王どのも氣の知れぬ男ぢや。はむむむ。

夜叉王 (形をあらためる。何分にもわが心になはぬ細工、人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面をなんと御覽なされませぬ。)

頼家 さすがは夜叉王、あつばれの者ぢや。頼家も満足したぞ。

夜叉王 あつばれとの御賞美は憚りながらおめがね違ひ、それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んだ。

すこしく顔を含みて頼家にさぐぐ。頼家は更にその顔をじつと認る。

頼家 いや、聽かされて主人に所望がある。この顔を予が手許に召仕ひたう存するが、奉公さする心はないか。

夜叉王 ありがたい御意にござりますが、これは本人の心まかせ、親の口から御返事は申上げられませぬ。

(桂は隠せず、すゝみ出づ)

かつら 父様。どうぞわたしに御奉公を……

頼家 うい奴ぢや。奉公をのぞむと申すか。

かつら はい。

頼家 さらばこれよりその面をさぐげて、頼家の供してまゐれ。

かつら かしこまりました。

(頼家は起つ。五郎も起つ。桂しつゝいて起つ。頼は姉の袂をひかへて、心許なげに嘆く。)

かへで 姉さま。おまへは御奉公に……

かつら おまへは先程、夢のやうな望みと笑うたが、夢のやうな望みが今叶うた。

(かつらは誇りに見かへりて、庭に降り立つ。)

頼 やれ、やれ、これで過僧も先づ安着いたした。夜叉王

でをりまする。

五郎 面が死んでをるとは……

夜叉王 年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとしと人も云ひ、われも許して居りましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打直しても生きたる色なく、たましひもなき死人の相……それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面ではござりまする。

五郎 そちは左様に申しても、われらの眼には矢はり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉王 いや、いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者をか呪ふがごとき、怨靈怪異なんどのたぐひ……

頼 あ、これ、これ、そのやうな不吉のことは申さぬものぢや。御意にかなへばそれで重疊、ありがたくお禮を申されい。

頼家 むむ、兎にも角にもこの面は頼家の意にかなうた。持歸るぞ。

夜叉王 強て御所望とござりますれば……

頼家 おい、所望ぢや。それ。

(頼家は腹にて示せば、かつら心得て假面を箱に納め、

どの、あす又逢ひませうぞ。

(頼家は行きかゝりて物につまづく。桂は走り寄りてその手を取る。)

頼家 おい、いつの間にか暗うなつた。

(桂はすゝみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を箱にわたし、我は片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひき出づ。夜叉王はじつと思案の體なり。)

かへで 父さま、お見送りを……

(夜叉王は初めて心づきたる如く、頼と共に門口に送り出づ。)

五郎 そちへの御褒美は、あらためて沙汰するぞ。

(頼家等は相前後して出でゆく。夜叉王は起ち上りて、しばらく黙然としてあたりしが、やがてつか／＼と聲に

あがり、細工場より提を持ち來りて、壁にかけた種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。頼はおどろきて取籠る。)

かへで あゝ、これ、なんとなさる。おまへは物に狂はれたか。

夜叉王 せつば誇りて是非におよばず、拙き細工を献上したは、悔んでも返らぬわが不運。あのやうな面が將軍家の

おん手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と實物假

にも記されて、百千年の後までも笑ひをのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人もけふ限り、再び槌は持つまいぞ。

かへて、さりと短氣でござりませう。いかなる名人上手でも細工の出来不出来は時の運。一生のうち一度でも天晴れ名作が出来ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。

夜叉王 むい。

かへて、拙い細工を世に出したを、さほどに無念と思召さば、これからいよ／＼精出して、世をも人をもおどろかすほどの立派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。かへては絶りて泣く。夜叉王は答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。日暮れて笛の聲遠くきこゆ。

第二場

おなじく桂川のほとり、虎渡橋の袂、川邊には御幾本たちて、芒と蘆とみだれ生ひたり。橋を隔て、修禪寺の山門みゆ。同日の宵。
(下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧は假面の箱をかゝへて出づ。)

頼家 おゝ、月が出た。川原づたひに夜ゆけば、芒にまじる蘆の根に、水の聲、蟲の聲、山家の秋はまた一入の風情ぢやなう。

かつら 馴れては左程にもおぼえませぬが、鎌倉山の星月夜とは事變りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂しうござりませう。

(頼家はありあふ石に腰打ちかけ、桂ば燈籠を持ちたるまゝ、橋の欄に凭りて立つ。月明かにして蟲の聲きこゆ。)

頼家 鎌倉は天下の覇府、大小名の武家小路、薨をならべて綺羅を競へど、それはうはべの榮えにて、うらははおそろしき罪の巷、悪魔の巢ぞ。人間の住むべきところで無い。鎌倉などへは夢も通はぬ。(月を仰ぎて云ふ。)

かつら 鎌倉山に時めておはしなば、日本一の將軍家、山家そだちの我々は下司にも使ひなされまいに、御果報拙いがわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟詣ての下向路、桂谷の川上へ、はじめて御目見得をいたしました。

頼家 おゝ、その時そちの名を問へば、川の名とおなじ桂と云うたな。

五郎 上様は桂どのと、川邊づたひにそゝろ歩き遊ばされ、お供の我々は一足先へまゐれとの御意であつたが、修禪寺の御座所もはや眼のまへぢや。この橋の袂にたゞずみて、お歸りを暫時相待たうか。

僧 いや、いや、それは宜しうござるまい。桂殿といふ婦女をお見出しあつて、浮れあるきに餘念もおはさぬところへ、我々のごとき邪魔外道が付き纏うては、却つて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎 なにさまなう。

(とは云ひながら、五郎は猶不安の體にてたゞすむ。)

僧 殊に愚僧はお風呂の役、早う戻つて支度をせねばなるまい。

五郎 お風呂とて自づと沸いて出づる湯ぢや。支度を急ぐこともあるまいに……先づお待ちやれ。

僧 はて、お身にも似合はぬ不祥をいふぞ。若き男女がむつまじう語らふてゐるところに、法師や武士は禁物ぢやよ。はゝゝゝ。さあ、ござれ、ござれ。

(無理に袖をひく。五郎は心ならずも叱かるゝまゝに、打連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂ば燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。)

かつら まだそればかりではござりませぬ。この窟のみなかに、二本の桂の立木ありて、その根よりおのづから湧水を噴き、末は修禪寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またその樹を女夫の桂と昔よりよび傳へてをりますると、お答へ申上げましたれば、おまへ様はなんと仰せられました。

頼家 非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありさうな……と、つい戯れに申したなう。

かつら お戯れかは存じませぬが、そのお詞が冥加にあまりて、この願かならず叶ふやうと、百日のあひだ人にも知らさず、窟へ日参いたせしに、女夫の桂のしるしありて、ゆくへも知れぬ川水も、嬉しき逢瀬にながれ合ひ、今宵おん側近う、召出されたる身の冥加……

頼家 武運つたなき頼家の身近うまゐるがそれほどに嬉しいか。それも大方は存じて居らう。予には比企の判官能員の娘、若狭といへる側女ありしが、能員ほろびし其初に、不憫や若狭も世を去つた。今より後はそちが二代の側女、名もそのまゝに若狭と云へ。

かつら あの、わたくしが若狭の局と……えゝ、ありがたうござりまする。

頼家 あたゝかき湯の湧くところ、温かき人の情も湧く。感
をうしなひし頼家は、こゝに新しき態を得て、心の痛み
もやうやく癒えた。今はもろくの煩悩を断つて、安ら
げくこの地に生涯を送りたいものぢや。さりながら、月
には雲の障りあり、その望みも果敢なく破れて、予に萬
一のことあらば、その父に打たせたる彼のおもてを形
見と思へ。叔父の痛處は罪無うして、この修禪寺の土と
なられた。わが運命も運かれ流され、おなじ路を辿らう
も知れぬぞ。

(月かくれて暗し。籠手、鬘當、腹巻したる軍兵二人、
上下よりうかゞひ出で、芒むらに潜む。蟲の聲儀にや
む。)

頼家 人やまありし。心をつけよ。

(金窪兵衛尉行親、三十餘歳。烏帽子、直垂、籠手、鬘
當にて出づ。)

行親 上、これに御座遊ばされましたか。

頼家 誰ぢや。
(柱は燈籠をかさず。頼家達しみる。)

頼家 子が召使ひの女子ぢやよ。

行親 おん謹しみの身を以て、素性も得知れぬ殿しの女子ど
もを、おん側近う召されしは……

(柱は堪へず、すゝみ出づ。)

かつら 兵衛どのとやら、お身は下者か人相見か。初見參の
わらはに對して、素性隠しき女子などと、迂濶に物を申
されな。妾は都のうまれ、母は殿上人にも仕へし者ぞ。
まして今は將軍家のおそばに召されて、若狭の局とも名
乗る身に、一應の會釋もせて無禮の難言は、鎌倉武士と
いふにも似ぬ、さりとは作法をわきまへぬ者なう。

(冷笑はれて、行親は眉をひそめる。)

行親 なに。若狭の局……して、それは誰が許された。

頼家 お、予が許した。

行親 北條どのにも許せたまはず……

頼家 北條がなんぢや。おのれ等は二口目には北條といふ。

北條がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家來ぢや
ぞ。

行親 さりとて、尼御臺もおはしますに……

頼家 え、くどい奴。おのれ等の云ふこと、聴くべき耳は
持たぬぞ。退れ、すされ。

行親 金窪行親でござりまする。

頼家 お、兵衛か。鎌倉表より何としてまゐつた。

行親 北條殿のおん使に……

頼家 なに、北條殿の使……。惣はこの頼家を討たうが爲
な。

行親 これは存じも密らぬこと。御機嫌伺ひとして行親參
上、ほかに行親もござりませぬ。

頼家 云ふな、兵衛。物の具に身をかためて夜中の参入は、
察するところ、北條の密意をうけて、予を不意撃にする巧
みであらうが……

行親 天下やうやく定まりしとは申せども、平家の殘黨ほろ
び盡さず。且は西の山路に、盜賊ども徘徊する
由きこえましたれば、路次の用心として斯様にいかめし
う紛擾申した。上に對したてまつりて、不意撃の狼藉
なんど、いかで、いかで……

頼家 たとひ如何やうに陳するとも、憎き北條の使なんどに
對面無用ぢや。使の口上聞くにおよばぬ。隠れ、かへ
れ。

(行親は感がす。しづかに柱をみかへる。)

行親 さほどにおむづかり遊ばされては、行親申上ぐべき
やうもござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまゝ退
散、委細は明朝あらためて見參の上……

頼家 いや、重ねて來ること相成らぬぞ。若狭、まるれ。
(頼家は起り上りて柱の手を取り、打連れて橋を渡り去
る。行親はあとを見送る。世のあひだに潜みし軍兵出
づ。)

兵一 先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合圖もござり
ませぬば……

兵二 手を下すべき機もなく、空しく時を移し申した。

行親 北條殿の密旨を蒙り、近密つて討ちたてまつらんと
今宵ひそかに伺候したるが、流石は上様、早くもそれと
覺られて、われに油断を見せたまはねば、無念ながらも
仕損じた。この上は修禪寺の御座所へ密かけ、多人數一
度にかみ入つて本意を遂げうぞ。上様は早業の達人、近
習の者どもにも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覺を取
るな。場所狭し、夜いくさぢや。うろたへて同士撃す
な。

兵 はつ。

行親 一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控へた

る者どもに、即刻かゝれと下知を傳へい。

（一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彦、うかゞひ出づ。）

春彦 大仁の町から戻る路々に、物の具したる軍兵が、こゝに五人、かしこに十人屯して、出入りのものを一々詮議するは、合點がゆかねと思つたが、さては鎌倉の下知によつて、上様を失ひたてまつる結構な。さりとは大事ぢや。

（遠近にて宿鳥のおどろき起つ聲。下田五郎は橋を渡りて出づ。）

五郎 常はさびしき山里の、今宵は何とやらん物さわがしく、事ありげにも覺ゆるぞ。念のために川の上下を、一わたり見廻らうか。

春彦 五郎どのではおはさぬか。

五郎 おゝ、春彦か。

（春彦は近きてさゝやく。）

五郎 や、なんと云ふ。金鐘の音入は……。上様を……。確と左様か。む。

（五郎はあわたくしく引返してゆかんとする時、橋の上

かへで 生憎に春彦どのはありあはず、なんとしたことてござりませうな。

夜叉王 我々がうろ／＼立騒いだとて、なんの役にも立つまい。たゞその成行を疑てゐるばかりぢや。まさかの時には父子が手をひいて立退くまでのこと、平家が勝たうが、源氏が勝たうが、北條が勝たうが、われ／＼にはかゝりあひのないことぢや。

かへで それぢやと云うて不意のいくさに、姉様はなんとなされうか、もし迷惑うて過失でも……。

夜叉王 いや、それも時の運ぢや、是非もない。姉にはまた姉の覺悟があらうよ。

（寺鐘と陣鐘とまじりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、幾たびか門に出で、心痛の體、向うより春彦走り出づ。）

かへで おゝ、春彦どの。待ちかねました。

春彦 寄手は鎌倉の北條方、しかも夜討の相談を、測らず木

かけて立馳して、其由を御注進申上げりと、修禪寺までは駆け付けたが、前後の門はみな圍まれ、費なければ入ることかなはず、残念ながらおめ／＼戻つた。

かへで ては、姉様の安否も知れませぬか。

春彦 姉はさて措いて、上様の御安否さへもまだ判らぬ。小

より軍兵一人、長巻をたづさへて出で、無言にて撃つてかゝる。五郎は抜きあはせて、急ち斬つて捨つ。軍兵数人、上下より走り出で、五郎を押し取りまく。）

五郎 やあ、春彦。こゝはそれがしが受け取つた。そちは御座所へ走せ參じて、この趣を注進せい。

春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮闘す。）

第三場

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門にたちて望む。

（向うより楓は走り出づ。）

かへで 父様。夜討ぢや。

夜叉王 おゝ、むすめ、見て戻つたか。

かへで 敵は誰やらわからぬが、人数はおよそ二三百人、修禪寺の御座所へ夜討をかけたぞ。

夜叉王 俄にきこゆる人馬の物音は、何事かと思つたに、修禪寺へ夜討とは……。平家の殘黨か、鎌倉の討手か。こりや容易ならぬ大變ぢやなう。

勢ながらも近習の家が、火花をちらして追つ返して、今が合戦最中ぢや。

夜叉王 なにを云ふにも多勢に無勢、御所方とても鬼神ではあるまいに、勝負は大方知れてある。とても逃れぬ御運の末ぢや。蒲殿といひ、上様と云ひ、いかなる因縁かこの修禪寺には、土の底まで源氏の血が沁みるなう。

（寺鐘烈しくきこゆ。春彦夫婦は再び表をうかゞひ見る。）

かへで おゝ、おびたしい人の足音……。鐘を削る太刀の音……。

春彦 こゝへも次第に近いてくるわ。

（桂は源家の假面を持ちて顔には髪をふりかけ、直垂を着て長巻を持ち、手負の體にて走り出で、門口に來りて倒る。）

春彦 や、誰やら表に……。

（夫婦は走り寄りて扶け起し、庭さきに伴ひ入るれば、桂は又倒れる。）

春彦 これ、傷は淺うござりまするぞ。心を確に持たせられ

い。

かつら （息もたゆげに。）おゝ妹……。春彦どの……。父

様はどこにぢや。

夜叉王 や、なんと……。

(夜叉王は怪みて立ちよる。桂は顔をおげる。みなく驚く。)

春彦 や、侍衆とおもひの外……。

夜叉王 お、娘か。

かへで 姉さまか。

春彦 して、この體は……。

かつら 上様お風呂を召さるゝ折から、鎌倉勢が不意の夜討……。味方は小人数、必死にたゝかふ。女てこそあれこの桂も、御奉公はじめの御奉公納めに、この面をつけてお身がはりと、早速の分別……。月の暗きを幸ひに打物とつて庭におり立ち、左金吾頼家これにありと、呼はり呼はり走せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの上様ぞと心得て、うち洩さじと追つかくる。

夜叉王 さては上様お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむき、こゝまで斬抜けてまゐつたか。

(血に染みたる假面を取りてじつと視る。)

春彦 我々すらも侍衆と見あやまつた程なれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かへで とはいふものゝ、淺ましいこのお姿……。姉様死んで下さりまするな。(取纏りて泣く。)

かつら いや、いや。死んでも憾みはない。賤が伏屋でいたづらに、百年千年生きたとて何とならう。たとひ半响一响でも、將軍家のおそばに召出され、若狭の局といふ名をも給はるからは、これで出世の望もかなうた。死んでもわたしは本望ぢや。

(云ひかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は假面をみつめて物云はず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟をかぶりて逃げ来る。)

僧 大變ぢや、大變ぢや。かくまうて下され、隠まうてくだされ。(内に駈入りて、桂を見て又おどろく。)

かつら 手負が……。お、桂殿……。こなたもか。

僧 お悼はしや、御最期ぢや。

かつら ええ。(這ひ起きて屹と視る。)

僧 上様ばかりか、御家來衆も大方は斬死……。わし等も傍杖の怪我せぬうちと、命からんく逃げて來たのぢや。

春彦 では、お身がはりの効もなくな……。

かへで 遂にやみく御最期か。

(桂は失望してまた倒る。楓は取付きて叫ぶ。)

かへで これ、姉さま。心を確に……。なう、父様。姉さまが死にますぞ。

(今まで一心に假面をみつめたる夜叉王、はじめて見かへる。)

夜叉王 お、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であらう。父もまた本望ぢや。

かへで ええ。

夜叉王 幾たび打ち直してもこの面に、死相のありくに見えたるは、われ拙きにあらず、鈍きにあらず、源氏の將軍頼家卿が斯く相成るべき御運とは、今といふ今、はじめて覺つた。神ならでは知しめされぬ人の運命、先づわが作にあらはれしは、自然の感應、自然の妙、技藝神に入るとはこの事よ。伊豆の夜叉王、われながら天晴天下一ぢやなう。(快げに笑ふ。)

かつら (おなじく笑ふ。) わたしも天晴れお局様ぢや。死んでも思ひ置くことない。些とも早う上様のおあとを慕うて、冥土のおん供……。

夜叉王 やれ、娘。わかき女子が斷末魔の面、後の手本に寫しておきたい。苦痛を堪へてしばらく待て。春彦、筆と

紙を……。

春彦 はつ。(春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち来る。)

夜叉王 娘、顔をみせい。

かつら あい。

(桂は春彦夫婦に扶けられて這ひよる。夜叉王は筆を執りて、その顔を模寫せんとす。僧は口のうちに念佛す。)

—幕—

小栗栖の長兵衛 (喜劇)

登場人物

- 百姓 長兵衛
- その父 長九郎
- その妹 おいね
- おいねの婿 七之助
- 馬士 彌太八
- 獵人 傳藏
- 庄屋 與茂作
- 僧法 善
- 巫女 小鈴
- 百姓 丑五郎 彦松
- 建場茶屋の重助
- その女房 おくろ
- その娘 おかん
- 堀尾 茂助 吉晴

吉晴の家来など

山城國 宇治郡、小栗栖村。
正面の少しく下の方によせて、古風なる茅葺の立揚茶屋あり。家の正面には奥へ出入りの繩腰開口あり。店のまへには古びたる床几二脚ほどを置く。正面より上の方にかけて、丘または森、田畑などが遠くみゆ。
(天正十年六月十四日の午後、百姓丑五郎と彦松の二人は店さきの床几に腰をかけ、茶屋の女房おくろと娘おかんとが茶を出してゐる。木の音きこゆ。)
おくろ 相變らず毎日お暑いことでございます。
丑五郎 まつたく今年の暑さはいつもより少しきびしいやうだ。
彦松 これて早さへ續かなければ、作物のためには好いのだが、かういふ年には兎かくに空照りが續くものだ。
おかん それでも軍が早く片附いて、まあ、まあ、結構でございます。
丑五郎 ほんたうにそれが何よりのことであつた。だが、あ

れほどの大いさが唯つた一日で片附かうとは思はなかつた。明智方もあんまり膽かつたではないか。
(茶屋の亭主重助はぬれ手を拭きながら、奥の繩腰籠をくゞりて出づ。)

重助 もし、お二人さん。これが世にいふ三日天下で、明智光秀ほどの大將もたつた一日の山崎合戦で他愛もない總崩れとは、まつたく夢のやうでございますね。

彦松 なんと云つても明智は謀叛人。一方の羽柴どのの主君の弔ひ合戦といふのだから、一日が二日、二日が三日に延びたところで、所詮は明智の負軍になるのが願當らしいよ。

重助 成程そんなことかも知れませぬね。わたくしどもの商賣では、どつちが勝つても負けてもいゝから、ちつとも早く軍陣の納まつてくれるのが何よりでございます。きのふも明智方の深武者が十五六人もどやどやと押込んで来て、一釜の飯をみんな食ひ倒され、肴も煮染も手づかみの暴れ食ひに、商賣も半休みになつてしまひました。

おくろ おまけにこの娘をつかまへて、悪巫山をやる者もあるので、ほんたうに困つてしまひました。

おかん わたしはほんたうに怖くつて、どうなることかと願へてゐました。

丑五郎 それは飛んだ災難だ。一人前の侍なら眞道にそんな亂暴もしまいが、雜兵足輕どもでは行きがけの駄賃に、どんないたづらをするか判らないから、そんな時には早く店をしめてしまふことだ。

彦松 だが、もう大丈夫。明智方は大抵どこへか散りぐに引揚げてしまつたらしいから、當分はこゝらも静かだからう。

重助 どうかさうしたいものでございますと。

(上のかたより百姓 長九郎、五十餘歳。娘おいね、十七八歳。おいねの婿七之助、廿一二歳。三人連れ立ちて出づ。)

丑五郎 おい、長九郎どの。家印續つてどこへ行きなすつた。

長九郎 (珠數を見せる。) これでござります。

彦松 は、あ、お寺まゐりかね。
長九郎 きのふは六月の十三日、死んだ女房の三回忌にあたるので、墓まゐりに行つて遣りたいと思つてゐると、つい眼と鼻の山崎ではあの通りの大騒ひで、流れ丸がとん

て来るやら、落武者が逃げ込むやら。うか／＼と外へ出て飛んだ災難をうけてはならぬと、家のなかにみんな小さくなつてゐましたので、一日おくれて今日の墓まゐり、土の下にゐる女房にもよくその斷りを云つて來ました。

重助 それはおかみさんもさぞ喜びなすつたらう。かみがへて見ると早いもので、亡つたおかみさんももう三年になりますかね。

(この中、おくろとおかんは床几をまへに持出して、長九郎等に掛けるといふ。三人は會釋して床几に腰をかける。)

丑五郎 だが、まあ、おいね坊にも七之助さんといふ立派な婿どのが出來て、かうして三人が仲よく揃つて御參詣に行つてやれば、死んだおかみさんもどんなに喜ぶか知れやあしない。

産松 ほんたうに長九郎さんの家でも良い婿を取りあて、仕合せだと、近所でもみんな羨んでゐますよ。

長九郎 (嬉しげに。) はい、はい。人様のまへで自分の家の婿を譽めるのも異なるものでござりますが、まつたくこの七之助はみなさんも御存じの正直者で、朝から晩まで畑

仕事には精をだし、年を取つたわたくしには孝行を盡してくれます。

おくろ それにおいねさんと夫婦仲のむつまじいのが第一の親孝行といふものでござりますよ。

(七之助とおいねは顔を見あはせて恥しさに俯向く。)

重助 それにつけても、あの長兵衛さんがもう少しどうにかなつてくれたら。

おくろ (これ、眼で制する。)

(重助も氣がついて口をつぐむ。丑五郎と産松も眼を見あはせて氣の毒さうに黙つてゐる。)

長九郎 (嘆息する。) まつたくこの御亭主のいふ通り、あの長兵衛めは自分の生みの性ながらも、愛想の盡きた役難もので、博奕は打つ。酒はのむ。おまけに子供の時から喧嘩好きで、なにかと云へばすぐに腕づくて暴れ散らすといふ。それは、それは、箸にも棒にもかゝらぬ奴、幾たびか勘當しようとは思ひながらも、やつぱり肉身の恩愛で、けふまで堪忍してゐますが、あいつの噂が出るたびに、つながらる縁の妹や婿どのにも、肩身のせまい思ひをさせますのが、ほんに氣の毒でござります。

丑五郎 どの息子もそれが多いが、長兵衛さんは少し念が

めてござります。

おくろ なるほど、無い子には泣かないといふが、あんな息子を持つた長九郎さんは、ほんたうにお察し申しますよ。

(下の方より馬士彌太八出づ。)

彌太八 お、長九郎さん、こゝにゐなすつたか、丁度い、所で逢ひましたよ。

長九郎 お、彌太八さん。わたしに何ぞ用でもありますか。

彌太八 用といふのは外でもねえ。おまへさんには些と氣の毒だが、あの娘野郎がね。

長九郎 え、性がどうかしましたか。

彌太八 娘野郎の長兵衛がおれの家の馬を盗んだのだ。(大きな聲で云ふ。)

おいね そんなら兄さんがお前の馬を……。

七之助 して、それはいつの事でござります。

入は過ぎてゐるやうだ。さうして今日のお墓まゐりにも、長兵衛さんは一緒に出ては來なさないのだね。

長九郎 なんの、なんの、きのふの朝から家を出たがりて、どこをうる附いてゐることやら、今まで姿を見せませぬ。あんな奴のことなれば、自分の母親の祥月も命日も大方忘れてゐませうよ。

産松 そんなことかも知れないな。(丑五郎と顔を見あはせる。)

七之助 今度の軍がはじまると、おれもこのどさくさまぎれに金儲けをするのだと云つて、竹槍を持つて出たまゝで、今に戻つて來ませぬので、もしやなにかの間違ひでもありはしまいかと、おたくし共も察じてをります。

重助 なに、竹槍を持つて出た……。それはなるほど不安心だ。

おいね 大方野武士の仲間入りをして、落武者の鎧や刀でも銅き取るつもりでござりませうが、相手は侍、こつちは百姓、もし什損じたら大變と、七之助さんもわたくしも昨日から胸を痛めてをります。

長九郎 いや、いや、あんな不孝者は、いつそ流れ丸にでも中つて死んでしまふ方が、世間の若い人達のよい見せし

めてござります。

おくろ なるほど、無い子には泣かないといふが、あんな息子を持つた長九郎さんは、ほんたうにお察し申しますよ。

(下の方より馬士彌太八出づ。)

彌太八 お、長九郎さん、こゝにゐなすつたか、丁度い、所で逢ひましたよ。

長九郎 お、彌太八さん。わたしに何ぞ用でもありますか。

彌太八 用といふのは外でもねえ。おまへさんには些と氣の毒だが、あの娘野郎がね。

長九郎 え、性がどうかしましたか。

彌太八 娘野郎の長兵衛がおれの家の馬を盗んだのだ。(大きな聲で云ふ。)

おいね そんなら兄さんがお前の馬を……。

七之助 して、それはいつの事でござります。

彌太八 今から五日まへの晩に、おれの馬小屋へ忍び込んで、大切な栗毛をぬすみ出した奴がある。あれを盗まれたは其日の商賣も出來わえので、毎日方々をさがしてゐると、今日になつてやう／＼その手がかりが付いた。二

三日前におれの栗毛を引張つて、隣村の源右衛門のそこ

ろへ賣りに行つた男、それがあの娘の長兵衛に相違ねえのだ。

七之助 はて、二口目には娘々と、大きい聲で云つてくださるな。そんなら長兵衛どのが、お前の馬をひき出して、隣村へ賣りに行きましたか。

彌太八 さうだ、さうだ。ひとの飼馬を断りなしに牽き出して、よそへ賣つてしまつたからは、云はずと知れた馬どるばうだ。その旗合にゆく途中で、こゝでお前方に逢つたのが丁度幸ひだ。さあ、おやちさんも婿どんもこの始末をどうしてくれる。(詰める)

七之助 (起ち上りて進る) まあ、待つてくだされ。なるほどお前の方には確かな證據もあらうけれど、なにをいふにも相手の長兵衛どのは、きのふの朝からゆくへが知れぬので、わたし達も心配してゐる所。ともかくも當人が戻つて来た上で、その實否をよく聞きたとして……。彌太八 では、おれが根もないことをこしらへて、云ひがかりでもすると云ふのか。

七之助 いや、さういふわけでは決してござらぬが、くどくも云ふ通り、その相手の長兵衛どのが留守であれば……。彌太八 あんな役難者は初めから相手にしねえ。おれはお前

長九郎さんではない。落松 今日のところは我慢しろ、我慢しろ。

彌太八 (進々うなづく) みんながそれほどに云ふものを、おれ一人がじやく張るわけにも行くめえ。ほんたうに居ましいのは馬どろばうの長兵衛めだ。おれはこれから隣村へ行つて、兎もかくもあの馬を取戻して来なければならぬえ。では、おやちさん。また逢はうぜ。(彌太八は上の方に去る)

長九郎 なんと言はれても一言ござらぬ。ほんに憎いのは馬どろばうの長兵衛めだ。上のかたより庄屋界

(皆々も氣の毒さうに黙つてゐる。上のかたより庄屋界 奥茂作、僧法善と連れ立ちて出づ。)

重助 お、庄屋様。お暑いことでございます。(皆々會釋する)

長九郎 (進み出づ) 庄屋様。こゝらの軍も静まりましてまづ、結構でござりました。和尚様。先刻は御邪魔をいたしました。

(七之助もおいれも會釋する) 法善 こなた衆はあれからこゝにござつたのか。

方を相手にして、なんとか埒をあけて貰ふつもりだ。さあ、馬をかへすか、それだけの金を拂ふか、二つに一つの挨拶をして貰はう。(七之助の腕をつかむ)

おいな (進る) それだと云つて、今すぐには……。まあともかくも、二三日のところを……。彌太八 (おいれを突きのける) え、二三日は扱措いて、もう一日も待たれぬのだ。

長九郎 (起ちあがる) はて、手荒なことをさつしやるな。おまへの理窟はよく判りました。あらためて本人を證額するまでもなく、その馬は屹と長兵衛めが盗み出したに相違ござるまい。あんな件を持つたが親の因果、たとひ田畑を賣り換つてもかならずお前に損をかけますまいから、勘辨しにくい所でもあらうが、わたくしに免じてもう二三日、どうぞ待つてくださるまいか。

七之助 わたしも共々にたのみます。重助 ふだんから村中でも正直者と評判のおやちさんと聞かさんが、かうして頼みなさるのだから、お前もおとなしく料簡して、まあ二三日待つて遣ることにしたらどうだね。

重助 さうだ、さうだ。決しておまへに損をかけるやうな

七之助 はい。あの、少し面倒なことが出来まして……。法善 はう、なにか知らぬがそれはお氣の毒ぢやな。

(丑五郎と彦松は起つて床几をゆづれば、奥茂作と法善は腰をかける) 奥茂作 さて、こゝにあつまつてゐる人達にも、話して置きたいことがある。と云ふのは、今度のいくさに限らず、近ごろは村々の百姓どもの氣が暴くなつて、やゝともしれば竹槍や鐵砲などをかつぎ出して、落武者の鐵兜などを刺ぎ取らうとするのは、以てのほかのことだ。百姓は鐵や鉄を持つて、耕作を精出すのがめい／＼の務で、猪狩の時のほかには、竹槍や鐵砲などをむやみに持出す筈のものではない。その道理をわきまへずに、この頃の若い百姓どもは、兎かくに亂暴で慾張りて、野武士や強盗の眞似をしたがるのは、言語道斷の不埒とあつて、羽柴筑前守殿から唯つた今きびしい御觸れがまはつて来た。今度のいくさに就いても、右様の不埒者は強盗と同罪、一々に捕め取つて磔の刑に行ふとある。

重助 お、磔……。(皆々おどろく) 法善 この村の人達は皆おとなしい正直者、そんな不心得の

御仁は一人もあるまいと、わしも安心してゐますが、それでもまた大勢のうちには……長九郎を見る。どんな人間がどんな出来心で、どんな事を仕出来すまいものでもない。萬一そんなことがあつたら、本人は勿論、村中の者も又どんな迷惑を受けまいものでもござらぬ。ちやによつて、誰も彼も氣をつけて、かならず野武士のやうな眞似をしてはなりませんぞ。よいかな。

一問は、はい。判りましてございます。

(この以前より獵夫傳藏、火繩筒を持ちて下のかたより出で、庄屋と僧との話を聴きあたりしが、大勢をかき分けて進み出づ。)

傳藏もし、庄屋様、和尚様。どうも飛んだことを致しました。鐵砲をまへに置いて、土に手をつく。

飛んだこととは……

實はこの鐵砲をかき出しまして……(泣く)どうも大變なことになつてしまひました。

む。では、その鐵砲で……(撃つ眞似をする)遺つたか、遺つたか。

傳藏(おなじく撃つ眞似をする)やりましてございます。法善その相手はやはり明智方の落武者かな。

子供も六人ございます。萬一わたくしがそんなお仕置にでもなりますと、その女房や子供がみんな路頭に迷はねばなりません。もし庄屋様……和尚様……。お察しなすつて下さいませ。お助けなすつて下さいませ。もし、この通りでございます。

(傳藏は泣きながら手をあはせる。)

重助 正直者の傳藏さんがどうしてそんな氣になつたか。これも不斷から猪や狼を殺した、殺生の報かもしれぬ。おくる。それにしても鐵砲一つ撃つたために、引廻しの上へに……

おかん あんまり悲しい酷らしい。

(重助、おくる、おかんの三人は聲をあげて泣く。)

傳藏 はい、はい。お助けなすつて下さいませ。それだから助けてやる。なるほど落武者を狙つたといふのは、貴様が悪。しかし相手を殺したといふわけでもなし、物を取つたといふ譯でも無し、貴様は狩夫で鐵砲をうつのが商賣、人間を猪と間違へて、ついつかりと引金を外したとけのことだ。

傳藏 はい。立派な鐵砲を着てみましたので、ついふつと出来心で、遠くから一發撃ちましたが、猪や狼をうつのとは違ひまして、人間を撃つのは生れてから初度なので、何だかふる／＼と手がふるへて、たうとう撃ち損じてしまひました。

丑五郎 む。撃ち損じて、それからどうした。

傳藏 どうも斯うもない。なにをいふにも相手は立派な侍。見つけられたら命懸けと、あとをも見ないで一目散に逃げて来た。

森松 いや、弱い男だ。

傳藏 いや、弱くつて仕合せだ。もしその落武者を首尾よくずどんと撃ち留めて、その鐵砲もはぎ取つたが最後、おまへはすぐに繩にかゝつて、京の町々を引廻しの上におまへは、考へてもおそろしい。(身を顛はせる。)

法善 南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。(珠數を爪繰る。)

傳藏 まつたく怖ろしいことでございます。(泣く)就きましては庄屋様にも和尚様にもわたくしが一生のお願ひ、どうか此事は御内分になすつて下さいませ。御承知の通りわたくしには、女のくせに毎晩寢酒を一升づつ飲む女房もござります。泣くと食はうのほかに何の能もない

法善 左様でございます。さうして見れば傳藏どのに罪はござらぬ。

傳藏 では、お助けくださいますか。

與後作 お、助けてやります。皆の衆も聞く通りの次第だから、どうぞ内分にたのみませ。

傳藏 (一同に) どうぞ御内分に願ひます。これでわたくしも生き返りました。ありがたうございます。有難うございます。

(傳藏は土に額をすり付けて、庄屋と僧とに幾たびか禮をいふ。この時、向うにて女の叫ぶ聲。)

小鈴 あれ、あれ。なにをしなさるのちや。あれ、あれ……(向うより小栗村の長兵衛、二十七八歳、村一番のあばれ者、少し酔つてゐる體にて、片手に穂さきを切られたる竹槍をかつぎ、片手に小鈴の手をとりて出づ。小鈴は十七八歳の美しき巫女、狩衣に緋の切袴をはきて、手には神の杖を持つ。長九郎はこれを見て、悪い奴が来たといふこゝろにて、七之助にさゝやき、自分だけは店の暖簾口に入る。)

長九郎 はて、いゝから一緒に来いといふのに……。遠くまで行くのちやあねえ。あの立場茶屋まで来て酌を一杯し

てくれ、ば可いのだ。別に面倒なことを頼むのぢやあねえ。さあ、早く来てくれ。
(息がる小鈴の手をひきて、無理無難に茶屋の前に引摺つてくる。これを見て、一同はたち上る。)

おいね お、兄さん。
七之助 どうなすつたのでござります。
長兵衛 どうするものか。このお巫女に酌をして貰はうと思つて連れて来たのだ。

おいね お、おまへは八幡様のお巫女さん。どうして兄さんに連れられて……

小鈴 今そこで長兵衛どのに行き逢ひましたら、わたしに酌をしてくれと云つて、忌がるものを手籠めにして……
おいね 又いつもの悪い癖が始まりましたか。人もあらうにお巫女さんを手籠めにして連れて来るとは……

七之助 あまりと云へばあまりの無難、もうそんなことはおやめなされませ。
長兵衛 なにを云やあがる、黙つてゐろ。おい、亭主。べらぼらに暑いな。その床几を風通しの好いところへ出してくれ。

重助 はい、はい。

(重助はよんどころなしに床几を直せば、長兵衛は小鈴の手を取りしまゝ床几に腰をかける。)

長兵衛 なんでも好いから酒と肴を持つて来てくれ。明智の落武者とは違ふから、おれは食倒しや飲倒しはしねえ。まあ、安心してどしどし持出してくれ。

おくら 長兵衛さん。大層御機嫌のやうですが、なにか好いことでもありましたかえ。

長兵衛 好い事どころか、あんまり馬鹿々々しいので自棄酒だ。やけになるのも無理はあるめえ、まあ聞いてくれ。明智日向守光秀、羽柴就前守秀吉、この二人が山崎で天下分目の合戦。その大博奕のなかへ割り込んで、おれの名前のちやうと出るか、半と出るか、うまい金儲けをしようと思つて、朝からそこらをつらう付いて、いくさの様子を見てみると、明智方はいや散々の大敗北。そのうちにははくれる、空は雨催ひ、これはおあつらへの豫言時だと村はづれの竹藪にもぐり込んで、藪つ蚊に食はれながら待つてゐたところが……いやもう理無しの香狂はせよ。それでもこつちは白痴未練で、たうとう夜あかしをした上に、そこらに手負や討死でも轉がつてゐたら、明智方でも羽柴方でも頼着はねえ。見つけ次第に鏝でも

太刀でも刺ぎ取つて、きのふからの立前にして遣らうと、この暑いのには汗みづくになつて、二里三里のあひだを駆けまはつたが、この頃はだん／＼に世が悪くなつたので、勝つた方でも負けた方でも如才はねえ、誰がどう始末してしまふのか知らねえが、槍一本だつて満足なものも落ちてゐねえ。これがほんたうの骨折損のくたびれ儲けて、暑さは暑し、眠くはなる。足は重くなる。腹は空る。もうがつかかりして歸つてくると、丁度そこでこの美しいお巫女さんに出逢つたから、無理にたのんで一緒に来て貰つたのだ。どうだ、亭主。かう事が判つたら、兼問の本重のやうに眼をばちくりさせてゐることもあるめえ。小栗判官の長兵衛判官のながしの御指圖にしたがつて、酒を持つて来い。肴も持つて来い。

重助 はい、はい。でも、おまへはもう酔つてゐるやうな。長兵衛 あんまり忌々しいから、途中で一杯引つかけて来たが、そんなことでは蟲が納まらねえ。さあ、早くしろ。ぐづ／＼してゐると、この竹槍で土手つ腹をお見舞ひ申すぞ。(竹槍を投げ出す。)

重助 (おどろいて飛び退く。) はい、はい。唯今すぐに……。(重助はおくろ顔を見あはせて、二人は奥の暖簾口に

入る。)

小鈴 あの、わたしは……。

(小鈴は起ちかゝるを、長兵衛は押へる。)

長兵衛 え、逃げてはいけねえ。お神樂に出る八股の大蛇のやうに、取つて喰はうといふのではねえ。たゞ酒の相手をして貰へばいゝのだ。

(一同は呆れてながめてゐる、奥茂作は見かれて進み出づ。)

奥茂作 これ、これ、長兵衛どの。自棄酒を飲むと飲まぬとおまへの勝手だが、神樂につかへる巫女どのを捉へて、酒の酌をしろなどは、あんまり穩かであるまいぞ。酒の相手がほしければ、そこにゐるおかん坊に酌をして貰ひなさい。第一にそんな竹槍などを遊ばまはつて、落武者を刺ぐの、金儲けをするのと、大きな聲で囁いてはならないぞ。

長兵衛 子供のときから野良へ出て、大きな聲で猪を逐ふ癖が附いてゐるので、それが地聲になつてしまつたのだから仕方がねえ。大きな聲で囁いては悪うございませうかえ。

奥茂作 その大きな聲も事による。今も云つて聞かせた通

り、落武者の體をはくの、太刀を取るのと、そんなことを無暗に嘯鳴つてゐると、おまへの命にかゝはるのだ。法師 長兵衛どのはまだ知るまいが、羽柴前守のから御觸れが出て、野武士の眞似などをする百姓は一々に召捕つて、御にかけるといふ、殿しい御沙汰ぢや。

長兵衛 それはほんたうかえ。馬鹿なこともあるものだ。自分たちは勝手に人殺しや分捕功名を造つてゐながら、おれ達がうっかりしたことをすれば、すぐに、あんなまり手前勝手にも程がある。おれはそんな御觸は背かねえ。忌だ、忌だ。

七之助 たとひ背かうと背くまいと、それが世にいふ泣く子と地頭で、上の御沙汰ならば是非がござりますまい。

おいね そんなことがお侍衆の耳へでもきこえたらば輪々罪の重る道理、なんでもおとなしくしてゐるに限りませう。

長兵衛 やかましい。なんぞと云ふと利口振つてつべこべとうるさく口を出す奴等だ。(奥にむかつて呼ぶ。)おい、おい、なにをしてゐるのだ。早く酒を持って来い。

おいね それにしても、このお巫女さんを……。歸してあげてくださいませ。

(おいは二人のあひだに入りて、小鈴を引放さうとすれば、長兵衛はおいを突き倒す。七之助とおかんはあわて、おいを介抱する。)

長兵衛 え、變度云つてもわからねえ奴等だ。阿兄さんにむかつて意見がましいことなんぞ云やあがると、ひきがへるのやうに踏み殺すぞ。

(奥より重助とおくろは、酒と肴を運び出で、床几の端におくろ) お待遠てございました。

長兵衛 こゝの家の酒はあんまりよくねえが、おなじ村の好みに飲みに来てやるのだ。ありがたく思ふが可い。(茶碗を取る) さあ、酌をしてくれ。

おくろ はい、はい。

長兵衛 え、お前のやうな南瓜ではいけねえ。おれは唐瓜のやうに色の白いお巫女さんに頼んでゐるのだ。(小鈴に) おい、笑ひ顔をして機嫌よく酌をしてくれ。

小鈴 わたしにそんなことは出来ませぬ。どうぞ免してくださいませ。(桶を振り直して顔をそむけてゐる。)

長兵衛 なに、酌は出来ねえ。別にむづかしいことではねえ、手のある人間なら誰にでも出来ることだ。一體そんな

なものを大事さうにさゝげてゐるから、肝胃の手が塞がつてしまふのだ。(長兵衛は小鈴の手より桶を引つたりして地に投げ付ける。)

長兵衛 や、清淨の御觸を……。 (人々も呆れる。長九郎は奥よりうかゞひ出で、堪へ兼ねて前に出ようとするを、七之助とおいねが制して、無理に奥へ押込む。)

長兵衛 (冷笑ふ) なにが御觸だ。こんなものはどうでも構はねえ。(足にて桶を踏みにじる。) さあ、手が明いたら酌をしてくれ。(酒壺を小鈴に突きつける。)

法師 これ、これ。長兵衛殿。それはあんまりの亂暴狼藉といふものぢや。庄屋様も云はれた通り、酌をして貰ひたければこゝの娘にたのむがよい。神に仕へる者や、佛につかへるものを、唯の人とおなじやうに思つてはならぬ。もうよい加減にさつしやれ。

長兵衛 なに、神に仕へる者や佛につかへるものを、唯の人と思ふなど……。へん、乙う我田へ水を引くな。佛にかへるを食坊主なんぞには初めから用はねえ。西瓜頭をかゝへて引込んでゐる。

法師 さりとは餘りに度しがたい人物ぢや。現にきのふはこ

あなたが母御の三回忌といふに、朝から家を飛び出したままで、けふの真夜中にもこなた一人が缺けてゐるではないか。

長兵衛 きのふは阿婆の三回忌……。成程そんなことかも知れねえが、おれの代りに此奴等が……。 (七之助とおいねを指さす。殊勝らしく拜みに行けば、それで可いのだ。おかげで和尚も幾らかの御布施にありついたらう。は、うまく遣つたな。)

法師 これは怪しからぬ。わしは御布施のことなどを云つてゐるのではござらぬ。おまへの不孝を吐つてゐるのぢや。

長兵衛 そんな御説教はそこらにゐるおめでたい人間どもに聴かしてくれ。それよりも酒のさかなに、その坊主頭に飲込でもして、景氣よく一番酔つてくれ。おれのやうな亡者には、その方がよつほど功德になる。さあ、さあ、猫ぢや猫ぢやでも、湯瀝場踏てもなんでも構はねえ。亡者に魔が魅したやうなところを一つ見せてくれ。おい、和尚。やい、坊主。早くやれ。

法師 はて、怪かはい。こなたこそまことの惡魔外道ぢや。

長兵衛 悪魔でも外道でもひよつと、こども構はねえ。お巫女に酌をさせて、坊主に踊らせれば、神佛かけあひで、こんな酒落れたことはねえ。さあ、さあ、遣つてくれ。お、お前も手が驚かつてゐるのか。そんなものを持つてゐるから不可わえ。邪魔なものは思ひ切りよく打捨つてしまへ。

(長兵衛は法善の珠数を奪ひ取りて、これも地に投げつける。)

七之助 もし、お前。とんでもない。
(七之助は見かれて支へんとすれば、長兵衛はよろ／＼しながら見かへる。)

長兵衛 なんだ、なんだ。又出しやばるのか。
七之助 でも、お前。佛様の罰があたります。

長兵衛 へん、罰はこつちで中てゝやるわ。

(長兵衛は七之助をなぐり倒す。おれば介抱する。上のかたより彌太八は栗毛の馬をひいて出づ。)

彌太八 お、長兵衛。いゝところで貴様を見つけた。さつきもおやちが掛合つたが、おれの馬小屋からこの栗毛を引つ張り出したのは貴様に相違あるめえ。
長兵衛 なんだ。その栗毛をどうしたと云ふのだ。

前(ゆく)やい、こん畜生。おれが今、貴様のあたまを一つ撲るから、若しほんたうにおれが盗んだのならば、もうと啼け、もうと啼け。おれがまつたく盗んだのでなければ、ひんと啼け、ひんと啼け。さあ、可いか。みんなもよく聞いてゐる。(拳をふりあげる。)

彌太八 (長兵衛の腕をとらへる。) え、好加減に人を馬鹿にするな。馬がもうと啼いてたまるものか。もし、庄屋どの。この通りの横着者、どうぞ御裁判をねがひます。興及作 では、この長兵衛がその馬をぬすんだに相違ないな。

彌太八 正銘まがひ無し馬どろばうでござえます。(無理に長兵衛を地に引き据ゑる。)もし嘘だと思召すなら、隣村の源右衛門を證人によんで来て宜しうござえます。

(この間におれば小鈴にさゝやき、おくとおかさんも誘ひて小鈴を店なかへ連れ込む。)

無頼 (進み出づ。) おい、長兵衛さん。さつきから黙つて聞いてゐたが、どうもお前がよくないやうだ。なんでも人間は正直が肝心、たとひ一旦は心得ちがひをしても、すなはち白状してあやまれば、皆さんも又堪忍してくださると云ふものだ。

彌太八 盗人猛々しいとは貴様のことだ。貴様がこれを盗み出して、となり村の源右衛門に賣つたといふ噂を聞いたから、すぐに行つてみれば案の通りだ。この馬がなくては一日も商賣が出来ねえから、買主の源右衛門にわけを云つて、兎もかくも馬を返して貰つて来たのだ。
長兵衛 返して貰へばそれでよからう。ほかに云分はねえ管だ。

彌太八 馬鹿をいへ。買主が唯で返してくれるか。馬の代の三兩はあとで拂ふ約束にして来たのだ。その代金は貴様が拂へ。

長兵衛 生馬の眼をぬくとさへ云ふ世のなかに、貴様が聞けだから誰かに盗まれたのだ。おれがその尻拭ひをする謂ればねえ。

彌太八 這奴いよ／＼太い奴だ。もうかうなれば慈悲も容赦もねえ、おやちには氣の毒だが、貴様を馬泥坊として村役人のところへ引摺つて行くからさう思へ。お、丁度こゝに庄屋殿もある。うぬ、逃げようとしても逃がしはしねえぞ。

長兵衛 なにが怖くつて逃げるものか。おれが盗んだか盗まねえか、その馬に聞いてみる。それが確な證人だ。(馬の

(丑五郎と彦松も進み出づ。)

丑五郎 さうだ、さうだ。わし等もさつきから後の方に退つて聽いてゐたが、みんなお前が悪いやうだ。

彦松 第一に和尚様や巫女どのに悪暴を働いて、珠数をなげ付ける、神を踏みにじる。あま、身に神佛を恐れぬ仕方だ。

七之助 ほんにさうでござります。わたくしも先刻から、何うなることかとはら／＼いたして居りました。もし、兄さん。みなさんもあゝして御深切に云つてくだされば：

おいね おまへも誠情を張らないで、おとなしくあやまつて下さりませ。

七之助 馬の代金はわたくしの方から訖と買主に償ひますれば、もしお庄屋様。どうぞこれも御内分になされてくださりませ。

おいね わたくしには唯つた一人の兄さんでござりますれば、馬どろばうの科人になりませぬやうに、どうぞお慈悲を願ひます。

(二人は土に手をつく。)
興及作 (うなづく。) はい、はい、ようござる。かならず

心配さつしやるな。鬮者の兄貴に引きかへて、婿どのと云ひ、妹といひ、揃ひも揃つて正直な人達だ。どうだ、彌太八。このおとなしい二人に免じて、馬どろぼうの長兵衛を今度だけは勘辨して遣らうてはないか。

彌太八 なるほど、長兵衛めは憎いが、婿どのや妹には氣の毒だ。買主の方へこの馬の代金さへ素直に償ふなら、わしは勘辨してやります。

七之助 それは先刻おやち様も云はれました通り、決して御損はかけませぬ。

法番 さて、奇特なことぢや。わしも先刻から感心して聞いておりました。おなじ血をわけた兄妹でも、兄と妹とはこれほどにも違ふものか。それに連添ふ婿どのも天晴れ見あげたものでござるなう。

彌太八 兄貴はこの小栗酒の村中でも、親のやうな憎まれ者。

五五郎 その妹や、妹婿は、佛のやうな正直者。

森松 どうすれば斯うも變るものか。

長兵衛 (地に坐りしきりにて嘆息する) え、さういふしい藪つ蚊どもだ。なにをがや、云つてのやあがるのだ。やい、七之助、妹もこゝへ来い。貴様達はよくも這奴等と一緒になつて、この阿兄さんに馬どろぼうの悪名を

させたな。

七之助 なんてわたくしがそんなことを……

長兵衛 いや、さうだ、さうだ。そんならわたくしの兄にかぎつて、決してそんな人間ではございませんと、なぜ立派に云譯をしねえ。頼みもしねえのに出しやばつて、馬の代金を償ひますから何うぞ御勘辨をねがひますと、初めから俺をどろぼうと決めてかゝつた挨拶、それが第一に氣に入らねえ。さあ、なんて這奴等と一緒になつて、おれを馬どろぼうと決めたのだ。譯を云へ、わけをいへ。

おいねでも、お前。見す、證據があるものを……

長兵衛 なにが證據だ。誰が證人だ。この馬が口をきいて、長兵衛が盗みまじたと云はねえ以上は、誰がなんと云つても水増しだぞ。

彌太八 いや、呆れた無法な奴だ。婿どのや妹に免じて、一旦は勘辨して遣らうと思つたが、さう飽まで圖太く出るならば、おれはもう堪忍がならねえぞ。

長兵衛 堪忍が出来なければ、どうでもしょう。(腕まくりして起ち上る) 堪忍が出来ねえとはこつちで云ふことだ。

彌太八 (進る) まあ、待つた、待つた。二口目には臍づくが、ふだんからの悪い癖だ。

おの指圖をうけるものか。

七之助 (側つて入る) もし、おやち様に向つてそのやうなことを云うてはなりません。

おいね わたくし共がお詫をしますから、まあ、黙つてゐてくださいませ。

長兵衛 また始めやあがつた。うるせえ奴等だ。貴様達のやうな、毛の三本足りねえ物なら知らねえこと、かうして満足に生きてゐる人間が、義理親父の云ふことなんぞを、おとなしくはい、と首いてゐられるか。積つてみても知れたことだ。

七之助 まだお前、そんな無法なことを……

長兵衛 なにが無法だ。そんな親父はこつちが勘當するから、貴様達が負ふとも抱くともして、魏捨山へても連れたいけ。おれは總領の跡取様だから、めつたにあの家を動くことではねえ。釜の下の灰までおれの物だ。

長九郎 總領でも跡取でも、親が勘當した以上、わが家の門ばたも踏ませぬのが世間一統の習はしだ。さあ行け。立去らぬか。(長兵衛の腕をつかんで引立てる)

長兵衛 (涙をふく) そんな指圖はおれは受けねえ。出ていくなら其方で行け。

長兵衛 なにを云やあがる。いさなりには傳説の持つたる鐵砲を奪ひ取る。さあ、這奴等。ぐづぐづ云ふなら腕で来い。矢でも鐵砲でも持つて来いとはこの事だ。

(長兵衛は鐵砲を逆持ち振りかざす。一同はおどろきて思はずあとへ退る。奥の暖簾口より長九郎は珠数を持ちて走り出す)

長九郎 これ、長兵衛のその腕をとらへて床凡の上に押戻す。さつさつから出ようと思ひながら、みな衆の手前あんまり面目ないので出るにも出られず、今まで小さくなつて隠れてゐた。親の心を察してみろ。この小栗酒の村中でたつた一人のあはれ者、役者、不孝者。親のつけた長兵衛といふ名のうへに、頼といふ結構な諱名をつけられて、自慢さうにのさばりある大馬鹿者。けふといふ今日は、もう堪忍も料簡もならぬ。庄屋殿のみる前で、おのれは唯つた今勘當した。

七之助 もし、おやち様。

長九郎 え、なんにも云ふな。うみの親が勘當したから、この村に一時でもゐる事はならぬ。早く行け、どこへても勝手に出て行け。

長兵衛 出て行かうと、行くまいと、こつちの勝手だ。おや

長九郎 え、なんにも云ふな。うみの親が勘當したから、この村に一時でもゐる事はならぬ。早く行け、どこへても勝手に出て行け。

長兵衛 出て行かうと、行くまいと、こつちの勝手だ。おや

長九郎 まだそんなことを……。おのれ、どうしてくれう。
 (長兵衛の襟裳をつかんで珠敷にて打つ。)
 長兵衛 (長九郎をつき放す) いくら親父でもおふくろでも、人の見てゐる前で揉まれては、この長兵衛の面が立たねえ。そつちよりも此方がもう勘辨が出来ねえて。
 (長兵衛は鐵砲をふり上げる。七之助とおいねはあわてゝ支へる。)

長九郎 おのれ、飽までも根性骨の曲つた奴。さあ、打てるものなら打つてみろ。

七之助 はて、おやち様もあぶなうござります。

傳藏 長兵衛もその鐵砲をこつちへ戻せ。

(傳藏は鐵砲を取りにかゝるを、長兵衛は一つ撲つ。七之助とおいねはそれを遮らうとする。長九郎は捨置詞にて長兵衛に詰めよる。長兵衛は支へるおいねを突き倒して、長九郎を鐵砲にて撲つ。長九郎は額に傷きて倒れるに、一同おどろきて逃げよる。おいねと七之助は長九郎を介抱して店のなかに連れ込み、小鈴とおくるとおか人も手傳ひて介抱する。傳藏は長兵衛にむしり付きてその鐵砲を奪はんとす。)
 彌太八 親に傷をつけた奴。死ね、ひつくとれ。

彌太八 こりやもういつそ寶巻にして、川へ投げ込んでしまふがよからう。

長兵衛 さあ、どうとも勝手にしる。

丑五郎 役人に引渡すまでもなく、所の法にしたがつて寶巻にするからさう思へ。

(彌太八と傳藏は長兵衛の繩をとり、丑五郎と彦松と重助の三人は奥より寶巻を持来る。)

長兵衛 え、なにをしやあがるのだ。

彦松 なにするものか。貴様を川へなげ込んで水葬にしたいやらのだ。

法善 もう是非がない。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

彌太八 さあ、早くしろ、早くしろ。

(一同は長兵衛をひき倒して寶巻にする。長九郎は額の傷に鉢巻して、七之助とおいねに扶けられて出づ。)

七之助 お、兄さんは寶巻にされて……

おいね こりや情ないことになりましたな。

長九郎 それもみんな不孝の報だ。貴様のやうな奴は寶巻にされて、餅や饅頭の餌食になつても親や兄妹は泣かないぞ。おれには七之助といふよい婿どのもある。おいねといふ良い娘もある。貴様のやうな生れぞこなひは、早く

(彌太八、丑五郎、彦松、重助も傳藏に加勢して、長兵衛をとりおさへんとすれば、長兵衛は鐵砲をふり廻してさんぐにあばれる。與茂作と法善はあとに退りて見物してゐる。五人を相手にあはれ疲れて、長兵衛は遂に得物を奪はれ、がっかりして倒れるところを大勢に押伏せらる。重助は店より荒縄を持ち來り、大勢にて長兵衛を縛りあげる。)

與茂作 お、よい、よい。流石のあはれ者も多勢に無勢で、丹波の荒熊のやうに生捕られてしまつた。餘事は振舞いて、現在の親の額に傷をつけるとは、呆れた奴だ。

法善 いや、これは悪魔の所行ぢや。

傳藏 いくらお慈悲ぶかい庄屋殿でも、親に傷をつけた不孝者を、もう助けては置かれますまい。

重助 御聞れにそむいて、野武士や強盜の眞似をする。それが第一。

彌太八 その次は馬どろばう。

丑五郎 その次は兄妹をなぐり、人をなぐり。彦松 あまつさへ現在の親に傷をつける。

與茂作 こりやどう考へても謀者だ。
 重助 命が二つあつても足りないくらゐだ。

死んでしまふ方が世間の爲だ。

與茂作 長九郎どには氣の毒だが、所の法に行ふよりほかはない。さあ、早くその寶巻を川端へ運んで行かつしやれ。

一同 あい、あい。

(人々は寶巻にしたる長兵衛を運んでゆかうとする時、上のかたより堀尾茂助吉晴、鉢巻、鎧、陣羽織にて、家來三人をつれて出づ。家來の一人は血に染みたる竹槍の穂先を持つ。)

吉晴 こりや、こりや、その方どもに少しくたづねたいことがある。

一同 はい、はい。

(寶巻を下に轉がして、一同はうづくまる。)

吉晴 先づ第一にたづねたいは、この小栗酒村の土民のなかに、竹槍のたぐひを持出して落武者の路を遮りし者はな

いか。

重助 はい、それは……

與茂作 これ。(眼で叱る。庄屋のわしを差指して、狂瀾にお答へをしてはならぬ。吉晴に) いえ、この小栗酒の村中にそんな者は一人もござりませぬ。

吉晴 たしかに無いか。
 一同 (口をそろへて) 一人もござりませぬ。
 吉晴 さりとは不審。いつはらずに申せ。まったく竹槍を持出した者はないか。
 一同 一人もござりませぬ。
 吉晴 はて。首をかき上げる。こりや、その竹槍の穂を……
 家来 はつ。

(家来の一人は竹槍の穂をわたせば、吉晴は他の家来に床几を立てさせ、槍の穂を手に取りて一同にみせる。)
 吉晴 その方共も大方は存じて居らうが、きのよの山崎合戦に謀叛人の明智方は総崩れと相成つて、大將の日向守光秀は夜にまぎれて勝龍寺の城を立退き、主従二三騎にて落行く途中、この小栗栖の村はづれの藪際にて不意に槍をつけたる者あり。
 一同 お。

吉晴 槍は脇腹に透りしかど、流石は光秀、すぐに太刀をぬいてその槍の穂先を切つて捨て、そのまゝに馬を急がせたれど、急所の捕手にたまり得ず、二三町も駆けぬけて、遂にその場を落馬いたした。
 興作 では、光秀はその竹槍で……

吉晴 ひとり。とても助からぬと覺悟して、光秀は遂に切腹、その亡骸のほとりに落ちてありしは、血に染みたるこの穂先ぢや。竹槍にて突きたるは正しく武士の仕業にてない。こゝらの村の百姓どもの猪突槍と見て取つて、扱こそわざ／＼詮議にまゐつたが、どうでも心當りはないか。
 興作 いえ、そのやうな者は。
 一同 一人もござりませぬ。
 吉晴 どうでも知らぬか、然らば藪村を探索いたさう。(床几を起つ) 皆もまゐれ。
 家来 はつ。

(吉晴は家来を連れて上の方へ引返さうとする時、簀巻にされたる長兵衛は俄に叫ぶ。)
 長兵衛 もし、もし、お待ち下さりませ。
 吉晴 (見かへる) 誰ぢや。
 一同 え。(顔を見あはせる。)
 吉晴 呼び止めたは何者ぢや。
 長兵衛 (駆けながら叫ぶ) もし、もし、こゝでござります。
 吉晴 はて、列らぬ。どこと呼ぶのぢや。
 長兵衛 簀巻にされてゐるのでござります。
 吉晴 なに、簀巻にされてゐる……。(初めて長兵衛に眼をつ

ける。)
 長兵衛 ゆうべ明智光秀を竹槍で突いたのはわたくしでござります。
 吉晴 しかと左様か。
 長兵衛 たしかにわたくしでござります。その證據にはそのらに竹槍の柄が抛り出している筈でござります。どうぞその穂先と穂ぎ合せて、切口をおあらため下さりませ。
 吉晴 む。

(腹にて指圖すれば、家来どもは其處らを見まはす。)
 長兵衛 さあ、大金儲けになる仕事だ。みんなも手傳つて探してくれ。
 (これにて一同も起ち上り、重助は店の前に立ちたる竹槍を拾ひて家来に渡せば、吉晴は持つたる穂先をその切口にあはせて見る。)
 吉晴 なるほど寸分も違はぬ。切口がしつくり合ふからは確にこれぢや。それ、彼のいましめを解け。
 一同 はつ。

(人々は長兵衛の簀巻を解く。長兵衛は這ひ起きる。)
 吉晴 その方の名はなんと申す。
 長兵衛 腹の長兵衛と申します。

吉晴 こりやよく承はれ。百姓どもが野武士の眞似をして、竹槍などをたづさへ出づるは、きびしい御禁制と相成りをれど、これはまた格別ぢや。謀叛の大將明智光秀を突き留めたるは天晴れの功名手柄。おそらく莫大の御褒美を下さるゝてあらうぞ。
 一同 やあ。(顔を見あはせる。)
 長兵衛 ありがたうござります。
 吉晴 詮議相済んだれば、それがしはすぐに立歸る。その方もあとより都へまゐれ。かく申すそれがしは羽柴前守殿の家来、堀尾茂助吉晴と申すものぢや。わが名をたづねて御陣へまゐれ。
 長兵衛 かしこまりました。では、堀尾様。
 吉晴 腹の長兵衛、かさねて逢はうぞ。
 (吉晴は槍の柄と穂とを家来に持たせて行きかゝる。)
 長兵衛 もし、もし、その槍を兩方持つて行かれては何にも證據がなくなります。柄の方だけを置いて行つてくださりませ。
 吉晴 それも道理。では、戻すぞ。
 (槍の柄を長兵衛に戻せば、長兵衛はうけ取る。)
 吉晴 大將もお待たせであらう。早くまゐれよ。

長兵衛 すぐにあとから参ります。
(吉晴は家來を連れて向うに去る。長兵衛は槍を杖にして見送る。)

與後作 これ、長兵衛どの。お前は偉い手柄をしたすつたな。長兵衛 ちよいとしても先づこんなものだ。實はゆうべこの竹槍を持つて、村はづれの藪際に忍んでゐると、なんて騎馬武者が三四人、勝龍寺の方から急いで来た。

一同 むむ。(思はず長兵衛のまほりに寄つて来る。)
長兵衛 眞暗やみてなんにも見當は付かねえが、屹と明智方の落武者に相違ねえと脱んだから、その通るのを待受けて藪の中から突き出すと、一の槍はつき損じて、初めの武士は通りぬけてしまつた。つゞいて二の槍を繰り出すと、今度はたしかに手堪へがあつたが、相手も心得のある侍だ。すぐに刀をぬいたと見えて、槍はこの通り、穂光からすつばと切られてしまつた。

一同 むむ。
長兵衛 思々しいとは思つたが、相手は三四人、こつちは一入、とても追つかけて行く元氣はねえから、切られた槍の柄を引つかついで、そのまますく／＼歸つて来たのだ。ところが、人間の運はわからねえ。今あの侍の話

を聞けば、おれが突いたのは明智光秀だと云ふことだ。

彌太八 なるほどそれは大變な手柄だ。

重助 羽柴前守殿からお召出しになつて、莫大の御褒美を下されるのも無理はない。

傳藏 まつたく人間の運は判らない。人もあらうに明智光秀を打ち留めたとあつては、今度の軍で一番の大手柄だ。

與後作 これが侍ならば大名にも取立てられるかも知れないが、百姓のこなたでは然うもなるまい。先づ家屋敷を賜はるか。

丑五郎 それとも小判か。

齊松 田畑か。

吾妻 なんにしても偉い出世ぢや。長兵衛殿。おめでたうござる。(頭を下げる。)

與後作 これ、長九郎どの。こなたの息子どのの偉いことになりませう。

長九郎 はい、はい。まつたく偉いことになりました。(進みよる。)

これ、長兵衛。おまへは偉い手柄者だ。その竹槍で明智光秀をつき留めた功によつて、莫大の御褒美を下さるとは、おまへの仕合せ。わしの仕合せと云ふものだ。こんな嬉しいことはない。はむむむ。

小鈴 (すゝみ出づ。) 八幡様の氏子からお前のやうな偉いお人が出るといふ、こんなおめでたい事はござりませぬ。

長兵衛 (小鈴を支へる。) はて、長兵衛どのの私家の檀家ぢや。わしの檀家からこのやうなお人が出たといふのは、愚僧も鼻が高いやうでござるわ。いや、愚僧ばかりでなく、本家の阿彌陀如来もさだめて御満足でござらうぞ。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。

重助 そのお祝ひに、こゝであらためて一口召上つてはどうでござりませうな。

長兵衛 むむ、前祝ひに一杯のまうか。(床几の上にあぐらをかき、)

重助 はい、はい。唯今すぐに支度をいたします。おくろも娘も、さあ早く手傳つてくれ。

二人 あい、あい。

(重助等は忙しさに店に入る。)

與後作 くどくも云ふやうだが、御褒美は家屋敷か、小判か、土地田畑か。なんにしてもめでたいことだ。これ、皆の衆もよろこぶが可い。この小栗村に雙の長兵衛殿といふ偉い長者がひとり出来ましたぞ。いや、長九郎どの。こなたも良い息子殿を持たれて羨ましいなう。

丑五郎 長九郎どののよい娘や婿を持つて仕合せだと思つてゐたが、かうしてみると、やつぱり總領は總領だけのことがある。

吾妻 まつたく兄貴は兄貴だけに、妹や婿どのよりもずつと偉いものだ。

(七之助とおいれば怖々すゝみ出づ。)

七之助 兄様。このたびの御手柄、お祝ひ申上げます。

おいね おまへ様が御出世あそばして、こんなおめでたいこととはござりませぬ。

長九郎 え、お前達はそつちへ引込んでゐる。役にも立たぬ癖に出しやばるな。これ、これ、御亭主。酒の支度はまだ出来ませぬかな。長兵衛はなか／＼口が奢つてゐるから、酒はなるだけ良いのを吟味して持出してくだされ。

重助 はい、はい。

(重助とおくろとおかんは酒者を選び出づ。)

長九郎 さあ、長兵衛。めでたく祝つて一杯飲んでくれ。

はい、めでたい、めでたい。

(茶碗を出す。小鈴は長九郎を押退けて進み出づ。)

小鈴 もし、そのお酒を八幡様の御神酒になぞらへて、わたしが酌をいたしませう。

長兵衛 むゝ。やつと素直に酌をしてくれるな。はゝ、ありがてえぞ。
 小鈴 これからはお前の御連長久を毎日神さまに祈りまする。(酌をする。)

長兵衛 お前のやうな女をお巫女にして、鈴ばかり振らして置くのは惜いものだ。これからは時々にかうして酌をたのむぜ。
 小鈴 (恥しそうに) はい。
 (長兵衛は飲み干して茶碗をたてば、小鈴は再び酌をする。)

法善 (羨ましそうに) やつぱり女子は仕合せぢや。
 長兵衛 (茶碗を置く) いや、ゆつくり飲んでほられねえ。これからすぐに出かけようか。

長九郎 善は急げといふこともある。日が長いやうでも京の町までは餘ほどの路程だ。暮れないうちに早く行つて来るがよからう。なにか用があるなら、この七之助を供に連れて行つて、遠慮なくどしどし使ふがよい。
 長兵衛 なに、邪魔な道連れはいつそ居ねえ方が可い。(起ちあがる)だが、これから京の町まであるくのは些と大儀だ。おい、彌太八。その馬を俺に貸してくれ。

彌太八 あい、あい。(驚いたる馬を解いてひき出す)こんな駄馬がお役に立てば仕合せだ。

(長兵衛は竹槍を持ちて馬にのる。)

長九郎 これ、御褒美を買つたら、かならず家へ戻つて来てくれよ。
 法善 長兵衛殿の息災延命。
 小鈴 もろくの禍を攘ひたまへ。

(法善と小鈴は祈る。)

長兵衛 さあ、日の暮れぬうちに一走りだ。
 (長兵衛は馬を早めて向うへ走り去る。皆々あとを見送る。)

興作 (扇をあける) いや、偉い、えらい。やつぱり長兵衛は村一番の男だな。
 長九郎 鶴が鷹を生んだとはこの事でござりませうか。
 彌太八 さあ、鶴を生んだおやぢどのを罰あげにして、みんな目出たく祝へ、祝へ。
 一同 それが可い、それが可い。
 (皆々わやく云ひながら、長九郎を罰あげにして擁ぎまげる。)

一幕

権三と助十

登場人物

- 鶴籠かき 権三
- 権三の女房 おかん
- 鶴籠かき 助十
- 助十の弟 助八
- 家主 六郎兵衛
- 小間物屋 彦兵衛
- 彦兵衛のせがれ 彦三郎
- 左官屋 勘太郎
- 猿まはし 與助
- 願人坊主 雲哲
- おなじく願者
- 石子伴作
- ほかに長屋の男 女 娘 子供 捕方 鶴籠昇など

第一幕

享保時代。大同越前守が江戸の町奉行たりし頃。七月 初旬の午後。
 神田橋本町の裏長屋。壁一重を境にして、上のかたには鶴籠かき権三、下の方は鶴籠かき助十が住んでゐる。いづれも破れ障子のあはら屋にて、権三の家の裏所は奥にあり。助十の家の裏所は下のかたにある。権三の家の土間には一挺の辻駕籠が置いてある。二軒の下のかたに柳が一本立つてゐて、その奥に路地の入口があると知るべし。

(けふは長家の井戸がへにて、相長家の願人坊主、雲哲、願者の二人も手傳ひに出てゐる。權三の家の縁に腰をかけて汗をふいてゐる。助十の弟、助八は廿歳前後のわか者、刺青のある男にて片肌をぬき、鉢巻、尻からげの跣足にて湯圍扇を持つて立つてゐる。権三の女房おかん、河岸の女郎あがりにて廿六七歳、これも手拭にて頭をつみ、露がけにて浴衣の袂をからげ、三人に茶を出してゐる。少しく離れて、猿まはし與助は手拭

を頭(かぶ)にまき、浴衣(ゆい)の上に猿(さる)を背負(かか)ひ、おなじく尻(しり)からげの跣(はだし)足(あし)にてばんやりと立つてゐる。表(うら)には角兵衛(かくべゑ)獅子(しし)の太鼓(たいこ)の音(ね)きこゆ。

三権(さんけん) やれ、やれ、暑いことだぞ。
三権(さんけん) まさか笠(かさ)をかぶつて井戸(いど)がへにも出(で)られず、この素頭(すくづ)をじり／＼と照(て)りつけられては、眼(め)がくらみさうにな

る。
三権(さんけん) まつたく今日の井戸(いど)がへは焦熱(せうねつ)地獄(じごく)だ。
おかん お前(まへ)さん達(たち)もあたしのやうに手拭(てふき)つゝゝんでゐれば好(こ)いぢやありませんか。

三権(さんけん) かういふ時には女(おんな)は格別(かくべつ)、男(おとこ)は鉢巻(はちまき)でないと何(なん)うも威勢(いせい)がよくないからな。
助八(すけやち) は、笑(わら)はせるぞ。鉢巻(はちまき)をしたつて、すつとこ被(か)りをしたつて、願人坊主(ねんりやうぢう)の相場(ちやうば)がどう上(あ)るものか。

おかん 與助(よすけ)さん。おまへさんもお飲(の)みてないかえ。(茶碗(ちやわん)を出す。)
與助(よすけ) (進みよりにて丁寧に會(あ)はさす) はい、はい。いや、これはありがたい。實(じつ)はさつきから喉(のど)が渴(かわ)いてひり／＼してゐました。
助八(すけやち) いくらおめえの商賣(しょうばい)でも、長屋(ながや)の井戸(いど)がへにえて公(こう)を

背負(かか)つて出(で)ることもあるめえぢやあねえか。
與助(よすけ) それがね。(猿(さる)をみかへる。) なにしる這奴(こゝろ)がよく馴染(なれ)んでゐるのでね。ちつとの間(ま)でもわたしの傍(わら)を離(はな)れないのですよ。

おかん 畜生(ちくせい)でも可愛(かわい)いもんだねえ。
與助(よすけ) 可愛(かわい)いもんですよ。
助八(すけやち) やあ、おれも可愛(かわい)がつて遣(や)らうか。(猿(さる)のあたまを推(お)でる。) やい、えて公(こう)。手前(てまへ)も一緒に(いっしょ)に出(で)て來(こ)ながら、親方(おやぢ)の背(せ)中(なか)で高見(たかみ)の見物(けんぶつ)をきめてゐる奴(やつ)があるものか。人並(ひとびら)はづれて長(なが)え手(て)を持つてゐるんぢやあねえか。みんなと

一緒に(いっしょ)綱(つな)をひいて、威勢(いせい)好(こ)くエンヤラサアと遣(や)つてくれ。おい、判(は)つたか、判(は)つたか。(猿(さる)の耳(みみ)を引張(ひきち)げ、猿(さる)は引(ひ)つかく。) え、痛(いた)てえ、痛(いた)てえ。こん畜生(ちくせい)、だしぬけに引(ひ)つ掻(か)きやあがつたな。

おかん おまへさんが悪戯(わるじやく)をするから悪いんだよ。
與助(よすけ) こいつは何(なん)うも氣(き)が暴(あ)くつていけません。八(や)さん。まあ堪(た)忍(しの)して遣(や)つてください。
助八(すけやち) 痛(いた)てえ、痛(いた)てえ。(手(て)の甲(か)を推(お)でながら。) 氣(き)が暴(あ)れえにも何(なん)にも、まつたく其奴(こゝろ)は旅(たび)の山猿(やまざる)だ。江戸前(江戸まへ)の猿(さる)ぢやあねえ。

おかん 猿(さる)に江戸前(江戸まへ)も旅(たび)もあるものかね。うなぎと間違(まちが)へてゐるんだよ。(笑(わら)ふ。)
三権(さんけん) 山の芋(いも)が鰻(うなぎ)になつても、山猿(やまざる)がうなぎになつたと云(い)ふ話は(わら)聞(き)かないな。
三権(さんけん) は、こいつは大(おほ)笑(わら)ひだ。

助八(すけやち) おい、與助(よすけ)。その山猿(やまざる)をおれに貸(か)してくれ。
與助(よすけ) え、どうするのだね。
助八(すけやち) おれ一人(ひとり)が引(ひ)つかゝれた上に、みんなのお笑(わら)ひ草(くさ)になつちやあ割(わり)に合(あ)はねえ。そいつをこゝへ遣(や)つ放(はな)して、片(かた)つ端(は)から引(ひ)つ掻(か)して遣(や)るのだ。

おかん (おどろく。) あれ、馬鹿(ばか)なことをお云(い)ひでないよ。呆(ほう)れた人(ひと)だねえ。
三権(さんけん) 悪(わる)巫山戯(おにやまげ)はいけない、いけない。(起(た)ちあがる。)

(助八(すけやち)は猿(さる)を取(と)らうとする。與助(よすけ)は遠(とほ)るまいとする。この争(まじ)ひのあひだに助八(すけやち)は又(また)引(ひ)つかゝれる。)

助八(すけやち) あ、こん畜生(ちくせい)め、又(また)遣(や)りやあがつたな。もういよく料簡(りょうかん)がならねえ。うぬ、生麩(なまぶ)を取(と)つた上で、兩國(ふたに)のものも、んじい屋(や)へ賣(う)飛ば(た)すからさう思(おも)へ。

與助(よすけ) え、人の商賣(しょうばい)をどうするのだ。
(助八(すけやち)と與助(よすけ)は争(まじ)つてゐるところへ、上(う)のかたより助八(すけやち)

の兄助(あにすけ)十(じゆ)、三十歳(さんじゆさい)前後(ぜんご)、これも鉢巻(はちまき)、刺青(しりやう)のある肌(はだ)のぎ、尻端(しりは)折(ひ)りの跣(はだし)足(あし)にて出(で)づ。)

助十(すけじゆ) やい、やい。なにを騒(さわ)いでゐるのだ。煙草(たばこ)休(やす)みも好(こ)い加減(かへん)にしる。いつまでもこんな泥仕事(どろしごと)をしちやあゐられねえ。日の暮(くれ)れねえうちに早く済(す)まして仕舞(しま)はなけりやあならねえのだ。みんなも籍出(せきだ)して遣(や)つてくれ。大屋(おほや)さんに叱(な)られるぞ。

與助(よすけ) 大屋(おほや)さんに叱(な)られては大(おほ)變(へん)だ。さあ、行(い)きませう。
三権(さんけん) さうだ、さうだ。
三権(さんけん) やれ、やれ、又一(また)と汗(あせ)かくかな。

(與助(よすけ)と三権(さんけん)、願人坊主(ねんりやうぢう)は上(う)のかたに去(い)る。)

助十(すけじゆ) (おかんに。) おい、かみさん。おめえの宿六(しゆくろく)はどうしたね。

おかん 奥(おく)に寝(ね)てゐますよ。
助十(すけじゆ) 冗談(冗談)ぢやあねえ。一年(いちねん)に一度(いちど)の井戸(いど)がへだから、長屋(ながや)中の者(もの)がみんな商賣(しょうばい)を休(やす)んで、かうして泥(どろ)だらけになつて働(はたら)いてゐるんぢやあねえか。その最中(さいちゆう)に自分(自分)ひとり悠々(ゆうゆう)と寝(ね)そべつてゐる奴(やつ)があるものか。あんまりお長屋(ながや)の義理(ぎり)を知らねえ狸野郎(ねずのや)の横着野郎(よこぢや)だ。ぬす人の癖(くせ)も好(こ)加減(かへん)にしると云(い)つて、早く引摺(ひきず)り起(た)して來(こ)い。

おかん (むつとして) 何もそんなに怒鳴り散らさなくつてもいいぢやありませんか。亭主の代りにわたしが出てりやあお長屋の義理は済んでますよ。

助十 ええ、おめえのやうな曳摺り騒がによろ／＼してゐたつて何の役に立つものか。よし原の惣掃きとは譯が違はあ。早く亭主をひき摺り出せといふのに……

助八 今までおれも気が注かなかつたが、こゝの權三はまだ出て来ねえのか。なるほど登人のひる寐にも程があらあ。(おかんに) さあ、早く連れて来ねえよ。

おかん おまへさん達は人聞きが悪い。二口目にはぬす人のひる寐なんぞを、大きな聲で云つてお笑んなさるなよ。内の人は夜の商賣が主だから、登問察てるものさ。それに不思議があるものかね。

助十 それを云へば、おれだつて同じ商賣で片棒をかついてゐるのぢやあねえか。そのおれが斯うして働いてゐるのに、相棒の權三が寐てるといふ法があるものか。

おかん 相棒と云つても、内の人は先棒だよ。ちつとは遠慮をするものさ。

助十 先棒でも後棒でも、斯ういふときに遠慮が出来るものか。

助八 先棒を前にきて、乙う大勢風を吹かすなら、おめえの亭主なんぞは頼まねえ。これからは兄貴とおれとが相棒で働きに出るばかりだ。

おかん 兄弟が相棒で御神輿でもかつぎに出るのかえ。(土間を見返りてあざ笑ふ) 肝心のかつぐ物があるかよ。

助十 (すこし詰まつて) なに、駕籠なんぞは何處からでも拾つて来る。なあ、八。

助八 む、大川へ行つてみる。そんな駕籠なんぞは上げ沙で變らも流れて来らあ。

おかん 下駄の古いのと一緒になるものかね。ぼか／＼しい。語らない無駄口をおきよてないよ。

助十 手前の方がよつほど無駄口を利いてゐるやあがる。河岸の切見世でべちやくちや噂つてゐた癖がぬけねえので、近所となりは大迷惑だ。おなじ年明きを引摺り込むにしても、少し眞人聞らしいのを連れ来ればいいのに、權三の奴めも見かけによらねえ漢つ垂らし野郎だ。

(奥の障子をあけて權三、これも三十歳前後の刺青のある男。浴衣の片襦を取りながら出す。)

權三 やい、やい。さつきから奥で聞いてゐりやあ、手前たちは兄弟揃つて、よくも口から出放題の悪戯もくだいを

列べ立てやあがつたな。なるほど俺のかゝあは吉原の河岸見世にゐた女で、飛んだ惚けをいふやうだが、おたがひに好き合つて夫婦になつたのだ。それがなんて漢つ垂らした。惚れた女とは夫婦になるなといふ奉行所のお觸れでも出たのか。さあ、見やがれ。

おかん ほんたうに近所迷惑とはこつちで云ふことさ。よるも登も兄弟喧嘩を商賣のやうにしてゐて、その仲裁に行くのはいつてもあたしの役ぢやあないか。

助八 え、手前たちこそ毎日毎晩、犬も食はねえ夫婦喧嘩ばかりしてゐるやあがつて、その留男の役はいつでも誰が勤めると思つてゐるのだ。

助十 さあ、まあ、だまつてゐる。こんなすべた女郎を相手にしたつて始まらねえ。やい、權三。(縁に腰をかける) 手前も海鹽の生れ變りぢやああるめえ。なんて一日寐そべつてゐるのだ。長屋中が惣出の井戸がへを知らねえか。寐ぼけた面を早く洗つて、みんなと一緒に綱を引きに出て来い。ふだんから相棒のよしみに、長屋の義理や附合ひといふものを教へてやるのだ。ありがたと思つて禮をいへ。

權三 それだからおれの名代に、曝をこの通り出してあるぢ

やあねえか。一軒の家から一人づつ出りやあ澤山だ。

助十 女なんぞは頭数ばかりで役にやあ立たねえ。おれの家ぢやあ斯うして大の男が兄弟揃つて出てゐるのだ。

權三 そりやあ手前たちの物ずきて勝手に騒いでゐるのよ。だれも顔んだわけぢやあねえ。折角よく寐てるどころを、無暗にがあ／＼怒鳴りやあがつて、たうとう起してしまやあがつた。(眼をこする) おい、おかん。茶を一杯くれ。

おかん あい、あい。

(おかんは茶を汲んでやれば、權三は飲む。この時、上のかたにて大勢の聲きこゆ。)

大勢 さあ、さあ、引いた、引いた。

助八 あにい、又始まつたぜ。早く行かう。

助十 む、こんな奴等にかゝり合つてゐると、日が暮れらあ。

大勢 引いた、引いた。

助十 おうい。待つてくれ。

助八 待つてくれ。

(助十と助八は鉢巻をしめ直して、急いで上のかたへ行く。)

おかん ほんたうに憎らしい奴だねえ。あたしももう行くま
いかしら。

三権 かまふものか。打つちやつて置け。鬨扇を取る。この
ごろは裏切ても寝つ奴が出て来やあがる。

おかん 暑い暑いと云つても、もう秋だともえて、結のお袴
をはいた奴がだん／＼に大きくなつて来たねえ。

（おかんも涙扇をとつて三権を睨んでやる。）
三権 おお、おや、手前けふは忌に専主奉行だ。今の節で
むかしの事を思ひ出したか。

おかん なに、あいつ等へ面當てさ。

三権 面當てよなけりやあ大事にしてくれねえのか。心ぼそ
いことだな。

（上のかたにて又もや大勢の聲きこゆ。）
大勢 引いた、引いた。エンナラサア。

（上のかたより以前の雲智と願智が先に立ちて井戸奥の
綱を引き、ついで長屋の男二人と子供一人、その次に

助十、いづれも綱をひいて出づ。又そのあとから長屋の
女房と娘、ついで猿まはし與助は猿を背負ひ、その次に

助八、長屋の男、子供など、同じ綱をひいて出づ。井
戸端にては水をあげる音。一同は又引返して上のかたに

入る。）

助十（行きながら三権を見かへる。）やい、この野郎。早く
出て来ねえか。

三権 勝手にしやがれ。

助十（容らうとして、綱にひかれてよろ／＼とな
る。）え、さう無暗に引いちやあいけねえ。やい、三権、
手前はどうしても出て来ねえのか。え、さう引いちや

あいけねえと云ふのに……。
（助十は綱に引かれて、よろけながら上のかたへ引返し
て入る。與助と助八はあとに残る。）

助八（これも行きながら三権夫婦を見て。）やい、やい、夫
婦ながら唯見てゐることがあるものか。お祭が通るのぢ
ぢやあねえ。早く出て来い。こいつ等、出て来ねえと唯

は置かねえぞ。
（助八は寄らうとすると、與助の猿はその頭管をつかん
で引く。）

助八 え、だれだ。誰だ。悪ふざけをしちやあいけねえ。
止せ、よせ。

（助八は猿に引かれながら、上のかたに入る。）
三権（笑ふ。）は、好い観せ物だぜ。

おかん あいつはさつきも猿に引つかれたんだよ。

三権 あんな奴等は猿を相手に、きやつ／＼と云つてゐるの
が丁度相當だ。

おかん ほんたうに猿芝居の役者だねえ。
（夫婦は笑つてゐる。やがておかんは気がついたやうに
上のかたを見かへる。）

おかん お長屋の人数がみんな出てゐるのに、中途から抜け
てしまふのも何だから、せめてあたしだけでも行つて来
ようかねえ。

三権 なに、打つちやつて置けといふのに……。ぐ／＼云
ふのは助の兄弟ぐらゐるものだ。ほかにも文句をいふ奴

があつたら、どいつでもおれが相手になつて遣らあ。長
屋中が東になつて来ても、びくともするもんぢやあね
え。矢でも鎧袖でも持つて来いだ。

おかん でも、大屋さんに叱られると困るぢやあないか。
三権 む、（少し考へる。）去年もさん／＼臂を取られたつ
けな。

おかん それ、御覽な。ほかの奴はどうでも構はないけれど、
大屋さんの心持を悪くするといけないからねえ。

三権 だが、大屋さんは善い人だ。まさか店立ては食はせ

るとも云ふめえ。

おかん 善い人だけに、こつちでも其のつもりで附合はなく
ぢやあ悪いよ。

三権 さうかなあ。（又かんがへる。）ぢやあ、いつそおれが行
つて来ようか。（起ちかけて又かんがへる。）だが、これか
らのそ／＼出て行くと、なんだか助の野郎におどかさ
れたやうで、ちつと構だな。おれはまあ止さう。おめえも
止せよ。

おかん 止してもい／＼かねえ。

三権 大屋さんに叱られたら、あやまる分のことだ。なに、
むづかしいことはねえ。あやまれば乾と堪忍してくれる
よ。

おかん あの、大屋さんにあやまるのは、幾らあやまつても口
惜しくはないけれど……。

三権 それだからあやまると決めて置けばい／＼よ。
（上のかたより助八は猿を引つか／＼へて出づ。あとより
與助が追つて出づ。）

助八（これ、これ、わたしの猿をどこへ持つて行くのだ。
助八 こん畜生、二度も三度もおれにからかやあがつて……。
もう生かして置かれるものか。あの井戸へ叩つ込んでし

まふのだ。(上のかたへ引返して行きかゝる。)

奥助 え、飛んでもないことだ。

(奥助は猿を取返さうとして争ふところへ、上のかたより助十出づ。)

助十 これ、八。馬鹿なことをするなよ。

助八 なにが馬鹿だ。

助十 この最中に猿なんぞを相手にして騒いでゐる奴は馬鹿に相違ねえ。そんなものは打つちやつて置いて、早く行け、行け。

助八 いやだ、いやだ。こん畜生を井戸へ叩つ込まなけりや

あ料備出来ねえ。

助十 折角井戸がへをしたところへ、そんなものを叩つ込まれて燃るものか。馬鹿野郎、よせと云ふのに……。

助八 止さねえ、止さねえ。

助十 そんなら猿の身代りに手前をぶち込むからさう思へ。

助八 なにを云やあがる。

(兄弟はむしり合ひ、なぐり合ひの喧嘩になる。その隙をみて奥助は猿を取返し、逆さまに背負ひて上のかたへ走り去る。)

三権 仕様のねえ奴等だな。(おかんに)留めてやれ、留めて

やれ。

(夫婦は縁から降りて、無理に兄弟を引き分ける。)

三権 毎日めづらしくもねえ、兄弟喧嘩はよせ、よせ。

おかん 八さんも兄さんに桶を突くのはよくないよ。

助八 べらぼうめ。猿の味方をして弟をなぐるやうな奴は兄

貴ぢやあねえ。

助十 手前のやうな判らずや猿にも劣つてゐるのだ。

三権 まあ、いと云ふことよ。兄弟喧嘩ぢやあ、どつちから膏藥代を取るわけにも行かねえ。つまり殴られ損だ。

止せ、止せ。

(上のかたより家主六郎兵衛出づ。)

六郎 これ、これ、みんな何をしてゐるのだ。もう些とだから忘れてはいけない。(上のかたに向つて團扇をあげる。)

さあ、さあ、早く引いた、引いた。

(上のかたより雲哲、願哲をはじめ長屋の人々は綱を持ちて出で来り、再び上のかたへ引返してゆく。)

六郎 助八。おまへはこの忙がしい最中に猿にからかつて騒いでゐたさうだな。

助八 なに、こつちが猿にからかはれたので……。

六郎 まあ、なんでもいゝから早く行つて、手傳へ、手傳へ。

貴様は長屋で一枚看板の馬鹿野郎だ。

助八 あい、あい。大屋さんに逢つちやあかなはねえ。

(助八は叱られて、これも早々に上のかたへゆく。)

おかん 大屋さん。今日はお暑いのには御苦勞様でございませう。

三権 まあ、まあ、こゝへお掛けなせえ。

六郎 (三権を見て。) お、お前はさつきから井戸端へ些とも顔を見せなかつたやうだな。

三権 (きよつとして。) え。實は其、すこし用がありました……。

おかん 早くあやまつておしまひよ。(眼で知らせる。)

三権 まつたく據ない用がありました……。

六郎 よんどころない用があつた……。

三権 へえ、急病人が出来まして……。

助十 いや、こいつ呆れた奴だ。もし、大屋さん。だまされ

ちやあいけねえ。そんなことは皆んな嘘ですよ。

(夫婦はあわて、手をふる。)

助十 (いよゝ怒鳴る。) え、嘘だ、嘘だ。大うその川瀬

だ。奥に樂々と登寮をしてゐるやあがつて、おれが幾度催

促に來ても出て來なかつたぢやあねえか。

三権 だから、急病人が出来たと云つてゐるのが判らねえか

よ。

助十 その急病人はどこにゐる。

三権 その急病人は……。おれだ、おれだ。

助十 這奴いよ、呆れた奴だ。朝つばらから酒を飲んでゐ

やあがつた癖に、急病人もよく出来た。あんまり人を馬鹿にするな。

おかん そのお酒に中つたんですよ。

助十 え、なにも彼も嘘だ、嘘だ。

六郎 成程これは嘘らしいぞ。これ、三権。おまへは去年の

ことを忘れたか。一年に唯つた一度の井戸がへで、家主

のおれまでが汗みづくになつて世話を焼いてゐる。その

なかに假病の登寮なぞをしてゐて、長屋の義理が済むと

思ふか。去年もあれほど叱つて置いたのに、今年も相違

らず横着をきめるとは太い奴だ。又、女房も女房だ。さ

つきちよいと其の生つ白い顔を出したかと思ふと、もう

それぎりで隠れてしまふとは、揃ひも揃つた横着者め。

さあ、さあ、早く出て働け、働け。

夫婦 はい、はい。

(上のかたにて大勢の呼ぶ聲きこゆ。)